

Cross Ballade (けいお
ん！×School Daysシ
リーズ)

SPIRIT

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

けいおん!×School Daysクロスオーバー小説

『Cross Blade (クロス・ブラード)』。

平沢唯たちのいる桜ヶ丘高校と伊藤誠のいる榊野学園が合併することになり、前段階でお互いの学祭で交流を深めることになった。

放課後ティータイムと榊野学園生徒も触れ合う中、唯は初恋の相手である誠に接近する。しかしすでに、彼には恋人が…。

この物語は、放課後ティータイムと榊野学園生徒のふれあい・ぶつかり合いによる成長物語です。

恋愛はまだまだ素人だけど、平沢唯と伊藤誠、ほかの人たちのぶつかりあいを、ぜひとも見て欲しいです。

あの学祭で、

私は貴方を／俺は君を 待っている。

永久に……。

運命は加速する。

ちなみにPixiv, FC2, 暁く小説投稿サイトくにも載せています。

目次

第1話『交錯』	1
第2話『秋雨』	20
第3話『前兆』	44
第4話『波紋』	69
第5話『迷走』	101
第6話『思慕』	144
第7話『再会』	184
第8話『暗転』	237
第9話『嫉妬』	286
第10話『岐路』	339
第11話『猛撃』	390
第12話『変転』	435

第13話『危機』	469
第14話『唯誠(ゆいま)』	509
最終話『交差譚詩曲(クロスバラード)』	558

第1話『交錯』

「きゃあー！」

「うあー！」

何かにつまずき、平沢唯と伊藤誠は重なって倒れ込む。

誠は強く背を打った気がするが、クツションみたいなのがあつて痛くはない。

「つーっ……え……う？」

気がつくと誠は、白いベッド（本来は保健室にあるもの）の上で、唯に肩を掴まれ組み敷かれている。

薄暗い部屋。そこに男女が二人きり。

窓は黒いカーテンがおろされており、女物ヘアスプレーの残り香がまだ部屋に匂っている。

ベッドのシーツには、血の跡が乾いて黒く、でもはつきりと。

「おい、やべえよ」

肩をふりほどこうと思って、誠は急にゾクリとした。

見交わした唯の顔は紅潮し、目は潤んでいる。

何を求めているかはすぐに分かった。

雰囲気の流れきれそうな自分を必死に押さえ付け、深呼吸して、唯に、

「や、やめようよ……」

「一回だけでいいから……」

「でも……」

「あと少しなんだよ！マコちゃんと恋人でいられるのは!!」

唯が普段考えられないほどの大声を出す。

「トーンダウン、トーンダウン。ばれちまうよ、唯ちゃん」

誠が必死になだめた。

「ごめん……。でも、あたしの気持ちもわかって……」唯が潤んだ瞳で続ける。「あと少しで、全部諦めなくちやいけななんだよ、マコちゃんのこと。」

せめて最後にマコちゃんが……マコちゃんの思い出が欲しい。

あたしじゃ、西園寺さんや桂さんの足元にも及ばないかもしれないけど、後悔したくないの……。

「お願いだから……」

「唯ちゃん……」

誠は、自分の頬どころか身体全体が火照っていることに今気がついた。

そして、誠に体を預けている唯も同じように熱くなっていることに。長い長い沈黙の後、誠の顔に唯の顔が近づいて……。

第1話 交錯

事の起こりは少し前。

「もうすぐかあ……」

桜ヶ丘高校の放課後、音楽室で紅茶を飲みながら平沢唯は呟く。

軽音楽部の部室で、教室と変わらない木製の机がくつついているが、漫画やらお菓子やら洋食器やらが詰め込まれ、喫茶店のような様相を呈している。

「榊野学祭のライブまで後少し、放課後ティータイム初めての外部演奏ねえ」

部員の一人、ムギこと琴吹紬は、腰までかかる金髪を振りながらお茶を配っていく。

日本では少子化がすすんでおり、私立高校の合併や廃校がはじまっているが、空想の世界もそうである。平沢唯達に通う桜ヶ丘高校と、伊藤誠達に通う榊野学園もまた、合併する話が進められていた。

その前段階として、一方の生徒を他方の学園祭に派遣し、お互いの部活動の紹介と生徒の交流をすることになっていた。

「ですねえ、じゃないですよっ！」ムギと唯の後輩、中野梓は不満げだ。黒いツインテールが不満を表している。「そもそも私たちが他校の学祭で演奏すること自体、無理があるんじゃないですか？　ほとんど練習もせず、お茶飲んでばかり、お菓子食べてばかり。夏に合宿するかと思えば、悩むのは水着のことばかりだし……」

もともとの軽音部、『放課後ティータイム』というバンド名で一応の活動はしているものの、お茶を飲んでお菓子を食べながら話すことがほとんど。新入生歓迎会と学祭前にしか真剣に練習はせず、それも、ノロノロダラダラとだべった挙句、忘れたところに練習を始めるという体たらくだ。

「まあまあ落ち着け」フオローに回ったのはドラマーの田井中律だ。唯やムギの同級生で、この軽音楽部の部長でもある。制服を着崩し、黄色いカチューシャのかかった茶色い頭に両手を添えて、悠長に言っている。「唯には絶対音感があるし、漣のベースは定評があるし。あたしのドラムだって走り気味じゃなくなってきただろ？　いつものように自然体、自然体。絶対上手くいくって！」

「そうそう、なんとかなるでしょ」

唯もそう言つて、のほほんとクツキーをかじる。

「はいはい……」

げんなりしているのは律の幼馴染、秋山澪。自分達が他校で演奏することが決まって

から、不安と不満ですつとこの調子。黒い吊り目が完全に死んでいる。「そういえばさあ、なんでうちらが榊野学園と合併することになってるんだ？」

「実はね」声を開いたのはムギ。「私達の学校は『勤勉』を理念に知育よりも徳育を重視していますよね」

「うちらは全然勤勉じゃねえだろ」

と、漣。

「まあまあ、榊野はこの地域ではちよつと名の知れた進学校で、指数対数をすでに学んでいて、それを『ハノイの塔』に応用させているという話なんですよ。榊野と桜ヶ丘を合併させて、『知育』と『徳育』を融合させた高校を作るつもりらしいです。」

男という水が入るのも嫌ですが、榊野の高度な知育は一度知りたいくらいですよ、私は」

ムギはどちらかといえば同性愛が好きで、男が入り込むのは嫌っているようだが、高い知識を手に入れたがる向上心はあるらしい。

「あたしはやだなあ」

と、梓。

「あら梓ちゃん、あなたが一番外部ライブを楽しみにしていたじゃない。自分たちの実力をみんなにも見せて、さらに向上させていきたいって」

「そうですね、榊野は偏差値高いけど風紀が良くないって聞いたんです。知育重視のあまり生徒の心の教育対策は立ててないみたいで。」

お酒は隠れて飲むし、不純異性行為だって頻発してるという話ですよ。

むしろ高校で『チェリー』を卒業しないと恥ずかしいという裏ルールもあるらしいし。雰囲気悪いところには行きたくない」

「私達は女子高ですけど、榊野は共学だからねえ。多少の羽目を外すことはあるでしょう」ムギがフオローとも皮肉ともつかぬ発言をする。「でもまあ、私達もこの際、異性との付き合い方を学んでもいい気がするわね。ひよつとしたら頭のいい彼氏ができるかもしれないわよ」

『彼氏』と聞いて、何のたわけた想像をしたのか、律がやらしく笑ってから立ち上がって叫んだ。

「よし、じゃあライブが終わったら、みんなでナンパだ!!」

……が、誰も盛り上がらない。

「か〜んべ〜んしてくれえ……」

漣はさらにげんなり。

「遠慮しときます」

梓もあつさり拒否。

「……誰か一人ぐらい『いえーい』と言えよ……」

テンションダウンした律に、ムギが優しく声をかけてきた。

「りっちゃん、『ナンパ』は男が誘うときに使う言葉で、女が誘うときは『逆ナンパ』って言うのよ」

「つつこむところちげえよ……それにどっちだって同じだろ……」

唯は少し考え込む。

彼女も年頃。一目ぼれする男子やアイドルがないわけではない。

けれども男つきの桜ヶ丘高校、たまに会つてもすぐに顔を忘れてしまう。

ただ、行きつけのコンビニでたまに会う人、その人の顔だけは覚えている。

女を引き付ける妙な魔力。

言葉で表すならこうだろうか。そんな顔をした男子だった。

「あ、唯。おまえは賛成してくれるな。一緒にナンパしようぜ」

律が唯の肩を叩いてくる。

「いいかもね。いえーい！」

考え事で聞いていなかったのをごまかし、唯は叫んだ。

「はいはい。さ、そろそろ練習しないと。本番で恥をかいていますよ！」

梓が立ち上がって自分のギターをとる。

「えーっ、まだ早いよ。もう少しお菓子食べようよ」と、唯は乗り気でない。

「これでも遅い方ですよ！もう4時じゃないですか!!」

梓にどやされ、唯は渋々練習の準備を始める。

律は本当に彼氏を作りたいと思っっているようだが、唯はまだ実感がわかず、恋する思いもすぐにしぼんだ。

「放課後ティータイム?」

伊藤誠がクラスメイトの西園寺世界から軽音部のことを聞かされたのは、昼休み、教室で食事をしている時のこと。

「ええ、桜ヶ丘高校の人たちがこの学園祭に来るでしょ? 軽音部の演奏、私と一緒に聞きたいかな?」

世界はアホ毛を一本垂らしたセミロングヘアを振りながらうきうきとしている。彼女はどうかやら軽音部のきやぴきやぴした曲風が好きらしい。

もともとハキハキしたクラスのムードメーカー。そっちの曲の方が彼女の気質にも合っているのだろう。榊野には軽音部がないからなおさら。

「あ、ああ……3時頃なら俺もあいているからな」

「やった、じゃあ2時50分に中庭ね、誠！」

実を言うと軽音楽は、誠はあまり興味がない。ともあれ、彼女の頼みとあらば、断るわけにもいくまい。

もともと流されやすく優柔不断な性格。頼まれるとあまり断れないのだ。

「桜ヶ丘って女子高だろ。どんな子達なんだろうなあ、生徒たちって」

そう言つて横から首を突っ込んできたのは、誠の親友。

「泰介!?!」

誠はぎよつとして親友を見る。

「俺の見るところ、可愛い女の子たちが多くと見た。合併したらハーレムみたいになるから、学校側も合併しようと思つてたりして」

と、泰介。

「大奥の間違いだろ！ つーかそんな理由で合併するか！」

誠はあきれる。

「距離的な問題もあるんだけど」世界がちよつと口を出した。「榊野は知育・受験重視でしょ？ 桜ヶ丘は哲学を中心に徳育に力を入れてるらしいの。」

ハリリー・ポッター風に言うなら、私達がレイブンクローで、向こうがハツフルパフ。

合併して知育と徳育が両立した学校を目指すというのが、両者の目的らしいのよ」

「おいおい、水と油じゃないか……」誠がため息をつく。「俺達はその前に卒業するだろうけれど、後輩が大変じゃないのかい？」

「まあ、それは私達が実際に接してみても判断することだと思おうわ。」

おっと、誠はほどほどにね。浮気とかされると困るし」

「へいへい……」

「じゃあ、誠も西園寺も頑張れよ！俺も桂さんのようないい女を彼女にして、それから、ふふふ……」

親友はいやらしい笑みを浮かべながら教室を出ていく。

「おい、あまり羽目は外すなよ、泰介！」

誠が忠告するが、泰介は全く聞かずに出て行ってしまう。

あのお調子者、相手の繊細な心が読めるのかどうか。相手が嫌がることも平気でやつてのけないか？ まあ自分の言えた義理じゃないが。

「桂、か……」

誠がつぶやくと、世界が眉をひそめ、

「桂さんとは、わかれたんじゃないの？ あの人と付き合っていないなら、いいでしょ、私と付き合っても」

「あ、ああ……」

とりあえず生返事をする誠。

かつて誠は世界の仲介で、『桂言葉』という少女とつき合ったことがあった。

しかし引つ込み思案で寡黙で、触れ合うことを極度に嫌がる彼女とは、いつの間にかすれ違いが出来ていた。

「俺たち、距離を置いた方がいいんじゃないかな。しばらく頭の中を整理すれば、いつかは……」

これを最後に、誠は言葉と一切話していない。

その後世界が自分に告白。言葉を紹介したのも誠を思いやつてのことだったという。

自分も世界の前々から好きだった、との思いがあつたこともある。彼は世界と付き合うことになった。

とはいえ、

（仲直りした方がいいかな。でも世界がどう思うかな）

あいまいな態度のままに距離を置いてしまった言葉のことを気にしつつ、誠は放課後ティータイムの曲目を調べてみた。

『カレーのちライス』、『私の恋はホッチキス』、『ふでペン くボールペンく』。

「……なんかシユールだけど、どこをどう突つ込んだらいいかわからんな……。ま、聞いてみるか」

誰にも聞こえないように、つぶやいた。

帰りがけ、誠は世界の目を盗んで、言葉がいる4組をのぞいてみるが、言葉は見当たらなかった。早めに帰ってしまったんだとか。

踵を返す誠に、4組の女子生徒の噂話が聞こえる。

「あいつ、桂にたらしこまれているのかなあ」

「きつとそうよ。ほんとむかつくよね。とろい癖、胸ばかりでかいあのフェロモン女は……」

それを聞いて、誠はつぶやく。

「本当に大丈夫かなあ、言葉……」

桜ヶ丘から少し離れた、青い屋根が目印のコンビニ。

唯はそこで、弁当を買うのが最近の日課になっている。

そこは榊野学園からも近く、生徒達もしばしばたむろす。

彼女は漫画雑誌を読むふりをしながら、ちらちらと振り返って、レジの様子を見る。

最近、いつもこのコンビニに来る、ある榊野男子生徒を求めて。

始めてみかけてから、いつも顔を見るたび、ドキドキしていた。

いた。

スーツに近い学生服を着た、優しい顔の好男子が、背の高い馬面の友人と雑談をしながら、レジに並んでいる。

その大きな目を見た瞬間、唯はドキリとなる。

と、好男子が勤づいたらしく、唯の方に目を向ける。

あわててそっぽを向き、漫画に夢中なふりをする。

唯の耳がキャッチする、好男子と親友の話し合い。

「誠、何かあつたのか？」

「いや……誰かに見られているような気がしたんだけど……何でもない」

「神経が過敏すぎるんだろ」

それっきり、取り合わなくなる。

唯は再び振り向き、斜向かいのレジで、誠と呼ばれた好男子が、友人と一緒に会計をしているのを見る。

その少年の穏やかな微笑みを見て、思わず胸がどきどきしていた。

唯は、恋する少年の名前を、頭の中で反芻していた。

誠、か……。

誠……。

誠……。

彼女は携帯カメラで、ほほ笑んで去っていく誠の横顔を撮っていた。

「まったく、学校といい先生といい話を進めすぎるんだよ……」

下校途中、ファーストフード店の2階で宿題を片付けながら滯は独りごちた。話し声が多少耳につくものの、自宅より大いにはかどる。

「梓の話じゃ榊野は偏差値高くても風紀よくないって噂だし……」

そもそもティータイムばかりの私らが他の学校で演奏すること自体、無理だつつの。逆ナンパも恥ずかしくてできるか。

当日になったらとんずら……駄目だ駄目だ。こうなったらやけ食いか……?」

文句を言いながらふと顔を上げると、1人の少女が目にとまった。

自分……じゃない。黒髪を腰まで垂らしたおそろいの髪形だからそう思っただけ。

前髪も違うし、目だって自分とは違って丸くつぶら。

それ以上に……胸が妙に大きい。

目をそらそうとしても視界に入るほど。どんくらいの大きさなんだ。

傍らにいるのは10、11歳位の子供。見た目も似ているし、大方彼女の妹だろう。

自分の隣の席に座り、妹のハンバーガーセットを渡すと、少女はカバンから本を取り出し、見ながらノートに何かを書き始めた。大かた自分と同じで、宿題に取りかかって

いるのだろう。

「お姉ちゃんも大変だねえ」

妹がノートを覗き込みながら話しかける。

「まあ、榊野学園は進学校だからね。急に勉強が難しくなって大変よ」

「でもサクサク解けているねえ」

そんな会話を話し半分で聞く漣。

宿題が少ないのか、それともこの少女の頭がよいのか、30分ぐらいで宿題は片付き、

少女は妹と食事をとることに。

漣の方は宿題も終えていたし食事も終わっていたが、この少女のことがちよつと気になるので、しばらく粘ってみる。斜向かいに面しているので、少女の表情がよく見てとれた。

不意に妹は、

「誠君とはどこまでいつてるの？ お姉ちゃんの彼氏なんですよ？」

「心、やめてよ」

姉は顔を赤らめて答える。

「そっか、けんかしているもんね……」

心と呼ばれた妹は苦笑いを浮かべる。

「学祭には仲直りするから。そして2人で回って、それから……」

男女の色ごとに興味をそそられるのは人情らしい。気がつくとは濡は、耳をそばだててこの姉妹の会話を聞いていた。

「あたし聞いたよ。榊野学園の伝統と伝説」

と心。

「ぶっ……………」

姉は飲みかけていたコーヒーを吹き出す。

「彼女と彼氏が、2人で学祭を回って、それから隠し休憩所で『ちえりー』を……」

「やめなさいっ！みんな聞いてるわよ!!」

姉は赤い顔で怒鳴った。もちろん小声で。

なんかいやらしいことでもやんのかな。そう思って濡はさらに体を傾ける。

「とにかく、そのあとキャンプファイヤーで二人で踊ると、そのカップルは永遠に一緒になれるという話なんだよね」

心はニヤニヤしている。

「心、それはあくまでもおまじない。実際はただ、榊野には娯楽が少ないから、アベックが羽目を外し過ぎるだけなんだってば。あれだけ先生が目を光らせていても」

ため息をついて姉はチーズバーガーをかじり、憂いを帯びた表情になる。

「私はただ、誠君と仲直りしたいだけ。そして、誠君とずっと一緒にいたいだけなのよ……」

澪は何となく、この少女の手助けをしたい気分になっていたが、まさか言いだすわけにもいくまい。

時計を見てそろそろ帰らないかと思い、立ち上がる。向こうは時計を見て、

「いけない、もうすぐ門限の時間だわ！ 心、帰るわよ！」

とあわてて荷物をしまつてゆく。

門限つて、どこかのお嬢様だろうかこの子。

そう思つて階段へと歩いていると、少女が横からぶつかつてきた。

「わっ！」

「きゃー！」

したたかに体をぶつけてお互いしりもちをついてしまい、スカートに入った小物が地面に飛び散る。

ごめん、澪がそう言おうとすると

「あつ！！ごめんなさい！」

少女は自分からあわててとびのき、落ちた小物を急いで拾い上げる。

「あ、ちよつと……」

濡が止めるのをよそに、少女は立ち上がって、妹といそいそと行ってしまった。立ち上がろうとして、ふと濡は気づいた。カードみたいなのが落ちている。

拾い上げてはつとした。

それは学生証で、そこには

『榊野学園 1年4組 桂 言葉』

と書いてある。

「かつら、ことのは、と読むのかな？　うちより1つ下か。さっきの人が落としていったのか」

あたりを見回すが、もう言葉という少女の姿はどこにもなかった。

学生証はとりあえず店にあずかってもらうことにして、濡は店を後にした。

歩きながらぼうっと考えるのは、学園祭当日のことではない。

先ほど目を合わせた、桂言葉のことばかり。

「綺麗な子だったなあ……」

自分と同じように長い髪を腰まで垂らしている。どちらかといえば人慣れしてなさそうな所も、自分と似ている。

でも自分はつり目で長身。彼女は小柄な体で、ルビーのような綺麗な瞳をしていた。

そして何よりあの胸。

「あれEカップかな……いや、それより大きいだろうなあ」

胸は母性の象徴であると聞いたことを思い出し、澁は自分の体に触れてみる。

「ああ、ぴったんこ……。いけないいけない、演奏のことを考えなくちゃ。」

帰ったら特訓、特訓！ それにサインの練習もしないと……。 ああ、大恥かかない

といいけどなあ……」

がつくりしながら、澁は家路を進む。

続く

第2話『秋雨』

秋雨は、今日の朝から降り始め、街路樹の楓を濡らしていた。

そんな中、紺のブレザー、灰色のスカートの少女が2人、傘をさして歩いている。

1人は、シヨートボブで茶髪。もう1人は、同じく茶髪を後ろで束ね、ポニーテールのようにしている。

シヨートボブは、平沢唯。ポニーテールは、妹の憂（うい）である。

双子の姉妹で、憂が髪をおろすと、唯と見分けがつかなくなる。

唯はかなり雨に濡れ、癖っ毛になっていた。

「ホント」憂は、冷やかし半分にいう。「いくらギターが大事だからって、傘を落としてまでケースを守ることないじゃない」

「だって……ギー太（愛用のギターの名前）がぬれちゃうといけないし」

「ビニール巻けば、いいじゃん」

「気付かなかった……」

天然ボケの唯だが、ここでもそれが炸裂した感じた。

「そういえば、お父さんとお母さん、今度はどこに旅行するのかな？」

「次はベルギー、と言つてたなあ。時期によつては、私やお姉ちゃんも、行けるかもね」
唯は聞いて、思わずはずみ、

「やったー！ いつもいつも、お父さんとお母さんばかり旅行して、ずるいと思つてたんだー！」

たわいもない世間話が続く。

昼食の弁当は、いつも憂が作つているが、今日は憂が寝坊し、作る暇がなかったので、昼食をコンビニで買うことになった。

「そう言えば、お姉ちゃんが気にする人つて、よくあのコンビニに来るんだよね」

「そうだよ、」と、唯。「私が2年になってから、しばしばコンビニで見かけるんだけど、とってもかっこいい学生さんなんだよ」

言つてから、再びその人の顔を思い出し、ドキドキするのを感じた。今日は来るかな、
どうかなあ。

「その人、多分榊野の人じゃないかな」

と、憂は答える。

「え？」

「あのコンビニは、榊野とも近いからね。きつとそうだよ」

憂の答えに、唯の胸はさらに高鳴った。

やがて6坪ほどの、学生がたむろすコンビニが、左手に見えたので、唯と憂は入っていく。

このコンビニから向こうへと5分ほど歩き、お稲荷様を左手にして右へ曲がると、榊野学園の裏門にたどりつく。

はたして、問題の人間に、唯も憂も、会うことになる。

会ったのは、入口近くで肩を並べ、漫画を読んでいた時。

「あ、来た」

唯が叫び、憂も入口の方を向く。

高ぶった唯の気持ち、入口を見て一気にしぼむ。

1組の男女がコンビニへと入った。

1人は、スーツに近い学生服を着た、中肉中背、しかし顔立ちの整った好男子。

女の方は、胸元に赤いスカーフ、白いYシャツを着て、セミロングヘア一本のアホ毛をたらし、朗らかな笑顔で歩いている。

伊藤誠と西園寺世界である。

「誠、「豆板醬チキンの味はどんなんだかねえ」

と、世界。

「あれは食つてみたことがあつたけど、辛すぎてどうも……」

誠は、涼しい目を世界に向け、白い歯を見せて笑う。

それを見て唯の気持ちさが、さらにしぼんでいった。女を連れた誠を、唯は見たことがなかったのである。しかも誠の彼女は、かわいくてスタイルも良い人物。

「私、ちよつと味わつてみるね」

世界はそう言つて、「豆板醤チキンを2つ注文する。じゅうじゅうといういい音を立てて、豆板醤チキンが出来あがつた。

勘定のときに誠が、

「今日は、俺がおごるよ」

「えーっ、でも悪いよー」

「まあまあ、今日は母さんも月給日だと言つてたし」

誠は、特に気にしていない。こう、いつも女の子に優しいのだろう、と唯は思う。

「ホント、悪いね」

世界は、照れくさそうなの、でも、とてもうれしそうな笑顔で答えた。

チキンを受け取り、弁当を買つて、世界と誠は、並んでコンビニを後にする。

「やっぱり榊野の人だねえ……なんだ、もう彼女いるんだ」

憂はどこか、ほっとしたような口調でつぶやいた。

「何となく競争率は高い気がしたけどね。私もドキドキしたし」憂は続ける。「残念だけど、あきらめた方がいいよ」

「やつぱり……？」唯が、泣きそうな表情になる。「私の初恋なんだよ……あきらめなくちゃいけないの？」

「そりゃあ、深入りして、相手の人間関係を壊すのはいけないでしょ？ お姉ちゃんの気持ちもわかるけど……」

最後に憂は、付け加えた。

「お姉ちゃんは、どんなになっても、私のお姉ちゃんだからね……」

放課後、音楽室。

「はーあ……」

唯は机に伏しながら、用意されたケーキをかじる。

今日も軽音部では、唯、漣、律、ムギ、梓、それに、顧問の山中さわ子を加えて、手始めにティータイムが開かれていた。ただ、少し違うのは、律の机とムギの机に、本がうず高く積まれているということ。

「唯先輩」最初に口を開いたのは、梓だった。「思い人のことは、あきらめた方がいいで

す」

「えっ?」唯は、思わず顔をあげた。「どうして? というか何で知ってるの?」

「憂から全部、話は聞いてます。大体その人、もうすでに彼女いるんでしょ? 下手に唯先輩が首を突っ込んだら、相手の人間関係だって壊しちゃうんですよ! そしたら相手
が困っちゃうんですよ!」

「だってえ……私の初恋なんだよお……好きで好きでしようがないんだよお……あきらめられないよお……思えば思われるってこと、ないのお?」

唯は、泣きそうな声をあげ、再び机に突っ伏してしまふ。

「女は、初恋に情熱をかけるけれど、」続いて切り出したのは、さわ子。「実りのないものよ。私なんか1001回もプロポーズしたんだから」

「1001回も!?!」

律が思わず、驚きの声をあげた。

「そう。1001回『Say yes』って言ったけど、帰ってきたのはいつも『No』。でもそうやって女は美しく磨かれていくもの」

「いやーだー、いやーだー」

机に突っ伏したまま、唯は地団太を踏んだ。

「はあ……」ムギがティーカップを口に近付けながら、「恋は盲目ねえ」

「そういえば、ムギ先輩、何持って来たんですか？」
と、梓。

「榊野学園に関連する資料よ。生徒たちと交流するわけだから、むこうの生徒たちに関する情報を知らない」と榊野の学内新聞をめくり、運動部の記事を見せて、ムギは言った。「この人、知ってる？」

ムギが指さした写真に写っているのは、短髪でボーイッシュなルックスの少女。

「誰ですか、この人？」

「この人、甘露寺（かんろじ）七海といって、バスケットの特待生として榊野に入った人なのよ。彼女が入ってから、榊野の女バスはベスト4まで進出したり、破竹の勢いと聞いているわ」

「す、すごい……」

梓も、うなった。

「私、この人に恋してしまったの……」

ムギは顔を赤らめ、ぽーっとした表情になる。

啞然とする一同。

ムギの百合好きは、いつものことだが、それが本番で出るとまずいのは……？

しかも、『異性との付き合い方云々』言ったのは誰だ。

「勉強熱心だな、ムギは」

律は手持ちの本をパラパラめくりながら、とりあえず言った。

梓は、律の本をまざまざと見つめ、

『男を口説く方法』、『血液型と理想の彼氏』、『本当に気持ちの…』、って、なんでこんな気持ち悪い本まで持ってきてるんですか!？」

「おいおい、せつかく彼氏を作るんだから、いい進展といい思い出をつくらないと。大体、彼氏とのアレは、大人への通過儀礼みたいなもんだぜ？ バンジージャンプだぜ？」

あっけらかんと、律は答える。

「何言ってるんですか、律先輩！ 17歳でそれはいけませんよ!! それは18歳を超えてから!!」

まじめな梓は、思わず大声を張り上げた。律はそれを聞き流し、

「かたいこと言うなよ。ついでに彼氏1号は、映画版ハリー・ポッター最終章を、私と一緒にみることが可能でっせ」

「恋愛のナンパの考えてないで、もっと真剣に、ライブのことを考えてくださいよ、部長さん！」

2人のやり取りを聞きながら、唯は『大人』と聞いて胸を突かれた。

子供っぽい。

これは幼いころはもちろん、軽音部に入ってからも続いた、唯の評判だった。

正直、大人になりたいという思いが、なくもない。

仮に女が、男との恋愛で、その結果のことで、子供から大人になれるとすれば、できれば成し遂げたいとは思っている。

もちろん、相手はあの人がいい。

横恋慕だと、わかっていても。

残る滯は、相変わらず、ぼんやりとしている。ただし違うのは、いつものように浮かない表情ではなく、ムギと同じ、誰かを考えているような、ポーっとしている表情だということ。

「ま、まさか……滯先輩も恋煩い……？」

いい加減にしてくれとばかりに、梓は、眉間にしわを入れ、苦虫をかみつぶした表情で尋ねた。

「うーん、そうだな、それに近いかな」

滯は、答える。

『恋煩いに近いもの』

というのとはあながち、嘘ではない。

ファーストフード店で会ってから、滯は桂言葉のことが、どうしても忘れられずにい

る。登校時に、榊野の門を横切ったが、すぐ言葉が目についた。授業中でも思い浮かぶのは、言葉の愁いを含んだ表情ばかり。

前世があるとすれば、つながりがあるのか、と思えるくらい。

「とりあえず、邪念を振り払うためにも、練習！ 練習！」

漣は立ち上がって、愛用のベースの調整を始めた。

「そうですね。ベストな演奏をしないと、人目ひけなさそうだし」

続いて梓が、ギターの弦をいじる。

唯は、いつものろろろして、練習の開始が遅いが、今日は普段以上に、練習する気になれなかった。

「そういうえば」漣が切り出す。「榊野と桜ヶ丘、たて続けにライブをやるとなると、演奏曲が足りなくならないか？」

「別にいいじゃねえか。足りなくなったら、今流行りのK-POPをアレンジするとか、策はいくらでもあると思うぜ」

律は、特に気にしていない。

「何言ってますか。私たちが作詞・作曲した曲だから、希少価値があるんじゃないですか」

梓はすぐに反駁した。

「……まあ、時間が許す限り、私が考えてみるよ」

濡がその場をうまく治め、練習を始めた。

「ねえ、ライブの時の服装、メイド服がいい？ それとも水着？ バニー？」

さわ子が騒ぎ始めた。いつも手製のコスプレ服を、軽音部員に着せるのが趣味なのである。

「普通でいいよ、普通で。さ、うちらも始めるか」

律は適当にごまかし、ドラムのスティックを持つ。

唯は、もう正直、学祭のライブがどうなるうが、どうでもよかった。

一つあくびをして、ケーキを丸ごと平らげた。

雨脚は3時頃から、いよいよ激しくなっていく。

そんな中、小さな進路指導室で、誠は本を読みあさっていた。

『14歳のハローワーク』、『迷うからこそ理系』。

『看護師になるには』、『ケアマネージャーになるには』。

名の知れた大学の赤本も読んでみるが、難しすぎて1問ぐらいしか解けない。

異性と付き合うようになってから、誠はここに來ることが多くなっている。

かつては言葉、今は世界と、たて続けに彼女と接していると、妙に気疲れするのであ

る。

もてすぎるのも辛いのだ。

その時は、普段行かない場所に行つて、気分転換をしている。

という気持ちが大半だが、正直、将来が心配という気持ちがないでもなかった。

あまり授業態度は真剣ではないが、1か月ほど前から追い込みをかけるため、成績は中の上といったところ。

とはいえ、成績と将来は別物。

看護師をしている母の影響もあり、医療系に興味はあるが、自分のレベルで行けるのか。

浮気症の父と別れてから、母は女手一つで自分を育ててきた。

正直、父とは、もう会いたくない。

というより、自分と母を捨てて、他の女に靡いた父を、思い出したくもなかった。

こうしている間でも、通りがかりの男子生徒は、彼女の童貞卒業の、やたら騒ぎ立てている。

馬鹿馬鹿しくてかなわない。

そんなことよりも、こうして進路を決めて、仕事をする方がよっぽど、童貞から離れられるだろう。

実は、すでに誠は、童貞を喪失している。

言葉に「距離を置く」と言ってから、誠は世界と、『言葉と上手に触れ合う方法』というところ、互いの体に優しく触れ合う練習をしている。

ところが、それがエスカレートしてしまい、ついに関係を結ぶに至った。

誠も世界も、『お互いのことは好き』『一回だけだし、それにこの段階で、童貞卒業も悪くない』と、その時は、思った。

その直後である。世界から告白を受け、付き合い始めたのは。

ところが最近、自分はその時の感觸を、もう一度味わいたくて味わいたくてたまらないのだ。

そういう欲気が、むらむら起こると、なおさらに彼女の、童貞卒業の騒ぎ立てるのが、馬鹿らしく感じてならないのである。

「誠君」

後ろから声を掛けられ、飛び上がらんばかりに、ぎよつとした。

ふりむけば、言葉である。

思わず読んでいた本を背の裏に隠す。

「言葉……」

「私、やっぱり……」言葉は、うつむき加減に言ってから、「誠君と、仲直りしたいです。またあの時のように、仲良くわらって、仲良く話したいです」

「あ……」誠は思わず「い、いや……俺も思わず、ひどいこと言ってしまったから。言葉の気持ちを考えずに、言葉と触れ合いたいとばかり思っていたから……」

「私こそ、ごめんなさい」

言葉は、小さく頭を下げた。誠は、彼女のその姿が、しおらしくてしやうがなかった。自分がいなくなつてから、言葉がどれだけ、さびしい思いをしてきたか、想像するに難くなかつた。

「ほんと、ごめんな……。こんなことになつて……」

何がごめんなのか、自分でもわからなかつたが、思わず口走つた。

「そんな……。私たち、まだ何ともなつていないと思います。ただ……ただちよつと、喧嘩しただけで」

喧嘩なんて、そんなものじゃない。あれは自分が一方的に、距離を置く、と言つただけなんだ。誠はそう思い返す。

ふと、世界の顔が、彼の頭に浮かんだが、懸命に打ち消す。

これで冷たく拒んだら、言葉がどれだけ傷つくか。

「誠君の……都合にもよりますけど……」言葉は言つてから「学祭のときでいいんです、

2人で回りませんか？ それまでは無理して話さなくてもいいですから……学祭のときは、どうですか……」

「学祭か……午後は、その……軽音部のライブに行きたいから、その後でいいかな」
「私も、ライブを見ます。誠君が行きたいなら、一緒に、行ってみたいです。それから、お互いどんなものだったか話し合って、それから……」

ライブの後なら、うまくごまかして、世界から離れられるかもしれない。誠はそう思ってから、

「ライブの後なら、大丈夫だよ。」

「じゃあ、学祭の日、待っていますから……」

言葉は、周りをちらと見てから……

誠の口にキスをした。

……

しばらく、誠は何もしやべれなかった。

「これから……宜しくお願ひします」

言葉は、満面の笑顔で言い残すと、駆け足で指導室を出て行った。

誠は、ぼんやりとしていた。

男に触れ合うことを、あんなに嫌っていた言葉だったのに……。

あまりに唐突なことだったので、その様子を、クラスメイトの甘露寺七海が見ていたことに、気付かなかった。

教室では、学級委員を中心にクラスの皆が、学祭の出し物について話し合っていた。誠は、まだ戻っていない。

「世界！ 世界！」

七海が息せき切って駆け付けた時、世界は澤永泰介と話していた。

「どうしたの、七海？」

世界は、目を丸くして尋ねる。

「あたしの中学の同級生である桂がさ、伊藤にキスしてたんだよ！」

「か……桂さんが……？」

「そうだよ……あのフェロモン女、よりにもよってあなたの彼氏を……」

「ま、まあまあ。桂さんは以前、誠と付き合ったことがあるし……」

世界は、苦笑いを浮かべながら言った。

「何言ってるんだよ。あいつ、男受けばかり良いからさ。伊藤だってどう転ぶかわからないよ。」

七海は、女バスのキャプテンということもあり、人脈が広い。

「そうだ、澤永！　ちよつと耳を」

「ん？」

七海が泰介に、何かをそつと耳打ちする。泰介はたちまち喜びの表情を浮かべ、

「よし、やつたるぞ」

と、つぶやく。

それをするどく聞いて、世界は七海に尋ねてみた。

「何を話したの、七海……？」

「大丈夫、桂をあんたたちのところへ寄せ付けないように、根回ししたただだから悪いようにはならないよ。」

根回し、と聞いて、世界は嫌な予感がし、

「あ、あんまり手荒なまねはよした方が……そりゃあ、誠を取られたくないけれど……」

おっかなびつくりで、言った。

「いやいや、男つてもんは胸さえでかけりや、すぐコロツといつちまうからさ、足止めしておくにこしたことはないよ」七海は平然と言つてから、「じゃあ私、女バスの集まりがあるから、行くね」

「あ……忙しいのにごめんね」

世界は、多少心配の入った笑顔で、七海を見送った。

「世界」

中学生のような、小柄でスレンダーな体型、赤いリボンの少女が、続いて話しかけてきた。

学級委員の清浦刹那。世界の幼馴染でもある。

「あ、刹那……」

「桂は、伊藤の周りにいつもいるし。伊藤も、完全に気がないってわけじゃなさそうだよ」

クールでしつかりした刹那。人間観察にも長けており、その言は、事実に近いとみていいだろう。

「いや、でも刹那、誠は今、桂さんとは距離4置いてるって言ってたよ」

「でも、気にしているのは確か。昨日も4組に行っていた」

「ま、まあ……桂さんはクラスで浮いているからねえ。やっぱり、気になるのは当然でしょう。」

誠の気が、言葉に向くのは嫌だけでも、言葉の境遇もあり、世界は懸命に、割引いて考えようとする。

「まあそんなに言うのなら、聞き流していいけど」刹那はぶつきらぼうに言ってから、「ただ、気をつけたほうがいいと忠告しただけ。私は学級委員で、七海のような根回しはで

きないし」

機嫌を損ねてしまったか。世界はそう思い、

「いや……利那の忠告はありがたいよ。でも……」

曖昧に、答えた。

やがて、誠が戻ってきた。

「いやあ、ごめんごめん。ちよつと山本先生の説教をくらっちゃって……。でも時間内だったよな」

「伊藤、確かに話し合いは4時から始めると言ったけど、みんなその前に来ている。

皆に合わせるべきだよ。それに、今回は他校の生徒を招き入れるわけだし」

「清浦、ごめんな」

利那の注意に、誠は謝る。

誠のそしらぬ顔を見て、世界の不安が、急に高まった。

学級会が終わり、世界と誠の2人きりになった。

「誠……」

世界が、乾いた声で話しかける。

「何？」

「今夜、誠のうちに寄っていい?」

これが何を意味するか、誠はすぐ分かった。

言葉の顔が、一瞬浮かんだが、脳髓に、血のなせる肉欲が、むらむらと攻め入って、言葉の影を消してゆく。

しばらくたってから、

「ああ」

と、誠は言った。

その次の朝、誠は例のコンビニで、朝飯を買いに来ていた。

母は看護師の仕事で、朝になっても帰ってこず、自炊が日課になっていたが、事を済ませた翌朝は寝過すことが多く、作る暇がなかったのである。世界も、昨日のことがばれないように、昨晚帰っていた。

秋雨は、朝方止んで快晴に。

しかし、誠の頭はそれに反比例して、もやもやがどんどん濃くなっていた。

世界とした、その直後こそすっきりしたもの、しばらくしてから背徳感が、ついで言葉の満面の笑顔が、頭の中に住み着いて、離れなくなっていた。

世界の顔と、言葉の顔が、誠の脳裏でかわるがわる浮かぶ。

全く、浮気性の父を毛嫌いしながら、今の自分のやつてゐることは親と変わらない。

結局、自分は親父と同じじゃないか！

早晩、よりを戻さないで、大変な事になる気がする。

恋愛の行為のするよりも、この関係のよりをもどしたほうが、よっぽど童貞から成長できるように思えるのだ。

しかし……。

しかし、よりを戻すにも『どうやって』戻すのかが分からなかった。

関係まで持ってしまった世界と、今更別れられるか？

さりとて、言葉も拒絶できない。

どちらかを切らなければよりは戻らない。惰性でこのまま続けるしかないのか？
考えれば考えるほど、袋小路にはまっているような気がしてならなかった。

「よく……ここで会いますね」

不意に横から声をかけられ、誠はそちらを向く。

ギターケースを肩にかけた、茶髪でショートボブの少女がそこにいた。

服装は、紺のブレザーに青いリボンという、桜ヶ丘の学生服。

平沢唯であった。

「ええ……。そうですね……」

誠は、どぎまぎして答えた。

縁もゆかりもない、赤の他人から声をかけられたのだから。まして異性である。もつとも、榊野学園に入ってから、コンビニで結構見かけたが。唯のこわばった表情が、緩んだ。

唯と誠は、肩を並べて、出た。

誠は、いまだにドギマギとしている。

一方の唯は、誠が自分に答えてくれたことで、満面の笑顔になり、「榊野学園の人ですか?」「あなたのお勧めの食べ物って何?」「私、桜ヶ丘高校の人ですけど、結構榊野の人って、賢そうですね」と、矢継ぎ早ぎに話す。

「い、いやいや、僕はどちらかといえば劣等生の方……」

多少、引きつり笑いを浮かべながら、誠は答えていく。

唯のギターケースが気になり、今度は、誠の方から聞いてみた。

「もしかして、軽音楽部の人、ですか?」

唯の笑顔が、さらに人懐っこいものになり、

「そうですよ!」

と、はずみのある声が返ってくる。

「榊野の学祭でライブするんですよ。私はリードギターだから、一生懸命練習するつもりです」

まったくの、本音である。

唯の人懐っこい笑顔を見て、誠の緊張感が、少しずつほどけていく。それと共に、誠の頭の中にある、世界と言葉の影も薄れてきた。

「そうですか、俺の……」恋人も、と言いそうになって、誠は少し恥ずかしくなり「友達も、軽音部のライブを一番楽しみにしてるんですよ」と答えた。

「へっへー、嬉しいなあ」

「俺も、楽しみにしてますよ」

一応の礼儀として、誠は言った。

が、唯の声にさらに張りが出る。

「あなたに言われると、さらに嬉しいですよ！」

別れる直前、唯は手を振りながら、

「待ってくださいね、必ず特上のライブを見せますから！」

そのあと、唯は勢いで、自分の名前を名乗った。

「私、平沢唯っていうんです！」

「平沢唯さんですか。いい名前ですね」

唯の率直さと、屈託のない笑顔につられ、誠も声に明るさを戻す。世界と言葉のことを、この時だけは完全に、忘れることができた。

「俺は、伊藤誠」

「伊藤誠君ですね。本当に、待っていてください！」

張りのある声で、唯は答えた。

1人になってから、唯は歓喜の悲鳴を上げた。

「や……やったあつ……！ 誠君が……マコちゃんが、私のライブを楽しみにしているって……！！」

冷静に考えれば、それは礼儀としての方便とわかるようなものだ。しかも初めて話した人間に、勝手にあだ名をつけるのもなれなれしい。

しかしまあ、『恋は盲目』というやつであり、まして天然ボケの多い唯である。「やつぱり、思えば思われる、なんだね」

昂然として踵を返し、唯は学校へ戻っていった。

続く

第3話 『前兆』

唯の練習ぶりに、弾みがついた。

誠と、話して以来、である。

『俺も、放課後ティータイムの演奏、楽しみにしていますよ』

その言葉だけが、唯の頭に残り、何でもかでも、滅茶苦茶に練習したくなって、昨日よりは今日、今日よりは明日と、ものすごい加速度をもって、半狂乱のような獅子奮迅を続けた。

部活では、ムギの茶菓子を一口で平らげ、いつものようにだべりもせず、すぐにギターの練習に取りかかる。

それから休まず、水も飲まずに練習を続け、それから帰宅して、食事と入浴を済ませると、すぐにギターをとって、歌と演奏の練習を、深夜まで続けた。

そんなに練習して、死んだように眠って、その翌朝は目覚まし時計が鳴る音と共にはね起き、朝食まで発声練習をした。

もちろん、部員たちはおどろきおののく。

「おいおい、どうしちまったんだよ、唯だけは私の仲間だと思っていたのに……」

いつもは唯と並んで、練習を始める時間の遅い律が、啞然と話しかける。

「何いつてんの、ライブも近いじゃない。たまにはしっかりと練習しないと。それに、たまに泊りがけで練習することもあるでしょ?」

唯は朗らかに、笑って答えた。

「唯ちゃん、私はもう少し、ティータイムの時間がほしいけどなあ」

さわ子もあまり乗り気でない。

「さわちゃんたちはいいよ、マイペースで。私も、マイペースでやってるだけだから」

「これがマイペースと言えるかや。どう見ても躁状態だろうが……」

律は呆れて、呟くように言う。

「いや、いや、よかったですよー」梓だけが、大喜びである。「いつもいつも唯先輩、全然練習しないから困ったもんだと思ってたんですよ。やっと真面目になったんですね」

「ああ、あずにゃん、ひどい! 私だってやる時はやるんですからね!!」

唯は、むくれてみせる。

「冗談ですよ。さ、一緒に練習しましょうか」

梓は笑って、ギターの調整を始めた。唯もそれを見て、ギターのネジを回す。

不意に肩をたたかれたので、そちらを向くと、潑がげんそうな表情でいる。

「唯、最近変だぞ。何かあったのか?」

「べつに。ただ、ライブでは悔いのないように、全力で取り組んだほうがいいかと思っ
て」

あからさまな疑りの視線を向けられ、唯は思わず目をそらして、言った。

「滯先輩、いいじゃないですか。唯先輩があれだけやる気を持つてくれるなんて、初めて
じゃないですか。私は嬉しい限りですよ」

梓が満面の笑顔で、滯をたしなめた。

「……まあ、真面目になったのはいいかもしれないが、なんか私は不安でしょうがない
だ。いったい、何があったのやら……」

しかし滯は、不安な思いを隠せなかった。

「さ、唯先輩、合奏の練習しましょうよ」

「そうだね、あと少し頑張ろう、あずにゃん！」

梓の誘いに、唯は快い表情で答え、大車輪で演奏を始めた。

「ちよ、ちよつと唯先輩！ 力みすぎです。トーンダウン、トーンダウン」

そして、帰宅までの間、必ずコンビニに寄り道をする。

誠に会うためだ。

大体6時頃を目安に行けば、大体誠がいる。

「伊藤くーん!!」

「あ、平沢さん」

いつも元気よく声をかけると、おだやかな声で、誠は返す。

そしてお互い、笑顔を浮かべる。

たまたに世界や泰介と一緒にいたり、コンビニにいなかったりすることもあるが、たいていは一人で、夕飯のおかずを探している。

実際は誠と唯の帰る方向は正反対なのだが、唯はうまくごまかし、誠と行動を共にするようになった。

肩を並べ、誠の向かう榊野学園駅まで一緒に行くのだ。

たわいもない話をしながら。

「そうですね、今年榊野に」

「はい。まあ、受験前にひいひいしながら勉強したんですけど、運よく合格してね。あははは……」

「でもすごいじゃないですか! 私も一夜づけで勉強しましたし。桜ヶ丘がやつとでしたよ……」

もつともつと、誠のことが知りたくて、誠が気付かぬうちに、彼のすぐそばに歩み寄る。もちろん誠は頬を染めて、

「あ、あの……人前だから、あまりくつつかないでくれませんか？」

「いいじゃないですか、伊藤君。たまには」

「ちよ、ちよつと……困るんですけど……」

「困っている伊藤君を見るのも、うれしいです」

明るい蛍光灯が、リビング全体を白く照らしている。

静かな部屋で誠は、世界と共に手製のシフォンケーキを食べていた。

その中でも、唯の笑顔が、焼きついて離れない。

改めて思う。

行きつけのコンビニで見かけていた子だった。

最初は地味だと思ったけど、あれだけ素敵な笑顔を見せる人は、初めて見たな。

「誠、何ボーツとしてんの？」

世界が怪訝な目で尋ねてくる。学祭の会議が長いためか、少し不機嫌なようだ。

「ううん……。なんでもない」

「なんか最近、誠、変よ」

「そうか？」

「今頃なら、たぶん食前に私達、しているはずなのに」

彼の顔がぼんと赤くなってしまう。

というか世界、恥ずかしくないのか。

「な……！　恥ずかしいこと言うなよ……。別にいいだろ！！　いつもそればかりじゃ

お互い疲れるからさあ!!」

「まあいいけどね。学校の昼休みでもやりたがる貴方だから、ちよつと気になっただけだけ」

世界の目が、若干厳しくなる。

無視して誠はシフォンケーキを再び食べ始めた。

そういえば、唯ちゃんと出会ってから、彼女の笑顔を見たら十分で、最近特にした
いとは思ってないんだよな。

不思議なもんだな。

まあとりあえず、唯と親しくなっていることは知られていないらしい。

彼は軽く、息をついた。

そんな日々が続いた、ある日のことである。

唯は手元の券をのぞきこんだ。

『喫茶店ベラ・ノッテ

珈琲無料券』

行きつけの喫茶店の割引券である。2枚ある。

朝起きて、机の奥の奥から見つけたのだ。

しかも、期限は今日まで。

しまっている間に忘れてしまったものとみられる。

「あそこの珈琲、とてもおいしいからなあ。マコちゃんも好きになるかなあ……」

ベージュ色の券を見つめながら、唯は独りごちた。

朝食の席で、もう制服に着替えた憂が、唯に声をかけてきた。

「ねえ、お姉ちゃん、ベラ・ノッテの券って来た？」

「自分の行きつけの店だったのだが、妹の憂にも紹介して、しばしば2人で行った店だったのである。」

男の人と一緒に飲む。そう答えるのが妙に恥ずかしくて、

「いや、来てないよ」

と答える。

「そろそろ来るころなんだけどなあ……またお姉ちゃんと、あのおしゃれな店で話したいなあ。」

遠い目をする。

心の一部で、罪意識みたいなものがうずきながらも、振り切つて家を後にした。

いつものような日常が続いた、午後。

誠は例のコンビニで、漫画を読んでいた。

世界は学祭の話し合い、言葉は委員会活動があり、あいているのは自分だけなのである。

もつとも自分の役割は、学祭近くになつて多忙になつてくるのだが。

実を言うとあまりここで、油を売る必要もないのだが、あえてここにいる。

あの人が、来るかもしれないから。

「ま……伊藤くん！」

来た。

「またいつもの時間ですね、平沢さん」

いつものようににっこりほほえみ、誠は入口にやってきた。

ふと、唯の表情に多少の緊張があることを、彼は悟る。

「あ、あのですね、伊藤君……」唯が、頬を染めてうつむく。「あの……とつてもおいしい珈琲の無料券があるんですけど……今日、一緒に、どうですか？」

誠は唯が見せた、珈琲無料券を覗き込む。

喫茶店ベラ・ノツテ。

彼は珈琲通というわけではないが、あその珈琲は美味だという噂を結構聞いてる。

行こう行こうと思いつつ、なかなか行けない場所の一つであった。

「やっぱ……だめかなあ」

唯が残念そうな表情になる。ほんと、彼女は分かりやすい。

「い、いやいや……俺もあいているし、大丈夫ですよ」

唯を傷つけてしまうのが嫌で、誠は気がつくとうなずいていた。彼女はすぐにはぼつと笑みを浮かべ、

「よかった！　じゃ、さっそく行きましょう」

「あ、でも、ちよつと……人気がない道つて、ないかなあ。」

こんなところを世界や言葉に見られてはかなわない。

「そうですねえ、このあたりに細道があるから……」

細道か……いささか恐喝のターゲットにもなりかねないが、まあ他人の目はごまかせるだろう。

唯の案内するまま、誠はついていく。

「あ、あの……平沢さん。人前なんですから、あんまりくつつかないでくださいません……」

「？」

「いいじゃないですか、一緒にお茶するんですし」

一定の壁を超えると、もはや唯、ためらいがないらしい。きつく誠の腕にしがみついで、顔をすりよせている。

本当に子供っぽい。

周りの人が二人を見て、ぼそぼそと話しているのを、誠はすこし気にした。

「どうしちまつたんだ、唯の奴……………」

あごに手を当てながら、滯は帰路につく。

いつもは唯、律と並んでなかなか練習せず、お茶とお菓子を食べながらダラダラしているのに。

あまりにも、変わり過ぎだ。

そう思いながら、桜ヶ丘の正門を出て左に行き、目を見張った。

唯が、彼女と同じ年程の男子生徒と、肩を並べて大通りを横切っている。

男子生徒の腕を引き寄せて。

「唯…………。あれは、榊野の…………？」

いつの間に唯、彼氏を作ったのか？

それも、榊野の男子生徒と。

「うわあ……ちよつと憎いな、唯の奴……」

彼氏の赤らんだ横顔を見ると、なかなかの好青年に見える。ドキリとなる。

ふと、彼氏を作るために、一生懸命本を読んでいた律の姿が思い浮かぶ。

気になったので、2人を尾行してみることにした。

件の喫茶店は、榊野学園駅東口を出て、すぐ右手にある。

スターバックスやドトールコーヒーよりも高級な飾り付けと、クオリティ高い珈琲豆を仕入れており、一介の学生には手の届きにくい店である。

「はあー、到着うー！」

幼子のような唯の口調。

「俺、ここに来るの初めてですから、ちよつと緊張しますよ……」

誠は少し、ネクタイの位置を調整する。

ドアの鈴の鳴る音とともに、唯と誠は中に入る。

黒いブレザーの店員がゆっくり、深く頭を下げ、二人をテーブルに案内した。

「(イ)ちちへどうぞで」

四人がけの丸テーブルに案内され、誠と唯は向い合せに座った。もちろん荷物は、そ

れぞれとなりの椅子におく。

誠の後ろには、30cm位はある花瓶があり、さらに奥には黒いグランドピアノ、そして窓がある。これならば、外から見えにくい。

「ここなら大丈夫だな……」

つぶやく誠に、

「どうしたんですか？」

と唯は聞く。

「あ、いや、独り言です」

唯の後ろ側にはカウンターがあり、壁の棚には、ターコイズ色、エメラルド色のラベルで染まったティーカップ、ピーターラビットの描かれたものなど、様々なティーカップがびっしりと並べられている。

このおしゃやかなデザイン、静かな感じ、どれも唯のお気に入りなのである。

シヨパンの静かな音楽に耳を傾けながら、唯はにつこりほほ笑む。

誠も、それにつられて笑顔を返した。

何を話してよいものやら。

迷いながら誠は、唯とメニユーを覗き込む。

「うわあ、珈琲1杯で1155円……」

「無料券対象だから大丈夫ですよ。それに、値段が張る分だけ珈琲の質が良いということですよ。」

唯も珈琲通というわけではない。

ただ単に、高いものほど価値がある、そういう考え。

「コロンビアがこの店で一番のお勧めなんですよ」

「じゃあ、俺もそれで。よく来るんですか、ここ？」

「はい、いつもは妹と来ることが多いんですけど、せっかくだから伊藤君にも教えたいと思ってる」

「そっかあ、いいところを知ってるなあ。俺にも妹がいるし、今度連れてこようかな」

「伊藤君にもいるんですか、妹？」

「ええ。別れた親父に引き取られてるんですけど、どうも俺のほうに懐いていてね。よく家を飛び出してこちらに来るんですよ。」

『おにーちゃんのはんばーぐー！』なんて、よく俺の手料理をねだってたね」

誠は笑いながら言った。父のことは、言い出したくなかったが。

「そう……ですか……」

唯は、誠が料理できると聞いて驚きつつも、彼の家庭事情を聞いて、少し心を痛めた。

でも料理もできるんだ。

私なんか、妹がいないと料理も洗濯もできないのに。

自分より年下なのにしっかりとっている。

それは父がいなくて、いろいろ苦労したからなんだろうなあ。

一方の誠は、唯の表情が曇ったのを見て、しまった、と思った。

なんか話しやすいからつい喋ってしまったが、複雑な家庭事情を誰か(まして異性)に話すなんて、自分も口がちよつと軽すぎる。

話題変えないと、と思っていると、唯のほうから別の話題を持ちかけてきた。

「コロンビアはまるやかでね、コクがあるんですよ」

あてずっぽう。

「へえ。俺は苦みの強い奴が、コクがあると思ってました」

素人同士のトンチンカンな会話。思わず苦笑い。

誠は、ちよつと気まずいな、と思い、新しい話題を思いついて、

「話が変わりますけど、平沢さんはいつからギターを習ってるんですか？」

「実は軽音部に入ってからなんです。」

最初は軽音を、軽い感じの音楽しかやらないと思って入部したんですけど。口笛とか。

バンドだと知ってあわてたの、昨日のことのように覚えています。

迷いましたよ。その時はカスタネットしかできなかったし……」

いや、カスタネットはともかく、口笛ってどうだろう……？ 大道芸にはなりそうだけれど。

どうもこの子、かなりの天然と思われる。

「でも、ギターを高校1年から始めて、そこからリードギターを務めるまでに成長するなんて、すごいじゃないですか。めっちゃ練習したんですね」

「そんなことないですよ……」 唯は思わず、顔を赤らめた。「部員が五人しかいませんからねえ」

「五人かあ……部員集めがちよつと大変そうだ」

「本当は伊藤君にも入部してほしいんだけど、違う学校だし、無理だよね」

「まあ俺、楽器を弾いたことないですし……」 言いかけてから、冗談半分に話してみた。

「あえていうなら、小学校の修学旅行の時に吹いたホラ貝ぐらいかねえ、ははは……。もしそれでも良ければ入部したいけど……」

「是非とも入部してほしいです！ そしてホラ貝とカスタネットで、ぜひとも合奏したいですね！ あはははは！」

カラカラ笑って唯は答えた。

「あ、いや、冗談で言ったんだって……」

いちおう誠も笑い返す。

ホラ貝とカスタネットつて合うのかわからないし、そもそもそんな軽音楽があるわけないし、突込みどころが多すぎる。

独特の感性の持ち主なんだな。

でも、心を洗うような笑い声、自分と話すときのキラキラした瞳。

俺のそばにいてほしい。

一瞬そんな思いがよぎり、誠はあわててかき消した。

「ふう、旨かった」

誠はコロンビアを飲み干し、自分の荷物を取ろうとする。

唯は時計を見た。一時間しかたっていない。

もう少し、話したい。

「も、もう少し楽しみませんか……？ ほ、ほら……ケーキもあるし。このチーズケーキ、以前妹と食べたんですけど、旨いですよ」

「そうですか？」

「そ、それにほら、もうすぐピアノコンサートもあるし。是非とも聴いた方がいいと思

ますよ。」

思わず焦ってしまう。

「じゃ……じゃあ頼もうかなあ。」

誠は思わずうなずいてしまう。

母の帰りも遅いし、まあいいだろう。

「やった!!」

唯は思わず立ち上がり、机をけり上げる。

カランコロンとティーカップが揺れ、珈琲の残りの分がこぼれる。

「あ、しまった」

唯が手を出す前に、誠がティッシュでコーヒーを拭いてくれた。

「ご、ごめんなさい……」

「いえいえ」

優しく誠は微笑む。

唯もつられて、笑い返す。

やがてピアノリストがやって来て、ピアノのコンサートを始めた。

「おお、綺麗な曲……」

入口近くのテーブルの席で、ピアノの音に耳を傾けながら濡はつぶやく。

この席と、唯と誠の席の間には大きな花瓶があり、お互いに見えにくくなっている。耳を傾けながらも、少し背伸びをして、唯と誠の様子をのぞき見る。

結構、和気あいあいと話しているようだ……。

どちらかというところ、唯が自分から話して、誠がニコニコしながら聞いている構図になっっている。

まあ、女性って男性よりも口が達者で、話のネタを結構多く作るものだからな。

「唯……」

ちよつとうらやましく感じた濡である。

改めて誠の顔を見ると、再びドキドキがぶり返した。

コンサートが終わると、もう夜の8時になっていた。

「うわあ、うまかったなあ……」誠は、冗談半分に行ってみる。「二つの意味でうまかった」
「くすくす。よかったあ、ケーキも気に入ってくれて嬉しい」

唯は思わず、はしやいでしまう。

「！ 言葉？」

ふと、言葉の視線を感じた気がして、誠は入口のほうを向く。

……が、そこには誰もいない。

「どうしたんですか？」

聞いてきた唯に対し、何でもありません、とだけ答えた。

「どうでもいいけど、口にクリームが付いてますよ」

苦笑いしながら、誠はティッシュを取り出し、唯の口についたクリームをふき取つてやる。

ティッシュを通じて彼の手のぬくもりが伝わり、唯の鼓動がトクトクと速くなった。

ちよこちよこ羽目は外すのに、つついスキンシップをかけちゃうのに、彼はにっこりして受け入れてくれる。

なんだか自分より、誠のほうが大人っぽく感じる。

自分より年下なのに、なぜだろう。

「そうそう、ケーキのお勘定はどうしましょう？」

「あ！ 全部私が払いますよ」

おもわず唯は声をあげた。

「で、でも……」

「いいえ、今回は私が無理して引きとめちゃったみたいだし、せめて物施を……」

話しながらカウンターへ行き、まとめ払いです、とレジの人に声をかけた。

とはいえ、珈琲ほどではないが、ケーキもかなり高い。

2人分払うだけで、今月分の小遣いはなくなってしまうた。

「ほんと、すみませんね……」

すまなそうな誠の表情を見て、いえいえ、と首を振る。

「そんなことないです！ 伊藤君がうれしいなら、すごく私もうれしいですよ！」

こんな……こんな気遣いしか出来なくて、ごめんなさい」

顔を赤らめ、唯は答えた。

喜んでくれただろうか。

唯はいつもの癖で、好意を寄せている人の腕にスキンシップをかける。

日はもうとつくに暮れ、駅の入口からは、黒い闇と一直線にともる電燈が見える。

唯も誠も、肩を並べて歩くこと、触れ合うことにいつの間にか違和感を感じなくなり、恥ずかしいとも思えなくなっていた。

駅の改札口まで、2人は歩いた。

「平沢さん、ありがとう。今日はいい時間が過ごせました」

「うれしいなあ。またいつか誘うね！ それでは、おやすみなさい！」

後ろを向いた誠を見て、唯は思い出したかのように、

「あ、そうだ！ 伊藤君！」

携帯電話を取り出す。

「せっかくだから、メールでもお話しましょうよ。赤外線で私のデータ、送ります」

「じゃあ、俺も」

誠はからつと笑って、青い携帯をとりだした。

赤外線送信は携帯を近づけないとできない。

携帯を近づけて、思わずお互いの手の甲が触れ合う。

「あれ、おつかしいなあ……。うまく出来ないや」

「あ、たぶん平沢さんの携帯には背中についているんだと思います。……やつぱり」

「あ、ごめんなさい……。最近なかなか使わないもので」

「しようがないですよ。おまけに送信するときはパスワードを入力しないとイケない

し、ちよつと腹立ちますよねえ」

「そうですねえ」

携帯の赤外線受信部を近づけると、簡単にデータの送受信ができた。

「じゃ、これからもよろしく！」

「待っていてくださいね。学祭の日はベストな曲を聞かせますから！」

そう言って思わず唯は、手を振った。

誠も手を振って返しながら、改札口を通って行った。

弾む気持ちで唯が踵を返すと、目の前に漣がいる。

思わずぼんと顔が赤くなる唯。

「み、漣ちゃん……見てたの……？」

漣は思案顔のまま、表情を変えず、

「なるほど、まさか唯、彼氏を作ってたなんて」

「い、いや、そういうのじゃないよ……」

うつむいたまま、唯は答えた。

「唯も隅におけないな。あの人に気に入られたくて、練習を張りきってたというわけか。

あの男、以前梓が言っていた人なのか？ 彼女のいる、あいつ？」

「ち、違うよ……」

思わず唯は、目を外した。

「だったら、いいけど。考えてみれば、唯もそんな年か」

漣は半信半疑の表情だったが、これ以上問い詰めるのをやめてくれた。

「それにしても唯、いい顔で笑ってたね」

「え、そう……？」

「うん。私たちとしゃべっている時にも、あんな笑顔しないよ」

自分でも気づいてなかった。

誠と話している時、今までなかった朗らかな笑顔をしていたことに。

「ひよっとしたらあなたたち、似合うのかもしれないね……」

頬笑みを浮かべながら、漣は言った。

うつむいていた唯の頬が、ゆるんだ。

似合う、かあ……。

電車の車窓から、赤々とした紅葉と、黄色い銀杏の並木が見える。

音楽を聴きながら席に座り、唯の屈託ない笑顔を、ぼんやりと誠は思い浮かべていた。

肌のぬくもりや、感触よりも印象深い。

あのいい笑顔。

そして、赤子にも似たきれいな目。

あれを見ていると、癒される。

二股をかけているという罪意識を、一瞬だけ忘れることができる。それに甘えてしまっている、自分も情けないといえれば情けないが。

こんな自分に、どうして懐いてくれるんだろう。

でも、そばにいてほしい。

という思いがまた、頭をよぎったとき。

「伊藤！」

強い声で、我に返る。

甘露寺七海が、前に来ていた。

自分より大柄な彼女が、強い剣幕で睨んでいる。

「ああ、びっくりした……甘露寺か」

「びっくりしたじゃねえよ！ どういうことだ？ 世界がいながら、桜ヶ丘の女の子と

付き合ってるってのは!!」

「お、おいおい……付き合ってるって、そういうわけじゃ」

「しらばっくれんじゃねえよ！」七海が詰め寄る。「現に駅前の喫茶店で、一緒に食事してたじゃねえか！」

やっぱり見られていたか。

「い、いやねえ……。コンビニでよく見かける子なんだけど、喫茶店に誘われて、断れなくて……」

誠があわてていると、

「とにかく、世界にこのこと、知らせたからな」

と、そっけない七海の返事が返ってくる。

すると誠の携帯から、音のしない振動が伝わってきた。このリズムを考えると、世界からだ。

ぱつと携帯を開けてみると、こんなメッセージが。

『今夜誠の家に行くのはやめた。』

どういうこと？ 桜ヶ丘の女の子と隠れて付き合ってるっての。

七海から聞いたよ。

今日は遅いから、明日じっくり説明してもらおうからね』

案の定、本当に、世界からである。

「ああ……」

これから嵐が起こることを悟り、誠は頭を抱えた。

続く

第4話 『波紋』

登校の足取りは重かった。

誠は改めて、唯の誘いに乗ってしまったのを後悔した。

2人っきりの登下校、2人っきりの喫茶店。

それに腕を組みながらの移動。

ついつい唯の笑顔が見たくて、拒めなくて、受け入れてしまったが。

それが世界に誤解を招くような行為だったとわかっていながら。

誠にしてみれば、知り合ってから日も浅いし、単なる友達のようにしか認識していないつもりだった。

山県や加藤のように、中学時代からの女友達もそれなりにいたわけで、そういうのと同じだと思っていたんだ。

とはいえ、それをどう説明するか。

頭の中がぐるぐるし、混乱が収まらなかつた。

教室に入ると、クラスの話が急ににぎやかになる。

世界は自分の席で眉間にしわを寄せ、手を組んで座っていた。

誠と世界の席は隣り合わせ。

世界の周りに七海、刹那、それに同じく世界の友達の光が立っている。

3人からの冷たい視線から眼をそむけながら、誠は世界の隣に座った。

少し離れたところで、泰介が興味深げに見つめていた。

「誠……………」

低い声で世界が声をかける。

「最近私が忙しいことをいいことに、桜ヶ丘の女の子と付き合ってるって、本当?」

「付き合っているというわけじゃ、ないんだ……………」

「でも、二人つきりできつついたり、そこでキスしたりしたんでしょ?」

七海から聞いているんだから」

「キスって」誠は顔を真っ赤にして、「し、してるわけじゃないじゃないか!!知り合ってからそんなにたつてないんだぞ!! どんだけあらぬ尾ひれがついてんだ!?!」

「嘘くさい…………光も、七海も、誠の腕にその子が抱きついていてのを見たって…………絶対ス

ゴイ関係になってるって、みんな言ってる…………」

「だから生々しいこと言わないでくれよ!! 違うってば!」

「いっつもいっつも、くっつかれてただろ? あの平沢って奴に。」七海が口を挟んでき

た。「なのに伊藤、一度も拒まなかったよな？」

確かにそうだ。

人の腕にスキンシップ。

恋人同士のお約束なのに、自分は誤解されるということをわかっていながら、それを拒めなかった。

誠は、黙ってしまった。

「まあまあ、待て待て」泰介が話に入ってきた。「西園寺もこいつの彼女ならわかるだろう？ こいつ優しすぎて、なかなか嫌と言えないところがあるからさあ」

「だからと言って、限度というものがあるでしょ、澤永」

世界はそっけない。

「俺もその子と誠が、一緒に下校しているのを見たけど」

「泰介、いつの間に見たのか!？」

誠の顔が、さらに赤くなった。

「いつつも向こうのほうからくつついていたぜ。誠は逆に迷惑そうだった」

迷惑、というほどではないが、恥ずかしかつたのはたしか。

ただ……。

同時に、自分に強い好意を寄せてくれてうれしいと思ったことを、誠は思い返した。

そして、自分自身も、好意を持っていることに。

「大体、人を好きになるってことは、その人の悪い点も含めて好きになるってことだろう？
こいつのなかなか拒めないところも含めて、好きにならなきゃ、西園寺。誠の本当の彼女になるのならね」

泰介は、急に真顔で言った。

「……まあいいけどさ、それほどまでに言うなら、あの平沢って子が誠にちよつかい出さないよう、見張ってほしいんだけどね」

ぼやくような口調で、世界は言った。

「……まあ、できるかぎりはね。ところでさ、甘露寺。あいつが俺に興味を持つてるのって、ほんとか？」

「ああ、とはいえ、あいつは奥手だからね、強引すぎるぐらいに攻めてもかまわないと思うぜ」

何の話だか、世界も誠もふと気にした。『あいつ』とは誰のことなのやら。

ちらりと見ると、光が冷たい視線で泰介を見ている。

「じゃあ、どのタイミングがいいかなあ。放課後ティータイムの演奏も聞きたいしなあ……」

ぶつぶつ言いながら泰介は去っていく。その時の一瞬、誠にウインクをした。

昼休み。

教室では、食堂に行かない生徒たちが、手作りのものやコンビニで買った弁当を食べ
ている。

誠と一緒に食事をとるにはあまりに気まずく、世界は一人で食事していた。

「世界……一緒に食べていい？」

弁当箱の前に、頬杖をつきながら考える世界に、七海が声をかけてきた。傍らに刹那
もいる。

2人は世界をはさむような形で座り、それぞれの弁当箱を開く。

「あの平沢って子、いまだに気にしてる？」

七海がさりげなく尋ねた。

「当り前じゃない」

「まあ、桂に比べれば地味な子だからね。平沢って人」

刹那は落ち着いて話す。

「なんだい、刹那も見たのか」

「少しね」

「だったら、止めてくれればよかったのに、」世界はぶっきらぼうに言った。「ひよつとし

たら平沢さんに誘惑されて、本当にキスとか、えっちとかしてたんじゃ……!」

「それはないでしょ。噂がたつてからあんまり経過してないのに」

刹那はどこまでもクールである。

「あんたもさあ、伊藤なんかやめちやつて、他の奴にすればいいのに」七海は呆れたように言う。「大体あんたにコクする奴なんて、山ほどいただろ。なのに伊藤以外、全員ふつちまってるさあ」

「誠よりいい男なんて……」

顔のよさや優しさ、心洗われる笑顔、気前の良さにひかれた。

自分には到底振り向かない人間だと思っていたのに、言葉と誠の仲を仲介してから、いつの間にやら本気になって……。

そんな中で、誠と結ばれるチャンスが出来て、逃すことができなくて……。

誠に言葉を紹介してからの自分の思いを、彼女は改めて反芻した。

その時、世界の携帯から、聞き覚えのある着うたが流れてきた。

「うわ、KARRAの『ミスター』の着うたじゃん!」

「へへへ……」

笑いながら世界は、メールを開いてみた。

「……桂さん……?」

「助かった。感謝するよ、泰介」

同じ頃、学校の食堂で伸びをしながら、誠は泰介に礼を言った。

「いいってことよ。それに、あれは一方的に向こうがくつついてきたような感じだったもんな」

「とはいえ、甘露寺の言う通り、拒めなかった俺も駄目だよな……絶対みんな誤解するだろうって、わかっていたのに」

カレーライスをほおばりながら、誠はぼやく。

「あまり嫌と言えないってことは、優しいってことだよな。ま、顔がよくて、優しくて気がよいくれれば、そりゃあ、モテるだろう。にくいね！」

「やめてくれよ……おまけにもうクラス中で噂になっていて、かなわないんだから……。もう極悪プレイボーイのレッテル貼りされてるんだぜ……」

「ま、しょうがねえよ。人の口に戸は立てられないっていうし。」

それにみんな、桜ヶ丘と榊野のヘテロカップル第1号が楽しみだって、お前とあの平沢って子が第1号になるのではないかって、ワクワクしてるんだぜ？」

「ヘテロカップルってなあ……」

逆に誠、あきれてしまった。

「実際、平沢さんとは、どこまでいつてるんだい？」

「それは……」

浅い関係とはいえ、言い出しにくかった。それにこのお調子者、誰に口を滑らせるか。「だーいじょうぶだ、俺はこう見えても口が堅いから、秘密は守るぜ。」

別にいいんだよ。ぶつちやけ、キスしたとか、セ……」

「だからそういう間柄じゃないんだって!! 一緒に下校したり、喫茶店でお茶したりするだけなんだから……あ」

思わずしゃべってしまう。

「……ま、向こうのほうが押しまくってたもんな」

泰介は肩をすくめた。浅い関係に多少残念そうな顔つきである。

誠はなぜか吹っ切れた気持ちになり、

「それにキスなり何なりしなくても、あの人こそばにいてくれるだけで、癒されるんだ」
窓の青い空を見て、続けた。

「そばにいて、笑ってくれるだけで、いいんだ……」

唯が教室に入ると、何やら周りの噂話が急ににぎやかになった。

「……?」

どうしたんだろう。

最近皆、唯が教室に入ると、彼女を見てひそひそ何か話していることが多い。

そのなかで、律とムギ（滯は別のクラス）が、彼女を興味深げに見つめていた。

「お姉ちゃん」

声をするほうを振り向くと、入口に憂がいた。

「憂……」

唯は妹のそばに駆け寄る。

「実はお姉ちゃんがね、榊野学園の男の子……たしか、伊藤さんといったかな……付き合ってるっていう噂が、学校全体で噂になっちゃっているの」

「え、どうして……?」

「みんな注目してみたいだよ。こっそり後をつける人も多かつたらしいし」

「いや、付き合ってるんじゃないんだけど……」

「ううん、お姉ちゃんの方が積極的だつて、みんな言ってる。その人の腕に抱きついたりして」

「……………」

事実。何も言いだせなかった。

「それより、ベラ・ノツテの無料券がまだ来ていないっていうの、あれ、嘘だったんだ

……

「いや、そういうわけじゃ……」

「もうわかっちゃったよ……お姉ちゃんとその人がベラ・ノツテでラブラブの話をしていたって、澤さんからもう聞いてちゃったし……」

「ラブラブってねえ……。でも、どうしても誘いたい人だったから……」

「しようがないよ。お姉ちゃんにしてみれば、私以上に大切な人なんだから」

肩を落として去っていく憂は、最後に付け加えた。

「お姉ちゃんは、どんなになっても、私のお姉ちゃんだからね……」

放課後、音楽室。

学祭が近づいても、練習前のティータイムは、この軽音部の場合、欠かさない。

「唯先輩、先輩が付き合っている男の人って、以前憂も見た、あの人？」

紅茶を口につけながら、梓が目ざとく尋ねた。

「いや、だから違うって……」梓からの問いに、懸命に唯はごまかす。誠に彼女がいるとわかっているながら、隠れて付き合っているのだ。ばれたらなんと言われるか。「とりあえず、早く練習しようよ、あずにゃん」

「そうはちよつといかないです。あれから憂、なんか元気ないみたいですし」

すでにギターをとっている唯に対し、梓は疑いの視線をあからさまに向けていた。

「まあまあ、梓」濡が話に入ってきた。「別にいいんじゃないの。バンドの仲間として、恋が実るよう見守ろうよ」

「濡ちゃん……」

唯は目を潤ませた。

「ちくしよお……唯はうらやましいなあ」

苦虫をつぶした表情で、律がつぶやいた。

「ひよつとしたら、桜ヶ丘で彼氏を作ったのって唯ちゃんが初めてかもね」

さわ子がニヤニヤしながら言う。

「いや、だからそういうのじゃないんだって！」

唯は顔を赤らめる。

「あいつは確か、伊藤って奴だけけど」濡が続ける。「私も、唯とその伊藤がくつついてるところを見たのさ。喫茶店で話している時、なかなかいい雰囲気だったよ。」

それに、唯もいつも以上の朗らかな笑顔をみせていたし」

「……でも……」お茶とお菓子を持ってきたムギが不安げな表情で、言った。「噂では、キスしたとか、夜を一緒に過ごしてるとか、そこまで言われているみたいよ。そういうことはないと思うけど……」

「あ、あ、あるわけないじゃない！」唯は熟したリングゴのように紅潮しつつも、「でも、マコちや……伊藤君と話すようになってから、二、三度そうなる夢を見たんだよね……」
「つて、女の子に言えることですか、それ!? それにしてもアレを夢にまで見るなんて、かなりの重症だなあ……」

梓は呆れた。

「いいじゃない、夢なんだし」

「よくないです。誰と付き合うにしても、節制は守ったほうがいい。それに、羽目を外すとどんどん憂がやつれていくと思いますよ」

「だから付き合ってるんじゃないってば……あの人が好きなことは好きなんだけど……」

「じゃあ、やつば彼氏と認めてもいいじゃねえか」律がぼやき口調で言う。「あーあ、悔しいなあ。私も唯みたく、青春を満喫したいよ」

「……もういいよ……。先に練習するから、私」

唯はもう付き合っていられなくなり、ギターの糸の調整を始めた。

「お前ら言いすぎだぞ、見守ってやろうつて。噂もそのうち消えるだろうさ」

澁が他の皆をなだめ、唯に続いてベースを調節する。

日がとつぷりと暮れても、軽音部の練習は続いた。

一旦資料をとりて職員室に戻ってきたさわ子に、男子教員が声をかけてきた。

「山中先生。 榊野学園の女の子が先ほどやってきたのですが、お知り合いですか？」

「え？」

「音楽室の場所を聞いてきましたよ。 軽音部の人に会いたいと」

「いえ、知りませんよ。 ……どうしたんだろう…？」

窓をふと見ると、霧が少しかかっていた。

この軽音部が夜まで練習を続けることは少ないが、学祭近くになると、ごくまれに寝袋まで借りて、泊りがけで練習することもある。

唯の発案で、今日は泊まり込みで練習しようということになった。

濡は集中力を増すためと言って、珈琲を飲みすぎてしまい、トイレに行っている。

「それにしても、あれから急に唯先輩の練習がはかどってますね。 いつもはノロノロダラダラしてるのに」

梓が冷やかす。

「いつもがんばってるつもりなんだよ、こっちは」

唯はいつも通り、むくれてみせる。

「榊野に彼氏が待つているもんな」

律はまた、唯の触れられたくない話題を持ち出した。多少妬んでいるものと思える。

「だーから、いいかげんやめてよ」

その時、急にがらりと戸が開いた。音楽室の。

「あ、濡ちゃ……じゃない……？」

その子は濡ではなかった。

戸をあけたのは、唯と同じくらいの背丈の（濡は唯より背が高い）、黒髪を腰まで垂らした女の子。

黒いブレザーに、胸元に赤スカーフという、榊野の学生服を着ていて、胸が妙に大きい。

「だれ、貴方……」

言いかけて唯は、思わず息をのんだ。

その少女にある、暗い炎のたぎった瞳に、圧倒されたのだ。

「いやあ、すまんすまん……あれ、貴方、あの時の……？」

トイレから戻ってきた濡は、その子を見てすぐに気付いた。

その子が、あの時に出会った、桂言葉であることを。

……しばらく、沈黙が場を覆った。

「平沢さんですか……貴方が……?」

最初に口を開いたのは、言葉であつた。

「え、ええ……そうだけど」

「なぜ伊藤君に……誠君に近づいて……誘惑なんかするんですか……?」

「誘惑……」

「聞きました。誠君が貴方に誘われて、貴方の家に一緒に行つたつて。一緒に腕組んでたつて」

「ち、違ふよ……ただ喫茶店に誘つただけだつてば」

「誠君は私と付き合つてるんです。ちよつかいかけないでください」

低い、だが芯のこもつた声で、言葉は言つた。

「あれ、伊藤君と付き合つているのは貴方じゃなくて、もつと髪の毛の短い、ちつちやな子だつたと思つたけど」

言つてから、誠と付き合つている時の世界の朗らかな笑顔を、唯は一瞬思い出した。

「それは……。その子が誠君を誘惑して、一緒にしたから……」

「した……何を……?」

言つてから唯は、言葉の顔がかすかに赤くなつたのを見て、その行為が人に言えない

ものであるのを感じた。

もつとも、自分も夢に見たことであつたが。

「唯……………あんた横恋慕してたんか……………う？」

「というより、二股も三股もかけるような不誠実な男と付き合つてた、ということですよ
ね」

律と梓が、横から勝手なことを言う。

「まあまあ、黙つて聞いてあげたら？」

ムギが懸命に二人をなだめる。

ふと濡は、言葉が胸ポケットの中をさりげなく探つているのを察した。いやな予感がして、表情を曇らせる。

「とにかく、もうこれ以上、誠君にちよつかいださないで！ 近づかないでください!!」

声を荒げた言葉に対し、唯はうつむき加減で、しかし、しつかりした声で、言った。

「いやだ」

「え？」

「……………あの子や、貴方が伊藤君のこと好きなら、私も……………伊藤君の……………マコちゃんのこと好き！」

「え……………？」

一瞬、凍りついた空気が、場を覆った。

律も梓も、口を半開きにし、ムギは口を両手で覆った。

滯は、唯と言葉の顔をかわるがわる見ながら、ますます表情を険しくした。

「初恋なの」唯は言葉に対して、ゆつくりと、言い聞かせるようにつづける。「2年になってから、近くのコンビニで見かけるようになって、一目ぼれして……」

でも学校も違うし、なかなか声かけられなかった……。貴方とは違って……」

「私とは………?」

「本当は、貴方のことが妬ましいと思えるくらいなんだよ。貴方は同じ学校だから、きつと気軽に会えて、気軽にマコちゃんと話せたかもしれないけど」

「そんなことないです。昔は楽しかったです、確かに。でも、ちよつと喧嘩したのを機に、友達に取られてしまって。それがどれだけ辛いものか、貴方、わかっているんですか!？」

「……それでも……どつちにしても、ゆずれない。」

どうしても、あきらめられないんだ……」

分かってもらえない。

そう思い込んだ言葉は、学生服の裏の胸ポケットを探りはじめた。

その時、

「待つてくれ！」

割つて入ったのは、濡だった。

「唯も、貴方も、トーンダウントーンダウン」

むりくり、笑顔を浮かべた。

「……これができると思いますか」

低い声で、言葉が答える。

濡は、言葉の目をじつと見つめ……。

「……できないとは、わかっているけど。それでもな。

そつちでもいろいろとあるみたいだな。付き合っていた恋人を取られて、気が立つて

るんだよね」

「……本当に、取られています。その上、この人も誠君をとろうとしていているんですか

ら」

「……そりゃあ、怒るのも無理はないわな。でも一番悪いのは、取った奴じゃないの

か。唯は事情を知らなかったんだし」

「さつき、誠君に彼女がいるって、この人言っていましたよね……」

「う……」 濡は言葉が途切れた。「とにかく、貴方が伊藤つてやつの本当の彼女なんだから

？ それより取り戻す方法を考えた方がいいんじゃないのか？ 唯は伊藤と、まだそれ

ほど親しくないんだし。お互いに敬語で話しているんだぜ」

「男女の関係、どうなるかわかったもんじゃありません。それにこれ以上、誘惑する相手が増えると困るだけです」

「いや、それはわかるけど……」 漣は戸惑ってから、「まず第一に、彼氏をとった相手の説得はできないのか？ 私が唯によく話しておくからさ、そつちを優先させるべきだと思っけど……」

「そう……ですわね……」

ようやく言葉が、納得した。そのように漣には思えた。

「何やってるの？」

教師の顔、教師の声で、さわ子が声をかけてきた。

気まずい雰囲気、音楽室の外からも感じられたらしい。

さわ子は一応、このことを榊野の教職員に報告すべきと思っただが、漣は必死に説得を続ける。

「ま、待ってくださいよ……。別に暴力沙汰とか、そういうのを起こしているわけじゃないんですし、なかったことにできない？」

「そうは言われても……一応教師としては、向こうにも何らかの連絡をとったほうが」

「大丈夫です。本当はおとなしい子だと思っし」

「滯、こいつの知り合いか？」律が目をしばたいて尋ねた。「何で、んなこと、言えるんだ？」

「知り合い……というほど会ってはいないけど、態度からしてそうだろう。」

成程、言葉は滯の横で、はにかんだ顔でかしこまっている。

「いや、でも大人しい人ほどキレると怖いからねえ。そんなんでいいのかなあ……」

とりあえず……ということ、他の先生に相談を持ちかけるために、さわ子は教員室の中に入った。

唯達は、練習のために音楽室に残る。

滯と言葉は、教員室の前のベンチで、肩を並べて、座った。

「私のこと、かばってくれるんですか……？」

言葉がまばたきして尋ねた。

「貴方の気持ちも、分かるから……」滯はそう言いかけてから、あわてて、「いやいや、私は彼氏なんて恥ずかしくて作れないから、彼氏をとられた貴方の気持ちが分かるなんて言えないけど……」

ただ……わかりたいし……貴方を助けたいって、思ってる。」

本音が知らぬ間に出ていることが、自分でも信じられなかった。

「……………どうしてですか……………？ 学校も違う見ず知らずの私を……………」

妙な顔で、言葉が訪ねた。

「それは……………」

滯は思いが、喉まで出かかった。

初めて会ったときからの思い。

きざもキザ、恥ずかしいと思いつつも、気がつくと滯は、大声で言葉に言ってしまった。

ていた。

「貴方の、笑顔が見たいからっ！」

貴方が苦しんでるのが、耐えられないからっ!!」

「え……………」

しばしの沈黙が流れる。

滯はパツと顔を赤らめ、

「ごめん……………つい大声出しちゃって。

でもね、初めて会ったときから、貴方になんか親

近感のようなものを感じていたんだ。

どこか不器用で、人付き合いが苦手なところも

似ているし」

「いえ……………。でも、ありがとうございます」

戸惑いながらも、言葉は頭を下げた。

「あのさ……」

「はい？」

「初めて会った時、学生証落としていったよね……。ほら、マックでぶつかつた、あの日」「あれ、貴方が拾つてくれたんですか。よかつたあ……。次の日血眼になつて捜したんですよ。」

「ありがとうございます」

「気をつけてね」優しく微笑み、滯は続けた。「あの、確か名前……。桂つて、言つたよね。」
「そうです。桂……。言葉です。貴方は？」

「滯だよ。秋山滯。……。これから、もし、あの伊藤つて奴のことで悩み事や心配事があつたら、いつでも相談してよ。メール、交換しないか？」

「そ、それは……」

言葉は戸惑う。その飛びぬけたプロポーションゆえ、女子から冷たくされていた言葉である。この人の言うことも、どこまで信じられるか。

滯は言葉の、多少ためらいの混じつた表情を読み取り、

「……わかつた、教えたくないなら、いいよ。ただ、私のメールアドレスだけ、送らせてくれない？」

自分のメールを送れば、万が一の時に連絡もつくだろう。

言葉はきよんとしつつ、

「そ……それならいいですけど」

思わずうなずき、赤外線通信で漣のアドレスを受け取った。

幸い、このことはなかったことにしよう、という結論になったとか。

漣は嬉しかったが、言葉は少し複雑な気分であった。自責の思いもある気がした。

「桂！」

玄関で言葉と別れるとき、漣は声をかけた。

「なんでしよう？」

「学祭当日、私たちの……いや、私の演奏、出来たら聴きに来てほしいんだけど」

「え……？」

言葉は、目をしばたたく。

漣はすぐに頬を赤らめ、しかし笑顔で、

「その……貴方にだけは、私のベースを聞かせても、恥ずかしくないと……」

「秋山さん……」言葉は少し間をおいてから、「実は、誠君も放課後ティータイムの演奏を聴きたいと言っているんで、一緒に聴くつもりなんですよ」

「そ、そうか……」何となく滯は、ほっとしていた。「それじゃ、何か悩みがあったら、遠慮なく打ち明けてよ」

「は、はい……」

あいまいに答えて、言葉は校舎を出た。

ふと滯は、一瞬不安になった。

唯を誠から引き離すことで、唯が今までのように、あの時のように笑ってくれなくなるのではないかと。

「滯……」

こつそりと二人の会話を盗み聞きしていた律に、唯が声をかけてきた。

「どうしたの、りっちゃん？」

「いや……」律は振り向いて、「滯って人見知りがちよつと激しいじゃない。自分からライブを誘うことなんて、今までなかったのに」

「そういえば、そうだね」

「それより、唯、どうすんだ？ あんなこと言って……」

「やっぱり、どうしても、あきらめられないもの、」唯はうつむき加減に、「どういうことがあったのか、あまり分からないけれど、桂さんがあきらめられないように、私だって

あきらめられないんだよ。

学校も違うから、あまり声もかけられなかったし……。私の『好き』は、ずっと我慢する『好き』なんだ……。

でも、もう我慢できないんだ」

「唯……」

「マコちゃんに彼女がいるとは知ってたけど、それがかえって思いを強くして……思わず、声かけちゃった」唯は絞り出すように続ける。「声をかけるたび、一緒にいるたび、すぐくうれしくて、ニコニコしているマコちゃんを見て、もつとそばにいたくなって。本当は彼女になりたい。無理だなんてわかつてはいても、

思い……止められないんだ……」

大雑把な律も、何も言えなかった。

この時唯には、泊りがけで練習するのをやめにしたという思いが、頭の中の大半を占めていた。

校庭に出てから、胸ポケットにある果物ナイフを確認し、言葉は走り出していた。

何やら、思いが制御できなかった。

誠を横取りしようとする世界や唯への、波のついた憎しみと、

こんな自分をかばってくれた、滯への思いとが。

その思いがないまぜになって、なぜか果物ナイフまで持ってきた自分が、馬鹿らしく感じられた。

話がこじれたら、唯と世界の首をナイフで切るつもりでいた。

しかし滯にかばわれてから、はらわたがよじくれるほど腹を立てていた自分が情けなく感じられた。

校門まで出てくると、

「桂さんー」

聞きなれたハキハキした声が届く。

世界が、校門で待っていた。

「どうしたの？ こんなところに呼び出したりして。それにどうして桜ヶ丘の前で？」

「それは……………」理由を言いだせなかったが、思いを抑えることができず、「誠君のこと……………」

「誠のこと？ だったら、誠も連れてきた方が……………」

「誠君のこと、誘惑しないでくださいっ！」

今までのうつ憤を絞り出すように、言葉は言った。

「西園寺さんの紹介で誠君を知って、なのに……なのになんで、今更割り込むようなことをするんですか？」

「違う。私も……ううん、桂さんが誠のこと気にする前から、誠のことが好きだったんだもの」

「だったら、なぜ私に誠君を紹介するような真似をしたんですか!？」

「だって……あのときは、誠が桂さんのことを好きだったから、そう思ったから……」

「どうせ自分に振り向いてくれないだろうから、誠君の好きにさせたかったからですか!？」

「それとも、あの時は本気だったとでも言うんですか!？ そんな理由になりません!」

気がつくと言葉は、手持ちのカバンを地面に落とし、世界の方を揺さぶりながら声を荒げていた。

下校する桜ヶ丘の生徒たちが、じろじろと2人を見つめる。

「お、落ち着いてよ桂さん、とりあえず、裏で話そう」

言葉の手を払いのけながら、世界は言った。

細い裏道。

ここなら、人目につかない。

霧が濃くなり、木々をぼやけさせ始めている。

「どうして、私と付き合っているのを知ってて、誘惑したんですか？」

「誘惑って……」

「誠君と屋上で……してたじゃないですか！」

「!!」

触れ合う練習……そんな、自分でもわけのわからない理由で、誠とお互いにスキンシップをかけた結果がそれだった。

「それは……」

「誠君は私のことだけを思ってくれていたのに、どうして……」

「それは……誠と交わった証がほしかったし……」

「でも結局、そのせいで誠君は西園寺さんのところへいつちやつたじゃないですか!! あんまりです!!」

「……そのことは、申し訳ないとは思っているけど……」

「もう近づかないで下さいよ! 仲介ももういいです!!」

「………。近づく」

きつぱりと言った。世界まで。

「私、誠のこと好きだし。誠だって、私のこと好きだって言ってくれたんだもの!!」

「……西園寺、さんに……?」

「私、うれしかった。誠君が私のことを好きなら、私だって」

「貴方が誠君を誘惑するから、誠君もおかしくなつたんだと違いますか?」

「そんなことはない。誠は、私を選んでくれた。うん、そうだよ。誠は私のことが好きだし、私だって誠のことが好き。本当は片時も離れたくないんだ!」

言いきつて、去つていこうとする世界の腕を、言葉はつかむ。

「違います、誠君は、私のことが好きなんです。」

「でも……迷わないって、もう決めたんだから。もう誰も近づけさせない……貴方も……」

世界は、言葉の手を払いのけ、去ろうとする。

邪険にされたと思ひ、言葉は、もう我を忘れていた。

無意識のうちに、胸ポケットから例のナイフを取り出し、その蓋を外した。

去つていく世界の背に突き立てようと、腕を振り上げた時、かすかに、声が聞こえた。

『学祭は……軽音部のライブを見たいから、その後でいいかな……』

『私の演奏、出来たら聴きに来てほしいんだけど……』

貴方にだけは、私のベースを聞かせても恥ずかしくないと……』

その声で、視界が、一瞬、純白のスクリーンのように白くなった。元に戻ると、世界の姿はもうなかった。

言葉は、何やら自分のやろうとしていたことがばからしく感じられ、急いでナイフに蓋をした。

「……?」

泰介と下校する途中、誠は桜ヶ丘の方角を向く。

「世界……言葉………平沢さん……」

つぶやくと、泰介が、

「どうした、誠?」

振り向いて尋ねる。

「……なんでもない」

誠は首を振り、泰介に追い付く。ごまかし半分に、ちよつと質問する。

「泰介は学祭の日、誰とつるむんだい? ひよつとして黒田とか? 中学時代からの同

級生なんだろ?」

「おいおい、あんな奴と一緒に童貞卒業するなんて……。あいつよりも特上の人を見つけてな。甘露寺に言わせると、俺に気があるんだとよ」

「誰とだよ?」

「教えな—い」

男水入らずの話の続けようとする

「あ、誠!」

突如、世界が誠に駆け寄り、腕に飛びついた。

「せ、世界!?!」

頬を赤らめた誠に対し、彼女は何事もなかったかのような笑顔を浮かべる。

朝とはうってかわって積極的なアプローチである。

「ヒューヒュー! 誠! 熱いぞ!!」

はやし立てる泰介。

「やめてくれよ……」

「じゃ、俺はお邪魔虫になるようなので、ずらかるから」

泰介は、速足で去って行ってしまった。

誠は、自分の腕に抱きつく世界の肩越しに、壁の脇で様子を見つめている言葉を発見した。

飛び出そうとする言葉の前に、七海が出て、遮る。

「行くうよ、誠。今日はうちに寄ってかない? うち、母さんも夜勤で誰もいないし」

世界に誘われ、強引に引っ張られ、言葉が彼の視界から外れる。霧がまた少し、濃くなり始める。

風が急に強くなったので、道端の銀杏が夜空に舞い始めた。

続く

第5話『迷走』

「伊藤君！」

コンビニ近くで誠を見かけ、唯は駆け出した。

しかし目の前で、世界が先に誠の腕に飛びつく。

「あ……………」

「これで、わかったでしょう？」

唯の前に、短髪でボーイツシユ、長身の女子学生が現れる。

唯はその子が、以前ムギの言っていた甘露寺七海であることに、すぐ気付いた。

「伊藤には、すでに西園寺世界っていう彼女がいるんですよ。無礼だとは思いますが、

貴方みたいなのにウロチヨロされると、困るんですよね」

「そ、そ、それは…………。で、でも…………」

見下ろされるような鋭い眼光に、唯はたじろいだ。

「伊藤に近づかないでくださいな」

低い、ドスの効いた七海の声である。

とても近づくのは無理。

唯はそう感じて、すごくごと七海から離れた。

「あ……。別に落ち込まなくていいですよ。」

伊藤にちよつかい出さなければそれでいいんですから。放課後ティータイムの演奏、楽しみにしてるって、世界言ってますし」

七海は唯に同情したのか、うって変わってねぎらいの言葉をかける。

しかし、唯の耳に届くことはなかった。

「光、そっちのほうはどうだ？」

七海は、同じく世界と誠を見張っていた光に声をかけた。

「桂が来たわよ」

光は、ツインテールをイカリングのように留めた独特の髪を気にしつつ、答えた。

「案の定、来たか」

「あいつ、全然読めてないわね、今の状況。『西園寺さんは誠君の彼女ではないです。誠君の彼女は私です。』なんて言ってるし」

「ったく……。まあ、中学時代からムカつく奴だったけどさ、桂の奴」

「しっかし、世界の頼みとはいえ、何で私が伊藤のお守をしないとイケないのかしら」

光がため息をつくとき、七海はニッコリ笑顔を浮かべ、

「何言ってるんだよ。世界がそれで幸せならば、それでいいじゃないか」

「そう……」 光はいささか不満げの様子で、「平沢って子のほうは、来た？」

「来たよ。私が止めに入ったら、すぐにながかりして行っちゃったけど。さすがにちよつと可哀そうだったな」

誠は、刹那の視線を感じ取った。

「……」

「どうしたの、誠？」

世界が気づいて、眉をひそめる。

「いや……清浦も、甘露寺も、黒田も、さつきから俺たちにまとわりついて、なにやってるのやら……」

「私たちの仲が気になるんでしょう。みんな友達思いだから」

素知らぬ顔で世界は答える。実を言うと彼女自身が頼んだのだが。

唯や言葉が、誠に近いつかないようにと。

「あれから見かけなくなつたな……。言葉も、平沢さんも」

世界は疑惑の目を彼に向け、

「……誠の彼女、私じゃないの？」

「え……？ あ、ああ。」

「あの2人がいると、不安になるの」

「そ、そうか……ごめん………」

例のコンビニにつくと、いつもの光景が見える。

右手に雑誌や漫画がおいてあって、左手に豆板醬チキンやポテトの入ったヒーターが置かれていて……。

でも、どこか物足りなく感じるようになったのは、なぜだろう。

誠は世界から離れ、漫画雑誌を読んでみる。

いつもこうして読んでいると、

「伊藤くーんー！」

平沢さんの声が聞こえてきていた。

世界が言葉や平沢さんを警戒するようになってから、そういうことが全くなくなってしまった。

俺の彼女は世界。

それは分かっている。

でも、どこか物足りない。平沢さんに会えなくなつてからは特に。

自分が榊野学園に入学して、このコンビニに通うようになってから、たまに見かけるようになったな。

世界や泰介とつるんでいるとき、あの子もよくコンビニにいて、よく漫画を読んでいた。

ギターケースを肩にかけて、友達や後輩と笑っていたものだった。

理由はわからないけど、いつの間にかやら、それが気になって・・・。

こうして漫画を読んでいると、また

「伊藤くん！」

と呼んでくれるような気がした。

「誠!!」

はきはきした声で、誠は我に帰る。

「わ! あー、びっくりした、世界か……」

「びっくりしたはないですよ。」

世界は疑り深い目でにらむ。

「いや、夢中になってたから……すまん。でもいい時期なだけで、『ワンピース』。人魚島で麦わら一味が集結して、元・七武海のジンベエと一緒に悪党どもに大反撃ということ

になって……」

ごまかして漫画の話をする。世界はきよとんとしながらも、表情を和らげ、
「そういえばそうね。いいところいつてるかも」

『ナルト』はどうなってるかな。世界は好きなんだろ」

「まあね。ナルトとサスケが敵城侵入のあたりまでいったかな。火影になることを目前に控えて。」

「そう言えば、言葉は『銀魂』が好きだそうだな……」

お互いにくすくす笑いあって、

「私もちよつとびっくりしたなあ……あんな清楚な子が金魂ねえ……」

「SF時代劇なんて言ってる割に、下ネタばかりが多いからなあ、あの漫画……」

けたけた笑う誠だが、なぜか、心の奥底から笑えなかった。

携帯が気になった。

世界の頼みで、言葉と唯の携帯が着信拒否になっている。

平沢さんとは一度として、メール交換も電話もできなかつたなあ……。

なんでこうなるのやら……。

そんな日々が、一週間ほど続いた。

今日も、学校の勉強も学祭の会議も耳に入らず、誠は帰宅した。

世界もついていっている。

「最近だけど、いつもボーっとしてるね、誠……」

「まさか、そんなことねえよ」

誠は懸命にはぐらかす。

「誰かほかの女の子のこと、考えたりしてない？ 桂さんや、平沢さんとか……」

「それはっ……っ！」

凶星であった。

「やっぱり！ 誠、あの二人のことが!!」

「……それは……」

そんなに、独占したいのだろうか、自分を。

「だから私には、嫌そうな顔をしてるんだ」

「違う！ 俺は!……俺は……」

理由は分からないが、焦りと、苛立ちがいつの間にもやがツグツ湧き上っていた。

「私はただ、誠のえつちの相手でしかないというの!?!」

「そんなわけない!!」

声をいつの間にもやら荒げていた。

そんなに自分が他の人を気にするのが、いやだというのか？
自分だって迷ってるのに？

「わかったよ!! そんなにおまえが俺を独占したいのならっ……!!」
このっ……!

怒りで何も分からなくなっていた。

勢いのままに、世界を押し倒していた。

「ちよ……ちよつと、やめてよ! 嫌!!」

「うるさいっ!!」

バタバタ暴れ出す世界の手足も、やがて緩慢になってゆく。

なんであんなことをしたのか。

言葉や平沢さんに近付けなくなってイライラしていたのは確か。

でも……でもなんで世界に八つ当たりしてしまったのか……。

苛立ちのままに、事を7回ほど済ませ、やっと気が済んだ。

眼に涙をにじませ、ふらりふらりと帰っていく世界の姿が目に見えかんだ。

「伊藤!」

教室に入って最初に、光にどやされた。

「なんで世界に暴力振るうのよ!!」光に肩を掴まれて詰め寄られる。「世界今日、具合が悪いつて休んでいるのよ!!」

「それは…悪いと思ってるけど……」

言い訳など、できるわけがなかった。

「伊藤、最近笑わなくなったね」

誠の目を見つめ、隣にいた刹那は怒りというより、心配そうな声で言った。

「な、何言ってるんだよ清浦、ほら、こうやって笑顔なんて簡単に……」

ごまかすために、誠は口角をあげるが、心に空洞があつて上手く上げられない。

「……笑えてない。目も笑ってない」素早く刹那は悟り、「私達が、桂さんや平沢さんを

見はるようになってから、だよね」

「だ、だから違う!!」

ごまかしても、刹那は既に多くを読み取ったようだ。

怒り心頭の光の表情。刹那は思案顔になっていた。

「とにかく、学校終わったら、お見舞いに行くから」

二人の顔から眼をそむけ、急いでトイレに向かった。

トイレで一人になってから、錆びつきくすんだタイルに向かつて、誠は拳をたたいた。

「くそ！ くそ！ くそーっ!!」

昼の委員会活動。

学級委員たちが向い合せに座り、弁当を食べながら学祭のテーマについて話し合っている。

どしやつ！

急に大きな音がしたので、言葉はそちらを向く。

自分のすぐそばで、パン屑が散らばっていた。

「桂さーん、パン屑がこぼれてるんだけどー」

言葉は4人の女子学生に取り囲まれた。

「え？　で、でも…私は今日は、和食ですし…」

「つべこべ言わないの！　あんたの周りにこぼれてるんだから、あんたがひっくり返したんでしょ？」

意図的にちぎってこぼしたかのような、無数のパン屑の前に突き飛ばされる。

4人の剣幕に根負けし、言葉は黙ってパン屑を拾い始めた。

そんな彼女を、その場に居合わせた刹那はじつと見つめ…。

言葉を無視して、4人は再び学祭の話し合いを始めた。

「手伝おうか?」

かがんでパン屑を拾う言葉に声がかかる。

そちらのほうを向くと、刹那がいた。

「いいんですか? ……ありがとうございます」

言葉は頭を下げた。

刹那は何も言わず、言葉の隣でパン屑を拾い始めた。

「ねえ」

「何ですか?」

「伊藤のことなんだけど……」

話題にされたくない話。眉をひそめ、言葉は刹那を見つめる。

「私も世界の幼馴染だから、正直、貴方が伊藤にちよっかいをかけるのは嫌」

「ちよっかいなんかじゃありません。寝とつたのは西園寺さんのほうでしょう?」

息巻く言葉に、刹那は直接は答えず、

「でも、伊藤以外に頼れる人間がいるなら、頼ったほうがいいと思う。例えば、先生とか、

家族とか」

「頼れる人間……」

「私が言えることはこれくらいだよ」

「……とはいっても、私の両親は共働きだし。聞いてくれるかどうか……」
それは本音であった。

両親は大きな会社の社長と重役だが、共働きで忙しく、とても自分の悩みなんて聞いてやれるひまなどないのだ。

妹はまだ純真で、男女の愛憎なんかわかりっこない。

ならば……。

まだあの人の腹の中は、わからないが……。

「私がアドバイスできるのは、これだけ」

刹那はそれ以上何もいわず、パン屑と格闘を始めた。

刹那が去った後、言葉は携帯電話の電話帳を開いてみる。

そこには、桜ヶ丘の秋山滯のアドレスが登録されていた。

あの人、何で自分に親切にしてくれたんだろう…。

ともあれ、もう自分だけでは誠に近づけないかもしれない…。

……

言葉は、新規メール作成のボタンを押した。

誠に近づけなくなってからというものの、唯のやる気は一気にダウンした。

ひどく朝寝坊をして、1時間目の途中から教室に入る。先生の小言を聞き流して机に座り、あくびと居眠りばかりして授業に臨む。軽音部でも、いつもの、いや、いつもよりひどくのろのろして不機嫌に、ムギの紅茶と菓子を食べる。

「……唯先輩、あの時のやる気はどうしたんですか……」

ギターをとった梓が、声をかける。

「何の話？」

机に突っ伏しながら、低いこえで唯は答えた。

「あれだけやる気満々だったじゃないですか。一生懸命に練習して、ライブに備えるんじゃないかったですか？」

「もうどこでもいいよ……テキストにやるから、私」

「お願いですから、恋のことよりライブのこと考えてくださいよ……みんなが大恥かいちやうんですから。まったく、唯先輩も律先輩も、ライブより恋愛のナンパの考えていて困ったもんですよ……」

「おいー」律が文句をあげて、「私だって少しはライブのこと考えているんだぜ、トークとかさあ」

「トークはあくまでも箸休めでしょうが」

「はあ……」 漣はため息をつきながら、「気持ちわかるけどさ、今はライブのことを考えようぜ、唯。伊藤って奴とは、学祭の日にきつと会えるだろうしさ」

嫌な予感的中したか。漣は心の底から思った。

「だって……見張られてるんだよ……近づけないんだよ……。電話とメールだって、通じないんだよ……」

「まあ、そのうち伊藤が一人になることもあるだろ。その時に近づけばいいじゃん」
言っただけから、ふと思った。

桂は？ 伊藤に近づけているのか？

「唯ちゃん」 続いてムギが声をかけてきた。「ねえ、もう少し頑張れない？ 榊野の学祭が終わったら、みんなでケーキバイキングに行きましょうよ」

「ケーキバイキング!？」

皆の目が、一瞬輝いた。

唯を除いて。

「でも、いつにします？ 榊野学祭当日は休日だから、今の時期だともう予約いっぱいだと思います……」

と、梓。

「だいじょうぶ、私のお父さんに頼めば何とかしてくれるから。終わったらすぐバイキ

ングに行きましよう」

ムギは大企業の社長の娘で、様々なホテルや店にコネがある。これまでも、唯のギターを購入する時、修理する時、彼女の力で値段を大きくおまけしてもらっていた。

「……しかしね、ムギの力も今更ながら凄いいもんだなあ」

唯然としつつ、漣は答える。

唯は……。

今日のムギのケーキとお茶も、喉を通らなかつた。

なぜ誠に電話しても、メールしても、通じないのか。

正直このことが、ケーキ以上に大きなものとして自分の頭の中に存在するのは、信じられなかつた。

「ひよつとしたら榊野学祭、去年以上に有意義な思い出になると思うわよ。甘露寺さんに会って、ケーキを食べ放題で……」

甘露寺、と聞いて、もはや唯は耐え切れなくなり、

「……ごめん、帰る」

「え？ちよつと、唯、まだ練習の途中なんだよ」

「やる気にならないんだよ」

唯然とする周りを無視して、唯は音楽室を後にした。

「唯先輩……困ったものですよ」

唯の去った音楽室で、梓は一人、愚痴る。

「恋は盲目、だからね」

ムギが苦笑いを浮かべながら、食器を回収していく。

太陽は西に傾き、雲が空の多くを覆い隠していた。

「……初めてだな」

濡の言葉に、皆はそちらを向く。

「唯の奴、伊藤と親しくなってるから、いつもより思いっきり笑うようになって、そして今は、思いっきり不機嫌になってる……」

「濡、どういうことだ？」

「波がついてきたってことだよ。いつもダラダラしていたいつものあいっじゃない」

「それに」口を挟んできたのは、さわ子。「苦しみは魂を強くさせるからねえ。恋愛をすると、時々すごく苦しんで、時々すごいハイテンションになるものよ。それを繰り返し返して人は大人になっていくもの」

「おいおい」律はあきれ果て、「さわちゃんは100回振られている割に大人っぽくねえだろ。顧問のくせに全然仕切らないし、やたらと部員にコスプレ衣装させたがるし」

「ほつといてよ」

「まあ、そんなことはどうでもいいな。どうか、ベストなコンセプトで学祭に臨めるといいんだがな……」

滯は廊下を見ながら、つぶやいた。

「唯の奴、最近は遅刻ばかりだしよ。恋の病ってこええもんだよ」

律は頬杖をつきながら、クツキーをかじる。

「……まあ、お前と同じで、もともと真面目でないけどな。……いてて」

「どういう意味だ、こら」

滯の耳を引つ張りながら、律はなじった。

「冗談だ、冗談」

その時滯のポケットの中から、音のしない振動が伝わってきた。

メールを開いてみる。

差出人を見て、滯は目を見張った。

「桂……う？」

「桂って」律が横からメールを覗き込みながら、「以前唯に絡んできた、あいつ？」

「ああ。しっかし、『初めてメールいたします。桂言葉です。この間ありがとうございました。』なんて、ずいぶん礼儀正しいなあ」

「ちよつと正しすぎる気もするけどな。高校生とは思えん」

「まあ、いいじゃんか」 漣はメールに目を通しながら、「清楚なお嬢さんなんだよ。私らと違ってさ」

「おいおい、『私ら』ってなあ…」

『『今までのいきさつ、すべて説明します。』って……』

漣は目で言葉のメールを追っていく。律も横から携帯画面を見つめる。

登下校の電車で、誠と一緒に居合わせるが多かったこと。

世界の紹介で、誠と付き合うようになったこと。

そして、言葉の異性恐怖症によるすれ違い。

その間に、世界が誠と関係を持ち、そのまま彼女になってしまったこと……。

返してといわれても断られてしまったこと……。

詳しく書かれていた。

「……しかしね」律が苦笑いを浮かべながら『『西園寺さんが誠君に突かれて……』って、
どんだけ生々しいこと書いてんだこいつ』

漣も顔を赤らめ、

「それだけ印象が深いってことだね。まあ、そんなところを見てしまえば、疑心暗鬼になるのも無理ないけどな」

滯はすぐに、新規メール作成のボタンを押しした。

「あの……滯先輩」梓が不安げな表情で机を乗り出す。「あんまり深く関わると、面倒なことになると思いますよ」

「そうよ、滯ちゃん。よく言うじゃない。『人の恋路を邪魔する奴は、馬にけられてなんとやら』って」

ムギも懸念の表情であるが、滯は無視して、次のような返信をした。

『好きだった恋人をとられて、すごいショックだったんだね。友人と話してもうまくいかなかったのか。思い切って、恋人に直接会ってみたらどうだ。本人から直接思いを聞くといいよ』

太陽の半分が雲に隠れる。

「そういえば滯、桂のことになると目の色が変わるな……」

夢中でメールを入力する滯を見つめながら、律は独りごちた。

音楽室を飛び出し、トイレに入りこみ、唯は携帯電話を取り、誠に電話を試してみる。

『おかけになった電話番号は、電波の届かない所にあるか、電源が入っていないため、かかりません』

そのメッセージが、また届いた。

三回繰り返した。

何回やっても同じだった。

「どうして……どうしてなのよ……マコちゃん……！」

気がつくとい心不亂に走り出してた。

いつ校内を出たのかも、いつ校門を出たのかも、分からなかった。

気がついたら、既に家の玄関にいた。

無言で入っていく唯に、

「お姉ちゃん……？」

憂の声がかかる。

憂はリビングで、何か紙に書いていたようだ。

「憂……。今日は、早いね」

憂もなぜか元気がなく、目がうつろになっている。

「お姉ちゃんこそ。部活はどうしたの？」

「ごめん……。やる気にならない」

「え、何故……？」

啞然とする憂に、唯は答えた。

「マコちゃんに会えない…マコちゃんが、私に返事してくれない…。」

もうやる気、出ないよ」

その後、一気に階段を駆け上がって自分の部屋に入り、ベッドの上に突っ伏した。

「……やっぱりお姉ちゃんには、伊藤さんが私以上に大切な人なんだね」

ドア越しに眩く憂の声も、聞こえなかった。

顔を伏せているため、何も見えなかったが、誠の笑顔が視界によぎっていた。

「唯——！——はんよー!!」

母の声で、唯は我に返った。

窓を見ると、日はもうとつくに暮れ、にび色の雲が空全体を覆う中で、傘を被った満月が顔をのぞかせていた。

うつ伏せになっている間に、寝てしまったらしい。

蒲団が少し濡れているのが気になった。

一つあくびをしてから、唯は部屋を出た。

「あれ、お母さん、早いね」

「仕事が早く終わってね。今日はお父さんも来てるわよ」

「本当に？」

唯の両親が仕事から帰って来て、今日は家族4人で夕食ということに。久々に家族だ
んらんができそうだ。

唯も気分転換にと思い、部屋着に着替えて、テーブルに座る。

「おえっ！」

「ま、まずい……」

しかし、その日の料理は、これまでにない位まずかった。

唯だけではなく、両親までもがそう感じた……。

「……え……そう……？」

晩御飯を作った憂が、ぼんやりした表情で、ぼそりと答える。

「憂……砂糖と塩、間違えてる……」

渋い顔をして、唯が言った。

ぼんやりした表情でかたまった憂だったが、やがて、

「ご、ごめんなさい！……ごめんなさい……作り直すわ」

あわててて台所へ戻る。

「どうしちゃったのかしら、憂……いつもはこんな失敗しないのに」

不思議がる母の隣で、唯は憂を見つめて、言った。

「そう言えば憂、少し痩せたね……」

「伊藤、何しに来た？」

七海が、アパートの前にいる。刹那もいる。

「何って、世界のお見舞いだよ」

「いまさら謝っても、許してくれないとは思うけどな」

「……わかってるよ……」

ゆつくりとアパートに入る。

整理されている世界の家。彼女の部屋は玄関からすぐ右手。

ノックをし、

「誠だ。あけてくれ」

「帰ってよ……」

「分かっている……昨日は俺が悪かった。世界の言葉に、つい腹を立ててしまった」

「もういいよ……ホント、帰ってつてば……あの、ホント、桂さんのところにも、平沢

さんのところにも、好きなところ行きなよ……」

「行けないよ……。俺は、世界が好きだから……」

入れないのは理解していた。

ドア越しに会話を続ける。

「ただ……」 誠は、少し黙ってから、口を開いた。「俺にも、ずっと忘れられない気持ち

があるんだ。消したいとは思ってるんだよ……。その気持ち、わかってくれないか？」

「……わからないよ……」

「忘れたいとは思ってる。でも、忘れられない……」本当は忘れたくない。忘れるべきことなのに。「世界だけを見ていたいとは、思っているけど……」

「……」

あんなことをして、許してもらえないとは、分かっていた。でも、世界が一番好き、なはず。けれども、言葉や唯のことも、忘れられない。

「手土産、おいていくよ。ババロア。お前の好物なんだろ。世界の母さんと一緒に食べてくれ」

手に提げてきた、おしやれな黄色い鞆を一つおいて、誠は家を後にした。

世界は部屋を出て、玄関を見てみた。

そこには、誠が置いて行ったババロアの折詰がある。

帰りにデパートで買ってきたものと思われる。包装を破り、一つ食べてみた。

「……おいしい……」

それでも、誠の手作りのババロアには、劣る気がした。

雨の中を去っていく誠を見ながら、刹那は呟くように言った。

「七海」

「ん？」

刹那は、頭を少し下げて答える。

「私たちが桂さんや、平沢さんをマークするようになってから、伊藤、結構暗くなってる」

「おいおい、伊藤は世界の彼氏なんだぜ。他の子に目移りするあいつが悪いんだろうが」

刹那は、七海に直接答えず、

「これは私個人の意見だから、七海は七海のやり方でやればいい。

ただ私、思うんだ。

桂さんや平沢さんを力づくで遠ざけても、伊藤の心は乱れるだけ。世界も不幸になっ

てしまう。

伊藤自身が、最終的には好きな人を一人決めなきやいけない気がするんだ」

七海も思案顔になる。

「とはいえ、あのカイシヨウナシじゃあねえ……」

「それでも、伊藤の結論を待つしかないよ」

「だけだよ、もし桂や平沢さんを選んだとしたら？」

「伊藤が世界ではなく、あの二人のどちらかを選ぶのなら、仕方がないよ」

マンションの周りには、いくつもの曲がりくねった電燈が、雨に打たれながらも、ぎらつく光を照らしている。

誠はボーっとして蝙蝠傘の滴を落とし、マンションのエレベーターに乗った。雨がよく降る。

泰介からも、最近暗くなったといわれるけど、それは満たされない思いがあるから。でもそれは、満たしてはいけない。

しかし……そのことで、世界を深く傷つけてしまつて……。

言葉……はともかく、平沢さんのことは、忘れた方がいいのではなからうか、でも……。

「誠君！」

ぎよっとして顔を上げると、家の入口に言葉がいる。

「言葉……」

「えへへへ、来ちゃいました」

「どうして……」

「教員室で、3組の名簿を見て、住所を調べて」

ほほえみを浮かべながら言葉は答えた。

「誠君の家、お母さんの帰りが遅いんですか？」

「ああ」

「うちと一緒にです。うちも、帰りが遅かったり、帰ってこなかったり…。仕事ばかりですよ」

まさか自分の家に言葉が来るとは。

ひよつとしたら、何度も電話やメールをしているのに自分が応じないから、怒っているのかもしれない。

「あの……誠君？」

「何？」

「あがって行って、いいですか……？」

「え……？」

「誠君の家に、来たかったんです」

「……」

わざわざここまで来てくれたのに、追い返すわけにもいかなかった。電話やメールのことも、断れなかった自分がいけないのだから。

「……結構、部屋散らかってるけど、それでもいいなら」

「いえ。……では、お邪魔します……」

誠は母との二人暮らしだが、母が看護師の仕事で帰りが遅かったり、夜勤で帰ってこなかったりしている。

そのため、彼はほとんど独り暮らしに近い生活を送っていた。

どちらかと言うと整理整頓は苦手なほうだが、誰が来ても恥ずかしくないように、休日には必ず掃除をする。

「きれいなところですね……」

リビングで古い黒いソファーに座り、言葉はつぶやく。

「言葉のおうちと比べられると、厳しいけどね」

誠はティーバックで紅茶を作り、紅茶を差し出した。

「はあ……おいしい」

「ふつうのお茶だよ」

「なんだか、思い出します」言葉はふと、遠い目をする。「屋上で食べたご飯、三人で仲良くご飯食べて、三人で笑って、三人で話して……」

世界の仲介で、言葉と知り合ったころ。

上手く話せない二人を世界がサポートし、何とか話を盛り上げていた。

言葉とすれ違うこともなく、世界とも関係を持たなかった頃の話である。

「あの頃はよかったね、何もなくて……」

「ねえ、私、レモネード持ってきたのを覚えていますか？」

「ああ、あれはおいしかったな」

「はい、あの時のレモネード、すごく温かかったです……。ほんとよかったです……。最近、電話もメールも通じなくて……。ほんと怖かった……」

誠は胸を突かれた。

世界の強引な口調があつたとはいえ、流されるままに着信拒否にしてしまったこと。世界には悪いとは思うものの、自分自身、それでは不満だったのを引きずっていたこと。

やはり自分は、駄目だなと思った。

紅茶を一口飲むと、言葉は真顔で誠を見つめ、

「誠君、逃げてるから……」

「逃げてる？」

「私が、やだって拒絶してから、ずっと……。だから、連れ戻しに来たんです」

「連れ戻しに、来た……？」

言葉はそこで、顔を近づけ、

「誠君……私のこと、好きですか……？」

「へ？」

誠はぼつと顔を赤らめた。

「いや、ずいぶん単刀直入な……どうして、んなことを」

「いいから答えてください」

真剣な言葉のまなざしに、誠はつぶやくように、

「……好きだよ。でも、俺は……俺には……」

言葉は、誠が次のセリフを言うのより早く、

「西園寺さんや、平沢さんとのことは許してあげます」

「え……」

「西園寺さんにされても、平沢さんに強引に引っ張られても……たとえあの二人が、誠君を返してくれなくても……」

「そうじゃなくて……俺は……」

「私も分かっています。西園寺さんや、平沢さんの気持ちも。二人を誠君が、気にしているということも」

「言葉……」

「だけど、私のほうがもつと好きですから。もつと、誠君になんでもしてあげられますから。……そのかわり、私のお願い、受け入れてくれますか？」

「お願い？ 構わないけど」

「その……あの……」

言葉は、顔を真っ赤にして、手を組む。

と、突然、彼女がずいっと近づき、

「え……わ！」

気がつくど誠は、黒いソファアの上に押し倒されていた。

きゃしゃな体のどこに、こんな強い力があるのか。

「私の全て……受け入れてください。私もう、拒まないので……怖がりませんから……」

潤んだ目で言葉は、誠を見つめた。

「言葉……!?!」

「だから……だから……」誠の肩をつかむ言葉の両手に、力が入る。「私と、本当の恋人になつてください……」

「言葉……」

胸がドキドキする。思わず言葉の頬に、右手を当てる。

「誠君……」

思わず誠は、火照った顔を自覚しつつ、目を閉じ、言葉に顔を近づける。

雨の降る音に木枯らしが加わり、ピオーと音がし始めた。

その時、金属がこすれあう音が、ガララ、ガチャツと鳴った。

誠はすぐに、母が帰ってきたものと察する。

その勤が正しい証拠に「誠―、帰ってるの―?」と、玄関から間延びした声。

「母さんだ!」

思わず自分の上に馬乗りになっている言葉突き飛ばし、乱れた服を整えなおした。

言葉も顔を赤らめて彼から離れ、制服を着直す。

「誠、帰ってるなら返事しなさい……あら、お友達? 何という名前?」

リビングに母が、顔だけのぞかせる。

「あ、俺の友達の」恋人、というには余りに恥ずかしかった。「桂言葉。しかし母さん、今日は早いな」

「彼女です」言葉が誠の声を遮るようがいい。「はじめまして、桂言葉です。勝手にお邪魔して申し訳ありません」

頭を下げた。

「あら、誠の母です。息子が大変お世話になってます」

「はい」

二人とも以心伝心で気が合うと感じたらしい。たがいに満面の笑顔を浮かべている。

ようやく誠も、心から頬が緩んだ。

「誠も隅におけないのね」母はニヤニヤしながら、「今日は本部から助っ人が来てくれてね、婦長もお母さんを気遣ってくれて、早めに帰れたのよ。そうだ、せつかくだから言葉さん、何か食べていけない？」

「あ……。ありがとうございます」

「母さん、俺も手伝おうか？」

誠が腰を浮かせるが、

「いいのいいの。いつも誠には自炊させて申し訳ないと思つてたから。言葉さんとおしゃべりしてなさい」

母は、奥の台所へ急いだ。

再び、誠と言葉は2人きりになった。ソファで隣り合わせに座っている。

「誠君……ありがとうございます」

「え？」

「誠君の本音、聞きましたから……。でも、誠君、西園寺さんや平沢さんに誘惑されて、いまどうかしてます」

「どう……なんなんだろうな……」

正直、あの2人も好きなのである。

「やっぱり、勇気を出して来た甲斐はありました」

言葉は携帯を取り出し、受信メールを開いた。

誠はこっそりと、彼女のメールを横から見ると、

「……どうやら言葉は、この人の励ましでここに来たようであった。

送信者は、秋山滯。

知らない人である。

3人で夕食を済ませた後、言葉を車で送り、誠と母は、帰途へ着いた。

助手席に座っている誠は、下から上へと過ぎ去っていく電燈をぼんやりと眺める。

ワイパーが激しく動いている。

「それにしても、貴方も隅におけないわねえ。あんなかわいい子を彼女にしていたなんて。」

きつといいお嫁さんになるわよ。言葉さん」

車を運転している母が、あつげらんとした表情で話しかけてきた。

「……彼女、というわけじゃ、ないんだ……」

重い声で、誠は答えた。

「そうかなあ、仲よさそうだったんだけど……」

「ち、違うんだ」誠は首を振って、言った。「嫌いではないし、気になってはいるんだけど」

「……………どういふこと？」

「もともと俺が好きだったのは、違う人だったんだ。

だけど、二学期になってから、その人の紹介で、言葉と知り合った。言葉も嫌いではなかったし、もともと憧れていた子だったんだ」

「そう……………」

「でも……………でも、好きな人をあきらめることができなくて、その人のアタックを気が付いたら受け入れていて……………。自分も、思いを告げていた」

「でも……………貴方は言葉さんも好きなんですよ？」

「そうだよ……………。でも…その人はそれ以上に好きな人でもあるし、けど…最近はそのうでもないんだ……………」

母は妙な顔になった。要領を得ない答え方に戸惑っているのだろう。

「俺の気になる人は、もう一人いて……………」誠は左手にある川を見つめながら、別の人の話をする。「その人は桜ヶ丘高校の人で、軽音部をやっているんだ。

少し前に、あの人に、ちよつと強引に誘われて、一緒に登下校したり、喫茶店に行ったりしてた。

ちよつと天然だけど、すつごく笑顔が魅力的で、それにすごい癒されて…。

それは、さつき話した子や、言葉にはないもので…。

強引に誘われても気にしなくなつたし、もつとそばにいてほしいと、思うようになってちやつて…。

最近なかなか会えなくなつて、なんか俺、どうかしちやつたよ」

「……………」

「正直、だれが好きなのか、もう分からないんだ。

誰が俺にとっての『一番』なのか……」

しばらくお互いに、何も言わなかった。

母も、何も言えなかったのかもしれない。

車は、水かさの増した川を横切り、マンションやファミレスの林立する街並みを通過していく。

夜空には何もない。月も見えない。

「くわしいことは母さん、よくわからないけれど」母がやつと口を開いた。「じっくり決めていけばいいんじゃないの？ まだ貴方は子供なんだし。時間はたっぷりあるんだし」

「でも、学祭まで、もうあまり時間がないから」

「学祭にこだわらなくてもいいじゃない。貴方の思い通りにすればいいことよ。マイペースで、じっくり頭と心で考えて、3人の中から1人選べば」

「マイペースか……。そうだな……」

ふと誠は、車のサイドブレーキの隣にある母のかばんに、一枚の写真があるのを見つけた。

「母さん、それは……」

自分が幼いころに撮ったと思われる、家族4人の写真。

父と、母と、妹と、自分。

なぜか父の顔が見えないように、トリミングが施してある。

おもわずくつくつ笑って、

「親父の顔、わざわざ消したのか」

「ええ……」陰った表情で、母は答えた。「最近、また外で子を作ったって噂よ……」

「そうか。……ま、今となってはどうでもいいけどな……」

「いたるは気になるけどね」母は気丈な表情にもどし、「今も仕事の帰りに、お土産買ったりしてるけどね。いつも聞かれるわよ。『おにーちゃんはげんきー?』とか、『いつおにーちゃんのはんばーぐたべれるー?』とか」

「ははは、頼りにされて、うれしいような大変なような」

誠は笑いながらも、すぐに表情を曇らせ、

「なあ母さん……俺も、親父と同じなのかな」

「え……？」

「俺もなんだかんだで、二股も三股もかけてる。言葉や、世界や、平沢さんを傷つけていて……」

また、しばらく沈黙が流れた。

車は、誠のマンションの駐車場にたどりついていった。

車のタイヤが水たまりをけり上げる。

「……大丈夫、あなたはあの人と違って、相手を思いやれる優しい心があるから」
そういわれると、胸がきりきりする気がした。

いままで、自分は父と同じだと思っていたから……。

「思いやれる、優しい心、ね……」気がつくとも目が熱くなり、鼻汁のグスグスいう音が聞こえていた。「あれだけ、人を傷つけているのに……。でも、ありがとう、母さん」

携帯の電話帳を開く。

「言葉……。平沢さん……」

2人にかけていた、着信拒否を解除した。

秋の天気は変わりやすい。

その翌日、残暑とでもいうべき30℃の暑さと、快晴が戻ってきた。

「あ、マコちゃん!!」

唯は軽音部の部室で、高い声をあげた。思わず周りがそちらを向く。

唯の携帯に、誠からお詫びのメールが届いたのだ。

『平沢さん、メールの返事が遅れてすみません。』

ちよつと携帯の調子が悪くてね。

俺は学祭の準備、頑張っています。

桜ヶ丘のみんなや、平沢さんをしっかりとむかえたいし』

「ばんざーい!! 嫌われていなかったんだ!」

両手をあげて喜ぶ唯。

そんな彼女を、澪は目を細め、ただし心の一部に妙なしこりを抱えながら見つめていた。

ふと、携帯から音のない振動が届く。メールが来たようだ。

開いてみる。

「桂……。伊藤に会えたのか」

滯の表情が、和らいだ。

『秋山さんに励まされて、勇氣百倍になりました。』

誠君も、私のこと好きだって言ってくれて……。

私、もう一度やり直してみようと思います。そして学祭で、いい思い出を作りたいです』

「桂……」

「でもよ」横から律が首を突っ込んでくる、「西園寺って奴や、唯のことはそいつ、なんて言ってたんだ？」

「いや……何も言っていない。となると、伊藤が一番好きな奴って、分からないな……」

唯は、その事には気にも留めず、

「ばんざーい！ ばんざーい！ ばんざーい！」

と三唱を繰り返す。

「滯先輩も、あの桂って人に会ってから、なんだか変わっちゃいましたね……」

梓が横眼で見ながら、つぶやく。

「桂って奴が結構、滯の好みに合ってるんだろう。」

これも一種の『恋』なんだろうさ。

好きな人に尽くすのは悪くないと思うぜ」

「恋っていうわけじゃないけどさ、というか私はレズじゃないぞ」漣は律を小突きながら、「でも、何となくほっとけない、助けたようなはかなさが、何となく感じられたんだ」

漣はそう言うと、練習のためベースを取り出す。

唯もやる気が戻り、ギターでドレミファソラシドと弾いている。

「ま、あんなところだな。黙って見守るしかないな」

律は呆れて肩をすくめる。

「ですけどね、ひっじょーに込み入ったところに二人とも、入っている気がするんですよ。」

正直もう、あいつらとは関わりたくないですよ！ 伊藤って奴とも、桂って人とも、他のみんなとも!!

「……まあ、私たちはそれでもいいかもしれないですか!!」

唯や漣はそうはいくまい。本気であいつらが気にかかるみたいだから「ため息をつきながら、律は言った。「まあとりあえず、あたしらはあたしらで頑張ろうぜ。」

ライブを済ませてさ、逆ナンパをしてさ、うちらにふさわしい彼氏を作ってさ、チエ

リーを卒業してさ、キャンプファイヤーで踊ってさ。

いい思い出を作ろうぜ」

「そうね、学祭の後にはケーキバイキングもあるし。みんなでたくさん食べましょう」
ムギもうなずく。

「ま、以前にも言ったよね。苦しみが人を成長させるって。私もできる限りあなたたちのサポートはするから、楽しんできなさい」

さわ子も腕組みをしながら、穏やかに言った。

梓は一人、眩いた。

「もう地獄めぐりの気分……私たち、ただで帰れないかも……」

そして、学祭の日……

続く

第6話『思慕』

榊野学園学祭、当日……

「おはようー！」

元気よく唯は、食卓に座る家族に声をかける。

きょうは両親が特製の弁当を作ってくれた。

「おはよう、唯」

「いよいよ、今日だな」

両親はその日も働くので、見学ができないが、期待はしているらしい。

「榊野の学祭は2日間あるけど、2日間ライブは大変だろうな。」

「ううん、お父さん、」唯は首を振って、「私たちが演奏するのは1日目だけだよ。」

大丈夫、しっかり演奏して、放課後ティータイムの存在をアピールするから」

「楽しんできてね。それじゃ、いつてきます」

青い包みの弁当をおいて、両親は家を後にした。

憂は朝食のみそ汁を作っているようだ。

ただ調理中には、金属のこすれあう音が、カララ、ゴロロとなっている。

「憂も来てね。ライプは今日だけ、午後の3時からだから、気をつけてね」
「そうだなあ……。考えておくね」

味噌汁をかき回しながら、憂はつぶやくように言った。

「じゃ、行つてきます！」

唯は憂の奇行が気になった。

あのメモは一体何だったんだろう……。

それを頭を振つてかき消して、踵を返して家を飛び出した。

「あ、純ちゃん！」

ギターを抱えて外に出ると、癖っ毛、ツインテールの憂の友達が待っていた。

「おはよう、唯先輩。いよいよライプですね」

その友達、鈴木純が手を振りながら唯に挨拶をする。

「ライプは今日だけだからね。憂と一緒に見てきてね！　じゃ、いつてきます」

駆け足で学校へ向かった。

「おはよう、憂！　あがるね!!」

純は、友人の家の玄関から、勝手に台所に飛び込んでしまう。

「あ、純ちゃん、おはよう……」

少し振り向いて、憂は再び鍋をかき回しはじめた。

「いつまで料理作ってるの？ 唯先輩行っちゃったよ。」

なれなれしく純は近づき、鍋を見た。

ぞつとなった。

憂がかき回している鍋には、みそ汁も何も入っていなかったのだ。

空の状態でお玉をかき回していたのである。

「な………どうしたの、憂……。最近、元気ないけど……」

「ん？」

「あ、そっか！ そういうえば唯先輩に男ができたって噂だよ。まあ、仲の良いお姉ちゃんを取られた気分になっているのは、分からなくないけど」

ガシャン！

憂は激昂してお玉を床にたたきつけた。冗談半分で言っただつもりだったのだが。

「あ………」 純は後ずさりしながらも、「と、とりあえず、落ち着こうよ。」

そうだ、榊野学園の学祭行こうよ。こういうときには、明るくパーッといくのがいいのよ、パーっと!!」

「そうだ、マコちゃんにメール！」

走りながら、唯は携帯でメールを入力し始めた。

あの日から、誠とは毎日メールのやりとりをしている。

今日は特に、それが楽しみで仕方なかった。

会えるかな。

もし会えたら、自分の思いを素直に伝えたかった。

好きだ、つて……。

シャワーを浴びて、誠はリビングに出る。

そこには、母の書きおきと、ハムエッグ、フレンチトーストがあった。

『いよいよ今日から学祭だね。』

2日間、しっかりと頑張りなさい。

母より』

書きおきをパジャマのポケットにしまい、朝食を食べてみる。

「……うまいな」

悩みを打ち明けて以来、母はいろいろと誠を気遣っている。

いつもより早めに起き、朝食を作るようになったし、できる限り早めに帰って、炊事

をおこなうようになっている。

ありがたかった。やはり親はそばにいたほうがいいかもしれない。

ふと、携帯にメールが届いた。

2件。

言葉と、唯からだ。

『おはよう、伊藤君。』

いよいよ今日が、榊野学祭だね。

私の演奏、絶対聴きに来てね!!

待ってまーす!

平沢唯』

「平沢さん……」

彼女のホンワカした笑顔が、携帯を通じて見える気がした。

つづいて、言葉のメールを読んでみる。

『誠君、いよいよですね。』

午前中は私、クラスの手伝いをしないとイケないんですけど、午後は私もあいているんです。

誠君と一緒に、いい思い出作りたいです。よろしくお願いします。

桂言葉』

「言葉……」

ふと、頭に引つかかるものがあつた。

「世界は…学祭に来るんだろうか…」

あれから世界は、ずっと学校を休んでいる。

毎日お見舞いをして、手土産を渡したつもりだが、いまだに戻らない。

当然だろうな。

ただ……。

世界がいなければ、学祭でゆっくりと言葉と過ごすことができる。それは、確かだ。

気を使わずに、放課後ティータイムの演奏を聴くことができる。それも、事実だ。

そういう考えが頭の中にあり、自覚するだけでぞつとした。

桜ヶ丘高校は、今日は土曜日でお休み。

だが、音楽室にはすでに、放課後ティータイムのメンバーが集まっていた。

「おはよう！ いよいよだね!!」

入るや否や、唯は元気よく皆に声がけした。

「ああ、いいライブにしような!! ファイト!!」

律が右腕を上げる。

「正直、軽音部員初めてのライブがこれじゃあねえ……」

梓は朝から憂鬱である。

「まあ、やるだけやりましようよ」ムギがお菓子を配りながら、「いよいよなんだから」

漣は端つこで、榎野学祭のパンフレットを見ていた。

「桂は1年4組か……よりもよってお化け屋敷かよ……」

どんよりする漣を見て、

「わっ!!」

と驚かすさわ子。

「ひいっ!! ってなにしてるんですか!」

漣はさわ子を追い回す。

見慣れた光景である。

「くすくす……。ねえ、せつかくだから、みんなで学祭見物してみない?」

唯がはいはいと発案してきた。

誠のメールに、

『午前中は喫茶店の手伝いをしなければいけないけど、午後からは俺もあいてるんです。

ライブ、楽しみにしてます。』

できたら喫茶店にも来てほしいけど。』

と書いていたためである。

「私は嫌です」梓は拒否して、「午前中は練習して、ライブが終わったらさっさと帰りたいですよ」

「そうだなあ」漣も、「それに最終調整してしてないだろう。それに費やしたほうがいいと思うぜ」

「あれえ、漣ちゃんは桂さんに会えなくてもいいの?」

ニヤツと笑った唯に対し、漣の顔がぱつと赤くなり、

「わ、私は公私混同しないたちなんだ! ライブが終わったらゆっくり話をするつもりや!!」

「赤くなってる、赤くなってる」

唯はニヤニヤする。

「ここは夏合宿の時と同じく多数決だな、私は練習したいね」

「私も。」

漣と梓が練習したいと言い出したが、

「見物したい!!」

唯と律の声が重なった。

「私も、見物したいかなあ…なんて」
続いてムギ。

「私も。そもそもこの学祭は、生徒同士の交流という目的もあるでしょ」と、さわ子。

4対2。

学祭見物するということになった。

「じゃ、サービスで車で送ってあげるから」

「おいおい、榊野には歩いて5分でも5分でいけるぞ」

さわ子の発案に、律は笑い半分に答える。

「でも楽器とか持ち運ぶの、大変でしょ？」

「……それもそうだな。よし、今回はさわちやんの好意に甘えるか」

「律、人の厚意にへそを曲げるもんじゃないぞ」

濡は律をたしなめると、

「……ちよつと、トイレ行つていいかな」

音楽室を飛び出し、トイレへと向かった。

「さつきから何回トイレ行ってるんだ…10回目だぜ。」

さわ子の車にみんなで乗り、榊野学園に向かうことになった。

「榊野ってどんなところかなあ、学祭での出し物も変わってたりして」

「私たちのと変わらないでしょ。それに校風悪いですし」

胸いっぱいの唯に対して、隣の梓は相変わらず冷めている。

「そういえば」ムギが榊野のパンフを見ながら、「これ、お母様から受け取ったパンフなんだけど、澪ちゃんのと微妙に違うくない？」

皆集まって、ムギの開いたページを見てみる。

それは、お化け屋敷の部屋のレイアウト。

どこがろくろ首の部屋で、どこが冷たい手の部屋・・・と書いてあったのは共通する。

ただ……。

ただ違うのは、1つ別の部屋が書かれてあるということ。

ベッドと思いきデザインと、2人が座れる椅子、箱と思われるものも書いてある。

「……………」

皆、妙な顔になった。

気がつくとすでに榊野学園の校内に入り、駐車場に来ていた。

「そういえば、ちよつと聞いた話なんだけど」澪は顎に手を当て、「榊野学園には伝統と伝説があつて、学祭に隠し部屋でチェリーを卒業し、キャンプファイヤーで踊ったカッ

プルは、永遠に別れないんだって」

「私も聞いた。となると、噂は本当のようだな……。ますますわくわくしてきたな。彼氏の作りがいがあるぜ」

律はニヤリと笑って空を見上げる。

「何言ってるんですか。これ、榊野の先生方に言ったほうがいいと思いますよ。ねえ、さわ子先生」

梓がさわ子に話を振るが、

「そうだなあ……。私は馴染んでみようかな、榊野で新しい彼氏作るのも悪くないと思うし」

と、気にもしない。

「先生——」

「おお、さわちゃんもノリがいいねえ」

仲間ができて律の頬が、一層緩んだ。

誠達、1年3組が出す喫茶店。

すでに教室には、喫茶店の準備ができていた。

輪つなぎのほか、貝殻つなぎ、四角つなぎ、『高校生パティシエの作ったお菓子 Y U

M—YUM』と書かれたポスターなど、さまざまな装飾がほどこされている。

厨房を隠すカーテンがしかれ、奥に携帯用のガスコンロとボンベ、家庭科に使うフライパンもある。

「おはよう……あ」

誠が厨房に入ると、すでに皆集まっていた。

世界も。

「おはよう」

世界は、穏やかに答えた。

「体……もういいのか？」

「うん。もう大丈夫。やつぱり、私は自分の思いに正直になることにするから。」

誠と二人で回りたい、そう思っているし」

「そ、そうか……」

誠は後ろめたくなった。

「まあ、追いかけるのはせいぜいキノコぐらいにしてよね」

「俺はマリオか。それにキノコ追いかけても俺は1機増えないからね」

「とにかく、世界はあんたを許してくれてるんだから、感謝するんだな」

七海が背後で、にらみを利かせた。

誠はそれから眼をそらしながら、

「しかしまあ、よくこれだけのメンツがそろったな……」

世界、七海、刹那、光、泰介の顔をかわるがわる見る。

「言つとくがね、誠」泰介は半分ニヤけながら、「田中や福田もいるからよ、男子のほうが多いからな！ 遠慮することはねえぜえ」

「何を遠慮するんだよ」

「はいはい、無駄口叩いてないで、準備準備」

刹那は呆れたように声をかけ、客室に出てテーブルにクロスをかけていく。

他の皆も、ある者は準備のために花を飾り、他の者は厨房で食材の準備を始めた。

「それにしても、誠の調理法でクレープやケーキを作ると、とてもおいしいよね。びっくりしちゃった」

世界は微笑みながら言う。

「お菓子は結構作ってたからね、ガキの頃から」

「ふん、それでもうちの黒田流には劣るわよ」

光がそっぽを向いて厨房に向かう。

「おい黒田……」

「光はすねちゃっているのよ。家が洋菓子屋だからプライドもあるし」

世界がうまくフォローした。

「そうそう、桜ヶ丘と榊野のヘテロカツプル1号へのプレゼント、用意できたぞ」
七海が、輪飾りをつなげながら言った。

「プレゼントまで用意してるのか……いったい何なんだ……?」

「ベンツ1台、なんちゃってー」

「いや、たけえよ……それに俺たち運転できないだろ……」

「冗談って言ったじゃん。本当はパルコで買った高級チョコ2袋」

「チョコかあ」世界は顔を輝かせて、「あそこはおいしいものね」

「ま、あたしやあんた達には縁のないものか。1号をみんなで祝福しようぜ」

「それもそうだな」

険の奥に唯の笑顔が浮かんだが、言葉や世界の顔を思い出してかき消した。

ふと、七海の携帯が鳴り、その場を離れて電話をする。

「あ、もしもし、私、七海。……分かった、こちらもちちらで対策立てるから」

世界と誠のところに来て、

「桂も午前中に手伝いのシフトをずらしたらしい。となれば、かなりやばいな……」

誠はもう何も言わないでおいた。何か喋ったら、どう怒鳴られるかわからない。

「あんまり、桂さんを敵視するのもよくはないけれど……」

世界が言葉をかばうが、七海は、

「敵はどう来るかわからないからね。一応手は打っておいたけど。そうだ、平沢って人はどうしようか」

「最近はずもしぼんできたけどね……」

「でもまあ、向こうは本気みたいだからさあ。ちよつと気の毒だけど、警戒するのに越したことはないぜ」

無駄話をしている間にも、教室の外で生徒たちが、開店は今か今かと待ちわびていた。誠は、窓越しに生徒たちの様子を見ながら、ちらと思つた。

平沢さんも、いるかな。

モグラのようにもたげてくる唯への思いを、再び世界の顔を見て、消した。

銀色で殺風景な校内のいたるところに、輪飾りや派手なポスターが付けられている。携帯のマスコットと思しきピンクの髪の毛の着ぐるみが、手にインクを付け、手形を作っている。

ここは、榊野学園校舎の1階である。

榊野の生徒、桜ヶ丘の生徒、両方入り混じっている中で、放課後ティータイムは校内の散策をしていた。

「こうしてみると、女ばかりが多く見えるな……。 榊野が共学であることを忘れる……」
最後尾にいる滯は、キョロキョロしながら呟く。

「しっかし唯」律は呆れたように、「ただ遊びに行くだけなんだから、ギター持ってたかなくてよかったのに」

唯一人だけ、ギターケースをかついでいた。

「いいじゃない、なるべくギター太と一緒にいたいし」にこやかに笑って唯は言った。「それにさあ、こうしてみんな楽器を持ち歩けば、『放課後ティータイム、ここにあり』ということがアピールできるじゃない」

「それもそうね」ムギがうなずくが、「でも、りつちゃんとは私は持ち歩けないわ。ドラムもキーボードもかさばるし」

「くすくす、仕方ないよ」

一行は2組のオナベ&オカマバーを通りすぎていた。

すれちがった榊野生徒の女子たちが、話をしている。

「ねえ、例の休憩所、借りれるよね」

「う、うそ、来実、彼氏作ったの?」

「いよいよ来実も、晴れてチェリー卒業かあ……。いいなあ……」

「私たちも、石丸先輩や大岡君とか、いいところ探してみるか」

来実と呼ばれた少女の手元にある、『あるもの』にふと、目がとまった。自分も、ああなれたなら……。

唯の心を読んだかのように、梓が、

「唯先輩、もう伊藤って奴には近づかないほうがいいです。そもそもそいつ、二股も三股も掛けるような」

「梓」 濡が梓の肩に手を置く。「言ったって……」

「でも……」

「お願い、あずにゃん、濡ちゃん」 唯は2人に目を向け、「しばらく、私の自由にさせてくれない?」

「いい加減にしてくださいよ!! 唯先輩の行動で、みんなに迷惑かけてるんですよ!!」 荒い声の梓に、周囲の視線が集中する。

「梓、トーンダウン」 濡はあわててたしなめ、「でもさ、唯。伊藤には、すでに彼女がいる。わかってるだろう?」

「でも……あきらめたくない。これだってわかるよね。正直、もう恥じることなんか何も無いんだ!」

唯は反駁する。

思いが制御できない。

誠と親しくなってから、いつもそうだった。

周りがぼそぼそと、彼女をみて噂をする。

大方、自分と誠の話なのだろう。でも……。

「梓、黙って見守るしかないって、以前言っただじゃん」

律が半分呆れ気味の表情で言う。

「見守られますか！ いろいろ込み入っているみたいですし、向こうにもこちらにも迷惑がかかるだけじゃないですか！」

「梓、できる限り私が唯を抑えるから」

と、漣。

「漣先輩……」

「たぶん伊藤自身から振られるまで、唯は止まらないと思う」

「な、なんでそうなるのよ!!」

唯は声のトーンを上げた。

「お前はそういう人間だからな。子供っぽいし、一つに集中すると周りがおろそかになるし。」

「あまり何も言わないようにしておくけど、羽目外すんじゃないぞ」

「わかってるよ……」

唯は沈んでしまった。

「それでいいのかなあ」

梓は半信半疑。

「とりあえず、私たちは私たちでいい出会いを作ろうぜ」律は言うてから、背の高い男性を見つめ、「おーい、お兄さん、私とデートしないかい？」

声をかけられた男性は、「また今度」といつてそそくさ立ち去る。

「はーあ、異性への声のかけ方、りっちゃんはまだまだね。私が教えてあげようか」

「さわちゃんはうまく落とせたのかよ」

2人のやり取りに、唯はため息をついて、

「ねえ、みんなで1年3組の喫茶店に行かない？ 私たちが食べてるケーキやお茶と、

どっちがおいしいか比べてみようよ」

「おいおい、スイーツなんて、うちら毎日食ってるじゃねえか。それよりお化け屋敷なんかどうだい？」

律が拒否するが、

「食べ比べるの！」

唯は強い口調で繰り返した。

「私は怖い嫌いだし、唯の意見に賛成かな」

漣が唯に、そっと寄り添った。梓は指をつんつんしながら

「私も……甘いものが食べたいです……」

「私は……どうしようかなあ……」

さわ子は腕組みをする。

「分かった、行こう行こう」

律がぶつきらぼうに言った。

漣に肩をたたかれ、唯は振り向いた。

漣は黙って、唯を真剣な表情で見つめた。

「漣ちゃん？」

「もしかして、伊藤がいるのか？」

「うん……」

「まあ、正直私も伊藤に会いたいからな。桂のことや今までのこと、もう少し詳しいこと

を知りたいし」

「漣ちゃん……」

漣も、ひよつとしたら込み入った中に入り込みたいのだろうか。

彼女はつぶやいた。

「自分の思いに正直になりたいのは、唯と同じかもしれない……」

1時間ごとに、ウェイターとコックの役を交代させ、3組の喫茶店は、何とか客をさばっていた。

料理に慣れている誠も、さすがにひいひいしてきた。

「みんな！」

トイレから戻ってきた刹那の声に、皆がそちらを向く。

「どうした、清浦？」

「放課後ティータイムが来てる」

他の皆は「それがどーした」と言い返すが、事情を知る者は緊張する。

「とりあえず伊藤は、厨房に交代だな」

七海が真っ先に言った。

「待て甘露寺、1時間ごとの交代じゃなかったか？ まだ20分しか経ってないぞ」

誠が発するが、

「つべこべいわない！ また平沢って奴といちやつかれちや困るんだよ」

「そうよ、まだあの噂は完全に消えてないんだからね」

七海と光から鋭い眼光でにらみつけられ、「別に浮気してるわけじゃないってば……」

とつぶやき、誠は黙って引き下がった。

「放課後ティータイムには私が接客するから。世界は心配しなくていい」

「でも七海は、相手が嫌いだとすぐ顔に出ちゃうから、まずくない？」

冷静な刹那の意見である。

「私が行く」

名乗り出たのは、世界だった。

「世界？ 大丈夫？」

「この際平沢さんや、放課後ティータイムがどんな人たちだか、接していれば少しはわかると思うし」

他のメンツは、何がなんだかさっぱりわからない。

なんだなんだと詰め寄る皆を、泰介はなだめ、

「田中も福田も、気にしない。人の噂にちよっかいは出さない。」

まあ、誠は我慢するんだな。モテ男もつらいけどな」

「だからモテ男言うな」

誠は、すぐにコンロに火をつけた。

周りは、

「そういえば、伊藤って桜ヶ丘の女の子といい仲だもんな……」

「西園寺も頑固だなあ。伊藤が目移りしてると思っただけで必死になっちゃって……」

噂話に、また花が咲く。

思わず誠は、体を丸めた。

「やめてくれれば……」

マコちゃん、いるかなあ。

期待を弾ませて唯は、3組の入り口にたどりついた。

「いらっしやいませー！ 席へご案内いたします!!」

教室の入り口に入ると、すぐに、白い服にピンクのエプロンをかけた女の子が近づき、唯達を席に案内する。

その少女と目が合って、唯はひやりとなった。

誠に、いつもくっついていた子だ。

世界のほうは一瞬、笑顔が消えたようだったが、すぐに朗らかな表情に戻してメモを取り出す。

「こちらが、メニューでございます」

「お、サービスいいじゃんか。自分たちから近づいて、自分からメニューを取り出して渡して」

律はにつかり笑って言った。

「ありがとうございます。ご注文のほうは？」

「そうだねえ、私はバナナクレープにしようかな」

他の皆も、それぞれ好きな製品を注文していく。

「わかりました。おかけになってお待ちください」

きつちり45度で頭を下げる。

「なかなか丁寧な接客じゃないですか。それにはきはきしてるし」

ムギがにつこりしながら世界をほめた。

「あ、ありがとうございます……。海の家バイトが役に立ったかな」

世界は顔を赤らめて、セミロングヘアを振りながら厨房に向かった。

「あの人……」

唯は隣にいる滯の肩をつつきながら、小声で言った。

「え？」

「あの人、いつもマコちゃんにくつついてた人だよ……」

しよぼくれた表情で、唯は打ち明けた。

「じゃあ、あの人西園寺？」

滯も思案顔になった。

その時、

「あ、甘露寺さん」

ムギが明るい、しかし興奮した声を上げた。

みると、長身でボーイッシュなルックスの少女が、別の人の注文を受けている。

「え、あたし？」

ムギの声に気付いて、七海もそちらを向いた。

「あ、すみません……仕事の邪魔しちゃって」

「あ、いいいえ……どうしたんです？」

「甘露寺さん、榊野の女バスをベスト4まで導いた人だと聞いていたもんで、いろいろと話が聞きたくて」

頬を染めて近づくとムギに対し、

「あ、あ……今は取り込み中ですから、午後ゆつくりと」

同じく頬を染めて、七海は奥へと引っ込んだ。

「ムギ、今は仕事中なんだから迷惑だろう」

たしなめる滞に対し、

「でも……今逃したら、甘露寺さんと話ができないと思って……」

少しむくれてムギは答えた。

「ライブで会えないこともないんじゃないかねえか」

唯はその間、黙って客席全体を見渡した。

お客の中にも、ウェイターの中にも、誠はいなかった。

「いないなあ……」

下座で呟く唯に、

「伊藤、喫茶店にいると言ってたのか」

澪が小声で話しかけてきた。

「そうだよ。ぜひ来てほしい、とってたし」

お冷を飲みながら唯は言った。

「きつと厨房にいるんだろうな……」

「じゃあ今、マコちゃんを料理してるの？」

「まあ、そうかもしれないな」

澪はあり得ないといった表情だったが、唯の中で想像が膨らむ。

手料理作れるって話だから、きつとありかも。

「……みなさん、興味シンシンですね……」

一人梓は、無愛想に呟いた。

「シヨートボブの人が平沢さんだよ。ギターを持ってる」

厨房に戻ってから世界は、ケーキにホイップをぬっている誠に見えた。

「そうだけ……」

「案外と大人しい子だねえ、あんまり異性にアタックできなさそうなんだけど」

「そ、そう？」

誠は世界の顔を見て、唯のことを考えも語りもしないほうがいいと思った。

「そう言えば、長い黒髪の背が高い人がいたけど」世界は滯の話をした。「きれいな人だったなあ。桂さんにちよつと似てるのは気になるけど、何か懂れる」

「あ、そう……」

誠は聞き流す。

「後の連中、なーんかなれなれしいよな」七海も厨房に戻ってきた。「特にさっきの金髪の人。急に話がしたいといわれてもなあ」

「でもまあ、それは好意を持つてることでしょう？ 七海って結構有名人だし。あこがれの人だつて多いでしょ？ きつとあの……ムギつて人も」

世界のフォローが入る。

「あたしはタレントじゃないんだよ。それに午後は彼氏とのデートがあるし」
「なんとかさあ、あのムギさんと話す機会設けたら？」

世界と七海のやり取りを無視して、誠は冷蔵庫で冷やしていたチーズケーキを取り出

した。

「とりあえずできたよ。注文の品」

「! おいしい!!」

思わず梓は、声を上げた。

「うん、わかるわかる! 頬が落ちそうだよ」

唯もチーズケーキを食べて、梓に同感した。

「そ、そうかあ? ムギのより少し劣ると私は思うけどな」

バナナクレープのバナナを食べている律は少し不満げである。

「何言ってるんですか、こっちのほうが上ですよ! いったい誰が作っているんですか」

急に梓は、目をきらめかせた。

「私のところは、高級シェフが拵えたものなんだけど……」

「いや、ムギ先輩のじゃなくて」

「そこは、私も分からないわ。きっと手料理に慣れている人なんでしょう」

「男の人かなあ」

「うわあ、是非とも彼氏にしたいぜ、そいつ!」

律は声を強めた。

「まあまあ、私の彼氏だった人も手料理うまかったからねえ」

と、さわ子。

「さわちゃん、男運いいなあ」

「でしょ？　だけど、去年のクリスマスの日に別れ話を持ちかけられて……う、ううう

……」

「おいおいさわちゃん、泣くなよ……」

「おーおー、よしよし、泣かないでさわ子先生……」 濡はさわ子の頭をなでながら、「唯、
案外このケーキ、うまいぞ。うちらで食うケーキ以上の」

「濡ちゃんもそう思う？　やっぱりマコちゃん、料理うまいよね」

「おいおい、まだ伊藤の料理だとは分からないだろ。それに手料理、食ったことあるんか
？」

「ううん。でも、そうだったらいいなと思って」

「願望で物を言うなよな、人に……」

「へえ……みんな俺の料理、気に入ってくれるなんて……」

誠は声のするほうをちらりと見ながら、つぶやいた。

「世界もとりこにするほどだからね、伊藤の手料理は」

厨房を取り仕切っていた刹那が、誠の尻をぼんと叩く。

「あ、ありがとう」

目を丸くして彼は答えた。

刹那はそのまま、厨房の仕切りの合間をちよつとのぞき見る。

そのまま、動かない。

ケーキにサクランボを飾って料理を完成させると、誠は刹那のところへ行き、

「どうした、清浦？」

「いや、あの子、なんか可愛いなと思って……」

刹那が見ているのは、唯の向かいにいる、つり目小柄なツイントールの子。

「おい清浦……ひよつとしてお前、そういう趣味あるのか？」

「そうじゃなくて、おなじ同性でも人目を引く人いるでしょ。桂さんとか」

「……まあ、言葉はあのスタイルだしな。でもどつちかというところあの髪の毛の長い人、ちよつ

と言葉に似た人のほうが……」

梓の斜向かいに座っている、姫カットの前髪、黒髪ロングヘアの子に誠は目を向ける。

あ、ベラ・ノツテに行ったときに感じた視線は、あの子の……？

誠はふと、そう思った。

「まあ確かに、あの人は桂さんに似ているね。でもまあ、人の好みはそれぞれだよ」刹那はくつくつ笑って、「はい、仕事復帰」

誠の尻をつついて仕事場へ向かう。

彼は仕事場に引かれながら、ちらと唯のほうに目を移した。

彼女は、一緒に喫茶店に行った時、あの時と同じ笑顔で、朗らかに笑っていた。

あのときと同じく、口にクリームをいっぱいつけて。

それを見て、しこりが急に氷解していった。

そうだ。

俺はずっと、あの子の笑顔が見たかったんだ。

端っこに小さなレジがおかれ、こちらも交代で会計をする。

偶然にも世界が会計として、灰色の小さなレジを打っていた。

「じゃ、お会計3880円ですね。」

「割り勘で頼むわ」

レジを動かす世界に、律は小銭でパンパンになった財布を取り出し、勘定をすませる。食事はおいしかったものの、唯は結局誠と顔をあわせられず、落ち込んでいた。

「マコちゃん、結局いなかったな……」

「ライブで会えるさ」

再び滯の励ましが入る。

「ねえ、あたし特上の彼氏探してるんだけどさ、あんたいい人知ってる？」

「え、急に言われても……」

律が頬杖をつきながら尋ねる。思わぬ質問に困惑する世界。

続いてさわ子が、

「スカートはもつと短いほうがサービスイいんじゃない？ それとそれとより露出度を

高めて……」

「さわちゃんの言う通りかもしれない」

「そんなこと言われても……」

うなづく律に対し、顔を赤らめながら世界はどぎまぎする。と、そのとき

「あだだだだっ!!」

律とさわ子の声が重なった。滯が後ろから二人をつねったのである。

「あんたら何しに来たんだ……しようもないこと言っつて」

「いや、だってこの人人気ありそうだしさ、いい男知ってるかと思っただもん」

律が言い訳する。

「それに来年の学祭の参考になるのではないかと思ったのよ。私は桜ヶ丘で人気あるし、さわちやんのアイデアはいい参考になると思ってる」

さわ子はへらへらしている。

ぼかっ！

滯の鉄拳制裁がくだった。

「いい加減にしろ……」

「くすくすくす……」世界は思わず吹き出してしまった。「面白い人たちですね」

「あ、すみませんね……」滯はバツが悪そうに答えた。「2人とも悪い人たちではないんですけどね、羽目を外すことが多くて」

「いえいえ、参考になりました。後輩に話してもいいかもしれませんね。」

「ねえ」滯は小声でさりげなく、「伊藤のこと……」

「ん？ 何ですか？」

「……。なんでもないです」

世界の視線から眼をそむけ、滯はごまかした。

喫茶店から廊下に出る時、ちらりと、滯と唯の目があった。

唯は、いたたまれない気持ちで、滯を見た。

漣は多くを読み取ったらしく、

「まあ、しようがないよ。ライブに伊藤が来るといいんだけどな」

そうか……そうだよね。

ちくちく胸のあたりが痛んだが、唯は無理に気持ちを前向きにし、言った。

「きつと来るよ。マコちゃんメールでそう言ってたもん」

漣がやや不安げな表情になったのを見て、

「ひよつとしたら桂さんも来るかな？ 漣ちゃんは来てほしいんでしょ」

「なっ、頼むから桂の話はやめてくれよ？」

「お互いに頑張っていこうよ」

ぼんっ。

「何で肩つかむんだ!!」

2人のやり取りを見て、

「あーあ、何やってんだか」

呆れる律の耳に、周りの女子生徒の噂話が入る。

「ひよつとしてあの子たち、桂の知り合い？」

「あんなフェロモン女と仲いいなんて、どんな子かしら」

「スタイルもいいし、きつとエンコー仲間なんだよ」

彼氏のことばかり考えていた律の頭に、雲がよぎった。

ムギと梓も聞いたのか、二人とも顔をしかめている。

「あの桂つて、どんな奴なんだか……」

残るさわ子は、

「ねーねー、お兄ちゃん、暇——？」

と、すれ違う男に手当たり次第声をかけていた。

「やはり特上の生徒たちばかりだな、桜ヶ丘の人つて。特にさっきのメガネの人が。どうも軽音部の顧問らしいけれど」

泰介がはしやぎながら、クレープの生地を返す。

「それはよかつたな」

誠はぶつきらぼうにフライパンを動かし、生地をはね上げた。

「さわちゃんとかいつたな。アタックするのも悪くねえかもなあ。『澤さわカップル』つてのも、ヘテロカップル1号としてはいいと思わねえかあ？」

「はいはい……。ま、先生と生徒のカップルつてもありか」

まあそれも面白いかな。誠は一瞬思った。

「ひよっとしたら、1号はお前と俺との一騎打ちになるかな、なーんちやつて」

「何で俺とお前だけになるんだ！ それに前にも言ったろ、俺と平沢さんは、そういう関係じゃない！」

ついムキになってしまう。

「そうかなあ。平沢さんについて話した時、誠、すげえうれしそうな顔をしてたんだけどな」

泰介の言葉に、はっとした。

無理に抑えていた唯のイメージが、一気に、グイと脳の全体を占めた。

そばにいて、笑ってくれるだけでいい。

泰介にはそう言っただけど、本当はもつともつと、そばにいてほしいんだ。

あの屈託ない笑顔を、ずっと続けてほしい。

もつと話がしたい。もつとお互いのことが知りたい。

「ま、お前には西園寺がいるもんな」

「あ……。そ、そうだよ」

高鳴る胸を抑えつつ、生地を皿の上に移した。

「誠、お前はどうしたいんだ？」

「それは……」

「ま、今すぐ答えられねえよな」

凶星であつた。

誠はだまって、新しく生地を焼き始めた。

「ゆつくり決めなよ。誰を選ぼうとお前の彼女なんだから」

肩をすくめて泰介も、隣でクレープの生地を作る。

そろそろ交代の時間。

やっと交代になつた。

もちろん、時すでに遅し。

放課後ティータイムの姿は、どこにもなかつた。

一緒に下校した時、ベラ・ノツテに行つた時。

その時の唯の笑顔が、頭にほんわりと浮かんだ。

もつと、自分の気持ちに正直になつたほうがいいのか……。

でも、世界や言葉には何と言つたらいいか。

ふと、黒板の下にギターケースがあることに気づく。もちろん唯のである。

おいおい忘れんなくて。他の皆も誰か気にかけて。

お客もクラスメイトも全然目にくれず、めいめい好き勝手なことをやっている。

ギターケースを取ると、ぬくもりがまだ残っていた。

フラスナーのあたりに、白い字で小さく、

『ひらさわ☆ゆい』

とあるのに気付く。

それも『ひらさわ☆』と左上から右下に一筆書きで書かれ、『さ』をはさむ形で『ゆい』と『い』が左下から右上に、交差するような形でデザインされている。

たぶんサイン風に書いたつもりなんだろうが、あまりにおかしい。

でも、微笑ましかった。

きつと彼女、わくわくした表情で書いていたのだろう。

「やはりね」

はつとなつて振り向くと、背後に泰介がいる。

「やはりって、なんだよ」

「鏡見てみな。平沢さんのことについて考える時、お前、すつごく嬉しそうな顔をしてる」

泰介にしては、妙に小声。

「そりゃあ、好きな人のことを考えるとうれしいだろ？ 世界や言葉のことを考えたときだつて」

「いやいや、西園寺や桂さんのことを話す時よりいい顔をしてるよ。それに甘露寺たち

がお前らを見張ってから、急に誠は笑顔がなくなっちゃったし」

ニタニタしつつ、泰介は言った。

それは……。

きつと、平沢さんの笑顔が伝染したからだろうか。

そうだよなあ。周りにもうつすようないいものだし。

ばしっ！

急に頭に、焼けるような痛みがした。

「浮気者！」

声のするほうを向くと、光。

「黒田？ 別に浮気なんてしてねえ」

「やっぱりあんた、平沢さんのことが好きなのね。今の聞いてたからね、世界にも報告するから」

「ちよつと待て、黒田！」

「あんたは世界とデキた仲なのよ！ 忘れないでよね!!」

「分かつてるよ……」

「ふん、澤永、行くよ！」

「ちよつと待て黒田、俺はまだ誠と……」

泰介の話も聞かず、光は強引に泰介の手を引つ張つて行つてしまった。

誠はギターを奥に運びながら、初めて世界と結ばれた日のことを考えていた。

たぶん、それは親父の血なんだろうな。

そういえば、世界と結ばれたのも、言葉と触れ合いたいという思いから始まった。

でも、世界や言葉と違つてあの子は触れ合わなくても……

笑顔だけで相手を虜にするような、人間なんだ。

「すみませーん、オーダーー!」

客の声で彼は現実に戻り、急いで客室へ向かった。

「あ、はい。ご注文は何でしょうか?」

ウェイターとしての声で、尋ねた。

続く

第7話 『再会』

そろそろ、放課後ティータイムのライブの時間だ。

お化け屋敷の受付で、言葉は立ち上がる。

が、前にクラスの4人。

「桂ー、私たち遊びたいんだけどさー、受け付け続けててくれない？」

「え、でも、きちんと決めた順番があるんですが……」

「あんた、クラス委員でしょ!？」

大声を張り上げられ、言葉は思わず縮こまる。

「じゃ、あとよろしく。あと、休憩室使う人がいたら、前の人がまだいるか確認ね」

「それにしても大成功だったねー。まさか卒倒する人が出てくるなんてさー」

4人は話をしながら去って行った。

「秋山さん、あんなに怖いのが苦手なんだ……。あんなの序の口なんだけど……」

受付に取り残された言葉も独りごちる。

放課後ティータイムがお化け屋敷に来た時、言葉は裏の仕事にいそしんでいた。

その時に聞いた大きな悲鳴。

セツトをかき分けて飛び出すと、泡を吹いて倒れている瀧がいた。

「秋山さん!!」

傍らには、唯。2人で瀧を、入口まで担いだ。

「ははは……こんにちは、ね……………」

唯は苦笑いしながら、言った。

「秋山さん、大丈夫ですか?」

言葉が声をかけると

「あー……桂か……。やっぱお化け屋敷、来るんじゃないかなかったぜ……」

「りっちゃん……あ、うちの部長ね。挑発にのっちゃってね、あげく最初のコーナーで気絶しちゃって……」

ぼやく瀧に、唯が付け加えた。

「無事でよかったですよ……事故が起きたらどうなるものかと思いましたが……」

肩をなでおろしたが、唯がそばにるのが、なぜか妙に腹立たしく感じられた。

思わず、

「平沢さん……まだ誠君に近づくつもりですか……?」

詰ってしまう。

「そうだよ。だってマコちゃんのこと、好きだもん」

唯は開き直ったのか、妙に毅然とした態度。

滯は、「おろしてくれ」と言って2人から離れ、

「今は伊藤のこととどうこう言うのはよそう。あいつもいないんだし」

「はは……そうだね……」

唯は思わず、笑った。

言葉も、これ以上唯を責めるのをやめにした。

秋山さんのほうが自分より、何となく大人びていると前から思ってたけど、可愛いところあるなあ。

言葉はそんな思いを胸にしながら、一人お化け屋敷の番をすることになった。

とはいえ、やはりさびしい。

ふと、

「澤永さん？」

「いやあ、よかったあ!!」

中庭の楽屋で、唯は愛用のギターを抱きかかえながら叫んだ。

「まったく冷や冷やしますよ……」

「生徒会が預かってたからよかったものを……」

梓と律が、肩の荷を下ろしながら、言った。

「ほんと、ギー太がどうなっちゃうかと思つたよー」

「いや、それ以前にライブがどうなるか心配だつたんですけど」

ギー太を心配する唯に、梓が突っ込む。

「3組の学級委員さんが、わざわざ生徒会まで回したそうね」

「ライブ会場も生徒会本部も中庭……利口だな。」

話し合う他の面々を気に掛けず、ギー太のネックに唯は顔をすりつけている。

「それにしても濡の奴、いつまでトイレ行ってるんだ？ しかもこれで今日20回目の

トイレだぞ」

律が毒づくと、濡が戻ってきて、

「トイレ多くなるのも無理ないだろ！ あれだけ客が来てるんだからさあ!!」

「ねえねえ！」 さわ子が例のごとくはしやぎ始めた。「今回バニーで演奏しないの？

せっかく特注で作ったのに」

「いや、普通でいいってば……」

唯は隙を見て、楽屋の幕の合間から客席を見てみた。

桜ヶ丘から榊野の生徒まで、エノキタケのようにびっしりと客が来ていた。

……！

誠と、目があつた。

「マコちゃん……。」

世界と腕を、組んでいるが。

「唯、行くぞ!!」

律に呼び出され、唯はステージへと向かう。

「みなさん、こんにちは！ 放課後ティータイムこと、桜ヶ丘軽音部です!!」

唯は中央部で、大声を上げた。

ライブは無事終了。客席の皆も、中庭を後にしていた。

「言葉……。いなかったな……。」

世界に聞こえないように、誠は独りごちる。

「いやあ、よかつたねー!! 放課後ティータイムのライブ!!」

大きく伸びをしながら、世界は言った。

「まあまあ、かな。」

誠はうつむき加減に、微笑んで答える。

「誠……？」

「いや、正直、X JAPANのようなバラードがあるともっとよかったんだけどね。T earsみたいな」

「ふふふ、そうかもねえ。でも私は逆かな。もつとKARAの曲のようなノリがほしいな」

「はは、好きだなあ世界も」

中庭から校舎に入る。

泰介がいそいそと、目の前を通り過ぎた。

「泰介？」

声をかけるが、泰介は聞こえなかったようであった。

何かあるのか。

「そう言えば、放課後ティータイム、ファンクラブがあるみたいよ」

「はあ……加入したい人、いるのかなあ」

「まあ、たぶん生徒交流促進のための代物なんでしょうね。でも私は加入したいな。さっそく手続きしようよ」

悪い、というわけではないが、何となくファンクラブ入りも恥ずかしい。

教員室の横を通り過ぎ、階段を下りていく。

教員室前の桜ヶ丘奇術部ファンクラブには、押すな押すなと行列ができています。

「世界、ちよつとトイレ行って、いいかな……?」

「違いますっ！ 私、付き合っている人がいます!!」

「振られた男なんて、あきらめろよ。」

お化け屋敷の奥の、薄暗い休憩室。

保健室にあるはずのベッドの上で、言葉は泰介と争っていた。

「大丈夫だ！ そいつがいなくても、俺が慰めてあげるから」

「違います！ やめてください!!」

言葉は言い終わらないうちに、ベッドに倒される。

が……。

白い携帯を左手で握りしめ、とっさに入力し始めた。

「どうだ、ムギ、上の状況は?」

律が2階から戻ってきたムギに尋ねる。

「奇術部、押すな押すなの大盛況よ」

「つたく、こつちは閑古鳥か……」

律や唯が呼び込みをするものの、生徒たちは『放課後ティータイムファンクラブ』という文字を見向きもせずに通り過ぎる。

さわ子はファンクラブ会員を見つけると言って、上に上がったつきり戻っていない。

5人とも、白い席に座ったまま、退屈そうに宙を睨んでいた。

「やっぱり軽音部、人気ないのかな……」

翳を見せて呟く梓。

「ちよっどいいや、ちよっとトイレ行ってくるね」

滯は席から離れ、トイレへと向かう。

「これで30回目……」

「滯ちゃん、私も付き合うよ」

呆れる律を背に、唯は滯について行った。

用を足して、滯と唯は、黒ずんだ洗面所で手を洗う。

先に手洗いを終えた滯。

急にはつとなり、携帯を取り出す。どうやらメールらしい。

「? 桂……? ……え……!?!」

滯の顔が、青ざめた。

「滯ちゃん？」

「唯、ちよつと悪い、先に律たちのところへ戻つてくれ!!」

滯は一気に駈け出した。

「よりにもよつてお化け屋敷かよ……」とぼやきながら。

「滯ちゃん!?!」

後を追いかけて女子トイレを出て、男子トイレを横切りかける。

ふと、妙な予感がして、ドアを開けた。

第六感というべきかもしれない。探し物を感じくような。

案の定、誠がいた。

トイレ入口へと走っているところ。

「!! 伊藤く——ん!!」

「え? ひ、平沢さん!?!」

唯は駈け出し、誠の体に飛びついた。

「ちよ、ちよつと平沢さん、ここ男子トイレ! 便器にぶつかる!」

トイレの床に尻もちをつきそうになりながら、誠は何とかバランスを取った。

幸い、誰もいない。

「ずっと、会いたかったんだよ。……伊藤君に」

唯は誠から腕を外し、微笑んで、ゆっくりと言った。

「それは……その……」

誠は、ちよつと自分の運を呪った。

今は言葉のことだけを考えたいときなのに……。

「それは、俺だつて……」 呟いてから、「ごめんさい、平沢さん……。 その……今は……」

「ひよつとして、桂さん？」

「え、どうして……？」 誠は唾然として、「どうして言葉のことを？」

「前に会つたことがあつたの。あの子桜ヶ丘まで来て、伊藤君は自分と付き合つてるから、もうちよつかいださないでと言つて」

「そうなんですか、言葉が……」

確かに、俺と平沢さんのことは、噂にもなつてたけど、俺達はそういう関係ではないですよね……。 何でみんな誤解するんだろ……。 世界といい、言葉といい、泰介といい……」

そういう関係でない、と言つた時、唯の表情が陰つたことに、彼は気づかない。

「きつと多分、」唯は無理に微笑を作り、「男女の関係は皆興味を持つからだよ。みんな面

白半分で当事者に聞いて、面白おかしく噂するからね」

「……考えてみれば、そうかもしれないですね。」

無理な微笑み、と分かっていても、誠には唯の微笑が、とてもきれいに見えた。

「それより、桂さんが大変なことになってるみたいね!! 急い方がいいよ!」

「わかってます!!」

誠は言つて、唯と一緒に飛び出した。

唯が半歩ほど遅れて。

彼は走りながら、言葉のメールを読んでみる。

『今、お化け屋敷。』

助けて!!』

自分以外にもう一人、別の人にメールが送られているのが、妙に気になった。

「いやー、よかったねえ!! オナベ&オカマバー!!」

榊野学園の廊下を歩きながら、純は憂に話しかける。

「刺激的だったねー」

朝こそ気が立っていたものの、純のマイペースぶりと、榊野の様々なアトラクションのおかげで、憂はすっかり明るい気分になっていた。

廊下は憂以外にも、様々な生徒がたむろして、ちよつと間を通るのに苦勞する。意外とせまい。

「次はどこいこつか？」

「そうだねえ……放送部のアイスクリーム屋なんて……あれ？」

目の前で、男女2人が人々をかき分けかき分け走ってゆく。

「伊藤君、お化け屋敷ってどこ？」

「1階の端つこの部屋です。そんなにかからないですよ」

そんな会話をしながら。

周りは不思議な表情。

女の横顔を見ると、それは紛れもなく見覚えのある顔。

「お姉……ちゃん……？」

憂は低い声で呟く。

「あれ、唯先輩じゃない？」

わお、オトコ作ってたつて噂、ホントだったんだね!!」純はパツと目を輝かせて、「ねえ憂、唯先輩たちがどこへ行くのか、見てみ……。」

純が言い出したころには、憂はもう姉を追って走り始めていた。

後ろ姿に黒い霧が出ていることを、純は悟った。

「憂……?」

「しょうがねえなあ……。梓、ムギ、呼び込んでくれ!」

「呼び込む?」

残った放課後ティータイムの3人は、相変わらずファン集めに奔走していた。

ただし律は、彼氏目的。

『放課後ティータイム部長、田井中律! 田井中律です! 彼女にして絶対損はありません!』

せん!! よろしくお願ひします!!』みたいにさ。」

「立候補者みたいだね……」

「それに放課後ティータイムではなく、律先輩の宣伝になってるじゃないですか……」

恒例のごとく、ムギと梓の突っ込み。

そのとき、「くすくすくす……」と、第3者の声。

皆はそちらを向く。2人の少女がいた。

1人は3組の喫茶店で見かけた、セミロングヘアに1本のアホ毛を垂らした少女。

もう1人は中学1年生ぐらいの小柄な体格で、赤いリボンをした子。

「ほんつと、世界も好きだね……まさか軽音部のファンクラブに入りたいなんて」

小柄な少女が、もう1人の少女に話しかける。

「剎那も人のこと言えないよ」

世界は笑いながら、言った。

「女の子……出来たら男……むぐっ！」

「あ、あ、ありがとうございます!! 是非とも加入してください!!」

不満げの律の口を抑え、梓は苦笑いしながら応答した。

「ファンクラブに入会したいです。」

よろしくお願いします。 田井中律さん、琴吹紬さん、中野梓さん」

世界は3人の名前を、すぱりと言い当てる。

「……あり、すげえなあ。ライブでしか自己紹介してないのに」

「世界は1発で相手の名前を覚えるようにしていますからね」

哑然とする律に、剎那が解説する。

「そう言えば、平沢唯さんに、秋山澪さんは？」

「も、もうフルネームで言わなくていいです……」梓は両手を突き出しながら、「2人と

もトイレに行ってますよ」

「そうですか……。みんなで話をしたいところなんですけどねえ……」

世界は少し、目を遠くした。

「おーい、世界！ 剎那！ 何やってるー？」

「ファンクラブ入りなら、私たちも参加していいー?」

世界と刹那の後ろから、長身でボーイッシュな子と、ツインテールをイカリングのよ
うに留めた子も顔を出す。

「甘露寺さん!!」

ムギの興奮した声。

「いきなり4人確保か」

梓は、ほくほくしてつぶやく。

「ねえ七海、」世界は振り向いて、「彼氏と合流したんじゃないやなかったの?」

「それがさあ、」七海は悲しげな表情になり、「妹と一緒に来てさ、そっちのほうに行っ
ちゃって、『今日は二人きりになれない、ごめん』だつてえ……」

七海は明らかに、嗚咽している。

「まあまあ……」ムギが前に出てきて、「私がいいますから。落ちこまないでくださいね。」

「いや、あんた女だろ……」

「だからいいじゃないですかあ……」

ムギの目は、不自然に輝いている。

「え、ちよつと……」

「待て待て待て待て!!」律が苦笑いしながら2人を抑え、「実はうちの学校には、稚児さ

んと呼ばれる風潮があつてな。たまに友達以上の関係を持つ奴がいるんだよ。」

「ち、稚児……」

驚く榊野一同だが、

「あ、そう言えば聞いたことがあります」

「世界？」

世界だけが話を合わせる。

「よくあるんですよ、男子校や女子校は。同性でついつい仲が良すぎて、バレンタインやホワイトデーでお菓子交換までしちゃうという」

「お、わかつてるじゃねえか、あんた」

「『あんた』じゃなくて、お願いですから世界って呼んでくださいよ、田井中さん」

世界のフォローに、七海も落ち着き、

「よ、よろしく琴吹さん……。お手柔らかに頼みます……」

小さく言った。

「ええと、西園寺世界さんに、清浦刹那さん、甘露寺七海さんに、黒田光さん……」

梓は必死に、ファンクラブメンバーの顔と名前を一致させようとする。

「別に無理しなくていいよ。案外顔と名前って一致しにくいし」

「世界が言うど嫌味よ」光は言つてから、「とりあえず、中野さんだっけ。どこか落ち着ける場所で、ゆっくり話さない?」

「……正直、私達も、じっくり話したいと思つてました。」梓達は、世界が誠争奪戦の当事者の一人であることを知つている。「正直、大事なことです」

「まあまあ待て待て。梓、あのことは忘れよう」律が小声で言つて、「色々と西園寺達の趣味とか聞きたいしよ。ざつくばらんに話そうぜ」

「ふふふ、私もですよ、田井中さん」世界は笑つて、「とはいつてもファンクラブの受付をしているから、動くこともできないですかね」

「ま、とりあえず古今東西ゲームでもやろうぜ」

律はノリのままに、発案した。

「ん? ファンクラブの呼び込みとか、しなくていいの?」

「彼氏を探しているなら、私たちも協力しますよ。」

すでに彼氏のいる七海と世界が、ポカんとしつゝ尋ねた。

「あー……どうしようかな……」

律も思わず、思いとどまつてしまうが、

「私は、女水入らずのほうがいいですよ。皆さんもそうでしょ? もちろん、りつちゃん

の彼氏は紹介してくれるとありがたいですが」

ムギが前に出てきて、話を元に戻す。

「それもそうね。やっぱり男が入ると、なんか話が合わないし」光は早速のつてきた。「今だけしか水入らずは楽しいわよ。古今東西ゲーム、やろうよ」

「やるか!」

「やろうやろう!」

みながはしやぐ間、梓は律に、

「伊藤や桂のことに關して、聞かなくていいんですか?」

「何言っただよ、私たちの入るところじゃねえだろう。あいつらで解決すべき話さ」
「でも、ひよつとしたら取り返しのつかないことに……」

「大丈夫だってば。」

律はなんとかなだめて、「やろうぜ!」と声をかける。

浮かない顔の梓を、刹那は冷静な目で見ていた。

お化け屋敷に入り込み、唯も誠も、思わず息をのんだ。

セツトがぐちやぐちやになり、『冷たい手』や『傘お化け』が、無様な格好で倒れている。

それをかき分けかき分け進むと、薄暗い部屋に、保健室のベッドが一式。

その横で、泰介がなぜか股間を抑えながらうずくまっている。
ヘアスプレーの残り香が、まだ残っている。

「泰介!？」

誠は思わず駆け寄る。

「あ……誠かあ……」

「言葉が来ているはずだけど、今どこに……まさかお前……?」

「いやあ、ほんの冗談のつもりだったんだけどさ。」

その間、唯はベッドの下に、『あるもの』が入った箱を見つけ……。

それを一つ、上着のポケットにねじ込んだ。

泰介はバツが悪そうに話を続ける。

「直前に止められてさ。桜ヶ丘の、桂さんとよく似た子に……」

「桜ヶ丘? 言葉によく似た?」

「お前も見ただろ、喫茶店で。放課後ティータイムの黒髪ロングの子。」

「それって……滯ちゃん?」

唯が口を挟んできた。

「あ……そうですよ。挙句俺の大事なところけり上げて……」

成程、いいところ狙ったもんだな。誠はちらと思った。

「おい泰介、」誠は声を張り上げ、「言葉を見てりや分かるだろ、あいつはいつも俺のことを気にしてるって、それをお前は強引に……!」

「そうよ、それを貴方は……!」

唯が同調してきた。

「あのさあ、1対2ってつらいんですけどお……」

「つたく……」誠はため息をついて、「それで、その人と言葉は今どこに?」

「わかんないよ……すぐ行っちゃったし。」

「濡ちゃんからメールが来るといいんだけど……」

ふと、唯と誠の携帯から、音のない振動が伝わってきた。2人とも、とっしてみる。

『ごめんなさい、心配かけて。』

実は今、桜ヶ丘の秋山さんと一緒に、屋上にいます。

待ってますね。

言葉』

『悪いが、ちよつと桂と話がしたい。』

どこかでゆっくりしてくれ。

滞』

『言葉……』

「澪ちゃん……」

2人の声が重なった。

「あ……」

「どうやらお二人にとつても、深い仲のようすなあ」

泰介がチクリと皮肉った。

誠はそれを無視して、

「とりあえず、行こう」

「え、ちよつと……」

なぜか唯は乗り気でない。

「あー、ちよつと平沢さん、」泰介は起き上がりながら唯の肩に触れ、「せつかくだから俺とつきあわね?」 誠には西園寺が……」

「付き合うわけ、ないでしょつ!!」

唯は思わずカツとなり、泰介の股間をけり上げた。

「あ……つ!!!」

奇声を上げて泰介は、再び床をごろごろと転がった。

誠は呆れてものも言えず、休憩室を後にした。

セットをできる限り元に戻し、進んでいく誠。

が、目の前に唯が大の字になって行方をふさぐ。

「だめ！」

「ど、どうして……」

戸惑う誠。

「今、桂さんのところに行ったら……伊藤君、そのまま気がするから……」

指をつつきながら、唯は小声になる。

「そのまま？ 訳わからないこと言わないでくださいよ。さつきはあんなに言葉のこと心配していたのに」

「それは、桂さんに何かあったからと思っただから……無事な状態で会ったなら、伊藤君、そのままのような気がしてならない……」

「……？」

「桂さんのところへ、行っちゃダメ」

「……」

「ダメ」

唯の細やかな手が、誠の太い腕をつかむ。

触れた手は、暖かいというより、熱い。

「…………どうして…………」

誠も、顔が熱くなり、胸が少しずつ高鳴っているのを感じていた。

見かわした唯の目は、潤んでいる。

ぐちゃぐちゃになったジオラマのせいで、外からは見えない。誰か来る気配もない。

泰介は転がって動けないようだ。

しばらく、お互いに何も言えない時間が、続いた。

最初に口を開いたのは、唯だった。

「ずっと、好きだったから…………」

誠は、耳を疑った。まるっきりの冗談だと思い、

「あ、ありがとう、平沢さん」

と、とりあえず言っておく。

「ドジだし、天然だし、伊藤君の好みではないかもしれないけど、この思い、桂さんにだつて、負けないから!!」

唯の激しい言葉に、彼は呆然となる。

「え…………？」

それでもまだ、冗談だと思った。

「学校だって違うし、桂さんや、あの子よりも付き合いは深くないかもしれないけど……
ずっと、ずっとずっと、好きだったんだから!!」

ドンっとした告白に、彼は思わず圧倒されてしまった。

「……好き……」

「……平沢……さん……」

誠は生唾を飲み込む。

緊張のあまり、体が硬直していた。

スッ

気がつくとその彼のこめかみに、唯の右手が伸びている。

彼女の細い手が、誠の頬に触れて……。

「だめですよっ!!」

誠は思わず、唯の手を払いのける。

「すでに俺には……言葉が……」

「伊藤君……」

そむけた誠の横顔が、唯にはしおらしくて仕方なかった。

「それに、世界だっているし……すでに迷っているんですよ……」

……

唯は気持ちをも、どこにぶつけたらいいのかわからなかった。

「……わからないよ……」

膨れ上がっていく気持ちを抑えながら、唯は誠から離れていった。ぐちゃぐちゃになったお化け屋敷のセットをどけながら。

前髪に隠れて、唯の目はみえない。

「……い」

誠の腹の奥底から、ひやりとした感触がどんどん広がっていった。

「待っててくださいー！俺も、本当は……」

セットを飛び越えながら誠は駆け出し、唯の腕をつかんだ。

誠の手が触れた瞬間、

その瞬間、唯の頭で、何かがはじけ飛んだ。

振り返って誠を真剣な目で見つめ、いきなり彼の口を口でふさいだ。

「……！！」

誠を見ないまま、唯は目を閉じ、彼の胸に手を当て、キスを続けた。ずっと口の感触を味わっていた。

男のごつごつした体に反して、口だけは柔らかい。

「……」

今度は誠が、自分から唇を唯に押し付けてきた。

そのつもりはなかった。が、本能的に唯への思いに、答えようとも思った。短いはずなのに、2人とも、それがずっと長く、感じられた。

!!!
!!!

もちろんその様子を、憂と純が見ていることには、気づいていなかった。

ようやく、お互いの口が離れた。

気がつくとも2人とも、冷たい床の上に倒れている。

唯が、誠に覆いかぶさる形で。

2人とも、今の出来事で、体も顔も熱くなっていた。

額が、汗ばんでいる。

「平沢……さん……」

紅潮状態で、目も薄目で、誠はささやくように言いかけた。

「だめ」

唯が強い声で、それを制止する。

「え？」

「私のこと、名前で呼んで。」

ゆ、い。

って」

「え……そんな……」

啞然とした。

もはや何が起きたのか、分からなくなっている。

それでも何とか理性を保って、

「ちよつと待って、俺のほうが平沢さんより年下じゃ……」

「そんなの関係ない。1歳しか違わないんだし。それじゃ声も出ないなら、唯ちゃんって呼んで」

ぼんやりした表情で、誠は、

「……唯……ちゃん……」

「ありがとう、マコちゃん」

唯は耳元で、囁いた。

「え？」 誠は目を丸くして、「マコちゃん？」

「そう、誠君だから、マコちゃん。やつと言えた……」

「そうか……。うれしいな……。」

別にあだ名で呼ばれてうれしいはずはないが、なぜか、うれしく感じられた。

誠の胸のあたりで、唯が頭を預けていた。思わずポヤーンとしてしまう。

というより、この短時間の間に、様々な出来事が起きすぎて、ただ、頭がマヒしている。

とはいえ……。

これでいいのか、とも思う。

自分が堕ちていくだけじゃない。

唯の純粹さ、純潔さまで、彼女がアタックし続けることで、穢れていくのではないか……。

そんな思いが、こまつぶりのように頭の中で回転していた。

そばにいてほしい。

でも、自分も唯も、それでいいのだろうか……。

「唯ちゃん、言葉のところへ、行かせてくれないかな……？」

返答を待たず、誠は唯を跳ねのけて駈け出した。

「マコちゃん、やっぱり、駄目なの……？」

潤んだ目で、唯は呟く。

「きや—————っ!!!」

一部始終を見届けた純は興奮状態。

「すつごー！ すつごー！ すつごー！ 唯先輩、積極的！！ 自分から男にキスするなんて！！

絶対いいカップルになるわよ！！ ね、憂……憂……？」

憂の姿は、どこにもなかった。

「憂ー、どこー？」

「古今東西、ジブリ映画の名字の最初と名前の最初を入れ替えて！」

「ポケの上のガニョ！！」

「ガニョって何……？」

「菅と千尋の蝉隠し！」

「何その蝉隠しって……」

「瀬渡元気！！」

「なんか子供向けの本みたい」

「サクリコ……コカから」

「語呂悪いなあ……」

古今東西ゲームで、みなが様々な突っ込みを入れる中で、梓は不安な思いがドロドロとたまっていった。

「はっはっはっは！ こうしてみると宮崎駿ってタイトルに力入れてるよなあ」
「そうですね。まあ、だから世界的に有名になるんでしょうけど」

律と世界が特に盛り上がり、笑いあっている。

「ムギさん、古今東西ゲーム、上手いじゃないですか」

「そうですか？ でも私、あまりやったことないんです」

「ま、そのうち慣れるでしょう」

最初はぎこちなかったムギと七海も、ゲームが進み、自然体で会話している。

余りにうまくいきすぎて、周りを寄せ付けられないほどだ。

その様子を、微笑しながら眺める刹那。

だが、梓はいたたまれない。

言ってはいけないことを、ついに口を滑らせてしまった。

「いったい何なんですか……?」

伊藤って何なんですか!? 桂って何なんですか!?

「梓……!」

「梓ちゃん……!?!」

「中野……!」

「中野さん……!」

梓は『しまった』と思つたが、すぐに気を取り直して、隣の刹那に

「いつたい何なの……。どんな人なの、伊藤も桂も……。清浦、学級委員の貴方ならわかるでしょ……」

「? 何で急に伊藤と桂さんが出てくるのか、分からないけれど」

刹那は、表情を変えずにしらばっくれる。

「何言ってるんですか、榊野でも噂になっているんじゃないんですか？」

唯先輩が伊藤とラブラブの仲って。

伊藤は西園寺と付き合っているし、桂ともいい仲なのに唯先輩に近づいてるって!

それって、……浮気……ですよね……」

急に淀んだ雰囲気、場を覆ってしまう。

梓はそれを悟りながらも、もう後戻りできないと思ひ、

「清浦、ちよつとこつちに来て」

刹那の腕を引つ張り、廊下へ行つてしまった。

「実はね……」

2人きりになつてから、梓は刹那に懇願した。

「唯先輩と滯先輩を探してほしいの!!」

「唯先輩って……平沢さんのこと……？」

刹那は表情を変えずに答えた。

「唯先輩も滯先輩も、多分伊藤や桂を探していると思うんだ。2人とも、あの2人が好きみたいだし。」

「やっぱり、そう？」

刹那の目が、ふっと真剣になる。

「でも、伊藤も桂も、なんか悪い噂の絶えない人たちみたいで……とりあえず、唯先輩や滯先輩を捕まえて、とっとと帰るつもり」

「なんで？ せっかく今、仲良くなりかけてるのに？」

「だから嫌なのよ！」 梓は大声を上げた。「もう、あいつらとは関わりたくない。」

あいつらに会ってから、唯先輩も滯先輩もおかしくなった……。

ほとんど唯先輩は伊藤の、滯先輩は桂のことしか考えなくなって、あいつらのことばかり気にかけるようになって……。

それまでは、うちの軽音部は平和だったのに、ぐだぐだやりながら仲良くやってきたのに……それが全部壊れそうなのよ。

伊藤や、桂のせいで」

刹那は、梓の目を覗き込んだ。

「……………」

「本当にそれで、すむと思う？」

「…………たぶん、すまないとは思っているけど、それでも顔を合わせなければ、お互いに忘れていくだろうと思うのよ」

「せっかく仲良くなってるのになあ。田井中さんと、世界は」

「いや、もちろん西園寺はいい人だと思うよ。甘露寺や黒田だって。でも…………」

刹那は、梓の言葉に直接答えず、別の質問を持ち出した。

「平沢さんは、伊藤のことどう思ってるの？」

「…………。好きらしいですよ。『マコちゃん』なんて言っていました」

「そう…………」刹那はため息を一つついて、「実は伊藤も、平沢さんのことを、少なからず意識し始めてるんだ」

「え…………!？」

梓の顔から、血の気が引いて行った。

「実は私と七海と光で、平沢さんが近づかないように見張ってたんだけど、それから急に伊藤、笑顔がなくなってしまう…………。少し前に、世界とけんかしたみたいだし」

「そうなの…………」

「たぶん、平沢さんに近づけなくなったから、伊藤も欲求不満がたまっていた。そう私は

思うんだ」

「……」

「たぶん、私達が干渉すべきことじゃないよ。伊藤や、平沢さんが決めることだと思う」

「そんな……」

「それに桂さんも、クラス中の女子から嫌われいじめられていて、誰も頼る人がいないんだ」

「……まあ、あのスタイルにはやつかむ人も多いだろうね」

「だからこの前私、『頼れる人間には頼ったほうがいい』と言ったんだ」

「それで？」

「秋山さんが桂さんに強い興味を示してるんだとすれば、ひよつとしたら、桂さんにとつても、秋山さんが

『唯一の頼れる人』

なのかもしれないんだよ。伊藤はどうもふらふらしてるし」

「え……」

「今更二人を裂こうだなんて、残酷なことができる!？」

梓は、言葉が出なくなってしまうた。

「清浦……」

「ん？」

「私……私たち、どうなるのかな……」

うつむき加減になる梓に対し、刹那は

「どうなるも何も、なるようにしかならないんだらうけどね。」

『人間万事西郷が馬』と思ったほうがいいよ」

「塞翁が馬です、それを言うなら」

「刹那と中野さん、どうしたのかしら……」

残った5人は、呆然としている。

「そう言えば、誠も遅いな……。どんだけ先のトイレに行ってたか……」

と、世界。

「ま、でっけえ方なんじゃね」

「……あのね、りっちゃん。女の子の前で大とか小とかいうもんじゃないわよ」
諫めるムギ。

「桂の奴は、澤永が今頃『足止め』しているはずなんだけどな……」

「七海、あんまり手荒なことはやめた方がいいって、言っただじやない……」

顎に手を当てて呟く七海に対し、今度は世界がたしなめる。

「それにしても、伊藤って奴は、」律も表情を曇らせ、「私も気になる。唯の奴、本当に伊藤を好きみたいだしよ」

「うわっっちゃー！」七海はこめかみを押さえつつ、「やべえよ、それ……」

「伊藤、どんな奴なんだ？」

「早い話が、カイシヨウナシ。優柔不断」

「……そう……？」

ムギは唾然となる。

「世界の彼氏だというに、桂とかに目移りしやすいしよお……」

「まあ、」律が口をはさむ。「桂に関しても、あまりいい噂を聞かないなあ」

「あいつは男受けばかり良くて、最低だからね。私はあいつと中学でも同級生だったんだけどさ、女子みんなに嫌われ無視されてたようなフェロモン女なんだから」

「ねえ、」七海の横から、光が顔を出し、「何とかムギさんや田井中さん達も、私たちに協力できない。平沢さんや桂さんが、伊藤に近づかないように」

「それは……」

「私見たけど、いっつも伊藤は平沢さんのことで鼻の下を伸ばしているのよ。なんとかあいつに、もうちょっと節操をもってもらおうようにしないと。殴ってもかまわないわよ」

「そう言われても……。私、そういう強引な行動は苦手ですし……。」いつも笑顔のムギが、暗い表情になる。「肝心の西園寺さんは、どうしたいのですか?」

世界もうつむき、

「それは……。その……」

「もうちよつと強硬手段に出るべきだよ、世界!!」

七海が世界に叱咤する。

「私だつてそのつもりだったよ、七海。でも、かえつて逆効果だったじゃない……」

「おいおいおい……。」律はもはや、呆れてしまった。「伊藤がそんな奴なら、とつと別れて、別の男見つけりゃいいじゃねえかよ」

「ううん、」世界は首を振つて、「誠は、本当はそんな人じゃないから。いい奴だから、ずつとそばにいたいと思つてる。」

普段は豆板醬チキンおごつてくれたり、リラックマのぬいぐるみをくれたり、すつこい優しい人なんだから……」

「はあ……」

やがて、梓と刹那が戻ってきた。

「とりあえず、」刹那は落ち着いた表情で、「中野はちゃんと宥めたから。話題変えよう」
「そうはいかねえよ」七海は焦りを隠さない。「大体、平沢さんは放課後ティータイムの

メンバーなんだし、当事者なんだぜ。あなたたちも、何か知ってるでしょ」

「私たちは知らないです」ムギは答える。「全部唯ちゃんや滯ちゃんの問題。あの2人が幸せなら、それでいいって思ってたし」

「知らないわけないでしょ！ それにあいつらにとつてはよくても、こっちは迷惑なんだしさ!!」

「落ち着いて!!」

刹那が声を強めた。

「とりあえず、西園寺」大きく息をして、律が世界に、話を振った。「もうこうなったら、腹切って話すしかねえな。話し合おうじゃねえか」

「腹割って、です」

今度は、律が世界の腕を掴んで、その場を離れる。

だれも止める者はなかった。

「甘露寺さん……」

ムギが口を開く。

「ムギさん？」

「私、甘露寺さんのこと好きだから。甘露寺さんのためなら、何でもできるから……」

「そうかい……?」

目をわずかに細めた七海。

ふと、携帯の音が鳴る。

刹那と梓は、2人を浮かさない表情で見つめ……。

律と世界は、2人きりになった。

「ま、優しくされて好きになるのはわかっけどよ、あんまりそいつにこだわることねえんじやねえか？」

世界は、少し厳かな顔になった。

「たぶん田井中さんは、恋愛なんてしたことないからそんなふうに見えるんだと思います」

「……」

「クラスでも隣同士なんだけど、声をかけられるたびドキドキして……」。

好きって言われたから、とてもよかった。」

「はあ……」

「えっちして、気持ちいいってこともあったし……」

「……生々しいからやめてくれ……。要は、確かに伊藤が、西園寺のことを好きって言っただよな」

「え、ええ……」

うつむいたままで、世界は答える。

「何だ、伊藤も西園寺を好きって言ってるんじゃないか」

「ええ……」

律は頭をかきながら、顔を天井に向けて、

「だけどよ、滯の話によれば、元々伊藤の彼女は桂で、あんたが寝取った、というらしいのさ」

「それは……」

ある意味では、真実である。

「細げえことはよくわかんねえし、滯は桂のこと、好きみてえだし、滯が桂に肩入れするのは構わないとは思ってる」律は携帯のメールを見ながら、「今も屋上で、桂と一緒にいるみたいだしな。」

でもね、私は……」

「私は？」

「滯は私の幼馴染でさ、正直あの桂って奴には嫉妬してるのさ」

「嫉妬？」

「あいつが桂に妙に興味を持ってるってことは、前々からわかった。だけどよ、相手が

どこの馬の骨とも分からん奴つーのは、幼馴染として面白くねえと思わねえかあ？
濡より美形なのはわかるが」

「……いや、私そういう趣味ないですし」

「ならいいや……。とにかく、濡を虜にした桂に関して、もそつと知りてえしよ。それにあんたにも、かばう人間が1人いねえとな。」

「……私のこと、かばってくれるんですか？」

「最初は干渉しないようにしようって思ってたんだけどな。」

梓のせいで、干渉が避けられなくなっちゃった。

まあ、それだけってわけじゃねえさ。西園寺と話すとなんか楽しいし」

世界の表情が、急に明るくなる。思わず声をあげて、

「私も、田井中さんが本当に魅力的な人だなって！ 面白い人だなって思ってます!!」

「……サンキュ。」

「でも、桂さん……うちの学校では浮いているから、桂さんに好意を持っている人が1人でもできるのは、いいことだと思いますよ。」

それに田井中さんの友達……幼馴染とくれば」

「西園寺……」

「……ただ正直、秋山さんを味方につけて誠を奪おうというなら、私は……秋山さんも

……」

世界のこぶしに力が入るのを見て、律はため息をつき、

「だーから、奪われたら別の奴を探しやあいって」

「まあ、誠が私の彼氏になって、桂さんや平沢さんとも和解できるのが理想なんですけどね」

話していると、七海が息せき切って駆け付けてきた。

「大変だ！ 大変だ！ 大変だ!!」

小高い場所で、秋の木枯らしが吹きこむ。ベンチの横で、無数のボイラーが、ファンを回している。

ここは榊野学園の屋上だ。

「ううー、寒い……お化け屋敷壊しちゃったし、どうしようかな……」

青いベンチで、滯は肩を抱えて震える。

隣の言葉は、目を泣き腫らしていた。

「あ……そっか……」 滯は言葉に目を向け、「桂のほうがショックだよな……」

「そうじゃなくって、嬉しいんです……」

言葉の口元には、微笑みがある。

「あ……」

漣は思わず、頬を赤らめた。

「私、ずっと男子からやらしい目で見られたり、そのことで女子からも冷たくされてたんですけど……」。

私のこと、心から気にかけてくれる人がいましたから」

「あ、いや、その……」 漣は横を向きながら、「今度あんなことがあった場合、思いっきり玉蹴るべきだと思うぜ。律から教わった護身術なんだけど、効果てきめんだし」

「……」

「それより、伊藤に連絡しなくていいのか？ たぶん探してると思うぞ」

「誠君には、すでに連絡しました。 秋山さんは大丈夫ですか？」

「ま、メールは送ったから、大体みんな納得してるだろう」

目を丸くする言葉に対し、

「こんな感じで、グダグダやってんのさ……」 漣は言うてから、話題を変える。「どうだった、うちのライブ？」

ふと、言葉は悲しげな表情になり、

「……ごめんなさい……実は用事があったて、ライブに行けなかったんです……。本当は、いきたかったんですが……」

それを聞いて、漣は急にズーンとなつてしまった。

「そうか……残念だな……」

「でも！ 秋山さんのベースも歌も、本当は聴きたかったんです!! 本当なんです!!」

「ほんとに?」

「はい。」

沈んだ気持ちだが、急に浮き上がる。

言葉の手を握り、

「嬉しい！ 是非とも聴いて！」

『ふわふわ時間』

私が詩と曲を作ったから、自信あるんだ！」

漣は胸に手を当て、アカペラで歌を歌い始めた。

階段から屋上へと出ると、急に冷えた風が吹き込んだ。

唯には初めてだが、誠にとっては、おなじみの場所であった。

かつて言葉や世界と一緒に食事していた場所。

だが同時に、自分と世界がホテル代わりに使っていた所にもなっていた。

その意義深い場所で、歌声が聞こえてくる。

『♪キミを見てると いつもハートDOKI☆DOKI

揺れる思いは マシユマロみたいにふわ☆ふわ♪』

放課後ティータイムのライブで聴いた曲だ。

音楽はともかく、歌詞は聞いただけで体中がかゆくなるような詩。

「漣ちゃん……」

すぐ後ろの唯は、うつとりとした表情で聴いているが。

声のする方は、ベンチだ。

ベンチへと向かうと、歌声が突然やむ。

かすかに、あの時の視線を感じた。

誠と目があつたのは、姫カットの前髪、長身の女子生徒。

「秋山さん……?」

「……伊藤だね」

漣ははつとなつて頬を染めながらも、注意深く表情を消した。

「誠君!!」

漣の横から言葉が飛び出し、誠の首に抱きついた。

「言葉……大丈夫だったんだ……」

「はい……でも……うれしかったです……」

安らいだ表情の言葉。

その隣で、漣が呆れたような顔になり、

「唯……やっぱりこうなるのか……」

と呟く。

誠の背後で、唯は顔を赤らめてかしこまっていた。

「どうしてここにいますか!?! もう誠君に近付かないでといったのに!!」

唯の肩を掴んで詰め寄る言葉に対し、

「桂!」

たしなめる漣。

「言葉、」誠は横から、「唯ちゃん、ずっと言葉のこと心配してたんだぜ」

「唯ちゃん?」

漣が耳ざとく突っ込む。

「あ……。ひ、平沢さん!」

ごまかしても、漣も言葉も、ためにならないほど多くを読み取ったようだ。

「誠君……」誠を向いた言葉の目は、疑念にみちている。「秋山さん、何とか平沢さんに

言ってくれませんか!?!」

「桂、私は唯の友達でもあるんだ」

澪は首を振った。

と、

「桂さん……良かったあ……」

唯は言葉に抱きつき、頭を言葉の胸に押し付ける。

「平沢さん？」

「よかったあ、心配したんだから……」

言葉の大きな胸に顔をうずめて、泣いている。

「平沢さん……」

啞然として、言葉は唯を見下ろした。

「ライバルなんだから、お互い無垢な状態で、きっちり勝負したかったんだよ」

「らいば……!!」

澪と誠の声がハモる。

誠は不意に、唯の唇の感触を思い出し、後ろめたい思いになった。

スキンシップを許した揚句、いつの間にか……。

自分の流されやすい性分を、呪った。

「伊藤」

澪が誠に、声をかけた。

「はい?」

次に滯は赤くなつて、視線をそむけ、

「なんでもない……」

「秋山さん?」

「滯ちゃんは恥ずかしがり屋だから、」唯は滯の肩をたたき、「男の子とうまく話せないんだよ。ね、滯ちゃん」

「ち、違うっ!!」

「いや、ははは……」

誠は思わず笑つてしまった。

「秋山さん、無理しなくていいですから……」

律たちと世界たちは、お化け屋敷の前まで来ていた。

七海が『お化け屋敷が荒らされた』という知らせを聞いたためだ。

案の定、休憩室周辺の小道具が、すべて引き倒されている。

「うわっちゃん、童貞卒業の場所がぐちゃぐちゃじゃないか……」

目を丸くする律に、

「この分だと、先生にもばれたかな」

呟く七海。

「こそこそやつてたのね……」

ムギは引きつり笑いをしながら言った。

「あなたたちにも彼氏を紹介して、使わせたいと思つてたんだよ、あの休憩所」

七海は一応のフォローをする。

「その、私は、甘露寺さんと……」

ムギはいいにかけて、律に口をふさがれ、

「い、いや、心遣いサンキュー」

「……とりあえず、私達で直すしかないわね」

世界が真つ先にセットを修復していく。

一部分は、誰かが修復したように直っているが。

「あ、律先輩!! こんちはー」

声が出たので、そちらのほうを向くと、純。

「おつす、純、どうした?」

「見たの、見た見た! 唯先輩がオトコをつれて廊下を走つてる姿」

「え、お、男……」

梓が口にしわを寄せて答える。

「私もメロメロになるほどのイケメンだったんだけどね、唯先輩のオトコ」純は頬を紅潮させて、早口でしゃべる。「唯先輩、特上の彼氏を手に入れただけじゃなくて、すごいんですよ!! 自分からキスしてたのよ。ぶちゅーって!!」

「『ぶちゅー』はやめい」律は苦笑いしながら、「ひよつとして、伊藤にか?」

「伊藤……そうそう、伊藤って人に。唯先輩って積極的ですねー!! 絶対モテるわよ。」

ひよつとしたらあの人とロストバージンしたとか? あははは!!」

ベラベラベラベラしゃべる純。放課後ティータイムの3人はどんだん顔が青ざめていく。

「……唯の奴、そこまでいったのかよ……」

「手、早すぎじゃない」

「そんなことありえませんっ!!」梓が怒鳴り散らす。「唯先輩に、唯先輩に限って……」

世界と友人たちの空気も、かなり淀んでいることに感づいた結果。

「誠、まさか……。光の言っていた通り……」

「……あいつ……」

「やつぱり、浮気してたのね。一発殴ってやらないと、だめかねえ」

いきり立つ3人の中で、刹那だけが冷静。

世界は、ふいと思いいったかのように、

「ちよっと、屋上行ってくる」

そういつて駆け出してしまった。

「これも、一種の奇縁かねえ……」律は呟いてから、「ちよっと西園寺の様子、見てくる」
「り、律先輩まで!?!」

「深入りはしねえよ。西園寺の様子を見るだけさ」

律は、世界の後を追っかけた。

「どうしたのかしらね、律先輩も。憂もどこ行っただか」

つぶやく純。

「なんだなんだ」

休憩室の奥から出てきたのは、泰介。

「澤永、どうした?」

「平沢さんと誠に怒られたんだよ。桂さんが俺に気があるって、嘘ついたな、甘露寺。」

「い、いやあ……すまないね……」

「大丈夫だよ、澤永には私が……」

にっこり笑う光に気づかず、泰介は小声で放課後ティータイムのメンツに、

「確かに平沢さんと誠は、傍から見ても似合うけどな。童貞卒業までいつてねえ」

「でも、」梓は心配げに、「キスしたって……」

泰介は頭をぼりぼり掻きながら、

「ああ、してた。俺も這って目撃しちゃったよ……」

「でも！ 伊藤は西園寺の彼氏だって……」

「まああいつ、流されやすいからなあ……」

「……ここまで情けないとは……」 梓は呆れてものも言えず、「何とか唯先輩を伊藤から奪回したいんですけど、何とかありませんか!？」

ずいっと迫られ、泰介はオドオドしつつ、

「い、いや、無理だろう……向こうは誠に気があるんだし、誠だって平沢さんのことを話すときは……」

「大丈夫!!」

普段出さない大声を張り上げたのは、剎那。

「清浦?」

「私も最悪の状況だけは、中野と一緒に止めたいと思っっているし」

啞然とする一同。何を根拠にそう言えるのか。

梓はつぶやく。

「うちの軽音部、どうなっちゃうのかな……」

続
く

第8話『暗転』

「誠君、一緒に行きましょう」

言葉が誠に声をかけて、そつと腕を組んだ。

「ああ」

誠は、笑顔を彼女に向ける。

が……………。

唯が2人を、大の字になって遮った。

「やっぱり、だめなの？ マコちゃん……………」

「ゆい…平沢さん…」

唯の悲しげな視線を見て、誠の胸が急に冷える。

「ね、ねえ…ならばタイムシフト制にできない？ 4時から5時まで桂さんが、5時から

6時まで私がマコちゃんと回る、とか」

「バイトか。」 藩の突っ込み。

言葉が唯の前に進み出て、炎が付いた眼光を向ける。

こうなる時、彼女はいつも頑固なのだ。

「平沢さん、学祭で男女2人で回るといふことは…」

「分かってるよ…付き合ってるってことなんですよ。私も、一緒に回りたいのに！」
「あげるわけには、いきません！」

激しくなった2人の口調。

「落ち着け、唯！ 桂！」 滯は誠に視線を向け、「伊藤、貴方はどうしたいんだ？」

「…それは…」

答えられるわけがない。

真剣な視線で唯と言葉は見るが…。

滯の顔を見ると、眉が幾分か寄っている。

『どうもはつきりしねえなあ』

そういう顔だと、すぐに彼も理解できた。
がちやつ!!

突然、屋上入口から大きな音。

そちらを向くと、世界。

風が急に、激しくなった。

「どうして…」

低い声で、世界は言う。

「誠……どうしてここに……」

「世界……」

誠は、彼女の怒りのこもった瞳から目をそむける。

「せっかく放課後ティータイムの演奏を聴いて、ファンクラブに加入して、学祭と一緒に回るって、約束したよね!？」

「と、トイレが長かったんだって……」

「誤魔化さないですよ!」世界は進みより、唯に目を向け、「聞いたんだよ……平沢さんとキスしてたって!」

滯と言葉は、思わず目を見開いた。

「ど、どうして知ってるの?」

唯は思わず、しゃべってしまふ。

「やっぱり……!」

「世界、それは……!」

パンツ!!

あわてて歩み寄った誠の頬を、世界は張った。

「誠……ねえ……私と初めて結ばれた時、言ったよね……? 誠は私のこと、桂さんより好き

だつて…」

世界の声は、震えている。

「…なのに、どうして…？」

「…それは…」

「私、桂さんの代わりだったの…？ 桂さんが誠にさせてくれなかったから、私で満たしたかった、ただそれだけ？」

それとも、平沢さんが現れるまでのつなぎ？ 私のないところで、ラブラブの登下校をして、喫茶店へ行つて…。いちやいちや話をして…」

「いちやいちやつて…そんなんじゃない」

「待つてくれ！」

誠と世界の間には、漣が入った。

「西園寺…だったね。」

「貴方は…秋山さん？」

「！」

ライブで自己紹介しただけなのに、名前を覚えられていたことに少々戸惑いつつ、「私が桂から聞いた話だが、」漣は探るような視線で、「伊藤はもともと桂の彼氏だったのを、貴方が伊藤と関係を持って、取ったと聞いた。

そんなはずはないんだがもしそうなら、貴方が一番桂を傷つけているし、伊藤を批判する資格なんてないと思うんだ」

「それは…」

事実だ。練習なんてわけのわからない理屈をつけて。

誠は言葉をちらりと見る。

助け船が入ったのは良かったが、知られてはならないことまで知られてしまった。

言葉は滯と同じく、探る目。

「おいおい、実際に伊藤は、西園寺のことを好きって言ったんだとよ」

屋上の入り口から、高い声が響いた。

「田井中さん!?!」

「律!?!」

世界と滯は、思わずまばたき。

よつと声をかけて、つかつかと律は話に入っていく。

「いやあ、実はね、こいつとそのダチ公がうちのファンクラブに入っちゃってさあ。部長としてはちよつと気になるところなのよ」

よりにもよつて、と思いつつ滯は、

「面白半分に入るな、律。ちよつと込み入ってるんだから」

と律をたしなめる。

「とにかく、伊藤だったな。あんたは西園寺にも桂にも、好きって言ったんだろ？」

両手を腰に当てて、律は誠を向いた。

「…それは…」

そうだ。

「だけどさ、律、先に付き合ってたのは桂なん…」

滯が言いかけた時、世界が声を上げた。

「私…みじめじゃない…!!」

声は、震えている。目も赤い。

「私の方が、桂さんよりも好きって言われて…何度もそばにいて、何度も腕を組んで、何度も身を任せた私って…みじめじゃない…!」

「世界…」

「あの時もそうだったじゃない…。誠が平沢さんや桂さんに目移りしてることをとがめると、逆ギレして…」

「あの時は、申し訳ないと思ってるけど…」

胸がきゅつとなるのを、誠は感じた。

「もういい！ 何も信じられないよ!! 嫌い！ 嫌い！ 大嫌い!!」

誠も、桂さんも、平沢さんも、何もかも、みんな嫌い!!」

「せか……!」

「大嫌い!!!」

頬を赤くして、目に涙を浮かべて、世界は後ろを向く。

「世界!!」「西園寺!!」

誠と律が止めるのも聞かず、つかつかと歩き出す。

風がやんだ。

律が誠に向けたのは、冷たい視線。怒りをこらえていると、唯にはすぐ分かった。

振り向くと、漣が複雑な表情で、言葉が冷やややかな視線で、世界の後ろ姿を見ていた。

唯達に知られないように、梓と七海は、入口付近に隠れて様子を見ていた。

「どんな悪人面かと思いきや、意外と優男じゃない……」

梓は誠の顔を見て、つぶやいた。

「…桂の奴、澤永の足止めを食らったはずがピンピンしてるな…やはり失敗したのか…」

七海の呟きを聞いて、彼女は、

『桂と話がしたい』

という漣のメールを思い出す。

「甘露寺、」梓は口を開く。「私には、分からないの。」

桂が気に食わないのは私も同じだけど、何でそこまで、追い詰める必要があるのか……
交わした七海の目は、真剣。

「世界の敵だからだよ。」

「それは……そうだけど……」

「あいつ、いまだに伊藤の彼女は私って言うてるからねえ……。脳内どうなってんだか知んねえけど。」

世界は彼氏でもゆずっちゃうような奴だからよ……」

「……」

「それにしても、桂をかばうあの女も何なんだか」

「！ 滯先輩は違います!! ……多分桂が可哀想だと、考えなしに思っちゃって……」

「そう……?」

七海は、あごに手をあてる。

と、2人の前に、つかつかと世界がやって来て、通りすぎる。

「世界!?!」「西園寺!?!」

「私、帰る!」

世界は七海と梓に、これだけ言うと、速足で階段を下りてしまう。

七海の表情が、さらに険しくなったのが、見て取れた。

女癖の悪い、ふらふらした少年…。

これで、すべてのいきさつが、唯にはわかる気がした。

世界の気持ちもわかるし、言葉の気持ちもわかる。

でも、この少年を好きになった自分の気持ち…。

それは間違っているのだろうか…。

「あのね、マコちゃん」

穏やかな口調で、唯は口を開いた。

正直、今は頭の中を整理できない。

でも、自分の思った通りのことを、語っていた。

「私、すつごく楽しかった。

マコちゃんに会ってから。

あのコンビニで、マコちゃんを見てから…。

ううん、マコちゃんに近づいて、そして登下校したり、喫茶店に行ったりして、すつ

ごく嬉しかった。

それだけじゃない。

榊野を通る時はすぐマコちゃんが目に付いたし、途中を歩いていても、マコちゃんのことか心に浮かぶんだ。

放課後ティータイムのみんなで演奏した時も、この演奏をマコちゃんに聴かせたいって思った。

みんなでお菓子を食べあいながら話す時もそう。

お菓子をマコちゃんに食べさせて、お茶飲みあいながら和気あいあいと話して、笑いあいたくなるんだ。

家に帰れば私の部屋をマコちゃんに見せたいと思うし、

ベッドに入れば、夢にマコちゃんが出てきてほしいっていつも思っちゃう。

マコちゃんと帰ると、また軽音部の練習を頑張りたいと思うようになったし、

マコちゃんと会えないと、軽音部の練習すらやる気にならなくなっちゃう。

軽音部にいる時よりも、ずっとずっと、ずーっと充実した一日一日になってたんだ」

「唯ちゃん…」

「えーつと…つまり…何が言いたいというかね。

ありがとう…。

そして、ごめん…。

私をこんな思いにさせてくれた人に、お礼の言葉を言いたいので…」

そう言うと唯は、満面の笑顔を作る…

が、誠は彼女が無理をしていること、そしてその目に、涙がにじんでいることをすぐに察した。

「唯…ちゃん…」

悲しげな表情の誠を背に、唯はすたすと歩き出した。

正直、もう何が何だか、自分でもわからなくなっていたのだ。

啞然とする皆、それに梓と七海を無視して、唯は無心に階段を下りて行った。

ボイラーの音が、相変わらず低周波を立てている。

「…くそ…！」

誠も入口へすたすと歩いていく。

こんなんじゃないやあ、嫌われるよな。

理性では分かっているけど、やはり耐え切れなかった。

「おい伊藤！ お前っ!!」

「唯先輩をたぶらかして、どういうつもりっ!？」

七海と梓が誠に手を駆けるが、強引に振りほどき、すたすと降りていく。

「誠君！」

言葉も誠を追って駆け出し、梓と七海の間をかき分けた。

その一瞬、言葉は七海を見て、かすかに……だが、間違はなく……微笑んだ。

七海が反応する前に、言葉は速足で、かけ下りる。

後にはただ、沈黙。

「ちえ、なんなんだかあいつ」

「伊藤……」

取り残された律と漣は、冷静につぶやく。

「しかし、まさか西園寺がうちのファンクラブにねえ……」

「西園寺だけじゃなくて、その友達もだよ。前々から興味を持っていたそうだけど。」

案の定榊野でも、唯と伊藤のことが噂になっていたようだった」

「そうか……」漣は腕を組みながら、「となると、それもあつて近づいた可能性も高いな……」

「そうかあ？ みんなでゲームしてた時は、それなりには楽しんでいたぜ、あいつら。」

これがファンクラブ会員の名簿なんだけど」

律は漣に、今まで入った会員の名簿を見せる。

世界、刹那、七海、光。

たった4人。

それも、世界とその友人ばかり。

「まる聞こえなんだけどなあ」

額に指を抑えつつ、七海は呟く…。

ここは先ほどの、1階ロビー。

「……」

梓から送られたメールを、刹那は受け取った。

ムギと2人で、放課後ティータイムファンクラブの受付番をしている。

「どうしたんですか?」

と、ムギ。相変わらず暇なので、あくびを繰り返してばかり。

「中野から、メール」

「梓ちゃんから?」

「はい。世界、伊藤と喧嘩しちゃったらしいです。事実上の絶交。

平沢さんも彼から離れたみたい」

「そうですか」

ムギは当事者ではないので、余り感慨はわかない。

「…とりあえず、これで伊藤さんは、桂さんと付き合うしかないんですね。ごたごたが解決して、よかつ…!」

ムギの笑顔が消える。

刹那が向けた瞳は、怒りに燃えていた。

「簡単に言わないで!! ずっと世界は伊藤のことが好きだったんだよ!! それをあきらめる苦しみが、貴方に分かるの!?!」

「…そりゃあ、唯ちゃんも伊藤さんのことが好きみたいですし。分かりますよ。」

でも、西園寺さんは伊藤さんを嫌いになっちゃったみたいだし、こうなっちゃった以上は、しようがないじゃないですか。」

「しようがない!!」

「…ごめんささい」

刹那の大声に、皆がちらちらと目を向けるが、すぐに皆皆通り過ぎてしまう。

「ムギさん」

「はっ?」

刹那は一瞬、ムギから目をそむけてから、

「七海には気をつけた方がいい」

「どうしてですか? 西園寺さんのために、結構気を使ってくれていい人じゃないですか。」

私には、まだどぎまぎしてるけど」

ムギはいまだに、この重大さが分かっていない。

「だからだよ」刹那は声に力を入れる。「七海は女バスのキャプテンだし、うちら誰よりも、私や世界よりも仲間思いだ。

でも、だから怖いんだよ。

友達のためなら、どんなことでも、できてしまうから」

日は傾き、窓には赤い夕陽が、飾りを照らしている。

昼ごろには廊下を埋める程に多かつた客も、今や数人となつてしまっている。

言葉は一人、誠を探して廊下を歩いていた。

「…どうして、誠に会えてたの…？」

横から、声が聞こえる。

世界だった。

待っていたのだと思われる。

「西園寺さん…？」

「みんな見張つてたのに…どうして近づけたのか、これだけは知りたいの…」

とは言いつつも、世界の拳は力を入れていた。

「私も聞きたいです。澤永さんに私を襲わせたのは、西園寺さんの差金だったんですか…？」

「澤永に？」

「それを教えてくれたら、教えてあげてもいいです」

「七海……どんなことをしたのかと思つたら……」世界は呟きつつ、「私は知らない……知らない……」

「そうですか？」世界の言葉は正直、言葉には信じられない。「幸い、秋山さんが私を助けてくれましたして、誠君ともメールが通じていたましたから。だから、いつもの屋上で落ち合えたんです。

作戦失敗ですね。

平沢さんがそばにいたのは、私も予想外でしたけど」

皮肉たつぷりの口調に、世界は昂しかけたが、

『貴方が伊藤を批判する資格はない』

という澤の言葉が、頭をよぎった。

「私はもう、男の人に触られることすら嫌っていた、臆病な自分ではありません。誠君好みの、誠君に尽くせる自分になれるように……努力しました。

本当の恋人になれる覚悟も、できています」

「でも……」

「あなたは、私が臆病だったことを利用して、誠君に体を与えただけじゃないですか。

しかも貴方は、私に誠君を紹介し、誠君との付き合いで悩んでいた時に相談に乗ってくれましたよね……？」

「違う！ 誠は、本当に私のことを、貴方よりも好きって言ってくれて……！」

「その時の快感を、誠君は忘れられないだけじゃないですか……？」

「う……」

それは……あるかもしれない。

「そして貴方も、それが忘れられなくて、誠君を離したくなくて、流されるままに続けた」

「違う！ だけじゃない!! 好きって、何回も言ってくれたし、コクリコ坂からを見た時だって、街を歩いたときだって、好きって言ってくれたし!!」

「よしんばそうだとしても、貴方が誠君のことを嫌いといった以上、誠君も貴方のことを嫌いになつたでしょう。」

「あ……」

世界は、ガタガタガタ震え始めた……。

感情に任せた、一度の勢いでああいつてしまったことを、後悔した。

言葉は低い、憎しみのこもった声で

「だから、もう……」

「嫌…嫌…」

「誠君に、近づかないでくださいね。」

「嫌ああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

世界は頭を抱え、消えていってしまった。

言葉は1つ、息をつく。

これで1人、ライバルが減った。

「桂!」

言葉にかかる声。

「秋山さん…」

どうやら、今のを聞かれていたらしい。

「今の、言いすぎじゃないのか? ほんと律や、西園寺の友達が聞いてなくてよかった

…」

「今まで傷つけていた分を、返しただけです。」

「そうだけど、いくらなんでも…」

澪は呆れた表情。

と、横の通路から、背の高い、馬面の少年が顔を出す。

「澤永さん!」

「あんた……」

泰介は「げ……」と呟く。

「へーい、兄さん、私とデートしない？」

そのころ、山中さわ子は1人、彼氏のアタックを続けていた。

手元には、女性にだけ配られる休憩所がある。

「受けた」

さわ子は、1人の男の声を聞き、そちらに目を向けた。

そこにいるのは、肩までかかる長髪、どちらかという筋肉質な男。

「おおー！ うれしい。」

「榊野の休憩所、私も知っているよ」

その男はなかなか整った顔立ちだが、目のどす黒い濁りにさわ子は気づかない。

「じゃあ、さっそく喫茶店に……」

「その前にこの近くに、休憩所があるからさあ」

男はさわ子の肩をつかみ、強引に休憩所へと歩いていく。

「え、は、気が早すぎ……！」

「いや、我慢できないんでね……」

「ちよ、ちよつとやめ……」

男は、問答無用にさわ子を押し倒す。

薄暗くなり、空が紺になり始めた時。

誠は一人、中庭で缶ジュースを飲んでた。

広場では、数人の生徒会員が、セツトの後片付けをしている。
知り合いがいないのが幸いである。

「こんなところにいたのか」

校舎から、声がした。

泰介であつた。

誠は、無言である。

正直、誰とも会いたくなかつたのに……。

「ま、色々であつた一日目みたいだな」

泰介は彼の隣に座つて、手持ちの缶ジュースを開ける。

どうやら一連のことを耳にしているらしい。本当に噂が回るのが早いもんだ。
はぐらかそうとして、誠は、

「おい、泰介……。言葉には……」

「分かっている…」 泰介はぼやくように、「桂さんには一応謝ったよ。土下座して。

…背後であいつも、にらみをきかせていたし」

誠は思わず、吹き出してしまった。

そう言えば、秋山さんに、一言もお礼をしてなかったな…。

「話はちよつときいたよ。西園寺とけんかしたんだって？」

「いや、もう事実上、別れた。絶交状態」捨て鉢になって誠は、「もういいんだ…。好きだけど、好きじゃなかったんだな…」

「は？ なに訳のわからないことを。それに童貞卒業した仲なんだろう」

「それは、もういいんだ。その時はお互い勢い任せだったし、結局それで大人っぽくなつたわけでもなし。」

それにそれが、悪癖になっちまってたよ」

「そうなのか？」

「ただ、最近は、あまりしりたいって、思わないんだよな…。」

ゆい…平沢さんの笑顔を見てから」

「そんな仲にまでなったのか」泰介はニヤツと笑ってから、「いや、いいって、唯で」

「唯ちゃんの笑顔を見るだけで、それを思い出すだけで十分になったんだ」

「そうかい、そうかい。そう言えば、平沢さんの笑顔だけで満足と言ってたしな」泰介は

うなずいて、「ま、お前にはまだ、平沢さんや桂さんがいるだろう?」

正直、平沢さんと聞くと、あの悲しげな笑顔が目には浮かぶ。

「いや、この体たらくで唯ちゃんにも嫌われたし！」

言葉だつて、どうだかわからないぜ…。

いい! いい! もういいよ!!

明日は一人で回つて、それなりに楽しむから」

「おいおい、いじけんなよ。もしなんだつたらさ、俺が黒田紹介すつから」

「…いや、どう見ても黒田は俺のこと嫌いだろ…」

「だーいじょうぶだ、あいつは俺の言うことには素直だから。」

俺はさわちやんにコクするから、うまくいったらダブルデートな!」

「いや、ははは…」

取らぬ狸の皮算用とはまさにこのことだが、口にするのはもちろん控えた。

「同じ悩みを抱えてるのは、お前だけじゃないんだぜ」泰介はグイッとジュースを飲みほしてから、「知ってるか、足利のこと」

「足利かあ…。そういえば最近会ってないなあ。」

「あいつ、4組の加藤と、桜ヶ丘の真鍋つて子に同時にコクられたそうであ。今も迷つてるらしいんだ。」

「そうか、加藤が…足利も加藤も中学の同級生だけど、そうだったんだ…。」

「加藤と真鍋は、『彼氏を手に入れるための修行』っていつて、早めに帰っちゃったらしいが…。」

この学校、本当に恋人を取り合うケースが多いな。

誠はそう思ってから、空き缶をくるくる回して一人悦に入る。

「それから、教員室でちよつと聞いた話なんだけどよ」泰介は心配げな表情になり、「教員室に桜ヶ丘の子が来て、3組の掲示板を見て、なんかお前の住所を調べてみたいだぞ。」

なんかずつと、うつろな笑い声をあげてたつて話だ」

「…誰なんだろう」気がかりになった。「言葉や世界は、俺の家をもう知ってるし。唯ちゃんはそんな暗くないしな」

ふとその時、

「伊藤！」

校舎から声がして、2人はそちらを向く。と、泰介が、

「げ、あいつ苦手…あとはよろしく…」

といつて、そそくさ逃げてしまった。

誠は驚かなかつた。

とても見覚えのある顔。

つり目で黒髪ロングヘアの子に、小柄で茶髪、カチューシャで短髪の子。どちらも桜ヶ丘の学生服を着ている。

「秋山さん……それに……ええと……」

「田井中律だ。軽音部部长。」

髪の短い方が、言った。

「しかしね、何で私まで付き合わなきゃいけないんだ？」

「頼むよ。私は一人じゃ男と話せないんだからさ、」

律だって、伊藤と一度話をしたいと言ってたろ？」

律と滯は、誠に聞こえないようにぼそぼそと話す。

「な、なんですか……」

2人の表情から考えて、とてもいい話とは思えない。

「伊藤……」最初に口を開いたのは、滯。

低い声だ。

「貴方は本当は、だれが好きなんだ？」

貴方があいまいな態度をとったせいで、西園寺も桂も、かなり傷ついているの、分かっているだろう。

挙句唯まで巻き込んで…」

誠は、滯の鋭い眼光から目をそむけて、

「唯ちゃんまで、巻き込むつもりはなかったんです…。」

それに言葉はあのスタイルと顔だし、世界だって、俺のしたいことをさせてくれたから…」

ドンツ！

言いかけて誠は、横つ面を殴られ、地面へ叩きつけられた。

「おい律!!」

滯のたしなめる声。

「西園寺の言った通り、ハナからそれが目的だったのか!?!」律は殴りつけた右こぶしをそのままに、「つたく、いい奴って聞いてたけど、大外れのこんこんちき!! お前の親の顔が見てみたいわ!!」

セツトの片づけをしている人たちが、一斉にそちらを見た。

滯はパツと顔を赤らめて律をとめる。

幸いすぐに生徒会の人たちは、自分たちの仕事に戻る。

「そりゃあ、ずるずるずるずる流されていったのは情けないと思うけど…」

「あんたがもつとはつきりしねえとよお! ま、もう手遅れだけどさ」

律はそっけない。そんな彼女を漣は押さえながら、

「誰も捨てたくない気持ちわかるが、そういう態度が誤解を生んでいるんだ」

「それは、そうですけど…」

「とにもかくにも、西園寺とは関係を持ち、桂や唯ともキスをして、そんなふらつについて
ちや、だめじゃんか」

「わかつてますって…」

反論の余地がない。

「ま、二兎を追うものは一兎も得ずみたいな結末になっちまったけどさ」

律は冷淡である。

「それは、覚悟の上です…」

本音。結局自分の自爆なのだ。

誠は、律や漣の顔を見ることもできない。うつむき加減に話すしかない。

「何してるんですか！」

と、律と漣の前に立ちふさがったのは、言葉。

「桂…」

「言葉…」

「誠君を責めないでくださいよ!! 秋山さん、それから…誰でしたっけ…」

「田井中律だ」律は額を抑えながら、「何で部長のあたしが覚えられていないんだよお……」
「仕方がないだろ、桂は私たちのライブに來れなかつたみたいだし」

漣は言葉を、例のごとくフォローした。

「誠君は西園寺さんに誘惑されたんです。彼のせいではありませんから」

「言葉……」

誠も、漣も、律も啞然となっている。

「私決めてるんです。西園寺さんや平沢さんにされたことも含めて、誠君を許すつて」

「……」

「おい桂、」今度は律がたしなめる。「漣はあんたのことを思つて、」

「もういいんです。これですべて、元通りの人間関係になつただけですから。」

とにかく、もうこれ以上、誠君を責めないでください」

そう言つて強引に彼の腕を引つ張り、校舎へと連れ戻していく。

漣は不安と安心が半々といった表情で、

「桂！」

「はい？」

「貴方は本当に、それでいいんだね」

「いいんです」

言葉の言、それに真剣な目には、迷いも何もないようだ。

「わかった。…それほど、大切な人ならば、そばにいるといいかもな…」

ぎこちない微笑を浮かべて、滯は言葉を見つめる。

誠は振り向きざま、

「秋山さん、ありがとう。」

「え、」滯は目を丸くしつつも、「あ、ああ…」

思わず答えてしまった。

言葉はにつこりして、誠の腕を引っ張っていった。

最後に、軽く滯に会釈して。

「桂…」

眩く滯に、律は、

「滯、桂は、」

「分かってる。今回の一件は全部西園寺や唯がいけないって、伊藤は悪くないって、桂は思ってるんだろう」

「みたいだな。」

「まったく、桂の奴何なんだか…せつかく滯がいろいろと世話してやってんのにさ」

「いや、いいんだ、律。

これであいつは、伊藤を取り戻せたんだし。

幸せならばそれでいいよ。

あの子の、笑顔が見れたのだから」

漣の微笑は、どこか寂しげ。

「はいはい。ま、桂もなーんであんな奴を好きになるのかねえ」

「まあいいじゃないか。伊藤も悪い奴ではないし、唯のことも桂のことも気にしているようだったしな」

2人も校舎へもどり、廊下を歩いていく。

漣は、

「私、明日も榊野学祭に行ってみるわ。2人のことが気になるし」

「オイオイ、それはお節介つーもんだろ、」律は笑いながらも、「漣は本当に変わったな…あんなに榊野に行くの、嫌がってたのに…」

漣は微笑を、律に向け、

「あえて言うなら…桂と会えたからかもしれないな…」

「そうかいそうかい。ま、恋がかなってよかったですなあ」

「だから恋じゃねえっての!!」

「ま、私も行くつもりだけだな。あくまで彼氏探しだ」

「結局彼氏目当てか。西園寺はどうすんだよ」

漣の問いかけに、律は笑顔を消して、

「私が入り込める余地もねえだろうさ。それに西園寺にはダチがたくさんいるし。

そのうち立ち直るだろう」

「でも、背中を押す人間は必要だよ。ひよつとしたら、お前になるかもしれない。

さて、後は唯か」

律は梓からのメールを見ながら、

「あいつ、あれからずっと部屋にこもりっぱなしか」

「らしいな。菓子も拒否していることを考えると、相変わらず重症だな……」漣は、急に表情を深刻にして、言った。「なあ、あり得ないとは思うけど……もし西園寺が、伊藤のことをあきらめていなかったら、どうする?」

「はっ」

「放課後ティータイムファンクラブに入ったのは、西園寺とその友達だけだったんだよな。」

あいつらにとって、伊藤を手に入れるためには、桂は邪魔な存在なはず」

律も思案顔になり、

「…そう言えばあいつら、桂のことをかなり嫌ってた。西園寺はそうでもないみてえだ
けど。」

それはいいとして、漣…」

律は真剣な目で、漣を見る。

「お前が桂をかばっていることが知られたら、お前までも浮いちゃうかもしれない。」

それでもお前、あいつのサポートを続けるつもりなのか？」

漣は、その後のことを、想像した。

後に続くのは、ろくなことがない…。

「…正直、分らない。」

2人は榊野を出て、唯の家へと足を進めていく。

「ひよっとしたらうちらも、割れるかもしれないな…」

律の口調は、半分自嘲気味。

「割れる…」

さびしがりやで、長らく律だけがたった一人の親友であった漣には、それが耐えきれ
ない。想像したくもない。

「ま、割れちまつてるか。唯が伊藤にちよつかいを出してから。」

だけど、私たちはぐだぐだながら仲良くやってきたんだから、今回もぐだぐだやれば

いいんじゃないか。どんな状況になっても、のろのろだらだらとき」

「そうだな…動じないのが大人だな…みんなを、信じなきゃな…」

最後に滯は、携帯で電話をして、

「それにしても和（のどか）の奴、こんな時に限って連絡が取れないとは…。

唯が大変なのに…」

言葉と誠は、同じ電車に乗って家路についた。

神野学園に入学した時から、お互い見かけた場所。だけど長い間、話すことはなかった。

そして世界によってお互いが紹介され、曲折あつて…。

言葉が触れられるのを拒否してから、世界が『練習』を持ちかけ…。

本来自分は言葉と付き合うべきだったのに、それからその時の快感が忘れられなくなつて…。

だから、これでいいんだ。

そんな思いが、頭をよぎった。

その時、誠の頭の中で、ふいと唯の笑顔が浮かんだ。

同じく、神野学園に入ってから、コンビニでお互い見かけていた。

けれど、2学期まで話すこともなく…。

突然、声をかけられたこと。

自分の腕に抱きついて下校していたこと、喫茶店でウキウキしながら話をしていたこと。

休憩室の中でのキス。

そして、屋上での別れの言葉…。

長い時間が流れる。

車窓から海が見えてきた。

いつの間にか誠は、あの歌を口ずさんでいた。

『♪キミを見てると いつもハートDOKI☆DOKI

揺れる思いは マシユマロみたいにふわ☆ふわ

いつもがんばるキミの横顔 ずっと見ても気づかないよね

夢の中なら 二人の距離 縮められるのにな♪』

そつと誠の手に、暖かい手が重なる。

「言葉？」

「『ふわふわ時間（タイム）』ですよ。放課後ティータイムの」

「ああ…そうだよ…」

「でも…もう平沢さんは、誠君の隣にはいません」
「わかつてる…」

半分自棄的に、彼は答えた。

「なら、いいじゃないですか」

「え？」

「私、誠君のことが好きです。誠君の隣にいたいんです」

「…」

誠はため息をつく。

流れるように過ぎていく風景。

言葉は少し、間をおいてから、

「今日、うちに来てほしいです。うち、だれもいませんから…」

「言葉…」

「私、はじめてですけど…やっと、誠君と本当の恋人になれそうで…」

「そういうえば、俺もご無沙汰だったな…」

眩きながら誠は、自分の気持ちに正直に問いかけた。

答えは、一つしかなかった。

言った。

「実はゆ…平沢さんと会ってから、あまりしようって気が起きないんだよ…。

最後にしたのは、世界とけんかした時だったかな。八つあたりもあった。

世界と『練習』して以来、なんかあの時の感触が忘れられなくなって…。

それで、あいつと猿みたく毎日していたんだけど、それが嘘のようで…」

「そうなんですか…?」

「…すまない。」

もう分かつてると思うけど、俺はお前がいながら、隠れて世界と関係を持っていた。

あげくゆ…平沢さんとも、誘われるままに近づいて、キスマでしてしまつて…」

言葉の表情が、一瞬曇った。

が、穏やかに、しかしきつぱりと言った。

「もういいんです…。どれだけ誠君が他の人に興味を持っても、私が一番好きならば…」

「うん、わかっている。」うつむき加減に誠は答えた。

が、いたたまれなくなつて、

「でも、分かってくれないか。」

俺の悪い女癖を直してくれそうなのは、平沢さん…唯ちゃんの笑顔かもしれないんだ

！

「誠君…?」

「あの子の笑顔を見てから、俺はしたいなんて思わなくなってきた。

あの子の笑顔が見られるなら、俺はそれで十分って！」

純粹な心を取り戻せるって、自分で分かかってきてるんだ!!

女癖の悪さは自分でもまずいと思ってる。

唯一の薬が、あの子が笑ってる姿なんだよ!!」

「…」

激しく、やつぎばやぎに話す誠の口調に、言葉は啞然として聞くしかない。

「そしてあの子は、決して汚したくない、汚させたくないって、思うんだ。

だから、言葉…。

唯ちゃんとは…、

例え唯ちゃんが俺のことを嫌いになっただとしてもいい、会わせてくれないか」

「誠君…」

言葉は少しうなって、間をおいた。

電車のアナウンスが、次に停車する駅を告げる。

再び言葉は思案顔になってから、

「いいですよ。平沢さんとは、今までどおり接しても。

私も、秋山さんにいろいろと助けてもらいましたし。

それに平沢さん、私のために泣いてくれましたしね」

「そうだったな。」

くすくすと笑い、笑顔になった誠を見て、言葉ははつとなり、呟く。

「平沢さん……？」

「え？」

「あ、いえ、何でもありません。」彼女は赤面して、懸命に首を振ってから、どこか寂しげに、「恋人付き合いをしないという約束なら、これからも誠君が、平沢さんと会うのを許してあげます。」

私だけが、深い関係になれるのならば……」

そこまで言われると、もはや断るわけにはいかなかった。

「わかった……」

これで自分の好色が治って、かつ唯ちゃんの笑顔を見られるのだから、これでいいんだ。

「振り出しに戻っただけですから、やり直しがきかないわけ、ないと思います」

言葉は言った。

先ほど熱く語りすぎた照れ隠しもあり、誠はさりげなく聞いてみた。

「なあ……秋山さんって、どんな人だ？」

彼女は面食らったような顔になったが、すぐに表情を戻し、

「誠君に、似ています」

「え……？」

「不器用だけど、すごく優しくて、一生懸命で……」

「そうか……？ 俺は言葉に似てると思ったけどな、顔も性格も。」

傍から見たら姉妹に見えるくらい。」

「そうですか？」

「それで、世界は田井中さんとか……。奇妙なぐらいの力の拮抗だな……」

世界に張られ、律に殴られた頬を、誠はさする。

言葉の表情が、曇る。

唇だけ笑みを浮かべ、話題を変える。

「今日、うちに来てくれますか？」

誠が答える前に、メールが着信する。

それを見て、

「ごめん、実はいたるが俺のところに来ててね、その面倒を見なくちゃいけないんだ」

「いたるさんって、妹さんですよね。」

「そうですか」言葉はまばたきしつつも、「じゃあ、私が誠君の家に行きますね。心も連

れてきます。せっかくだから、家族ぐるみで付き合いましょう」

「あれ…誰もいないんじゃないかなかったつけ…」

「心は強く叱れば、私たちの邪魔はしませんよ」

彼女はにっこりと笑った。

日は暮れ、曇り空の中。

灯りを消した自分の部屋で、唯はベッドの上で体育座りになり、榊野学園の休憩室でくすねた『あるもの』を、右掌で転がしていた。

登下校した時、喫茶店に行った時の、誠の笑顔が、焼きついて離れない。

始めてキスした時の、彼の赤らんだ顔も…。

そして、自分が屋上でああ言ったときの、あの傷ついたような顔…。

あのときは、頭の中が整理できなくて、ついああ言っちゃったけど…。

やっぱり、忘れられないや…。

『待って下さい、俺も、本当は…！』

続いて、この言葉が頭の中でリピートされていた。

そうだ。

私も、マコちゃんに彼女がいるとわかっていながら、あきらめきれず、近づいていた

んだよね…。

それだけ、マコちゃんに…。

あのニコニコした顔に魅かれていたんだ…。

頭の中が、ぐるぐる回り始めた。

それとともに、手の中にある物も、ぐるぐると回転が速くなる。

唯の家のリビングでは、梓と純が、ソファで隣り合わせになって話していた。

憂が2人を迎え入れた後、外出しているのである。

「そういうことがあったの…」

「まったく、純が無神経にベラベラしゃべるから、さらに状況が悪化しちゃったじゃない？」

「だって、そんな複雑な状況があっただなんて思わなかったし…」

純はふてくされたように言う。

「それにさ、唯先輩だって、その人あきらめたんだから、それでよかつたんじゃない？」

「だといいんだけどね…。それにしても立ち直りが遅い…」

どっちにしても、私は明日ゆっくりするから。

榊野に行かない。

あんないかれたところ、二度と行くもんですか！」

「梓あ、」純は苦笑いしながら、「アトラクションだけでも行ってくればいいのに。面白いよ」

「い・か・な・い!!」

梓はふいっと顔をそむける。

「そういえば、みんなは？」

と、純。

「律先輩と滯先輩は、もう少し伊藤に話を聞いてくるって…あんなの相手にする価値もないのに…」

「そう？ 私はコクつちやいそうな人だったけど」

「このミーハー！ 顔よりハートでしょ!!」

「あはは…それにしても、唯先輩もファーストキスを渡しちやって、どうすんだらうねえ」

「自業自得でしょ。」

あ、それとムギ先輩は、甘露寺に誘われて西園寺の家に行ってるよ。

ま、いろいろ迷惑かけちゃったし…」

「そう…」純はせんべいを食べながら、呟く。「そう言えば憂、遅いなあ…」

夜になったものの、月は全くなく、煙のような雲が厚く空を覆っていた。家に帰ってから、世界は自分の部屋のベッドの上ですすり泣くばかり。

母は仕事で外に行っている。

傍らに刹那、そして光がいる。

「ねえ世界……」光は、「もう伊藤なんか忘れてさ、他のいい男見つけたほうが得だよ」

「光、今は下手に慰めたりしたら駄目だよ」

刹那は冷静にたしなめる。

「あの時は同情しちゃったけど、こんなことになるのだったら、敵に塩を送るんじゃないかかったかな……？」

ぼつりとつぶやく彼女。

「刹那?」

「いや、独り言」

ぴーんぽーん。

誰かが来たようだ。

来客を見て、刹那は目を丸くする。

「七海……あれ、ムギさん?」

「お、よ」

「お邪魔いたします。まさか甘露寺さんが、私を誘ってくれるなんて」

「あたしんちじゃなくて、誘ったのは世界の家ですよ。それにわざわざ、ケーキを持ってこなくても…」

ムギの手には、お菓子が入った箱がある。

いつも部室で食べるものである。

「手土産のつもりで持ってきました。私たち、部活はお菓子を食えることがほとんどだし。それに西園寺さん、これで少しは立ち直れるかなと思って」

「ちえ、七海も私のところにケーキ頼めばいいのに」光は多少むくれながらも、「でも、ありがとうございます。ね、世界、ここはおいしいものを食べて元気だそうよ」

「ねえ七海、刹那は気がかりなことがあり、口を開く。「他の放課後ティータイムはいないの？」 田井中さんや、中野は？」

「あ、いや、その…」七海は笑いながら目をそむけ、「それにしても乙女の奴、こんな時に限って連絡が取れないなんて…」

「……」

「まあまあ」ムギは箱を開いて、「これを食べて、元気を出しましょうよ。」

あ、K A R A Aのポスター！ 実はりっちゃんもK—P O P好きなんですよ」

「悪いですけど、ほっといてくれませんか…？」

世界はベッドに突っ伏しながら、ぼそりと言った。

「まあまあ、スイーツを食べれば立ち直れることもあります」

ムギはそう言つて、如才なく皆にケーキを配つていく。早速光はそれにかじりついて、

「おいしいですー！」

世界もゆっくりとおきあがり、好物のババロアを口にした。

「おいしい……」

ぼつりとつぶやく。

「ムギさん、確かにこれはおいしいですよ」

刹那も相槌を打った。

「なあムギさん、」七海はゆっくり口を開く、「ちよつとこつちへ」

「はい？」

七海に誘われるままに、ムギは誰もいない外へと行く。

七海の右手が、拳になっていることを、刹那は気にした。

世界の家のドアの前で、七海はムギに、真剣な口調で、言った。

「ムギさん、いつか言いましたね。」

『私、甘露寺さんのこと好きだから。甘露寺さんのためならなんでもできるから
って』

「え、ええ…」

「なら、私の頼み、聞いてくれないか」

「え…」

「桂に、今までのすべてを復讐するんだよ」

「そん…」

ムギが答える前に、5人の女子生徒がムギの周りを取り囲む。
がんをつけるようにして。

「こいつらは同じバスケット部員の同級生なんだけどさあ、

結構私を頼りにしていて、私の言うことには忠実だからさあ…」

七海は微笑を浮かべながら言う。

「頼み、聞いてくれるね…」

その鋭い眼光に、ムギは縮こまり…。

「あんた達も気をつけな。」

ターゲット追加。標的は桂、それに、あいつをかばう秋山さんだ」

微笑を続ける七海。ムギは顔が青ざめるのを通り越し、血の気を失っていく。

「そんな…濡ちやんまで…。」

「お願いします！ 濡ちやんは私の大事な友達です!! あの子に危害を加えるようなまねはやめてください!!」

「あいつをかばっているんだから、秋山さんだつて容赦はしないよ…」

「そんな…」

「どっちをとるかですね。あたしか、秋山さんか。」

もつとも、秋山さんを取った場合、どうなるか分かつてますね」

気がつくと、ムギの目がかすみ、ぐしゅぐしゅと鼻水の音が聞こえてきていた。

学校。

すっかり夜になり、今や喫茶店の後始末をする人間しかいなくなっていた。

いったん外を出て、ぼんやりと廊下を歩く泰介の向かいから、人影が現れる。

さわ子だ。

なぜか虚脱状態で、服も乱れ、ふらりふらりと歩いている。

顔は、何かされたかのように歪み、弛緩した口から涎が出ている。

「まさか、放課後ティータイムのさわちゃ…さわ子先生」

泰介が駆け寄ると、さわ子は彼の腕の中にぐつたりとくずおれた。

「ああ……よすぎる……」

さわ子はうわごとのように呟いている。

「止（とまる）さん……よすぎ……」

「あ、あの、さわ子先生、どうしたんですか!？」

泰介は正直、これからどうすべきか迷った。

霧の中で、家やビルの明かりが、ポツポツと町を照らす。

妹や言葉、それに心に御馳走するための材料を買って、誠はマンションに帰宅した。
安いひき肉も、4人前となると結構値が張る。

学祭でも大分使ったし、今月のこづかい厳しいなあ。

そういう思いを巡らせていると、今日の出来事がおのずと忘れられる。

というより、もう気持ちを前向きにすべき時だろう。

「いたるー? どこだー?」

声をかけながら、マンションの廊下を進む誠だが……思わず顔色が変わった。

妹が人質に取られている。

いたるが、意識を失った状態。

その状態で、茶髪、ポニーテールの少女の左腕に抱きかかえられている。

その少女は桜ヶ丘の学生服。

右手には、包丁。

「いたる…!?!」

いたるを人質に取った少女の顔を見て、誠は…。

思わず、自分の両目をえぐりたいと思つた。

だが、盲目になつても、この光景は焼きついて離れないに違いない。

妹を人質に取つたのは、自分に純粹な心を取り戻させてくれた人。

自分がだれよりも美しいと感じる人で、誰よりもそばにいてほしい人。

「君は、唯ちゃん…!?! どうして…!?!」

『『どうして』と聞きたいのは、こちらの方ですよ』低い、ゆつくりとした声で少女は口を開いた。「どうして、私のお姉ちゃんを誘惑したんですか?」

この言葉に、誠はポカンとなり、

「お姉ちゃん?」

ふと誠は、唯と行つた喫茶店で、『いつもは妹と行くことが多いんです』と、彼女が言つていたので思い出す。

木枯らしが急に寒くなる。

「まさか、貴方…唯ちゃんの妹さん…」

口をあんどぐりと開けてしまった。

「そうですね……はじめまして、伊藤さん……」

憂は誠を睨みつける。

その瞳には光がなく、偏執的な狂気しか感じられない。

そして、がっくりと頭を垂れているいたるの首に、包丁を突き付けた。

彼は生唾を飲み込む。

「お姉ちゃんから……手を引いてくれますか……？」

「……」

「最初から遊びだったんでしょ。すでに二股かけてるのに。」

拳句私のお姉ちゃんにも手を出して、あげくキスマでして。私のお姉ちゃんをその気にして。

可愛い妹の命がかかっているとすれば、はいと言ってくれますね……。

断つたり、一歩でもそこから動いたら、この子の首、切りますよ……」

「そんな……」

呆然として、誠は憂を見るしかなかった。

続く

第9話 『嫉妬』

「お姉ちゃんから、手を引いてくれますね」

誠の目の前で、いたるに包丁を突き付ける憂。

生唾を飲み込みながら、誠は静かに、しかしはつきりと、言った。

「…手を引かなくても、唯ちゃんはすでに『ごめん』と言っています」
「…」

「確かに、二股をかけた状態で唯ちゃんをその気にさせたのは申し訳ないと思ってる。

でも、唯ちゃんへの思いは、本当だったんです。

世界や言葉だつて同じだった…。

誰が一番に取ることもできないまま、ずるずるずるずると流された揚句、この状態になつたんですけどね。

それに…悪いのは俺一人で、いたるには何の罪もない。

いたるは命を奪われる理由なんて、何も無いのに！」

すると、憂はくすくすと笑いながら、

「貴方が命を亡くしたところで何も変わりません。死なんて一瞬の痛み。」

それよりも、貴方の大切な人を失わせて、生き地獄に突き落とすのも悪くないと思つて」

「…正気…ですか…」

「正気です」

「そんな…」

呆然とする誠。

くすくすと笑う憂。

と、その時、

ドンツ!!

後ろから体当たりを受け、憂は思わず包丁といたるを手放す。

「いたる!!」

あわてて誠は、前方に飛んで来たいたるを腕にキャッチする。

包丁のほうは、床を大きく弾んで、やがて動きを止める。

誠はいたるが生きているのを見て、大きく安心のため息をついた。

「いたるちゃん、大丈夫!?!」

声をかけてきたのは、言葉の妹、心。

「心ちゃん!?!」

向こうを見ると、憂が両腕を抑えられ、騎乗位で言葉に組み敷かれていた。

「離して！ 離してよ!!」

「いったいどういうことですか!? 誠君の妹、それも子供を盾にとつて!」

つかみ合う腕を振り回しながら、があがあと2人はわめいている。

「サンキュー、言葉!」

「あ、いえ…:急いできて、何やら騒がしいと思つたから…」

言葉は相手の手首を抑え、ぐつと力を入れていく。

バタバタする憂の手足が、だんだんと静まっていく。

やがて動きが、止まった。

「平沢さんの妹だそうですね。…:とりあえず、秋山さんに連絡を」

そうしたほうが、いいだろうな。

「ほ、包丁どうしよう…:」

包丁を取つた心はおびえながら話す。

「とりあえず、俺が預かる。この子とはじっくりと話したい。」

誠は、とりあえず気分を落ち着けた。

なるほど、憂は、信じられないぐらいにうなだれてしまっていた。

「あ……う……」

その時、腕の中のいたるが寝がえりをうった。

「いたる？」

「あ……おにーちゃん……？」

薄目でいたるは、眩くように答えた。

「良かった……無事だったんだ……」

急にいたるは元気になって、誠の首に飛びつきながら、

「おにーちゃ！ ハンバーグたべれる？」舌つ足らずな口調で話しかける。「あれ、このおねーちゃ、だれ？」

いたるが指さしたのは、憂。

「あ……それは……」

憂が襲ったことを、覚えてないのだろうか。

「いたる……何も覚えてないのかい……？」

「うーうん、おにーちゃんのおうちに来たら、きゆうにあたまがいたくなくなって、それつきり」

「どうやら、あまりに唐突だったので、その場の記憶がないらしい。」

「この人はですね……」

言いかける言葉を誠は制し、

「この人は俺の親友の妹さん。あ、それとこっちは、俺の友達のこと…」

「彼女です」言葉は遮る。

「頼むよ、恥ずかしいから…」

顔を赤らめる誠に、言葉は

「いいじゃないですか」と制して、「いたるちゃん、よろしくね」と腰をかがめ、いたるの頭をなでる。

「はーい、よろしく！」

いたるの笑顔に、誠も思わず表情をほころばせた。

それを見て、言葉の表情が急に曇る。

「言葉？」

「誠君…正直…今の誠君の笑顔を見てると…」

「言葉…？」

「…平沢さんの影が、ちらついてならないんです。

誠君の笑顔が、そのまま、平沢さんの笑顔に見える」

「そう？　唯ちゃんの写真、やっぱりいいよな」

につっこりして、誠は家へと入っていった。はしやぐいたるの手を引いて。

憂はうなだれたまま、その後に従う。

「何してるの？ お姉ちゃん、入ろうよ」

心が言葉に声をかけるが、

「…誠君の彼女、私だよね……」

ぼそぼそと言葉は呟く。

「お姉ちゃん？」

「あ、ごめん、心。入ろうか」

につこりと笑顔を見せて、彼女も心と一緒に家へ入る。

そして携帯を取り出し、濡に電話し始めた。

風がゴトゴトとなる中。

整理された部屋。つややかな木の床。

丸いテーブルに向かい合うように、ソファアが置かれ、そこに放課後ティータイムが並んで座っている。

ここは唯の家のリビングだ。

ムギを除いた皆で、明日のことについて話し合っていた。

純はすでに帰ってしまっている。

「とりあえずよ、みんな自由行動でいいんじゃないね？」

「っけらかんと、律は結論を出した。」

「そうはいきませんっ！」

梓はいかにもヒステリックだ。

「何でだよ」

「あんな荒んだところ、私も先輩達も行ったらどうなるか！ 私、本当に先輩達が心配な
んですよ!!」

「いーじゃんか、彼氏づくりには持つてこいなところだしよ」

律はへっへと笑う。意に介さないようだ。

「それに私も」 澪が穏やかな口調で、「伊藤と桂のことが気になるし。ちよつと2人を見
てみようと思うんだ」

「…マコちゃん…」

ポケットの中のものを気にしながら、唯は聞こえないように呟く。

梓はさらに顔を青ざめ、

「ますます嫌ですよ!! もう伊藤や桂に近づくのはやめてくださいよ!!」

「梓…」

「澪先輩！ あんなに榊野に行くの嫌だったじゃないですか!! どこに行っちゃったん

ですか、あの時の漣先輩は!」

「ま、住めば都って奴だろ」律は腕組みしながら、「成長したと思うぜ、漣も。その荒んだところに行っても動じなくなっただからよ」

「おねがいですからー! 私ほ本当に…!」

さわぎたてる梓の隣で、唯はうつむいたまま、無言になっている。

今更自分が行っても、もう誠は…。

「唯」

「漣ちゃん」

漣は、唯の心を読みとおしたかのように、

「伊藤のこと、あきらめてないんだな」

「…そっだよ…」

「なっ!」ますます梓は血相を変えて、「何であんな奴が好きなんですか!」二股も三股もかけるような、

「梓!」漣は梓をたしなめ、「唯、あの時、『ごめん』って言ってたから、てつきりあきらめたのかと思ってたぞ」

「あの時は、頭の中を整理できなかつたから」指をつんつんしながら、唯は言った。「あの時はあの人が傷ついているのを見て、あの人の汚点に気づいたけど…」

やっぱ、忘れられないよ」

「…なんだつたらさ、唯も榊野に行ってみたほうがいいと思うんだ」

「いいの!?!」

「いいのって、それは個人の自由だと思うぞ」

漣は憐れむような目つき。それでも気遣っているのだと、唯は判断している。

「私はあくまで反対です」梓は唯の肩をつかみ、「あんなところに行つて、あんな野郎に会つたら、唯先輩はどうなるか!」

「あずにゃーん、あずにゃんはマコちゃんに直接会つたわけじゃなくて、又聞きで評判を聞いているだけでしょ。マコちゃんのことわかつてないよ」

「…一応、あの時の修羅場は横で聞いていました、甘露寺と」

「つーか漣」律は耳をほじくりながら「んなことしたら、桂が黙っちゃいないだろう」

「それは、そうだけど…」漣は困惑顔になり、「桂には以前話したけど、私は唯の友達でもあるし、唯の好きなようにさせてやりたいんだ」

「つて、こういうのはやめさせるのが真の友情でしょ?」

「そーだそーだ、それにそんなあいまいな態度じゃ、伊藤になつちまうぞー!!」

「それは伊藤に失礼」

ふとその時、漣の携帯から着信が届いた。

「はい、秋山です…桂…？ え、はい…なんだって…!？」

受話器を取った滯の表情が、どんどん強張っていく。

「あ、うん。ちょうどそこに唯もいる。わかった。すぐ向かうから。場所は…原巳浜

(はらみはま)か…ああ。桜ヶ丘駅から乗れば30分ぐらいだと思っ。ありがとう」

電話を切って、切羽詰まった表情で、

「憂ちゃんが、伊藤の妹さんを人質にとったそうさ。唯から手を引かなければ、妹さんの命を奪うって…」

普段温厚な唯の顔から、血の気が引いて行つた。

「憂…!?! どうして…!?!」

「幸い、通りがかった桂が憂ちゃんを取り押さえて、妹さんも無事らしい」

「待つて!! どこ行けばいいの?」

「原巳浜駅から、歩いて5分ぐらいのところらしい」

「そうか…いそごう!!」

マコちゃん、怒ってるだろうな。

唯は心が痛くてしょうがない。

ガン! ガン! ガン!

急に壁から大きな音がしたので、そちらを向く。

リビングで、梓がガンガンと壁に頭突きをしている。

「い……い……いいかげんにしろオオオオオ……!!」

男のような低い唸り声。

思わず悲鳴を上げながら後ずさりする漕を、律と唯は抑えて、

「梓こわいぞ……」

「そんなにいやなら、あずにゃんは行かなくてもいいってば……」

「いいです、行きますから」

むくれた表情で梓は従う。

律は携帯を取って、ムギに電話をするが、

「どうしたんだ、ムギの奴も……連絡が取れない……」

「とりあえず、私は行く!」

リビングを飛び出す唯を、

「さて、分からないだろ!?! 私が道を桂に聞くから」

漕が追いかけた。

整理されているが、小さな電球がともるだけの簡素なリビングでは、4人がけのテーブルに丸椅子が追加され、5人座れるようにセッティングされている。

下座で憂が抜け殻状態でうなだれている。斜向かいの席でいたるは、心と指遊びをしている。

「ねーねー、おねーちゃん、おねーちゃんもあそばさないのー」

いたるが屈託のない笑顔で憂に問うので、心はぎよつとなり、

「お、大人しくしててよ…この人には関わらないほうがいいって…」

「なんでー?」

「いいから。さ、遊ぼう」

いたるは、うつむきっぱなしの憂を気にしながらも、心と再び遊び始めた。

そんな様子を、奥のキツチンで言葉と誠は見ながら、

「…なんか、本当に何も覚えてないみたいですね…」

言葉は顔をしかめて、呟く。

「どうやら、あまりに急だったみたいでさ。その時の記憶はないみたいなんだ。

まあ、凶器はとりあえず預かったし。まあ大丈夫だろう」

ユニパックに入れた包丁を見て、誠は安堵の表情で材料を用意する。

「ずいぶん、落ち着いているんですね」

一時の沈黙。

驚いていないわけではないが、今日1日は様々なことが起こりすぎて、頭が鈍感に

なってしまうているのだろう。

それに：…なんととっても、この子は唯ちゃんの妹。

もうすこし寛大になっても、いい気がした。

「驚いてないってわけじゃないけど…まあ、こうなってもしょうがないかな、と思つて。憂さんの言う通り、二股も三股もかけていた事実は否定できないさ。拳句唯ちゃんにキスされた時も、拒めなかった」

「あれは平沢さんから、勝手にキスしてきたんでしょ？　しょうがないじゃないですか」

「…そうかもしれないけど、唯ちゃんの妹だしね。」

「そうですか…」

エプロンをかけて、言葉と誠は、今晚の料理を作り始めた。

誠は慣れた手つきで、玉ねぎをみじん切りにしていく。

「いたっ！」

「言葉？」

言葉は、どうやら指を切ってしまったらしい。

「マキロンと傷パンならあるけど、使う？」

誠がきくと、言葉は大きな目で、じーつと彼を見つめ、

「傷、なめてほしい、です…」

「え…。恥ずかしいよ。それにかえってばい菌が入るだろ。」

「ううん。なめてほしいです…」

誠は困り果て、

「まいったな…」

と眩きながらも、切り傷のある言葉の人さし指に顔を近づける。

「そのまま、目を閉じて、なめてほしいです」

ずいぶんと注文が多い。

しづしづながら頬を染めて、誠は目を閉じ、言葉の傷口にしゃぶりついた。

パシヤツ

耳元で、カメラのシャッター音。

「？」

誠は思わず目を開いた。

言葉は後ろ手で何かをしまいながら、

「なんでもないですよ」

「そう…う…」

気にしながらも、彼は自分の仕事を進め、あつという間に野菜のみじん切りを終わらせた。

続いて、セイロの横でハンバーグをこね始める。

言葉はそれを横目で見ながら、

「そういえば、ハンバーグにセイロって使わないですけど…」

誠はにつこり笑って、

「これはデザート用。何ができるかはお楽しみ」

そう言いながら誠は、ひき肉に玉ねぎを混ぜ合わせ、ハンバーグを小さく、沢山つくる。

何とか足りるようだ。

「ずいぶん数が多いですね」

「ああ。憂さんもいるし」

「わざわざごちそうするんですか…あんなことされても？」

まあ、そうではあるが…。

あの子の落ち込みようを考えると、ある意味普通の人間かもしれない。

まして、あの子の妹さん。

少なくともあの顔を見ると、何となくほおっておけない。

「電話と、メール…」言葉が、うつむき加減になる。「平沢さんや、西園寺さんから来ても、取らないでください」

「え、なんで…」

「着信拒否にしてください」

彼は唾然となる。

なんだか、自分と付き合うと、みんな同じになるなあ。

「そんなこと言われたって、唯ちゃんと連絡がとれなきや、唯ちゃん達はたどりつけないだろう」

「私が秋山さんと連絡を取り合いますから、大丈夫ですよ」

いつになく、真剣な目つきの言葉。

「それは、できないよ…」

「え…」

「前に世界にそう言われて、挙句とりみだして分かったんだ。

俺にとつては、世界も唯ちゃんも、もちろん言葉も大事なんだって」

「そんなの…」

「世界に張られてさ、唯ちゃんにあんなこと言われて、すつごくぼつかり穴が開いた気分になってるしさ」

「……」

でも、平沢さんにはもう、近づかないほうがいいと思いますよ」

言葉はそれ以上何もいわず、何かを考えているような表情で、一心不乱に玉ねぎを切り始めた。

機嫌を損ねたか。

でも、仕方ない。

「いたっ!!」

あつという間に彼女、指を切ってしまったようだ。

桜ヶ丘から原巳浜までは、およそ30分。

プラットホームの中で、唯は一刻一刻が長く感じられてならなかった。

おまけに通勤客がたむろしている。その隣で、滯、律、梓が何か口論をしている。

唯はこっそりと人ゴミの陰に隠れ、誠への携帯に電話をする。

トウルルルル…トウルルルル…

額が、汗ばむ。

一時の、耳元に響く電話の後、

「はい、伊藤ですけど」

男の低い、でもさわやかな声。

「…マコちゃん…私、唯」

「唯ちゃん…どうしたの、元気ないけど」

あんなことをされて、気にしてないのだろうか。

真つ先に気遣ってくれたのは、自分…。

「あの…ごめんね…。憂が…妹が迷惑をかけたみたいで…」

「そのことかあ」

はははと笑う声が、受話器から聞こえる。胸がさらに苦しくなる。

「唯ちゃんは気にしなくていいよ。幸いいたる…あ、妹ね。無事だったしさ」

「ううん、ほんとひどすぎるよね…許してなんて、言えないよ」唯はしやがれた声で、

「怒ってる…?」

「怒ってるって…だから唯ちゃんがやったことではないし…」

多少笑いを含む声。

携帯を持つ手に、思わず力が入る。

「…マコちゃんは…」

「?」

「…優しいよね」

心から、そう言えた。

「優しい…」受話器の音が、思案するような声になる。「だとすれば、それは相手が唯ちゃ

んだからかもしれない。他の人なら、たとえば言葉や世界でも、こうはいかないと思う」
「そうかなあ」

自分のどこが、マコちゃんをそういう風にさせてくれているんだろう。
考えても、彼女自身にはわからなかった。

「唯、来たぞ」

濤が声をかけてくる。

我に返って向こうを見ると、銀色、ブルーラインのローカル電車が目の前を横切り、停車した。

「あ、すぐ行くから、待ってて」

「うん。わかった。せっかくだから、ご馳走食べてかない？ 言葉も来てるから」

「ほんと？ ありがとう…」

安堵の表情で、唯は携帯を切り、電車に乗り込む。

顔につけた携帯が、少し濡れていた。

「秋山さんの家は、どこですか？」

七海と子分たちに取り囲まれながら、ムギは世界の家の中で、地図を見ていた。

「ええと…桜ヶ丘の…このあたり…」

「わかった。あんた達はそちらをマークして。あんた達は桂を探るんだ」

七海の子分は、落ち着いてうなづく。

スポーツ特待生で女バスに入ってから、生徒を仕切っていた七海は、こういうことには如才がないようだ。

「あの…私は、どうすれば…」

「ムギさんは私と一緒に、榊野の校門で待機です」

七海は冷静な口調。

逃げ場はない。

放課後ティータイムの誰かと連絡を取りたかったが、いかんせん携帯が出せない。

せめて、誰か一人でも来てくれたら…。

無理だろうか。

「いったい七海…何しているのかしら」

「あれだけの人数を集めているから、大がかりなことだと思う」

そわそわする光に対し、隣の刹那は、相変わらず無表情。

「世界…」

光が声をかけるが、世界は布団にうつ伏せになったまま、応じない。

と、

「私…」むくりと起き上がり、「私、ちよつと用事思い出した」

低い声で、つぶやくようにいい、

「行ってくる」

そう言つて、外套を着ると、玄関の方まで急いでいく。

「世界、どうした？」

「用事思い出したんで、行ってくるから」世界は真顔で、「七海、あまりてあらなことはしちやだめよ。今日も澤永をそそのかして、桂さんに危害を加えようとしてたつて聞いたし」

「あ、いや、はは…」七海は頬を染めて、「まあ、おいおいな…」

「ムギさんも、無理しなくていいですからね。七海が暴走しそうになったら、止めていいから」

確信に満ちた口調に、ようやくムギの緊張が、ほどけた。

「あ、待つて西園寺さん！ 私もついていくわよ。」

「あ、でも…ちよつと今日は、1人で行きたいんです…」

「伊藤さんや桂さんのことなら、私は平気です。あまり干渉しませんから」

「…でも、ごめんね…」

懇願するムギに対し、世界は顔を赤らめて断つた。

そのまま、世界は夜の闇へ飛び出していく。

再び孤立してしまったムギ。

「どこへ行くんだ？」

「伊藤のとこだね…」刹那は息をしながら、「七海、強引な方法を取らなくてもいいんじゃない。世界の思いが通じて、伊藤と元通りの関係になる可能性もあるわけだし」

「それもそうね」

光も同調する。

ムギは無言。

すっかり、物言えば唇寒しになってしまっている。

「…うまくいくといいけどねえ…相手はあの牛チチ女だよ…」

こめかみをかきながら、七海はつぶやいた。

「とりあえず、万が一の時の作戦。実行するつもりですよ、ムギさん」

「…そうですか…」

ムギは、再びうなだれてしまった。

プラットホームから、海が見える。

ようやく原巳浜駅についた。

「あ、もしもし桂、いま原巳浜についた」

滯が立ち止まって言葉と電話する時も、誠の家まで、唯は全速力で突っ走っていた。

「おい、待て唯！ 大体お前、伊藤の家知らないだろ!!」

息を切らして走りながら、滯は前方の唯に声をかける。

「ううん、こつちがきつとマコちゃんの家だよ!!」

一種の直感みたいなものが、誠に絡むとよく働く。

唯自身、ちよつと驚いていた。

「なんでわかるんだよ…あ、桂、今原巳一丁目の本屋の近く。…あ、そつちに行けばいいんだな。ありがとう」

背後で滯の声を聞きながら、唯は直感の導くままに走っていた。

「やれやれ、持つて帰つちまつたよ…」

風が少しやんだ中。

自宅の玄関の電気をつけながら、泰介はつぶやいた。

黄色く光る部屋に、無数のドラゴンボールのフィギュアが浮かび上がる。

さわ子の左腕を肩にかけながら引きずり、学校から家まで連れてきた。

彼女は弱っているものの、怪我も病気もないので、救急車を呼ぶこともできず、どさ

くさにまぎれて連れてきてしまった。

弱みに付け込んだ感じである。

さわ子は、

「ああ…止さん…もつとして…」

相変わらずうわごとを呟いている。

「あー、どうしよ…まあ据え膳食わぬは男の恥ともいうし…一回だけなら…」

「たーいすけー、なーにやってんのー？」

廊下の奥から声がして、彼の姉が玄関までやってきた。

「あ、姉ちゃん…」

「あら、誰その人。なかなかきれいな人だけど、怪しい人じゃないよね」

「つて、祝福してよ！」泰介は悲しくなり、「学祭中なんだから、彼女ができてもおかし

くないでしょ」

「はいはい、私は美人は信用しない性質なんで。どこの人？」

「どこ、と言われても…」

直感でさわ子と思つたが、それを証明できるものは何一つ持っていない。

もはや破れかぶれになり、さわ子の手持ちのバッグをあさり始めた。

「つて、人のバッグを勝手にほじくるな…あれ？」

姉は、バッグから飛び出た一つの写真に目が行き、拾い上げる。

檜の部屋をバックに、桜ヶ丘の女子生徒5人とさわ子が、楽器を持ってそれぞれウインクしながら写っている。

「この人、桜ヶ丘の人…?」

「あ、そ、そうだよ」泰介は、真ん中に写っている唯を発見し、「あ、それにこの真ん中の子、平沢さんっていうんだけど、誠といい仲なんだよ」

「伊藤君がねえ…なかなかかっこいいものね、あの子。あなたとは違って」

「一言余計だぜ」

やつと怪しいものじゃないと、信用してもらえたようだ。

鞆をさらに探ると、身分証明書も見つかった。

『桜ヶ丘高校 音楽教師

山中 さわ子』

緑色のカードに、はつきりと書いてある。

「ほら、桜ヶ丘の先生だよ。怪しいものなんかじゃないだろ。せつかくだからさ、今晚この人を俺ん所に…あ」

ぐったりしているさわ子を、姉は泰介から奪い、背におぶって、

「私が預かります。あんたと2人にしたら、何するかわからないし」

「待ってよ！俺が連れて来たんだし、いいだろ!? それに榊野で童貞卒業しねえと恥ずかしい!!」

わめく泰介だが、どうすることもできない。

古びたマンションの、銀のドアの前で、唯と滯は、息を切らして停止した。後から律と梓も追い付く。

恐る恐る、唯は呼び鈴を鳴らした。

びーんぼーん。

誠の家の呼び鈴が、鐘をつくように聞こえた。

がちやつ。

ドアが開くと、出てきたのは、誠。

「唯ちゃん…」

「マコちゃん…」

思わず2人の、声がハモった。

と、唯は耐え切れなくなり、

「ごめんなさいっ!!」膝をついて土下座し、「ほんと、憂が…妹が本当に迷惑かけたみたいで…!!」

「唯ちゃん…だから唯ちゃんがやったことではないんだから、そんな卑屈にならなくても…」

「ううん、妹の不始末は私にも責任があるもん！ 本当に…本当に…ごめんね…」
額を地面に必死にこすりつける唯。

と、左頬がぽつと暖かくなる。

誠が唯の視線まで腰をかがめ、そつと手を差し伸べていた。

「大丈夫。もういいよ」

顔を上げると、誠は穏やかな微笑みを浮かべていた。

「マコちゃん…」

唯の眼がしらが、熱くなる。

「おにーちゃー！ どしたのー!!」

小さな子供の呼び声。

ツインテール、3歳くらいの少女が玄関に立っていた。

可憐で優しい顔だが、前髪などがよく誠に似ている。

「あ、この子が妹のいたる。あ、いたる、この子は俺の友達、平沢唯ちゃん」

思わず唯は膝をかがめ。

「ごめんね…憂が…妹が貴方に迷惑をかけちゃったみたいで…」

何度もぺこぺこ頭を下げた。

「はー?」

いたるはぼかんとした表情。

「ほら、いたるも覚えてないみたいだし、大丈夫だよ」

「それより」梓は少し、喧嘩するような口調で、「憂はどこ? 憂のことは申し訳ないと思っているけど、それはそれ。」

大体あんたが唯先輩をその気にさせたから、憂もおかしくなっちゃったんでしょ。あの子はお姉さん思いだし」

「あずにゃん、その気じゃなくて、もともと私から好きになっただよ!」

たしなめる唯に対し、誠は無言。

ある意味凶星なだけに、答えられない。

「…まあ、こんなにならっしやっってたんですね」

誠の背後から、声。

そちらを向くと、言葉と心。

「桂さん…。あれ、そっちの子は?」

「妹の心です。憂さんなら、向こうにいますよ」冷淡な声、冷淡な表情で言葉は唯を見据え、「全部なかったことにしますから、どうか、お引き取り願いますか」

「そんな…正直、マコちゃんにはホンつとーに申し訳ないと持っているし！死ぬことだつてためらわなくらいなんだよ!!」

「唯ちゃん、だからそんな卑屈にならなくても…」誠は苦笑いしながら、「とりあえず、憂さんもいるし、一緒に食事しない？今日はハンバーグライスとスパゲツティーサラダだから」

「ほんとなんだね!! ありがとう!!」

思わず気持ち浮き上がる。

「おい、遠慮しろよ唯。いやいや伊藤、悪いよ」

滯が手を。パタパタ振つて前に出るが、さらに律が出てきて、

「ハンバーグは私も好きなんだ、食つてみたいぜ!!」

「律先輩も遠慮してくださいよ!!」

たしなめる様を無視してずいっと進み出た。

「あのね、私、その…マコちゃんの手伝いをしたいっていうか…」

唯は指をつんつんしながら、恥ずかしげに囁く。

「え？ いや、そんな、悪いよ…」

「でも！ でも！ 憂のしたこと、少しでも償えればな、と思うし…」

「まあ、」言葉はすました顔で、「誠君に直接手を下すのではなく、誠君の大事な人を奪つ

て生き地獄に落とす、なんて言っていましたけどね」

唯は胸をつかれた。

床の湿り気がひぎを這い上がってきた。

「言葉、それは……!」

誠が言葉を抑える前に、思わず我を忘れ、唯は皆を背にして駆け出した。

ドタドタドタ!!

リビングに、憂。

「あ、おねえ……」

パアンツ!

言いかけた憂の頬を、唯は思いつき張り張っていた。

憂は椅子から、木の床にどさつと落ちる。

「何でそんなことしたの!」唯の口調は、自分でも信じられないほど荒い。「そんなことをして、私のためになると思っていたの!」

「……だって……伊藤さんが、お姉ちゃんを取っちゃうと思ったから」

左頬が赤くはれ、憂の目には涙がにじんでいる。

「そんなことはないよ! それに、私からマコちゃんを好きになったんだよ!! 私はこの人を好きになって、嬉しいんだよ!!」

なのに、貴方は…罪のないいたるちゃんにまで、迷惑をかけて…」
「…ごめんなさい、ごめんなさい…」

うつむき加減で、声が震えている。

憂は、かがんでいる唯の胸にこうべを垂れ、すすり泣きはじめた。
昂った思いが、急にほどける。

唯はほほえみを浮かべ、憂の背中に手をまわした。

同時に、ちよつと信じられない思いがした。

今まで、妹を殴ることなんてなかったのに。

生まれて、初めて。

一同もリビングに駆けつけ、唾然としている。

「唯が、殴った…」

眩く律。

「田井中さん？」

「いつも唯つて、憂ちゃんの世話になつてばかりで、姉としての威厳も全然ねえのに…」

「やつぱり、好きな人ができると、人間つて変わるものなんだろうな」

澪は平沢姉妹を見て、つぶやく。

「唯ちゃん…」

誠は呆然とするが、ふと思い出したことがあり、律に聞いてみた。

「そう言えば、あの人がいらないですね」

「あの人？」

「キーボードが得意で、金髪で、眉がちよつと太い人」

「あ、ムギか！ それがな、甘露寺に連れられて西園寺の所へ行つたきりなんだ。電話しても連絡とれねえし」

「世界のところか…。何しに行つたんだらう？」

「もとはと言えばあんたのせいでしょ」梓は詰る。「あんたと唯先輩がキスなんかするから、西園寺も凶太ぼろに傷ついちゃつたんじゃないの。ムギ先輩はその罪滅ぼしのために、行つたようなもんなんだからね」

「…そうなんだ…」

「私はお暇して、ムギ先輩たちのところに行つてくる」

踵を返す梓に、

「まてまて、せっかくだから、梓は一緒に楽しもうよ。あたしが行つてくるから。正直西園寺はあたしも気になるしよ」

律が止める。

「そうですか…」誠はちよつと、残念そうな表情になった。「じゃあ、唯ちゃん達は食べ

るっ。」

「うれしい、ありがとう!!」

気持ちの浮き上がった唯は、思わず誠の腕に抱きつく。

思わず顔を赤らめる誠。

と、

ぐいっ!

唯の腕を、言葉がすごい力で、引き離していた。

2人に向かう、冷たい眼光。

「……………!」

すまんねと、滯が言葉に謝る。

最後に残った律と梓。

ふと、梓の携帯から着メロが流れ、それを取ってみる。

「ん……?」

「どしたあ、梓」

「清浦から、メール。…西園寺がこっちにきてる!?!」

「なんだって? ……わかった、私もここに残る」

街灯が暗い夜道を、明るく照らす中。

自宅から最寄りの駅まで、世界は一心不乱に走り続ける。

道行く人は、大学のアベックもいれば、仕事帰りのサラリーマンもいる。

それをかき分けかき分け進み、ようやく駅にたどり着いた。

すると携帯から、

『♪抱きしめてミスター　つかまえてミスター♪』

KARRAの着うた。

「誠?!」

蜘蛛の糸のような希望にすぎり、世界は画面も見ずに通話ボタンを押した。

「おいーす、さーいおーんじー。律だぜー」

間の抜けた声が、耳に。

「田井中さん…?」

急に気持ちがいぼむ。

「梓から聞いたよ。伊藤とのところに向かっているって?」

「何で知ってるんですか?」

「清浦が梓にメールしてきてな、それで分かったのさ。」

「あんたもこりないねえ…浮気した元彼を慕って、また出直してくるなんて」

「…そんなの、どうだっていいじゃないですか…人の恋愛に、いちいちよつかい出さな
いでください…」

律の言葉に、多少癪に触りながらも、ゆっくり世界は答えた。

「いや、実はあたしたちもちよつとした用事で、伊藤ん所に来てるんだよ」

「な？ どうして？」

「どうも憂ちゃん…あ、唯の妹ね。そいつが伊藤の妹を人質にとつて、唯から手を引けと
伊藤を脅したそうなんだよ」

「…そうなんですか？ 平沢さんの、妹さんが…」

信じられなかった。

「幸い、桂が憂ちゃんをおさえて、一件は落着いたけどな。伊藤の奴、やってきたあたし
たちもついでに誘つて、みんなで食事会をすることになったのさ」

「そうですか。誠も、よく平沢さん達を誘いましたね」

「そんだけ伊藤も、唯が好きなんだろ。それに桂や滯もいるから、望みは薄いと思うけど
な」

「こもつともである。」

さらに気持ちだが、しぼんでいった。

「だーいじょうぶだ、伊藤なんかよりいい男は、生きてりやそのうち会えるつて。あんだ

は結構いろんな人にコクられてんだろ？ はっはっは

あつけらかんと笑う律が、何やら腹立たしい。

「やめてください。ずっと前から私は、誠のことが好きだったんです！」

「あー……」

「……もう、乗り掛かった船です。駅まで来ちゃいましたし」

「そうかい……。あ、それとよ。ムギはどうしてる？」

「ムギさんですか……？」

あの人がつらい役割を、七海に頼まれていることには、薄々彼女も感づいている。

だが……七海も、自分のためにそれを行っている。

……

「……ムギさん、結構つらい表情をしていました。きっと、望まない役割を引き受けることになって」

「え……？」 律は何かを察したらしく、「あ、あんたたち、ムギに何をしたんだ!? 甘露寺

も黒田も清浦も、何をしたんだよ!？」

「……わからないです……。ただ、今度会ったら、はげましたほうがいいと思いますよ。」

そして誰か一人、ムギさんのそばにいていたほうが

「まで！ 何があつたのか全然わからねえ!!」

「わからなければ、いいです。

それと、秋山さんは桂さんから手を引いたほうが、身のためになると思います。

あ、電車が来た。きりますね」

「…わかった。あたしは西園寺の家に向かう」

「え？　でも、場所知らないでしょ。　模手原坂下（もてはらさかした）からすぐなんだ

けど」

「…そうだったな…」

少し呆れて、世界は通話をオフにする。

『貴方が誠君のことを嫌いになった以上、誠君も貴方のことを嫌いになったでしょう。』

言葉の言が、頭の中で響いた。

「大丈夫、だよね…。私が誠のことを好きならば、誠だって…」

つぶやいてから、電車に乗り込んだ。

誠はあらかじめ、何人来ても対応できるように、ハンバーグを小さくたくさん作っていた。

ハンバーグが好物であるいたるはちよつと不満だったが、誠が自分の分を妹に渡したことで、落ち着いた。

席が少ないのが気になったが、とりあえずソファアを使って、何とか間に合わせた。憂はいまだに落ち込んだままだが、梓が隣で慰めているようだ。

律、心、いたるが食事をしながらだべっている中で、誠はデザートを作っている。

3人とも、子供のように（心といたるは子供だが）はしゃぎまわって、誠の部屋に行ったり来たり。

「お、漫画！ おお、『ワンピース』『幽☆幽☆白書』『るろうに剣心』。全巻揃えてんなんですごいじゃねえか！」

「んー、なんだかわからないけど、おにーちゃんはすきだつて…」

いたるにつれ沿う形で、誠の部屋に行く律。

「勝手に人の部屋に入らないでくださいよ…恥ずかしい」

「そうだぞ律。大人しく食事しなつて」

「いいじゃねえかよ。それに恥じるものなんかねーぞ。ワンピースは私も好きだしよ」

赤面する誠と、注意する滞にも、律は動じない。

「ま、はまる物にははまるんですよ、俺も」

ため息をつきながら、セイロを使って料理を蒸している誠。

梓はむしやむしや、ハンバーグを早食いしながら、

「おいしい…。あ、ま、誰にでも何か取りえがあるもんですね」

「梓」

濡が仲裁するが、誠は多少癩に触りながらも、

「そりゃあね。のびただってあやとりと射撃が得意なんだし、ドラゴンボールのヤムチャだって、野球がうまいだろ」

とりあえず流す。

と、唯がそばに来た。

スパゲッティーサラダのクリームが、口の周りについている。

「あれ、唯ちゃん？」

「マコちゃん…私に、何か手伝えることある？」

潤んだ目で、ドキドキしながら言っていることに気付いた。

思わずぞくぞくしながらも、誠は、

「あ…そうだな…じゃあ、この生地にごまをのつけてくれる？」

「う、うん！」

「それより、口にクリーム付いてるよ」

「あ、ごめん…」

誰も見てないのを見計らってから、唯は…。

誠の頬に、キスをした。

胸の高鳴りが、さらに激しくなる…と、急にひやり。

言葉が、冷たい視線で彼を見ていた。

…

濡が彼女を引つ張って席をはずした後も、彼は冷たい気持ちに、震えた。

「マコちゃん、こんなんでもう？」

唯が明るい声をかけてきたので、思わず我に返る。

座敷わらしのような笑顔である。

「あ、いいじゃないか。じゃあ今度は、生地をセイロの中に入れてくれる？」

笑顔の唯と向かい合うと、意識しなくても笑顔が出る。

だから、妹のことも許せたんだらうと、彼は改めて思う。

生地をセイロの中にほうりこむ。

唯と見て、一緒にくすくす笑いあつた。

「ほんと、すまなかつたな…。憂ちゃんがいたるちゃんに迷惑をかけちゃつたみたいで。おまけにごちそうまでしてもらつて」

食卓から少し離れた、お風呂場の更衣室で、濡は言葉に声をかけた。

「…終わつたことは、もういいですから。正直、憂さんだけ迎えて引き取つてほしいとこ

ろでした」

横顔、思案顔で、言葉は答える。

「それにしても、相変わらず唯には冷たいんだな」

「当然です。あそこまで誠君とくつついてくるんですから」

滯は肩をすくめて、

「正直、貴方の独占欲が強すぎるんじゃないのか？」

「独占はしたいものです。誠君の彼女は、私ですから」

「…まあそうか。しかし、私達が帰ったあとで、ゆつくりと過ごせばいいんだと思うんだ」

「…」

「唯はただ、好きな人にスキンシップをかける癖があるだけで。伊藤は桂とのほうが付き合いが長いんだから」

「…貴方は、分かってません」

「え…?」

「私が、手を握られるのを怖がってる間に、西園寺さんは誠君を取ろうとした。同じようなことが、また起きないとも限らないんです」

「……」

「節度つてのを、明らかに破ってるでしょう、平沢さんは…」

「…そうだけどな…」

言葉の疑りの目が、今度は滯に向く。

「秋山さんも…どうして、止めないんですか…？」

思わず滯はそむけ、

「私は…唯の気持ちも大事にしたいし…。正直、伊藤がもう少しはつきりしてくれればいいんだけどな…」

「誠君は、優しすぎますから」

「はあ…」

「その分は私が、誠君にちよつかいを出す女の子を近づけないようにしないと。」

もう少し平沢さんは、許そうかなと思つてたんですけど」

苛立つ言葉の表情に、滯はひやりとしながら、

「頼む…唯はそんな奴じゃない…」

やがて唯と誠が、キッチンから顔を出す。

「みんな！ 食後のデザートだよ!!」

緑の花で彩られた皿の上に乗っていたのは、10センチくらいの大きさの、ブタ顔の

饅頭が何個も。

「ひよえーっ!!」

「かわいいー!!」

律と心がすつとんきように声をあげる。

「すごい…」

それまでうつむいていたばかりの憂が、思わず饅頭を持ち上げた。

押麦と黒ゴマで、つぶらな目がつけられ、細く伸ばした生地で鼻がつくられ、両脇に耳がちよこんとでている。

白い生地から、ふわふわ湯気が出ている。

「これでも中身はアンコ。名づけて、『こう見えてアンマン』」

ニコニコしながら、誠は発表する。

「うわ、フェイクかけるのが憎いな…」

「伊藤さん…私も食べていいんですか」

おどおどした表情で、憂は言う。

「いいよ」

「ホント！　ありがとうございます!!」

「いいですけど、残して下さいね」心がませたことを言う。「お姉ちゃんや、秋山さんも

いるんですし」

「は、…」

みんなで、むしやむしやとアンマンを食べ始めた。

唯と誠は、それを微笑みながら鑑賞し、

「可愛く出来たよね」

「そうだねー」

につこりと笑う唯。

それを見て、誠は今までの唯の表情を、くるくると思い返した。

必死に謝った時の、あの泣きそうな顔。

憂さんに平手打ちした時の、あの真剣な表情。

そして、心からの笑顔。

全てがいちらずで、穢れがない。

汚したくない。

心から誠は、そう思った。

「本当にありがとね！ マコちゃん!!」

唯は誠の首に腕を回そうとして…。

両腕をつかまれた。

続いて、横でえへんえへんと咳払いの声。

言葉が、2人の横にいた。

唯の腕を掴んで。

濡も不安げな表情で、彼女の隣にいる。

「平沢さん…少し2人で、話しましょう」

低い声。

唯と言葉がでていったリビングで、濡は、

「お互い譲れないみたいだな…」

誠は無言で、あらかじめ皿に盛っていたハンバーグとスパサラダを口にする。

「言つとくがね、」律は両腕を頭に組みながら、「西園寺もこっちに来てみたいなんだ。

いい加減はつきりしねえと、痛い目にあうと思うぜ」

「世界が…わかつてますよ…」

「あのですね、平沢さん」

誠の家の外で風を浴びながら、言葉は唯に、

「貴方が誠君に会うのは許したいんです。秋山さんのこともありますし。」

でも、誠君は私と付き合っているんだから、あまりくつつくのは、やめてくれませんか……」

「…それは、どうかな…」

重い口調で、唯は答えた。

「誠君も私が好きですし。貴方はあくまで『友達』です」

「それは…分からないと思うけど。」

相変わらず疑心的な目を、唯はちらちらと目をそらしてかわす。

「わかりますよ。誠君のこと一番わかっているの、私ですから」

「そんなことはないと思う。」

だって、憂があんなこととしても、マコちゃんは笑って許してくれた…。

それは、憂が私の妹だったから。あの人や貴方じゃそうはいかないって、マコちゃん

は言ってた…」

言ってみただけだったが、誠の思いが自分に向いていると、唯は信じたかった。

「誠君は、すごく優しいですからね」多少嫉妬の混ざった目で、言葉は、「でも、私には、キスしてくれました」

「キスなら、私だって…」

「いっぱいですよ」

「そんなの…」

「唇だけじゃなく、胸も、おへそも、おなかも、背中だって…」

「え…？」

唯は、嫌な予感を感じた。

「証拠だつてあるんですよ」

得意な表情で言葉が携帯を取り出した時、

ドツドツドツ…！

何やら階段を全力で駆け上がる音が聞こえる。

そちらを向くと、階段から1人の小柄な少女が飛び出し、2人の目の前で停止する。

「…西園寺さん…」

「貴方はあの時の…」

呆然とする言葉と唯に対し、世界は大きく息をして、

「はあ、はあ、はあ…2人とも、やっぱりいたのね…」

ぎこちない微笑み。

「もう、誠には許してもらえないとは思ってるし…まだ誠への未練を残しているというわけではないけど…あれから誠、どうしてるかな、と思つて」2人の視線から目をそむけながら、世界は言う。「いじけてさ、1人で部屋に引きこもってるかなーって、思つて

ただ、貴方達がいるとはね。まあ田井中さんから聞いたけど」

それを聞いて、ぷつと唯は吹き出して、

「要は西園寺さんも、マコちゃんのことをあきらめてないんだよね」

「バツ……！ なんてこと言うんですか!!」

「ならば、戻ってくる必要ないじゃない」

なんだかおかしくて、思わずすすくすと笑ってしまう。

世界の顔は赤く、言葉は相変わらずの冷ややかな視線。

「ちようどいいですね。西園寺さんも、みたほうがいいです」

携帯を取り出し、カメラのデータを開く。

言葉が2人に見せたのは、誠が彼女の指にキスをしている写真。首から先しか映っていないが。

……というのは見せかけで、先ほど彼女が怪我したときに、誠が傷をなめているところを撮ったもの。

「…………!!」

「誠君、私の指をこんなに夢中になって吸うんです」

「そんなの……」

世界は目をそむけつつ、でも声は明らかにテンションダウンしている。

「指にキスって、王子さまがお姫様によくやるよね…」

唯はシヨックというより、妙に興味深げな表情になった。

ちよつと変わったキスだと思っている。

言葉は浮かない表情になる。

やはりこれだけでは、不足か。

唯は、元気のない世界と、少しがっくりしたような言葉の顔をかわるがわる見て、思わず言ってしまう。

「ねえ…西園寺さんも桂さんも、『勝つても負けても遺恨なし』ってできない…?」
張りつめた空気が、さらに怪しくなった。

「…それができないから、こうやって修羅場ってるんじゃないですか…」

世界は、思わず呆れてしまった。

「ま、まあとりあえず、マコちゃん待ってるからさ、とりあえず食べようよ」

唯はにつこりと笑う。

世界も、思わず顔を赤らめた。

「…とりあえず、田井中さんじゃないけど、腹を割って話したほうがいいかもしれませんね」

廊下を走る唯を背に、世界は、さりげなく言葉に切り出す。

「…なんとなく、分かる気がする」

「え？」

「誠が、この人に惹かれていった理由が」

言葉の表情が、さらに曇った。

「なんとというか…あの悪意のない笑顔…。あれを見ると、こつちまで心が洗われるような気がして…」

「そうですか？」

「え？」

「平沢さんなんて、駄目です」

「……」

この人の意固地っぷりも、相変わらずというべきか。

「それにしてもよ」律はブタ顔のアンマンにかじりつきながら、「結局振り出しに戻っちゃまったじゃねえか。どうすんだよ、伊藤」

もつともだ。

自分も相変わらず決めることができないから、同じ賽の目を繰り返している。

「必ず決着は、付けるつもりです。…あれ、いたる、心ちゃん？」

2人とも、ブタ顔のあんまんをみつめたつきり、一口も食べていない。

「…これ、かわいそうで食べられないよ…」

「あはは…そうだね。じゃあ、持って帰るのもいいかもね」

「いたる、おとーさんにたべさせたくない、これ」いたるは不満げだ。「あ、そうだ。

おにーちゃんにあげる」

「はは、ありがとう」

満面の笑顔で、誠はいたるの頭をなでてやった。

それを見つめる漣、律、梓。

「…やつぱり、悪い奴じゃないと思う、伊藤は」

漣は肩をすくめて、律と梓に話す。

「漣…」

「漣先輩…」

まばたきする2人に、漣は続けた。

「ちよつと優柔不断なだけで、誰かを思いやれる心はあると思うんだ。

どれだけ振り出しに戻っても、じつくり、マイペースで決めさせてやっていいと思う。

そうすれば、多分いい形で上がれると思うんだ」

「?」誠は振り向き、「何か言いました?」

「あ、いや、なんでも」

漣は、顔を赤らめて答えた。

やがて、唯、世界、言葉が戻ってくる。

「世界、どうして…」

世界の顔を見て、誠は思わず言う。

「い、いやあ…誠、一人で落ち込んでるかなあつて思つて、来たんだけど…」

世界は笑いながら、目をそむけた。

「西園寺…」

「田井中さん…」

律は世界に近づく。

「いったい、ムギに何があつたんだ?」肩をつかみ、「なあ! 漣や桂のことか!? いったい何があつたんだよ!」

漣と言葉、唯と誠もそれを見て、あらぬ何かを感じ取っていた。

「ムギちゃんに、何かあつたのかな…?」

「はあ…」

誠の母は、彼に頼まれた買い物を手提げながら、車を駐車場に停める。外に出ると、星一つない、灰色の雲が覆う夜空。

マンションの入口に入ろうとすると、

「お前か」

と低い声。

振り向くと、長髪で縞の皮ジャン、筋骨隆々な男がいた。

「あなた…いや、沢越…止…！」

かすかに寒気、嫌、吐き気すら覚えた…。

「何だよその口調は。ただいたるを連れ戻しに來ただけなのにさ」

鼻で笑いながら、止はどす黒く濁った眼を彼女に向ける。

「…いたるを連れ戻したら、早く帰つてくれる？ 誠だつてあなたの顔なんか見たくな

いでしようし」

「…言われるまでもねえ」

おたがい淀んだ雰囲気のまま、2人は誠の家へと急いだ。

続く？

第10話『岐路』

「なあ！ ムギに何があつたんだよ!!」

世界を壁にぶつけて、律は問い詰めた。

根負けしたような表情で、世界は口を開き始めた。

「実は……ムギさんが桂さんに、何かしようとしてるみたいなんです……」

「え……？」

皆、哑然。

言葉の体が凍る。世界は続ける。

「一応まだ計画の段階。それにあの人が言い出したことではなくて、どうも……七海に何かされたらしくて……」

「甘露寺さん……？」

言葉が顔をしかめる。実を言うところの程度予想はついていた。

「知り合いか？」

「はい。中学生からの同級生でしたけど、そのころから意地悪でした……」

滯の問いかけに、言葉は低い声で答える。

「私も」唯は世界に、「以前貴方とマコちゃんが付き合ってた時、マコちゃんにもう付きまとうなって、あの人に言われたことがあった」

「……」

世界は唯を見て、やや後ろめたげな表情になる。話を続ける。

「それに……秋山さんもターゲットになってるらしくて……」

凍りつく放課後ティータイム一同。

「え……」

「やっぱり」律の表情が険しくなる。「たぶん、濤が桂をかばっていることがばれたんだな」

「……」

凶星かもしれない。濤は声も出せない。

誠は何も答えないまま、世界の瞳を見る。

彼女は、思わず目をそらした。

ガララ、ガチャツ。

玄関の鍵が解除される音。

「あ、とりあえず母さんが帰ってきたみたいだから、ちよつと行くよ」

声だけかけて誠は、玄関の方へ急いだ。

黒い、重いドアが開く音。

玄関にいたのは、案の定、母。

母に連れ添っている男の顔を見て、急に誠の背に、寒気が走った。

肩までかかる長髪、筋骨隆々。

だがその目は、どす黒く濁っているように見えた。

沢越止であつた。

「親父……？」

「久しぶりだな」

ニヤツと気味の悪い笑顔を、父は浮かべる。横で母は、後ろめたい顔つき。

「何だよその目は」止はすぐに気分を悪くして、「いたるを連れ戻したら、すぐ帰るから

や」

「マコちゃん、どしたのー」

廊下から、唯の声。

「あ、唯ちゃん、ちよつと……」

誠が止めるのも聞かず、唯は彼の隣に来てしまう。

「……」

止の目が、かすかに唯に向く。

「君、なかなかかわいいじゃんか」

思わぬ止の声。

「え……」

戸惑う唯の前に、

「萌子なんかより、ずっと……」

止は、両手を広げて急に近寄って、唯に触れようとした。

ばっ!!

誠が止の手を払いのけ、仁王立ちになって、彼女を守るように立ちはだかる。

「何のつもりだ……?」

「こっちのセリフだ」

睨みあう、親子の目と目。

「……あんたのすることはよくわかってる……。また同じことをするつもりか……」

「うるさいな……」

詰る誠と、はぐらかす止。

しばらく、沈黙。

その中で誠の母は、息子の目の変わりようを冷徹に見ていた。

(あの子……)

「唯、どうした!？」

律・滯・世界・言葉・憂・いたるが玄関にやってきた。

「! おとーさん……!!」

いたるの顔が、恐怖と嫌悪の表情に変わった。

「いたる、迎えに来てやったぞ」

いやがるいたるの手をぐいと引つ張り、止は自分の隣に引き寄せる。

「いたる……」

思わず誠は、いたるを気にして唯から離れてしまう。

唯はふと、慣れない感触にぞくつとなつた。

「あ……」

止の手が、唯の太ももをさすっている。

「く、貴方……!!」

憂が出るより早く、誠が止の手を弾き飛ばす。

「手を出すんじゃないよ……!!」

彼の声は、自分でも信じられないぐらい、荒い。

鋭い目から出る威圧が周りに広がる……。

逃げ出そうとする滯を、律は驚愕と焦燥の表情のまま抑えた。

止は、誠の手を乱暴に払いのけ、

「いつまでそんなことを言つてられるかな?」

嫌がるいたるの手を引いて、さつさと踵を返す。

一瞬、その濁つた目が、ちらりと唯を見た。

それを感じ取り、誠は唯を守るように、さらに体を密着させる。

それに気づいたときには、唯の鼓動はトクトクと速くなつていた。

さりげなく、彼の腕に自分の腕を回す。

ぬくもりが自分に、伝わってくる。

それに気を取られ、言葉の嫉妬でいっばいの眼光も、世界の悲しげな表情にも、気づかなかつた。

もちろん、「おにーちゃんと、はなれたくないー!」という、いたるの泣き声にも。

皆皆気を取り直し、明かりがぼんやりとともるリビングで、手前勝手に座る。

「何、あの人……?」つややかな檜のテーブルに座つた唯は、さっぱり状況が分からない。

「マコちゃんの知り合い……?」

「沢越止。私の元夫」

唯の斜向かいに座った誠の母は、冷めた声でため息をついた。

「止……………」

ソファーに座った世界がふと、思案顔になる。

「おばさんの旦那さんってことは……………」

「伊藤の親父さんか……………」

「はい……………」唯の隣にいる誠の表情は、暗い。「でも浮気症で、しかもやたら外で子供を作ることに熱心で……………。ほとんどごころつき同然ですよ」

ぎろつとソファーから、梓の冷たい視線。

「二股も三股もかけたあんたが言うな、という目つきである。」

「私も口説かれて、ついつい結婚しちゃったけど……………あんな人とは思わなかった」

乾いた目で、天井を見上げる母。

「まあよ」立っている律が間に入り、「唯を変な目で見てやがったけど、唯がひとりつきりじゃなくて良かったぜ。持つべきものはダチだよな」

「自分で言うか」隣で滯は呆れて、「まあ、とりあえず良かったですよ」

「そうね。不快な思いをさせて、ごめんなさいね」

誠の母は、落ち着いた声で言う。

「そう言えば貴方達は、どうしてうちに来たの？」

「あの「ですね」、実はこの憂「さん」が……」
言葉と唯の声が重なった。

誠はそれを抑えて、端的にこう答える。

「今日の学祭の時、いろいろあつて、桜ヶ丘軽音部の人たちと仲良くなつてね、皆で食事を取ろうということになつたんだ」

「そうなの」母は半信半疑の状態になりつつも、唯の方を向いて、「ああ、貴方が誠の言つてた、平沢さんね」

「え……？　なんで分かるんですか……？」

「驚かなくてもいいじゃない。ぼーつとしてる感じで分かるわよ。成程、誠が特別な思いを抱いてるといふわけね」

「い、いや、そういうわけじゃないよ、母さん……」

顔を赤らめて誤魔化す誠。

「ただの友達です」

ぶつきらばうに答える言葉。

2人を見て、母はくすくすと笑つた。

すると誠の携帯から、音のしない振動。

「ちよつと電話みたいなんで、行つてきますね」

「あ、ちよつと……」

自分の部屋に行く誠を、滯は気になるといった表情で、見ていた。

小ぢんまりとしているが、整理整頓されている自分の部屋。

青いベッドに座り、誠は携帯の通話ボタンを押す。

「はい、伊藤ですけど」

「あ、誠。俺だ。泰介だ!! 実は大変なんだよ!!」

親友の、いつものハイテンションな声である。

「……大変って何だ? ガチャガチャでベジータのフィギュアが当たったなんて言わせないぞ」

「馬鹿、ドラゴンボールの話じゃない!! まあ、うちにハチャメチャが押し寄せてきているのは確かなんだけど」

「それはこつちもだよ。大体お前はたいていのことにはHEAD—CHAILAって言うてなかったか?」

「それがそうはいかんのよ。実は放課後ティータイムのさわ子先生を、うちに連れてきてしまったんだ!!」

「ええっ!?!」思わず面喰ってしまった。「ど、どうして……?」

「さあ……」電話の奥の声が、自信なさげになる。「喫茶店の掃除を終えて廊下に出たら、さわちやんがふらふらしながらやってきたんだよ。なんだか服が乱れてたから、アレの後なんだとは思うけれど」

「……なるほど」誠は苦笑いしながら、「見事、弱みに付け込んでお持ち帰り、といったところか。でもよかつたじゃねえか。大好きなさわちやんを手に入れることができてる」

「よくねえよ……。今は姉ちゃんに取られて、どうする事も出来ねえし」

「シスコンだしなお前は。ベジータのフィギュアも、全部取られてもどうすることもできなかつたって言ってたしな」

冗談半分に言つて、自分の気持ちを和ませる。

「冷やかすなよお……」

「あははは……」

「まあ、さわちやんの奴、『止さん、よすぎる』って呟いてばっかりなんだけどよ……」
穏やかにかけた誠だったが、『止さん』と聞いて、急に背筋に悪寒が走った。

右こぶしに、力が入り、ガタガタ震えだしていく……。

「そう言えば誠、お前の親父の名前も『止』なんだっけ。」

止つて、俺が赤ん坊の時に家にいた父ちゃんの名前だつて、姉ちゃんから聞かされた

ことがあるんだけど、これって偶然かなあ」

泰介の言葉も、全く耳に入らず、

「悪い……泰介……ちよつと気分が悪くなったんで……切るな……」

「ちよつと待て！ 質問に答え……!!」

一方的に切斷ボタンを押した。

上がっていく息と、湧き上がる怒り……。

どうすることもできない。

「親父の野郎おおおおおおおおおおおおおおおつ!!!」

どおおおんつ!!

力任せに、壁を叩いた。

それでもムシヤクシヤが収まらず、また拳に力を入れると、びりつと壁が破れる。

「親父め……俺はあんたとは違う……唯ちゃんはあるたなんかに渡さない……」

震える声で……。

外に、聞いている人間がいるとも知らぬまま……。

「伊藤……」

滯は、誠の部屋の茶色いドアの前で、耳をそばだてて聞いていた。

いつもの彼女なら、怖がって逃げだすはずなのだが、なぜか恐怖はなく、代わりに悲しさと重い気持ちでいっぱいになっていた。

「秋山さん」

言葉が、そばに来る。

「桂……。伊藤、つらそうだなと思って……。どうも沢越止が、何かしたらしいんだ」

「そうですか……。私も誠君に、家族のことについて聞いたことがありましたけど、お父さんのことは、話したくなさそうでした。

その理由が、分かる気がします」誠の部屋のドアを見ながら、言葉は言う。「秋山さん達で、平沢さんを守ってやったらどうですか？ 交代で平沢さんの家において、様子を見るとか」

「何だか他人事のようなアドバイス。まあ桂は、彼とのデートがあるから、しようがないか。」

「文字通り隔離ということか……。だけど明日は学祭最終日だし、唯は伊藤が好きだしな。本人が納得するといいいんだけど」

むすつとなった言葉。滯の中に焦りが広がる。

「……誠君の彼女は、私です」低い声で言葉は答え、「まあ、今夜は誠くんちに泊るつもりですよ。2人きりになったところまで……」

急に顔を赤らめた。

「……いや、その先は話さなくていいから。察しはつくし」濡も頬を染めて、「そのまま、外に出ないほうがいいかもしれないな。甘露寺達も狙ってるって話だしな……」

「もちろん、そのつもりです。平沢さんだって近づけたくないですし」

急に言葉は、ニツコリした。

濡は、その顔を見て、さらに気持ちが悪くなり、唯のことを思い浮かべながら、「少なくとも、伊藤がどちらを選んでも、あいつの気持ちを大事にしてくれ。」

あいつが親父のことで、どれだけ苦しんでいるかも、分かってくれ……」

「止は浮気性なうえに、相手を妊娠させることに異様な執着を抱いているから……」

皆、どん引き。

母もさすがに、顔を赤らめているようだ。

「オイオイ、んなヤリチンに、あんたもなぜ引つかかったんすかねえ」

腕枕をしながら、律は呆れた表情で問いかける。

母は苦笑いしながら、

「誰にでもあるでしょう？ 不良が雨の中子犬を拾ってるのを見て、惹かれるパターンは」

「私も……小さいころあつた気がする」

唯は、思わず遠い目をしてしまう。

「おいおい……唯まで同調すんなよ。まあプロセスはおいといて、私たちが唯を守るつもりだからさ。警察（サツ）にも言っておこうかねえ」

「……無理」きつぱりとした母の答え。「あの男には、警察にコネがあるし」

「うわっちゃん……」

こめかみを押さえながら、ぼやく律。

「まさか……」

小声だが世界の声がしたので、唯はちらりと見る。

世界は、何かを思い出したらしく、目をぐつと見開いていた。

「……西園寺さん……?」

唯は、気になった。

目薬をさして平静を装い、誠は唯達を送ることにした。

食事を終えて、放課後ティータイムと憂・世界は、外の入口近くまで行く。

誠と母、それに言葉と心が、それを見送る形である。

「ほんと、^い馳走様でした」

澪が誠に、声をかけた。

「いやいや……不快な思いをさせて、申し訳なかったです……」

誠はにこつと笑う。

「ううん、こちらこそ、憂にまでご馳走してくれて、ありがとう。ほら、憂も頭下げて」
包丁はユニパックに入れたまま、唯が回収し、持ち帰ることにしていた。

憂は姉の隣で、頭を下げさせられ、

「……ゴチソウサマデシタ……」

多少棒読みに、言う。

「心こもってないなあ」

ごねる唯の携帯から、メールの着信音が流れる。メッセージを見てみる。

「唯ちゃん？」

「お父さんからだよ。『今日は早めに帰るから、ご飯一緒に食べよう』だって」

「唯の両親は、ラブラブ夫婦だもんな」

律の話の聞いて、胸がチクリと痛んだが、誠は、

「いいお父さんだね」

と、無理に笑顔を作る。

「普通だよ」

唯はにっこりと答え、父親にメールをする。

部長の律が前に進み出て、

「唯のことは気にすんな。あたしらであの止つて野郎から、唯を守るからさ。それと、
漕、桂」

「ん?」「はい?」

「お前達はずつと家にいたほうがいいかもしれない。すでに甘露寺たちから目えつけられてるみてえだし」

「ごめんなさい……」

冷静な表情の律の隣で、世界は頭を下げた。

「私は嫌です!」言葉は首を横に振り、「私は……誠君と一緒に、いたいですから!」

「言葉……」

唯と世界の目の前で、誠の腕に抱きつく。

「ちよ……桂さん……!」

不快に言う唯だが、何故か世界は無言で、目をそむけている。

「マコちゃんっ!」

唯は耐え切れず、誠の目を見据えて、大声を上げた。

「……唯ちゃん……」

「私、やっぱりマコちゃんのこと、好きだから！」

憂のしたことも含めて、マコちゃんに償いをしたいの……!!」

心の底から、絞り出すように言っていた。

誠は、哀しげな微笑みを浮かべ、

「償いたいののは、俺の方だよ。」

親父のしようとしていることも含めて」

言葉の抱きついていない側の手を、差し伸べる。

唯はそれを、包み込むように両手で握った。

その中で、不安な表情の滯と、不満げな言葉を察知し、律はきよろきよろと目玉を動かす。

「ん？　西園寺、怒らないの？」

腕枕をしている律が、世界に問う。

「……田井中さんも、言ってたじゃないですか。望み薄だって」世界の懽然とした声。背を向ける。「私、少し街をぶらついてから帰ります」

「世界……」

誠は不安と疑問に満ちた表情。

「……もう、桂さんでも平沢さんでも誰でもいいけど、楽しんできなさいね……」

儼然とした顔、儼然とした声で、世界は誠に声をかけると、そのまま速足で去って行った。

……………。

皆、沈黙。

「世界……………どうしたんだ……………」

「つーかね」律がお手上げのポーズで、「なーんでお前ら、そんなに伊藤にこだわるんだよ」

「私は……………」言葉は、「誠君がいないと、またひとりぼっちになってしまふんです」

「はー?」

「私、ずっとクラスで、友達いなくて、いじめられてるといふか……………孤立して……………」

言葉は続ける。

「でも、誠君に会えて……………はじめて……………1人じゃないって、こんなにいいことなんだって、嬉しいことなんだって、教えてもらえた気がするんです」

「1人、か……………」

つぶやく溚。

「誠君といると、ドキドキするんですけど……………それだけじゃなくて、嬉しいといふか……………温かい気持ちになるんです」

もし、誠君に嫌われたりしたら……また、元のさびしい私に戻っちゃう。ううん、もつとですよ」

「……」

皆、視線を言葉に集中させる。

「2人でいることの楽しさを知っちゃったから、もし1人になったら、きつと……もつとつらいです。」

つらくて、きつと死んじゃうかもしれないです……。

私にとって、誠君は自分の命と同じくらい大切な存在です……」

「言葉……」

複雑な思いで、誠は言葉のうっむいた視線を見る。

「私は……いや、私達は、桂の友達だよ」

滯が、不安と微笑みが半々の表情で、でも言葉の目をまつすぐ見て、答えた。

「秋山さん……」

「唯だって、伊藤のことで妥協できないだけで、貴方に悪い感情を持つてるわけじゃないし」

「……」

「でなければあの時、貴方のために泣くことはなかっただろう」

「……」

唯も、思い出していた。

あの時、本当に桂さんを案じていたと。

屋上で、桂さんが藩ちゃん隣の隣で、元気そうだった時は、本当にうれしかったと。思わず涙ぐみ、この人の豊満な胸の中で泣いていたこと……。

「ま、そう言うことにしとくわ」

「私も、貴方のことが嫌いなわけじゃないし」

律があきらめたような口調で、梓がため息をつきながら、藩に同調する。

「貴方には、どうしてもあきらめられないワケがあるのですか、平沢さん？」

「……」

言葉に問われても、唯は反論できなかった。

確かに、自分にはそれほど、背負い込んでいるものなんて、ないんだ。

「桂さん……」唯はひきつった笑いを彼女に向け、「それなら、あまりマコちゃんにべたつくのもよくないんじゃない？ マコちゃん嫌がると思うし……」

「それはこちらのセリフです」

そっけない答え。引き寄せた腕も、放そうとしない。

唯の胸が、誠の心が、痛くなる。

「ほら、唯先輩、行きますよ!!」

「あ……。じゃあお休み、マコちゃん」

梓に腕を引つ張られ、唯は誠と別れた。

「おやすみなさい」

彼は笑顔で、答える。

濡が彼を、心配げな目で見ていることに、唯は一瞬、感づいた。そして、自分に向けられた、誠の複雑な視線も。

唯達が去って、マンシヨンは静かになる。

虫の音が、聞こえ始めた。

「誠君……。今日は誠君のおうちに泊まっていいですか?」

「え……。無断外泊はまずくないか?」

「大丈夫です。お父さんもお母さんも仕事でいないし、このまま明日も、ずーっと誠君と一緒に過ごしたいですから。学祭はさぼっても大丈夫でしょう」

「……そうなるか……」

泰介に怒られそうなんだが。

ともあれ、正直、言葉と一緒に昼まで寝過ごすのも悪くないかもしれない。

その時、アメ車のように大きい、黒いベンツの車が、誠のマンションの前で停車する。「うわっちやー……うちの車だ……」

言葉の隣で、心が頭をかきながら苦笑い。

「何でここが分かったんだらう……」

「実はお父さんに、今日は誠くんちで食事を取るって言ってたんだよね……。お父さんもお母さんも、今日は仕事で帰れないって言ってたけど、まさか早く終わるなんて……」
残念な表情の心。言葉もがっかりした表情である。

彼は、無言でいた。

言葉も、唯ちゃんも、危機に陥っている。

なのに自分は……何もできずにいる。

「しょうがないですね。明日早く起きて、学祭に行くことにします。本当はずっと誠君と一緒に過ごしたいんですけど。8時に校庭で、待っていますね」

なんとなく、言葉との約束を守るかわからなくて、誠は、

「……行けたらね……約束はできないけど……」

とだけ、答えた。

「誠君……」疑心的な、心の目。「もしかして、平沢さんって人に未練がある？ お姉ちゃん、こんなに一生懸命なのに」

「それは、その……」

答えられない。

「ま、あんな妹さんがいるから、愛想尽かしてるよね。それにお姉ちゃん、平沢さんと今のうちに差をつけたいと言ってたし」

「ちょ……心……!!」

齒に衣着せぬ心を、言葉はリングゴのような顔で叱る。

「もう少し、考えてみるから、じゃ、おやすみ」

「おやすみなさい……」

言葉と心は、笑顔で挨拶をして帰っていく。

約束は出来ないというのは、本当である。

唯のことも、気になっているから。

「あ……」後ろ姿の言葉に、彼は声をかけた。「もしつらくなったら、秋山さんに相談した方がいいと思うよ」

「え……?」

振り向いた彼女の表情は、怪訝。

「屋上に行った時、秋山さんと言葉、とつてもいい雰囲気だったしさ」
にっこりと、誠は懸命に笑顔を作った。

が、なぜか言葉の表情が、曇り……そのまま背を向けて、歩きだした。「やはり、容赦しないほうがいいわね……」

言葉の呟きは、彼には聞こえなかった。

「あ！ 財布落としちゃった」

原已浜駅の階段で、唯はあわてて引き返す。

「馬鹿！ なにやってんだよ!!」

「もうすぐ次の電車来るぞ!!」

文句を言う律と滯を無視しながら、唯は階段を駆け降りて改札口へ向かう。

3つの自動改札の右隣に、白い改札窓があり、そこで1人の少女が駅員に、何かを手渡している。

唯はその少女に、目が止った。

「西園寺さん……あー!」

世界の手元にあるのは、まぎれもなく自分の財布。

「ちよつとそれ、私の財布!!」唯は改札口まで走って行って「ごめんなさい! その財布私のです!! ありがとうございます!!」

笑って駅員から、財布を受け取った。

「よかった」世界は安堵の表情。「ほんとに……いい笑顔してますね……平沢さん」

「ほんと！ ダブルでありがとう!!」

唯の頬は、さらに緩んだ。

それを見た世界の顔が、急に沈む。

「今まで、気づかなかったなんて……私って、ばかよね」

「え……」

唯は、わけがわからない。

世界はうつむき、静かな口調で話し始めた。

「誠のことが好きで、誠と他の女の子が付き合うのを横目で見ながら、歯がゆい思いして、挙句内緒で手を出した。」

貴方は、私と同じだったのに……」

「西園寺さん……」

「なのに、貴方と誠が浮気してると思いこんで、貴方をあいつに近づけないようにして、あいつの気持ちも踏みにじって……」

ぶつぶつと呟きながら、彼女は顔を上げる。

涙がにじんできた。

「おねがい、誠のそばにいてやってください……」

「え、でも……」唯は、戸惑った。「貴方だって、マコちゃんのが好きなんですよ。それに、そんなことをしたら、桂さんが……」

「そうだよ。私も、まだあいつをあきらめてない……」

「だったら!」

「でも……あいつのことを嫌いって言っちゃったし……もう無理だと思う……」

だから、代わりに貴方が願いをかなえてほしい! 桂さんに勝ってほしいんです!!」

「西園寺……さん……」

「今、誠はつらい思いをしてるの……」

貴方の笑顔が、一番いい薬だと思う。

貴方がそばにいて、笑ってくれれば、いつでも一緒に笑えると思う。

そして、その笑顔を見られたら……きつと私も、笑えるかな、と思つて……」

「……」

「約束……してくれませんか……?」

「……うん……」

誠に近づける嬉しさと、後ろめたさを半々に持つ形で、唯は、答えた。

「じゃあね」

世界はぼそりと言つて、唯と別れる。

唯も急いでプラットホームへ戻ろうとすると、そばに梓がいた。

「あずにゃん！」

「唯先輩が遅いから、思わず来ちゃいましたけど……」と、梓。「西園寺！ 貴方はそれでいいの!？」

呼び止められる、後ろ姿の世界。

振り向いたその顔には、涙がいつぱい溜っていた。

「だって……どのみち……私と沢越止のことを考えれば……私は……誠の彼女には……」

ぐすりぐすりと泣きながら、世界は闇の中へ飛び出していく。

「西園寺さん!!」

追おうとする唯だが、梓に止められる。

「今は、そつとしておきましょう」

何とか、電車に間に合った。

「危なかったねー!!」

何もなかったような笑顔を見せる唯。

「唯……」律は沈痛な面持ちで、「お前は、家にいたほうがいいかもな……」

「え、なんで？」

「お前自分の状況、分かっているのか!? あの変態から目えつけられてるんだぞ!!」

「分かっているよ……でも……このままマコちゃんに会えないなんて……」

「てん何とかムギに、奴の逮捕状を出させるようにできるといいんだけどな」

「何でムギ先輩に頼むんです？」

梓が話に入ってきた。

「ムギの家族ならきつと、サツともつながりがあるだろうと思うから。」

どうもおばさんの話じゃ、あいつはサツにもコネがあるらしくって、見逃してもらおう形で無作為に女性を襲って妊娠させていたらしい……」

「うわあ……どうすんですかあ……」

梓は声を震わせる。

「ムギのコネが、奴のコネを上回るといいんだが」

「だが、」 漣は心配げに、「そうなると伊藤も、『犯罪者の息子』のレッテル貼りをされることになるな……」

「漣、人より自分の心配だろ。おめえ甘露寺から睨まれてんだぞ」

「分かっている……。でも、伊藤のことも気になるから。桂がどう思うか」

「私は関係ないよ！」 唯は首を振って、「マコちゃんがどんなお父さんを持つとうと、マコ

「ちゃんはマコちゃんだから!!」

「唯、お前はそれでいいのかもしれないけど……」

漣はたしなめる。

その時、律の携帯から、音のしない振動がした。

開いてみる。

「……西園寺の奴……」

「律?」

「いや、なんでもない」律は首を振って、「後は漣だな。幸い私の知り合いに、漣ファンクラブの人がいるから、ちょっと相談してみることにするよ」

「律……」漣は安堵の表情を浮かべ、「ありがとな……いつもふざけてばかりいると思っただけど、優しいんだな……」

「バーカ、あたしはいつもマジだよ!」

破顔一笑ではっはっはと笑う。

「西園寺……」梓は悲しい顔で去っていった世界を、ずっと気にしている。

「清浦に連絡した方が、いいかも……」

ようやく、解放された。

ムギは虚脱したようにフラフラしながら、家路についていた。夜の電燈が、付いたり消えたりしている。

左手には、人一人いない公園が、ぼんやりとした明かりに照らされている。

甘露寺さんのあの目、あれは、本気だ。

肉食獣の目に怖じ気づき、滯ちやんの家まで教えてしまった。

子分たちもそろって、滯ちやんに猛攻を加えることだろう……。

自分のせいで、滯ちちゃんは……。

「ムギさんー」

背後から声をかけられ、びくつとなった。

振り向くと、刹那。

いつもの紙を貼ったような無表情で、そこにいる。

「やっぱり、友達を裏切った気分ですか？」

何でこんな時に、人の心をえぐるようなことを言うてくるのか。

耐え切れなくなった。

「もう……どうしようもないじゃないですか……。ぐすつ……。

甘露寺さんがあんな人だったなんて……。ううつ……。――」

目がどうしようもなくなくなり、自分で気がついたときには、崩れた顔を手で埋めてし

まっていた。

ぐすつ……ぐすつ……。

泣き崩れてその場にしゃがみこむ。

右肩に、暖かい感触。

刹那の手。

「こつちに行きませんか？ こちらも、話したいことがあります」

夜の深い闇の中で、リーリリーリと、鈴虫の鳴き声だけが聞こえる。

子供遊具用の、穴だらけの青いドームの上で、ムギと刹那は、並んで座った。

ずつとすすり泣くムギ。

刹那は、ムギの腰のほうに手をまわしていた。

半刻程して、ようやくムギは、泣きやめた。

「清浦さんは……」励ましているようで、相変わらず無表情の刹那が憎くなり、「どうして、甘露寺さんを止めようとしなんでしょうか？」

「できるわけではないよ。矛先が私にいくのも嫌だし」

考えてみれば、そうか……。

「それもそうですね……。でも、明日は榊野の門に来てくれって、甘露寺さんに言われ

「ちやいましたし……」

「伊藤と連れを、そこで待つ、ということですね……。世界ならともかく、桂さんや平沢さんが連れなら、止めると」

「そう言うことですか……」

消えそうな声のムギに対して、刹那の言った言葉は、意外なものだった。

「いっそ、熱心になればいいじゃないですか」

「な……！ 私はそのことは……!!」

「そうじゃなくて、七海より先に捕えて、彼女が知らない間に見逃す、とか」「そうですか……?」

表面的には迎合するが、魂まで売らない、ということだろう。

理解した時、ムギの頭の中で、何かがひらめく……。

「ちよつとお父様に連絡してみます。SP100人、いや、1000人動員できるかどうか」

「は……?」 哑然となる刹那。「SPって……」

「ありがとう、清浦さん。突破口が見つかりました」

そうやってムギは携帯を取る。

律から、無数のメールが来ていた。

横で刹那も、自分の携帯を見てみる。

「…世界が伊藤を、あきらめた……!？」

「え……? どうして……?」

「分からない。中野から聞いたんだけど」

「そう……。となると甘露寺さんも、桂さんを狙う必要がなくならない……?」

「いや、七海は嫌いな相手には攻撃的だから。」

ムギさんもSPがどうの言ってるけど、できる限りの準備はした方がいいかもしれない」

「……」

すつかり、ムギは怒りと失望、やるせなさでいっぱいになっていた。

夜の闇の中、街のイルミネーションと駅のプラットホームが、ぎらつく光を放つ。

桜ヶ丘駅で放課後ティータイムは、電車を降りる。

プラットホームのベンチで、ムギが待っていた。

律は思わず駆け寄って、肩をつかみ、

「ムギ……大丈夫なのか……?」

「え……?」

「西園寺から聞いた……」

甘露寺に脅されて、桂になにかすることになったって……」

「……西園寺さん、言っちゃったんですか……」

くすくすと笑うムギを、皆は啞然とした表情で見る。

「目が赤いぞ」

と、滯。

確かに、ムギは目を泣き腫らしていたが、そのことには触れず、

「私、実はそれで、SPを動員することにしたの。私個人の頼みでも、1000人は動員できるところから」

「……SP……1000人……」

ムギの家は、どれだけ金持ちなんだ。

「待て……」ずいっと滯が進み出て、「まさか、本当にあの子に危害を加えるつもりなんじゃ……!!」

「まさか。甘露寺さんの配下をうまく煙に巻く作戦ですよ」

みな、安堵のため息。

「まあ、桂は気に食わねえけど、いくらなんでも甘露寺の行為はなあ……」律はまた一つため息をついて、「それともう一つ頼みがあつてな。沢越止って知ってるか？」

「沢越止、ですか……?」

ムギは、よく知っているような顔をする。

「知ってるのか」

「ええ、少し前にうちの会社の専務が2人ほど、あの人に手籠めにされてて……」目に憤りの炎がある。「あの人の逮捕状を出すよう、お父様に頼んでいたのよ。警察庁長官と親友だし……」

皆皆茫然とする。どれだけトップオプトップとコネがあるんだ。

「出すんだね……」

漣の目は、どこか悲しげ。

「明日SPも動員するから、彼らに沢越止の勾留もお願いするつもりよ」

「そーかそーか。唯があいつのストライクゾーンに入っちゃったみたいなんで、重点的に守ってくれよな」

律はドヤ顔で、うんうんとうなずく。

とりあえず、これなら大丈夫だろう。

「私は反対だな」漣がうつむき加減に言う。「伊藤がどう思うか。沢越止は伊藤の親父さんだし」

「そうですか……?」

「おいおい、伊藤だつて親父のこと嫌いだろ」律が呆れ気味に言う。「それに今は、唯がピンチなんだからさ」

「だが……。そのことが公になれば、伊藤も肩身が狭くなるだろう。何とか極秘で逮捕……とかできないのか？」

「それは……無理ですよ」

ムギは困った顔で答えた。

「そんな……」

「そう言えば」ムギはちよつと、話題を変えた。「西園寺さんが、伊藤さんのことをあきらめたそうですね」

「そうなのか？」

滯は思わず、面喰った表情。

「清浦さんから、聞きました」

「清浦には、私が教えましたよ。西園寺は自分の思いを、唯先輩に託してましたが」梓は冷めた表情で、「何かわけがあるんだと思って」

「……西園寺が、唯に……。とりあえず、桂にも伝えておくか……」

滯は、言葉に電話をし始めた。

律はすでに、携帯に耳を当てて、

「くそ、さわちゃんにも和にも連絡が取れないとは……」

低い声で愚痴る。

「唯先輩は、ずっと家にいたほうがいいですね」梓は、「沢越止が逮捕されるまで」

「そう……」

しよぼくれる唯。

律も近づいて、

「もう伊藤には、近づかないほうがいいと思うぜ」

彼女には珍しい、真剣な表情。

「そ、そんな……」唯は懊悩を隠しきれず、「あ、だって、西園寺さんからも……」

「西園寺は、ああいつてたけどな。」律は世界のことをわかつているらしい。「あの止つて変態もいることだし、伊藤だって、その悪影響を受けているとも限らん」

「そんなことないよ！ マコちゃんはマコちゃんだよ!!」

「だめだぜ！ とりあえず明日は、ずっと家にいたほうがいい。あたしらも外を見張つてるから!!」

「いやだよ!!」

「わからずやつ!!」

横から、皆がぎよつとする程の怒鳴り声。

梓である。

「みんな唯先輩のことを心配してるんですよ!! なのになんかいつもいつも唯先輩は無視して……もう面倒見切れません!!」

「あずにゃん……わかってよお……」

「分かりません! もう唯先輩なんか、知りません!!」

上ずった声で懇願する唯を、怒鳴るだけ怒鳴ると、梓はかかを返し、他の軽音メンバーを無視して、夜の街へとあるきだす。

「お、おい梓、せめて唯んちの門番だけはしてくれよ!」

「知りません! もう何にもしてあげません!!」

あわてて声をかける律だが、梓はもう堪忍袋の緒が切れたらしく、ぶっきらぼうに答えてしまった。

「梓ちゃん……」

ムギの表情には、鬱の気がありありと出ていた。

唯は……。

梓のことも、他の皆のことも、頭の中に入れてなかった。

『償いたいのは、俺の方だよ。親父のしようとしていることも含めて。』

『誠のそばにいてやってください。』

貴方がそばにいて、笑ってくれれば、いつでも一緒に笑えると思う。』

誠と世界の言が、彼女の頭の中でリピートを繰り返す。

続いて、誠のさびしげな表情、世界の哀願に満ちた目が、瞳の奥で思いだされる。

「マコちゃん……」

ポケットにある、休憩所でくすねてきた物の手触りを、思わず、探っていた。

唯達の会話が気になりながらも、少し離れたプラットホームの黒い席に座り、滯は言葉に電話をした。

「西園寺さんが、誠君をあきらめた……？」

電話の中の言葉の声は、驚きと興ざめとがまじりあっている。

「ああ。唯を応援するそうだけど。多分、沢越止に絡んでいることだと思うが、まあそれは脇におこう」滯は、誰にも聞こえないように、「貴方か唯のどつちかが、伊藤の彼女になるな。さつきも言っただけれど、唯は貴方に敵意はないから、お手柔らかにやってくれ」

「……正直、私にはありませんね。まだあの人を、許しているわけじゃないんです」
乾いた声だ。

本当に頑固な人だ。

「……まあ、今晩は伊藤んちに泊まるんだろ。ゆっくり楽しみなよ」

「それが」乾いた声が低くなり、「うちの両親が予定より早く帰ってきてしまつて……うちには門限もあるから、家で怒られちゃいましたよ……」

「そうか、それは残念だな……」

とりあえず言つたが、どつちに転んでも、漕の不安は収まらないだろう。

「もし、誠君が私を捨てるなら、私……自殺します。」

「え……！」

そんな極端な。

「だって、誠君がいなくなつたら、私には何も残らないんです」

「そんな……。私達、いや、私がいるつて言つたじゃないか！」

「私に親切にしたせいで、いじめの矛先が貴方に向いても？」

漕の不安が、恐怖に変わった。

「……それは……。でも、律だって必死に対策を考えてくれてるんだし……」

『『やっぱり怖い』』という声ですけれど」

「そう……か……」

でも……。私だって、伊藤の代わりに、貴方の力になりたいって思つてる」

「……」

「何とか律に、桂のこともどうにかできるように頼んでみるから。」

「……」

耳にあてた受話器は、無言だった。

「つたくよお！ 有意義どころかサイツツツツアクの思い出になりそうだけ、今回は！！」

律が誰にともなく、愚痴った。

「私も同感……。」

ムギも呟いて、うつむいてしまった。

自分のせいかな。

唯はひとかけらの思いを、すくい取るように感じ取った。

「まあ、それはおことう。後1日あるんだし」 漣がこちらへと戻ってくる。「沢越止はとりあえずの対策ができるなら、いいんじゃないかな。唯は私達や、伊藤が守ればそれでいいことだし」

「そうかあ？」

「唯」 漣は話を、唯に振った。「明日は自由行動だから、伊藤のところに行つていい」

「ほんと!?!」

思わず唯は、目を輝かせてしまう。

「でもね、伊藤がだれを選んで、お前と過ごすのを拒んでも、伊藤の気持ちに大事にし

てくれ」

濡らしい、優等生の答え。唯は気持ちがいぼんでしまった。

それでも、「うん……」と力なく答える。

「でも……甘露寺さんは、伊藤さんは優柔不断のカイショウナシって言ってたし……」

ムギが諫めてきた。

「ううん」濡は首を振って、「伊藤は、そんなに弱くないよ。あの言葉が真実ならば……」

「あの言葉？」

「……何でもない」

そう言って濡は、半分悲しさが混じった微笑を浮かべた。

「おいおい、やけに伊藤をかばうよな」

律が冷やかし半分に言う。

「私はまだ、濡ちゃんの言葉、信じられないわ」

ムギの瞳には、潤みが入っている。

「いや、信じなくていいよ。ただ……後1日だし、しつかりとやらなきやと思つてさ。それに伊藤は、桂がほれ込む人だから、信じてやつても悪くないと思つて」

濡は、自虐的な表情になりながらも、前向きな口調。

「濡にとつては」律がシニカルな笑みを浮かべ、「桂に会えたのが何より良き思い出なん

ですかねえ。ま、それもいいけど」

「だーから違うよ」

顔を赤らめてムキになる滯を、唯は痛む心で見えて……。

誠の笑顔を思い浮かべ、気持ちを新たにすることにした。

そうだ。

自分にとつても、マコちゃんに会えたことが、1番の良い思い出なんだ。

だから、明日は行こう。

マコちゃんのもとへ。

一方、滯はしばらく、考え込んだ後……。

「じゃあ、また明日」

もと来た道を、引き返した。

入浴を済ませた後、誠は自分の部屋でうずくまり、ひびの入った白い壁を見つめながら、物思いに沈んでいた。

「何であんな奴が、親父なんだろうな……。あんなクソ親父のせいで、唯ちゃんにも、軽音部の人たちにも迷惑かけて……」

怒りのあまりぶつけた拳は、よほど強かったものとみられる。

「誠―、入っ方がいい?」

「あ、はい」

母が、彼の部屋に入ってきた。

「ん? 何やってんのよ、壁に穴開けて! 修理代何千万とかかるのよ!」

母は誠の隣に、どさりと腰掛けながら文句を垂れる。

「ごめん、でも……桜ヶ丘の先生が、バカ親父に襲われたと泰介から聞いて……ゆるせなくて……」

「そう……」母も彼の気持ちがかかるのか、怒りを鎮める。「そういえば、貴方の机を掃除してただけど、机の中から、無数の避妊器具が見つかって……」

「なっ!」ぼつと顔を赤らめ、「何で知ってるんだよ!!」

「……血は、争えないのかしらね……」

母はため息をついた。

「……言うなよ……!!」

「……ごめんなさい……。でも相手がどうなるか、分かっている……?」

「わかっている……。何であんな奴が親父なんだろうな……。母さんを捨てて、軽音部の先生を襲って、そのくせ性欲だけは俺に植え付けて……」

心からの本音。

「私も、今となつては何であんな男を好きになつたのかと思うけど……まあ、そういう思いがあるならば、やはりあの男とは違うでしょ。幸い相手が妊娠してないとするれば、まだ時間があるわ」

誠は落ち着きを取り戻し、

「後2人……。後2人なんだ……」

「……。そういえば、1人減つてない？ 以前私に話したのは、世界ちゃんと言葉さんと唯ちゃんの3人だったような……」

「あ、そういえば……。1人減つたことを、今まで気が付かなかつた自分に驚いていた。誰が消えたのか、それはちよつと言えないけど」

本音である。

「もちろん、無理に言う必要はないけどね。貴方もちよつとずつ進歩してると思うなあ」
「でも、少なくとも今は、親父に目をつけられている唯ちゃんを守りたいんだ。」

別に唯ちゃんが1番好き……というわけじゃなくて……親父の手で人生狂わされたら……つらいなと思うし」

それを聞いて母は、じつと彼の目を見つめた。

「……？」

「それだけあの、唯ちゃんのことを気にかけてるつてことは、唯ちゃんへの思いが強いわ

けじゃない？

ヒント、母さんにはつかめてきたな」

「い、いや、そういうわけじゃない!! ぶっちゃけ、恋とは違うような、気もするんだ……」

目をぱちくりして、母は、

「はー? ……ま、今晚じっくり考えなさい。私も明日、早いから」母は部屋を出ていく。

「あ、お風呂入った後悪いんだけど、ゴミ捨ててきてくれない?」

「あ、大丈夫……そして、ありがとう」

誠は、心から微笑んで答えた。

マンションのゴミ捨て場は、入口から少し外れたところにある。

秋の夜空の中、ほんのひと囲いの屋根付きの仕切りの中で、1つの電燈がともし、そこに何匹かの蛾がたかっている。

その中で、誠は両手に透明なごみ袋を持って、端っこに放り投げた。

「伊藤……」

聞き覚えのある声が、耳に入った。

振り向くと、滯。

「……秋山さん」

思わず彼は、答える。

ゆつくりとゴミ捨て場から出ていくと、マンションの灯りが、濡の真剣な顔を照らしていた。

2人の横で、マンションの煉瓦が、2人をにらむかのように立っている。

誠が目を合わせると、濡は一瞬顔を赤らめ、そっと目を背けた。

「……」

彼女は再び真剣な顔になり、口を開いた。

「伊藤、頼みがある」

「え……」

「貴方が、辛いのは」濡の目に、憐みの表情が混じった。「貴方が辛いのは、とても分かる。」

唯や桂や西園寺の板挟みで苦しんでいたということ。

あんな父親を持つていること。

父親のようになりたくないということ。

でもね、貴方の優柔不断のせいで、唯や桂がとても傷ついたというのには、気づいてほしいんだ」

「……それは、分かってました。」

「……そうか。ならいいんだ。でもこれだけは頼みたい。」

唯と桂には、傷つけたことを一度、謝ってほしい」

「……謝る……」

「私は、貴方に悪意はなかったと信じたい。そして、唯にも桂にも、誠実な思い一筋だったということも」

誠は暗い顔でうつむき、ボソリとつぶやいた。胃が痛かった。

「ねえ、俺って、生まれぬ方が良かったですか……？ 親父から異常性欲を植えつけられた挙句、唯ちゃんも言葉も世界も傷つけて……」

滯も思わず、黙ってしまった。

薄暗い明かりの中で、鈴虫の声だけが響く。

電灯に集る蛾は、ぐるぐると明かりを回っていく。

やがて、滯がほほ笑みを浮かべて口を開いた。

「いや伊藤、貴方は生まれてきてよかつたんだ。死んでいいわけがない。貴方が死んだら、唯も桂も悲しむ。」

貴方だけじゃないよ。生まれてきた人間の中で、死んだほうがいい人間なんて、一人もない」

「秋山さん……」

誠の心のうちの氷が、溶け始めていた。

「人間が生きている限りは、必ず過ちを犯す。多分伊藤も私も、これから星の数ほど間違いを犯すと思うんだ。」

でも間違えたら、その都度気づいて、反省して、そこからやり直せばいいと思うんだ。そうやって人は大人になっていく。チェリー卒業とかそういうのじゃなくて」

「でも、俺はさんざ迷って、今も好きな人を誰か選べなくて……」

「伊藤、貴方の選ぶ人だ。どちらでもいいんだよ」うつむいた彼の顔を覗き込むように、漣はシリアスな眼差しを向け、重ねて言った。「でも、これだけは頼む。2人には、謝ってくれ」

少し時間が流れた後……誠は顔を上げ、口を引き結んで、言った。

「わかりました」

「ありがとう。これだけが言いたかった」

漣は満面の笑みを浮かべ、そのまま踵を返して、外の闇の中へ消えていった。

漣と別れた後、部屋に戻り明かりを消して、布団にくるまる誠。

仰向けになると、黒く輝く蛍光灯が、天井に浮かんでいる。

振り子のように動くひもを見ながら、彼は物思いにふけっていた。
いち早く心配したのは、唯ちゃんのことだった。

バカ親父に狙われたということもあるんだろうけど……。

母を捨て、唯ちゃんの先生を襲い、そして、自分に呪われた血を押しつけた、恨み骨髄の男。

もちろん、それもあるが……。

真っ先に心配するのは、唯ちゃんということに、いつの間にやらなってきた。

言葉も甘露寺たちに狙われているというのだから、心配だけ……。

なおかつ先に、唯ちゃんが浮かんだ。

大きな存在になったのは確かだけど……

恋心とは、違う気がする。

結婚したいとかそういうのではなくて、

ただ……そばにいて……

自分を笑顔にしてほしいような……。

その笑顔を汚すものは、許さないというか……。

2人とも、大丈夫だといいいんだけどなあ。

……

あれこれ考えるうちに、
気の遠くなるような睡魔が襲い始めた。

続く

第11話 『猛撃』

朝の陽ざしどころか太陽までも現れず、外は夕闇とみまごうぐらい、ネイビーブルーになっていゝる。外からは新聞配達バイクのエンジン音や、鶯の鳴き声だけが響き渡る。

クマのぬいぐるみなど、いかにも女の子な趣味というべき、唯の部屋。

まだ4時半にもならないうちに、唯は目覚めてしまつていた。

彼女の頭に響く、あの声。

『償いたたいのは、俺の方だよ。親父のしようとしていることも含めて』

『誠のそばに、いてやってください』

無意識のうちに、足を大きく振つて、反動で起き上がる。

学生服に着替え、猫のような足取りで階段を下りていく。

靴を履こうとするとき、茶色い靴を間違つて蹴つてしまう。

カタン、と音が鳴るが、誰も起きてこない。

2階に向かつて手を合わせ、外へ行き、鍵をかける。

なぜこうしているのか、自分でもわからないが。

只一つ。

マコちゃんに会いたい。

それだけが、唯の頭の中を占めていた。

カーテンに光が差し込み始めた。

が、青い床、白い壁の誠の部屋は、暗い。

尿意を催し、誠はフラフラと起き上がった。

用を足して戻つてくると、白い充電器にかけていた自分の青い携帯が、音のない振動を鳴らしている。

隣の時計を見ると、まだ早朝。

こんな時間に、誰だ？

不機嫌にメールを開いてみた。

『おはよう。いい朝だね。』

マコちゃんちの窓から、下見てみてよ。

唯』

「唯ちゃん……う？」

半信半疑で窓を見た。

息をのんだ。

唯が学生服で、左手を振っている。

「おはようー！」

どうなってるんだと思いつつも、急に不安が誠の頭をよぎって、急いで深緑色の普段着に着替えて外に出た。

「おはよう!!」

元氣よく声をかける唯だが、誠は全速力で駆けより、

ガッ!!

強く唯を抱きしめていた。

思わず頬を染め、恍惚となってしまう唯。

「……マ、マコ……ちゃん……?」

「だいじょうぶ? 何ともなかった?」

「え……何ともなかった?」

「親父のこと」

「マコちゃんのお父さんは、全然見かけなかったよ」

「そ、それはよかった……」

とはいうものの、誠も困った。

母も熟睡しているだろうし、まさかたたき起こすわけにはいくまい。

恍惚としていた唯は、無意識のうちに、誠の背に自分の腕をまわしていた。

彼は、思わぬ唯の行動に頬を赤らめ、

「あ、あのさ、唯ちゃん……」飯食べてきた……？」

「あ、そうだねえ。行くときにおなかすかないように、バームクーヘン1個食べてきたけど……」唯は頭をポリポリ掻きながら、「意外とおなかにたまるから、しばらく食べなくて大丈夫だよ」

「そう……」

ああ言つてはいるものの、1時間もすればすぐに腹が減るだろう。

誠は考えた挙句、

「あ……じゃあ俺が作るから、家でゆっくりしててよ」

「え、でも……」

「遠慮しないで」

唯から離れた後、誠はマンションの入り口まで、唯の手を引っ張って連れていく。

おそらく親父は、唯を狙っているだろう。

家の中で少しかくまうだけでも、いいのではないか。

かたや唯は、胸がドキドキしてしやうがなかつた。

つややかな檜のイスとテーブルがある、リビング。

壁に手作りパンの写真も飾られてある。

真つ赤なケチャップのかかったスクランブルエッグを作り、青菜やパンと一緒に差し出す。

「うわあ、おいしそう!」

「普通のスクランブルエッグだよ」

目を輝かせる唯に、誠は笑いながら答えた。

母さんは起きてないだろうか。

一方唯は、もじもじとちよつと恥ずかしげに、何か言いたげに、上目遣いで誠を見ている。

「ん……どうかしたの……?」

と、誠。

そわそわするのをやめ、唯はゆつくりと口を開き始めた。

「あのね……今日だけでも……学祭だけでもいいから、私と……付き合ってくれない?」
誠は、迷った。

学祭で一緒に女の子を連れていくということは、付き合っているということを証明す

ることにもなる。

それを皆に見せるということは、つまり……。

だけど、目を離したら、そのすきを見て親父が狙ってくることだろう。

迷った挙句、彼は、答えた。

「いいよ」

「ほんと！　ありがとう!!」

喜びでいっぱいになり、思わず唯は、誠の首に抱きついた。

そこから誠の顔を見ると、頬が紅潮しているのが見て取れた。

「ふふふつ。マコちゃんってかわいいねえ。」

「か、可愛いつて……そんな……。あ、それと、ご飯はおかわりしていいから」

ドギマギしている。

「朝っぱらから何騒いでいるのよ……今日も夜勤なんだから、少しは親に気を使いなさいよ……」

母の部屋から、不満げな声。

それと共に部屋から、誠の母が出てきてしまった。

どうやら起きてしまったらしい。

「ぐっ、ぐめんなきいつ!!」

唯は思わず深々と頭を下げた後、そこから正座の姿勢となり、誠の母の目の前で土下座した。

「私、マコちゃんやマコちゃんのお母さんに、迷惑をかけるということは分かってたけど……どうしても、どうしてもマコちゃんに会いたくてっ!!」

言つてから唯は、ゴツンと額を床にぶつけた。

母も言い過ぎたと思つたのか、

「あ、別に……気にしなくていいわよ。あ、そうだ誠、ちよつとこつちへ」
誠は、しづしづ母に従つた。

自分の部屋で、母は誠に低い声で問う。

「いったいこれ、どうなつてるの……?」

「しょうがないじゃないか。俺が起きて窓をのぞいたら、唯ちゃんが来てたんだ。
このまま外においておくわけにはいかないだろう?」

「それもそうね」

「それに、このまま一人にさせていたら、親父は絶対、狙つてくるだろう……」

親子ゆえか、父親の行動が目には浮かぶように、誠には感じられた。

「あなたも、」母は誠に、「唯ちゃんのことを好きなのね……」

誠は、頬を染めてうなだれ、

「そ、そうだよ……。でも、俺にはほかに……」

「まあまあ、もし、唯ちゃんへの思いが、本当に強いのであれば、世界ちゃんや言葉さんだつてわかつてくれるでしょう。」

私は後で食べるから、唯ちゃんに世話してあげなさい」

「あ、ありがとう……」

「どうでもいいけど、無精ひげがそのままよ」

いっとなつて、顎のあたりをなぞると、中途半端にひげが生えている。

「やっべえ、唯ちゃんにかっこ悪いところ見せちゃったかも」

「ま、あんな態度じゃ気にしない口でしょう。急いで剃ってきなさい」

母の厚意に甘え、急いでひげをそり、誠は唯と一緒に、向い合せて食事をする事になった。

外はようやく、濃紺から快晴の青に変わろうとしている。

「ねえねえ、これマコちゃんが作ったの？」

誠の作ったスクランブルエッグを食べながら、唯はテーブルのバスケットに入っている物を指さす。

唯と誠をはさんで位置している、鳥の巣のようなバスケット。

その中にあるのは、自分が暇にまかせて作った、沢山の七宝焼きとシルバーアクセ。種類も、ブローチからペンダントまで、沢山と言っている程ある。

「そうだよ。それはシルバーブレイで、粘土のように形ができるんだ。割と簡単に作れるんだよ」

誠は穏やかに答えた。

母の趣味で、自分も子供のころから作っていたが、いまでは素人が作ったものとは思えないほどに形が整い、ブローチやペンダントとして、一応なしている。

本来ならこれは……学祭の日、強いきずなの証として、世界に渡すはずだった。

それが唯ちゃんと会ってから、曲折の末、結局世界と絶交状態となり……。

今頃彼女は、何をしているだろう。

また傷ついて引きこもっているかな？

バスケットの中でキラキラと輝いているアクセサリーを見ながら、誠は思いを巡らせた。

「ねえ、これ一つもらっていいかな？」

再び唯が、白銀色の指輪を指さして問う。

たしかに、沢山つくって沢山余してたから、渡すのも悪くなくろう。

「うん、いいよ」

「やった！ありがとう!!」

ガタンッ！

思わず唯は立ち上がり、テーブルの紅茶をこぼしてしまふ。

「唯ちゃん、またこぼしてるじゃん。それに、ほら、口にスクランブルエッグがついてる」
「あはは……」唯は苦笑いをしながら、誠の手が動くより早く、ティッシュで紅茶を吹き、スクランブルエッグをとった。「ベラ・ノッテの時と同じ。いつもこぼしてばかりで、だめだよ……」

「ううん……。むしろあの時のままのほうが、唯ちゃんらしくっていいよ」むしろ微笑む唯が、誠にとっては微笑ましかった。「あのさあ……。どこいこっか」
「どこって……。やっぱり学祭でしょう」

唯は、何をいまさらといったような口ぶり。

「あ、でもまだ学祭あいてないし」

「関係ないよ。マコちゃんと、いろいろな場所を見てみたいんだ」

「……でも……」

学祭。親父が狙ってくるのは目に見えている。

多少頭を抱えながらも、片手で近くにあったフリーペーパーをばらばらめくり、ピン

と思いついて、

「まずはさ、榊野ヒルズに行ってみない？」

「榊野ヒルズ……そう言えば、いろいろと楽しめるところなんだよね」

「ああ、プラネタリウムとか、アクアスクエアとか、いろいろ遊べるところなんだ」

以前、誠は何回か行ったところのある場所。

言葉や世界と水泳したのを覚えている。

「どうしようかなあ……学祭前に行くのも悪くないかも」

単純に考え、唯はOKした。

「じゃ、行くとしますか」

誠は内心、ほっとする。

出発する直前、誠は、シルバーアクセのペンダントと七宝焼きのブローチを一つずつ取って、学生服の上着に入れた。

そのころには、夜が明け、隣のガソリンスタンドにも光がさしている。

唯は左腕を誠の右腕に組ませながら、うきうきと歩くことになった。

隣の誠は携帯で、今日の学祭の手伝いを休むことを話している。

携帯電話から聞こえてきたのは、詰り声。

「頼むよ、中曾根……。ちよつと事情あつてさ。」

親父が来て、その対応をしなければいけないんだからさ……。そこをなんとか、残りのメンバーで頑張ってくれよ。三木や大平も、泰介だつているだろ……。

何、泰介や世界、それに清浦も休み？……。世界はともかく、泰介は何やつてんだか……。

な、頼む。後で掃除当番でも何でも引き受けるから！ ね!!」

あとの片づけほど、学祭で大変なものはないが、それでも唯ちゃんが親父に手籠めにされるよりはましだ。

誠はそう、強く思った。

一方の唯は、気になつてしようがなくなり、

「……休み、もらえた……？」

誠はすぐに、さわやかな笑顔を唯に向け、

「何とかもらえたよ。ただ、学祭後の後片付けを俺が引き受けることになつちまつてな」

「ほんと、ごめんね……」唯は上目遣いになり、「私のために、マコちゃんにずる休みさせることになつちやつて……」

「大丈夫だよ。親父が来たから、その対応をしなきゃいけないというのは、当らずとも遠からずだし」

唯は昨夜、止がむけたどす黒い目と、あの男が自分の体を触っていたのを思い出す。「あの人も……来るのかな。」

「あ、ごめん……思い出しちゃった……？　少なくとも今日1日は、俺が面倒見てあげるから。」

安心しなよ」

誠はふいと思いついて、

「たぶん親父は、榊野で唯ちゃんを待ってると思うんだ。少なくとも今日1日は、行かないほうが身のためだよ」

説得を試みたが、

「ううん……、」唯は首を振って、「私、マコちゃんと本当の恋人になりたいから……。学祭の中で、きずなを深めたいの……」

何かを探るように、手をもぞもぞとスカートのポケットに入れている。

誠は、歩きながらじつと考えて……。

言葉に、メールを送った。

「あれ、唯——！」

「おねーちゃん、どこにいるのー??」

本来なら家族みんなで、食事にありついている平沢家。

だが今回は、そうはいかなかった。

唯がいなかったからである。

「どこいったのかしら……。憂、わかる？」

憂の母が、彼女に問う。

「どこ、か……。そうだ」

憂が思いついた時、

ピンポーン。

玄関の呼び鈴。

憂はだれよりも早く動き、応対した。

「はい、平沢です」

『おや、唯ちゃんはいるかな』

憂は呼び鈴の声で、背筋が凍ってしまった。

沢越止の声。

「……お姉ちゃんは、外出してます……。たとえても、貴方には渡しません」

唸るような憂の声。止も不快になり、

「俺は狙った獲物は逃がさないたちでさあ。後悔しても知らないぞ」

すぐに切ってしまった。

「誰から？」

聞いてくる母に対して、憂は、

「何でもない」

とだけ、答えた。

一人で唯の家まで来ていた律は、家のドアの前にいる男を見て、息をのんだ。

肩までかかる長髪、筋骨隆々。

どす黒く濁った眼が、そちらをむく。

まぎれもない、沢越止。

「……何の用だ。わざわざ唯のところまで来て」

気がつくくと、律の声が一オクターブ低くなっている。

「何って、唯ちゃんに会いに来たのさ」

止の声は、悪びれていない。

「待ちなさい!!」

ドアから憂が、あわてて出てくる。

「お姉ちゃんがどこにいるのか、大体の察しはつくけど……貴方には教えない」

「おいおいおい……いいのかなあ、そんなこと言って。ま、君も可愛いから代わりにはないらうけど」

絡んできた止の手を、憂は払いのけ、真剣な視線で睨みつける。

「おばさんの言う通り、噂通りだったな」

律は思いつきり、止のことをなじっていた。

「お、君もいい体してるしよう……」

気がつくとも止の手が、律の背に触れている。

「くっっ！」

怒り狂った律。無意識のうちにトーキックを入れていた。

「あが——————っ!!」

止の股間に当たったらしく、奇声をあげながら、金的を抑えて止は逃げ出した。

「……ったく、しつけえ野郎だ。で、今回はどうしたんだ？」

息づきながらも律は、憂に問う。

憂の目は、赤い。

「お姉ちゃんが、朝起きたら、いなくて……」

「はー？」思わず律は、唾然となってしまう。「いったいどこに行きやがったんだ？」

「何となく、察しはつくけど……」

憂が曇った表情で向いたのは、誠の家がある方角。

律もすぐに察し、

「……伊藤さんところか。ほんと唯の奴、どこまであいつにこだわるんだ……」

「……律さんが伊藤さんに近づくなと言うから、お姉ちゃんはかえって怒っちゃったんじゃないんですか？」

「正直、あいつを警戒するに越したことはねえと思って、言っただけだよ」律はこめかみを押さえつつ、「……悪かった。とりあえず、先回りして榊野に行くとするさ。いずれ濡も追い付くだろうし」

「待つてください。濡さんは、甘露寺って人に狙われてるんじゃないんですか？」

「大丈夫だ。濡ファンクラブの人に、濡をガードするように頼んでいたから」

「……ならいいかもしれませんが……。この分だと、榊野評はガタ落ちですねえ」

「私は先行って、学祭の様子を見てくる。それと、西園寺にも電話しねえと……」

「西園寺さん？」

「メールで知っただけだよ」律は真顔で、「西園寺は、あの沢越止が外に作った子供らしい」

「え……？　じゃあ伊藤さんと西園寺さんは、血を分けた兄妹ってこと？」憂はあり得な

いといった顔つきで、「一昔前の昼ドラじゃあるまいし、まさか……」

「その『まさか』らしいぜ。あんとき消極的だったのも、そのためのようさ」

「そうですか……」憂は沈痛な面持ちで、「西園寺さんも、なんだか可哀想ですな……」

「ま、どれもこれもあの沢越止が悪いだけだよ。人間には多かれ少なかれ、運命つてもんがあるしな……伊藤も西園寺も、それを乗り越えるしかねえよ」

「……ま、私達はそれを自覚することもなく、のほほんとやってきたけどね」

「まあ確かに」苦笑いしながら、「滞から聞いたんだが、伊藤は親父のことですつと悩んでいたらしい。それが事実なら、伊藤は一番、運命を自覚してる気がする。

……んなことどうでもいいか。とりあえず、西園寺にも手助けしてもらわねえとな。

梓の野郎、もう榊野には行きたくねえ、生徒たちとも関わりたくねえって、だだこねてやるし……」

「そうなんですか、梓ちゃんが……」

憂は眉をひそめる。

「しようがねえよ、頼れる人には頼ったほうがいいさ」

律は世界に電話をかけた。

古い、黒ずんだアパートの1階。

四畳半ほどの自分の部屋で、世界は布団にくるまったまま、すすり泣いていた。「世界……」

その傍らで、刹那が憐れんだ表情で見ている。世界の母は、仕事に行った。ピリリリリ……

世界の携帯から鳴る、着信音。

取ろうともしない彼女に代わり、刹那が取る。

「はい」

「ああ、西園寺！……じゃなくて、清浦か」

携帯から聞こえたのは、甲高い律の声。

「田井中さんですか？」

「ああ、そうだ。実はよ、沢越止って知ってつか？」

「さわごえ？」

「西園寺から聞いてねえのか。要はセクハラおやじだよ、唯がそいつに狙われているのヤ」

「……そうなんですか」

低い刹那の声。

「何とかしてあいつを守ってやりたいんだけどよ、あんたや西園寺も手を貸すこと、でき

ねえかあ。唯を応援してるんだろ？」

しばらく、刹那は黙っていたが、やがて口を開いた。

「お断り、します」

「はあ……？」

「私もつかれた。もうこれ以上、平沢さんも桂さんも利したくないんです」

「を、おい！ 西園寺は応援してくれるんだろ!? なぜ唯を助けようとしなんだよ!」

「世界も、もう絶望と言うことが完璧に分かっていて、シヨックでまだ立ち直れないんです。いったん落ち込むと、なかなか立ち上がれないし」

「そんなの……」律はすこし考えてから、「じゃ、じゃあさ、梓だけでもちよつと説得してやってくれねえか」

「中野に?」

自分の気にする相手だったが、口調はあくまで飄々とするようにしている。

「あいつ、もう榊野に行きたくないって、駄々こねてるしき。何とか清浦の方から、説得できないかねえ」

「見た目通り、子供っぽいんだね……」

「ああ」

「私も以前、背の小ささで子供っぽいとか、からかわれたりしたんだけど、学級委員に

なったらそんなこと言われなくなりましたよ。見かけによらず臆病なんだ」

「あはは……」律の苦笑いが、耳の中で響く。「そうなんだよね……」

「とりあえず中野と、携帯のデータは交換したよ。できる限りのことはやってみるけど、期待しないほうがいいです」

相変わらず冷たい声。律は苦笑を続け、

「分かった、一応頼みだけは聞いてくれるんだ。それともう一つ」

「ん？」

「伊藤の電話番号、教えてくれねえか？ 沢越止は伊藤の親父でな、伊藤はあいつを面倒がってるんだ」

「……悪用しない？」

刹那の声が、急に低くなる。

「しねえよしねえよ。な、伊藤を助けると思ってたさ」

「なら、いいけど……」

半信半疑の状態で刹那は、律に誠の電話番号を教えた。

律との電話を済ませた後、刹那は梓に電話をし始めた。

「もしもし、梓はただ今冬眠中でーす」

けだるげな梓の声。

「今は秋」

「じゃあ秋眠……つてそういう問題じゃないし……つて、清浦!？」

「反応が遅い」表情を全く変えずに、刹那は話を続けた。「田井中さんが、沢越止つて人から平沢さんを守るように、協力してほしいんだつて」

「……さつき律先輩にも同じことをいいました。もう唯先輩のことなんか知らないつて、伊藤や桂にも関わりたくないつて」

「でも……」刹那は少し考えてから、「それで軽音部がめちやくちやになつてもいいの?」「は……?」

「伊藤には伊藤の、桂には桂の思いがあるんだし、平沢さんや秋山さんだつて、あの2人のことが好きなんですよ」

「うん……」

「ならば私達で、お互いの思いをなだめる必要があるでしょう。あの2人が暴走しないように……」

「こつちはすでに暴走してますけどね……」

「ならば、それを止めるようにしないと」

「もう遅いです」

「そうかなあ。……とりあえず、平沢さんや秋山さんはどこ行ったの？」
「わかりません」

「そうだよね……。でも、多分榊野には来ると思うんだ。私は世界の面倒を見なくては
いけないけど、先に榊野で待っていてほしい。」

「じゃあ、後でね」

刹那は相変わらず、淡々とした声。

梓は、何も答えなかった。

その後、刹那は檜の柵から、ガイドブックを取り出して、

「気晴らしに、どこか行こう……」

「……どこにも行く気に、ならないよ……」

「でもまあ、街をぶらぶらしてれば、気分転換にはなると思うし……。どこ行こうか
……」

刹那は、ガイドブックを読みながら、

「榊野ヒルズ、行こうよ。世界だって、K A R Aのうちわやポスターを血眼になって探し
ていたでしょ」

「……」

世界は、ゆっくりと起き上がった。

珍しく、滯は寝坊をした。

「わあ！ 遅刻遅刻!!」

休日なので、滯を起こそうとする人もいない。すでに両親は外に出てしまっている。

あわてて学生服に着替え、家を飛び出した。

空はすっかり晴れている。

が、家の前の白い門から出ようとした時、

ドンツ

横からにゅつと足が飛び出て、彼女は転ばされる。

「な、何すんだ!!……!!」

滯は足の出てきた方に向いて、思わず息をのんだ。

4人の女子生徒がいた。

黒い上着に赤いスカーフ、黒いスカートという、榊野の学生服。

皆、血走った目をしているが、1人のセミロングヘアで、茶髪を後ろで束ねた背の

高い女は、何もしなくても威圧感を放っている。おそらく彼女が頭領だろう。

「なるほど、確かに七海さんの言う通り、あのフェロモン女に似てるわ……」

そのリーダーは、答える。

「……あんた達、それは私が、桂と親しくしていることへの仕打ちか」
毒づく滯に、

「まあね」別の短髪で、背の低い女の子が答える。「あんな男受けばかり良い女を、気に入るあんたもあんたよね」

「私は……私のしたいことをしているだけだよ……!」

「聞き直るのかい？」リーダーがずっと進んで、見下すような視線で言う。「なら、容赦はしないよ」

「くっ……!」

話を通じないと悟った滯は、何とか正面突破しようと駈け出した。

ガッ

またも足を引つ掛けられ、高転びに転ばされる。

「ま、ここでは人目につくから、こっちへ来なよ」

リーダーに襟首をつかまれて起こされ、引きずられ、連れて行かれる滯。

鼻を強く打って、血が出ていた。携帯も道端の道路に転がる。

「く……桂……!」

1人の桜ヶ丘生徒が、それを目撃し、あわてて横に引つ込むのを、滯はみてとった。

小さな川の、人気がないところ。

コンクリートの間に雑草こそ生えているが、それでもコンクリートの灰色が目立つ。そのほとりに、濡は連れて行かれた。

草っぱらにはおり投げられ、皆からのヤクザキックをドツドツと受ける羽目になった。

「桂から手を引かなければ、ずっとこの調子だからね」

リーダーが見下すような視線で、濡に吐き捨てた。

「ぐっ……！ 気になる人に気を使って、何が悪い……!!」

濡は歯ぎしりしながら、呟くように言い返す。

最初は手足を使って懸命に抵抗していた彼女だが、いかんせん多勢に無勢。

無茶苦茶に頭や横腹を踏みつけられ、蹴りつけられているうち、頭もぼんやりとしてきた。

言葉から手を引いた方がいいか。

そんな思いがもたげそうになった時。

第三者の声があった。

「貴方達、何してるの!?!」

皆、そちらを向く。

15人ぐらいの女子生徒が、そこにいた。全員紺色の上着に胸元にリボンという、桜ヶ丘の学生服。

「あんた達、何者かねえ。これはこつちのことなんだ。部外者はちよつかい出さないでもらいたいな」

いじめっ子のリーダーが片方の眉を上げて言うが、

「そうはいきません！ 私達はこの人のファンですからー」

茶髪でロングヘア、ややつり目のファンクラブの会長が、ずいっと進み出た。後の皆は数に任して、4人しかいない榊野生徒につかみかかる。

ぐいぐいと押し合いへしあいだったが、そのうちに榊野生徒が倒され、ファンクラブの部員がそれを抑えつけるという形になった。

「秋山さん、大丈夫ですか!?!」

その隙に、濡ファンクラブのリーダーが、土にまみれた濡に駆け寄った。曾我部さん、ありがとう！ 大丈夫だと言いたいところだけど……。

それにしても、元生徒会長の貴方がファンクラブの一員だったなんて」

よろよると、制服についた土埃を手で払い落しながら、濡は立ち上がる。

制服は土だらけだし、顔もところどころ蹴られて、右目のあたりも痛い。

「あはは、恥ずかしいけど会長なのよ。

秋山さん、目にあざが……。それにしても榊野って、ずいぶん荒れているのね。統合しちやったらどうなるか不安だわ……」

「あははは……まあね……」

パンパンと衣服に付いた土を洗い落とし、曾我部から携帯をもらった。

もみ合っているファンクラブメンバーと七海一派を見て、

「そつちが片付いたら、私のところについてきてくれ。実は気になる人がいて……」

「桂言葉さん？」

曾我部は、彼女のことを知っているようだ。

「どうして知っているんですか？」

「田井中さんから聞きました。胸が大きくて、田井中さんはちよつと気にくわないうって、言ってたんだけど……」

「律のことはいい。桂の住所はあとで送っておくから、助けてやってくれないか。」

こいつらに狙われているんだ」

言い終わらないうちに、濡は走り出した。

幸い、住所は最初のアドレス交換の時、一緒に登録されていた。

鼻と目のあたり、それがまだ痛んでおり、口からも血が流れているが、そんなの気に

している場合じゃない。

そして、濡ファンクラブの人と、七海の手下が1対1でもみ合っている間に、間を縫って突破し、言葉の家へと急いだ。

曾我部と一部の会員達もあとからついて行く。

「そう言えば秋山さん」曾我部が、「木下さんと立花さん達が学祭に行つた後、『止さん、よすぎる』とフラフラしながら桜ヶ丘に戻つてきたんですがね。

その止つて男に襲われた可能性が高いのですが、何者なのか、秋山さん知ってます？」
止！

濡の中で、ぞつとするものが走つた。

桜ヶ丘の子も狙われたのか……。

「……いや、知らない。とりあえず、まずは桂を助けることに集中しよう」

濡は、それこそ一心不乱に走りだしていた。

考えないようにしたかった。

言葉は、その日は早起きした。

両親は仕事で早く出かけてしまい、妹の心と2人きりになっていた。

十八番のレモネードを作り上げ、メタリックの500ml水筒に入れる。

「いよいよだね、お姉ちゃん」

からかい半分に、心が言葉に声をかけてきた。

「本当なら昨日、あのまま誠君と一緒に過ごしたかったけどね。でも、今度は大丈夫」

昨夜こそ多少落ち込んだものの、言葉はしっかりと自信を取り戻していた。

「心、カメラの準備はできてる?」

言葉は穏やかな顔で尋ねる。

「大丈夫だよ。これでお姉ちゃんと誠君が踊っているのを、キャンプファイヤーをバツ

クに撮ればいいんだよね」

「そうよ。ずいぶん後になるけど、大事だから。ありがとう」

安堵の微笑みを浮かべる言葉。そのままきらびやかな玄関に行く。

「誠君、また平沢さんにフラァっと目移りしてないといんだけどなあ」

心は、心配げな表情。

「大丈夫。先手必勝。多分あの子は朝起きれないし、家も私のところよりは遠いから。」

言葉は唯のことをあまり知らないが、勘で話をする。「先に誠君ちに行つた方が勝ち。」

「だといいいんだけど……」

その時、言葉の白い携帯から、音のしない振動がする。

「誠君からだ。……え……?」

うきうきしながら携帯を取った言葉の顔が、青ざめてゆく。

誠からのメールには、こう書いてあった。

『ごめん。今日はちよつと学祭に行けなきそうだ。

唯ちゃんがうちに来て、親父に狙われている唯ちゃんを、守らなくちゃいけなくなっちゃって。

唯ちゃんのことを一番好きってわけじゃないけど、今はあの子を守ってやりたい。

『誠』

「平沢さん……どうして……!」

「お姉ちゃん、どうしたの?」

例のごとく心が、ちよつかいを出してくる。

「平沢さんが、誠君ちに来て、誠君は平沢さんを守ってあげたいって……」言葉は不安げな声になりながらも、「とりあえず、先を急ぐから」

あわてて玄関のドアを開け、日本庭園のような庭を駈け出し、道路に出る。
が。

「……!!」

体格のいい女生徒3人に、取り囲まれてしまう。

「あんた、まだ伊藤に付きまとってるの?」

その3人のリーダーである短髪の女子生徒が、言いがかりをつけてくる。

「関係ないです。私は誠君の彼女ですから」

「まだそんなこと言うのかい!? あんたがそんなだから、西園寺さんも根負けしちゃったんじゃないのかい? 七海さんの話じゃ、西園寺さんは家で落ち込んでいるとよ」

「知りません! そんなの!!」

ムキになって言い返す言葉だが、長い髪をつかまれてしまう。

「わかってないねえ! ま、ずっとむかつく奴だったけどさ、あんた!」

そのままぐいぐいとひきずられていく。

心は、姉の様子をずっと見ていたが、我慢しきれず外に出て、

「お姉ちゃん!」

「大丈夫、私は大丈夫だから……。それより早く、原巳浜に行つて! ひよつとしたら誠

君も電車に乗り込むかもしれないから!」

泣きそうになりながらも、心は、

「う、うんっ!!」

と、七海の手下に気づかれないうよう、すぐに横に隠れてやり過ごし、原巳浜駅に向かった。

「……世界の奴、やつぱり休みか。」

日がようやくやく、地面のコンクリートや校舎の壁を明るく照らし始めたころ。

学校の正門で、七海は壁にもたれる形で待機していた。

傍らには、子分の男子生徒がいる。五分刈りで、小柄。

「しかし、本当にあのムギって人、来るんですかねえ」

子分が七海に尋ねる。

「大丈夫、きつと来ると思う、ムギさんは」

「それにしても、七海さんを信用していたムギさんを、あんな形で引き入れなくてもいいんじゃないかったんですかねえ……」

七海は一瞬、唾を呑んだが、すぐに平静を装って、

「二種の賭けさ。大人しい子だから、ちよつとすればこちらになびくと思っていた。

……ともあれ、やってみると結構後味が悪いし、まさか世界が伊藤をあきらめちゃう

とはな……」

「……ま、俺も伊藤みたいな顔だったら、もつといい生活を送れたかな、なんて思うけど

……」

「顔よりハートだろ。少なくともハートはあんたの方が上。とにかく、世界の思いを、尊

重してやらなきゃな……」

「じゃあ、中止にしないと……」

「いや、続ける」七海は悪びれていない。「もともと桂には嫌な目にあわされつばなしだし。」

ところで、昨日の『黒子のバスケ』見たか？　ようやくアニメ化されてうれしいんだけど……」

言いかけた時。

呆然となつてしまう。

目の前に、ムギが来ていた。彼女が来ていたのには驚かないのだが、
両隣に、スキンヘッドでサングラス、スーツ姿で黒ネクタイの男が2人。

無表情だが長身で、ガタイもいい。

「あ、おはよう、ムギさん……その人たちは……」

「甘露寺さん、こちらは私の会社のSPです」

「え、SP!？」

「驚かなくていいですよ。ほんの1000人連れてきただけですから。桂さんをとらえるためには、このくらい必要でしょう」

SPの男がひゅうと指笛をならすと、あとから同じような顔の、同じような体格の男が何人も出てくる。

何グループ、何百人と。

「まだ沢越止の逮捕状は出てないけど、準備しておくにこしたことはないわ。みんな位置について」

「了解」

ザッザッザッザッ。

SPたちは、冷徹なムギの声に返事した後、物々しく校舎内に入っていく。その中には、校庭や校門に位置して、動かなくなる人もいる。

七海達はそれを唾然として見送った。

「あたし、とんでもないやつ味方に引き入れちゃったかなあ……」

七海の呟きを、ムギは聞きとり、

「大丈夫です。貴方が私にしたことは黙っててあげます。」

私は貴方のことが、好き『でした』から」

そう言つてムギは、SPのリーダーのところに行く。

「やっぱり、あたしを恨んでるよな」

七海の声も、聞かないままで。

SPは学校のいたるところに配置され、生徒達がげんな表情で見えるようになってい

る。

皆無表情だが体格がよく、グラサンをかけたスキンヘッド。

梓はこっそりと榎野の校門まで来たが、入口だけでSPが6人ほど後ろ手で待機しており、その多さに唾然となった。

「中野、」同じく待機していた七海が、梓に声をかける。ムギはすでにどこかへ行ってしまう。」「あれはムギさんの会社のSPみたいなだけだ。」

「ムギ先輩の……?」

呆然となった梓は、思わずムギの携帯に電話してしまう。

「もしもし」

「あ、梓ちゃん?」受話器の中のムギの声は、結構しつかりしている。「今会社のSPと話し合っているところ」

「SPはわかるけど」梓は呆れつつ、「何でこんなにSPが多いんですか? 絶対皆怪しい目で見ますって」

「大丈夫。それに沢越止を逃がさないためには、これくらい必要だから。すでに桜ヶ丘生徒の一部が、彼に襲われたって話だし」

背筋に寒気を走らせ、梓は電話を切った。

「ムギさん、なんて言ってた?」

七海が気になって聞いてくる。

「沢越止……って知らないよね。お尋ねものがこの榎野に来たんで、捕獲して警察に突き出すつもりらしいの。甘露寺も気をつけたほうがいいかもしれないな」

「そうなのかあ……」七海は顔をしかめ、「じゃあうちらも、ひよつとしたら桂がどうのこうの言ってる状況ではなくなるかもなあ……」

「まだ、桂に何かするつもりなんだ」

梓はちよつと不服だが、正直今は、沢越止や桂よりも、唯先輩のことが気になる。

直接電話しようとした。

……。

が、通じない。

「ああもう、唯先輩は何をやっているのやら」

苛立つて今度は、律のところに電話をする。

「あ、もしもし、律先輩ですか。」

「梓か……。どうした？」

「唯先輩、どうしました？」

「それはね……」

律は、今まで起こったことのすべてを話す。

沢越止が唯の家をマークしていたこと、運よく唯はその時留守だったこと。

誠の家に行つてると考えられること。

「そんなにしつこいんですか、沢越止は」

「そのようだな。正直今は、伊藤にすべてを任せるしかないのかもしれないねえ」

「あんなヘタレな奴に……。ムギ先輩もSPを用意してきたのに……」

梓の寒気は、さらにひどくなる。

いつそのこと、自分で唯を守つてやりたい気もしたが、さりとてどこへ行つたのかもわからない人を特定するなんて、できない。

具合の悪くなった梓、電話を切る。

「どうだつて?」

七海が口をはさむ。

「沢越止が唯先輩を狙っているつて。唯先輩は、ひよつとしたら伊藤のところにいるかもしれないつて。」

「そうか……。世界の奴、平沢さんに思いを託すつて言つてたけど……。」

正直、どうしたらいいのか、分からないな」

七海は虚空を見上げる。

梓は、とりあえずここで待機することを、決めた。

誠に、唯先輩を任せてみるか。

原已浜駅は高架線ではなく、普通の地面に面した線路になっている。

駅で切符を買って、唯と誠は、まだ通勤客が残っているプラットホームに行った。2人、腕を組んで。

目の前を、銀と赤の急行電車が通過する。

周りの人たちは、この高校生カップルを憧憬の目でちらちら見るが、後は取り合わず、新聞を読んだり携帯を見たりしている。

唯は通勤客の合間を、誠と一緒に通ってゆく。

表情は、晴れやか。

「本当に、いい笑顔だね」

誠は、微笑む。

「……実は、西園寺さんからも同じこと言われたんだけど、ほんと、嬉しいな……」
「そうなんだ。世界も……」

唯の左薬指には、誠のシルバーアクセがある。

ほほえむ唯が、誠には愛おしくてしょうがなかった。

唯は、きよろきよろと周りを見渡した後……。

さりげなく、誠の唇に、口づけを交わした……。

彼は頬を染めるものの、驚かない。

2回目なのに、何だか慣れてしまったような感じである。

でも……心の奥底に、不安のもやがあった。

「これで2回目だけど……嫌かな。」

「そんなことない……うれしいよ……」

唯のこわばっていた肩が、思わず柔らかくなる。

が、誠は頭を整理しきれず、しゃべっていた。

「あのさあ……こんな俺でも、いいの？ 来るもの拒まずで弱くてふらふらしているし、

いまだに唯ちゃんか言葉か決められないし、親父があんなだし」

「そりゃあもちろん！ ……どうしたの？」

「いや」誠はふつと目を閉じ、「唯ちゃんなら、俺なんかよりふさわしい相手がいくらで

もいるんじゃないか、と思って」

「そんなことないよ。私は、マコちゃんが好きだよ」

誠は、愛しさと悲しさがカフエラツテのように入り混じった気持ちで、

「ありがとう……」

小さく、答えた。

やがて銀と緑のローカル線が、2人の目の前で停止する。

「あれ？」

心は、思わず目をくぎ付けにした。

まだスーツ姿の人が絶えない時間帯。

その中で誠が、唯と腕を組んで、原巳浜駅に到着した電車に入ろうとしていた。

唯の方も、誠にしなだれかかる形になっている。

「誠君……！」

急いで心は、ありったけの小遣いを使うと、唯と誠を追う形で駆け込み、電車に乗り込んだ。

その直後に、しゃあつと電車のドアが閉まる。

七海一派に取り囲まれ、踏みつけられる言葉。

携帯を取る暇もない。

「どうする、七海さんの言うように、伊藤から手を引くか？」

頭を抱えて踏みつけキックに耐えながらも、言葉は、

「あきらめません！ 誠君の彼女は、私ですから!!」

言葉は譲ろうとしない。

「まだ刃向かうのかい。もうちよつと痛い目に合う必要があるな！」

寄つてたかつて蹴りつける七海一派。

その時、第3者の声があった。

「待てっ！」「待ちなさい!!」

皆、そちらを向く。

そこにいたのは濤と濤ファンクラブ会長の曾我部、そして、ファンクラブのメンツが4, 5人。

思わずあつけにとられた。

「やめなよ、もういいだろう!!」

ずいっと進み出て大声を上げる濤。

「なにがあつたかわからないけれど、こんな真似、やめてもらえる?」

曾我部もずいっと、一緒に出る。

「ちつ、あんたも抜け出して来たのか」

「ああ」濤はちらりと曾我部のほうを見て、「この人たちのおかげだけ……。曾我部さん、またお願いできないか?」

「アイアイサー」

滯をガードするのと同じように、曾我部を含めたフアンクラブの皆は七海一派に飛びかかる。

それを見届け、滯はがら空きになった言葉に近づいた。

言葉もまた、土埃だらけで、腰までかかる髪も少々乱れている。

どうやら、下着も脱がせられそうになったらしい。

着なおすと彼女は、よろよろと立ちあがった。

「あの人たち、誰なんでしょうか……」

「いや、私のフアンクラブでね、どうやら律の頼みで、来てくれたらしいのさ」

滯は、ちよつとバツが悪そうに答えた。

「秋山さん、人気なんですね……」

「いや、まあ、恥ずかしいというか、なんというか……」

張り飛ばしたり、張り飛ばされたりする滯フアンクラブのメンバーを見ながら、言葉は目をぱちくりさせる。

「その体では、大丈夫とはいえないさそうですね」

言葉は滯の体を見て、さらに。

「まあね」

確かに滯の学生服には、ところどころに靴の跡があり、顔もちよつと目の周りが黒く

なっている。

「まあとりあえず、まずは伊藤を探さないと……」

「誠君なら」言葉はメールを開き、「平沢さんと一緒にいるようです。まさかここまで早く誠君ちに来るとは思いませんでした」

滯は、何と言ったらしいかわからなかった。

「本当なら昨日、あのまま泊まりたかつたんですよね」

「そう……」

「あのまま泊まれば、平沢さんに付け入るすきを与えなかった……。お父さん達もお父さん達だけど、平沢さんも平沢さんです」

「……すまねえな……」今は言葉に対し、相槌を打つた方がいいだろう。「私も、唯には気の毒だけど、貴方の方を応援してる」

「……」

言葉は、何も言わなかった。

「あ、メール」

彼女はごそごそとポケットから携帯を取り出し、内容を見てみる。

「心の話によれば、今誠君が、平沢さんに連れられて電車に乗ってるみたいです」

「唯もいるのか……。わかった、心ちゃんの後を追いかけてみよう」

よろよろと立ちあがりながら、言葉は駅へと急いだ。
濡も後から付いていく。

もみ合うファンクラブの人と、七海一派を残したまま。

「それと、桂……」

「はい？」

もう、私は手を引いてもいいか？

と言いたいところ、出なかつた。

もうこれ以上痛い目に合うのはごめんだが、それでは桂がかawaiiすぎる。

どうしたらいいかわからず、濡は心の奥で迷った。

「何でもない」

結局彼女は、これだけ、答えた。

続く？

第12話『変転』

白いレンガをあしらったかのような壁に、3つのカウンター。背後には、滝がざあざあ音を立てている。

「ここは榊野ヒルズの最上階だ。

「もう開いているのか」

20人くらい並んでいる列の最後尾に位置して、誠は呟く。

「あれえ、マコちゃん知らないの？ 榊野町のプラネタリウムって、8時からすでに開園するんだよ」

誠の利き腕にしがみついている唯が、したり顔でしゃべる。

「……知らなかった。唯ちゃん初めてなのに、俺よりヒルズのことを知ってるって、どういうことだろう。」

「私もチェック入れてたからねえ。いつか一緒に行こうって思ってたところなんだ」

唯は、にっこりと笑った。

「そうか……。とはいえ、この分だと30分ぐらいは待つな……」

「ま、とりあえずニンテンドーDS持ってきたから、やってみない？」

「あはは、参ったなー……DS今回持ってきてないんだよ……」
誠は困り顔。

「いいから！ 見てるだけでも楽しいもんでしょ？」

唯が笑いながら、ニンテンドーDSを取り出そうとした時、

「誠君っ!!」

突如背後から、大声がしたので、2人ともそちらを向く。

「……心ちゃん」

振り向くとそこには、小学5年生ぐらいのセミロングヘア、髪を触覚のようにまとめている少女。

まぎれもない、桂心であった。

2人の中に、どす黒い靄が入ったような気がした。

「どうしてここにいるの!?!」

心が2人を睨みつけて叫ぶ。

「それは……」

誠は思わず、目を伏せた。

まわりが彼女の話の話を聞いているのか、ちらちら視線を向けてくる。

「……心ちゃん、とりあえずここだと人目につくから、場所を変えよう。」
誠が進めてくるが、

「だめっ！　ここで話すのっ!!　大事なことなんだから!!」

心は意固地になって、言うことを聞かない。

周りは「修羅場だ修羅場だ」などと騒ぎ立て始めた。

いちかばちか、誠は心の腕をグイッと引つ張り、強引に人気のないところへ行く。
唯も、心の後からついて行つた。

青いタイルが鮮やかな、男子トイレの入り口。

ここなら通路もせまく、人目につきにくい。

1人の用務員が、モツプがけをしているだけ。

気のはやる心を誠は抑え、彼女の不満を受け止める準備をする。

「お姉ちゃん、大変なんだよ!!　同級生に絡まれて!!　なのになんで誠君は、違う人と付き合ってるの?」

「心ちゃん……。それは……」

「お姉ちゃんが可哀想だよ!!　そっちのお姉ちゃんだって仲良くしないでよ!!　お姉ちゃんの彼氏は誠君なんだよ!!」

「そつちのお姉ちゃん、って……」唯は苦笑いしながら、「一応平沢唯って名前があるから、そうやって呼んでくれる？」

「じゃあ平沢唯、誠君の彼女は、うちのお姉ちゃんなんだから！　ちよつかいを出すのはおかしいよ!!　仲良くしないでよ!!」

「違うの、私は……」

「2人とも、」誠は唯と心を諫めると、「俺はな……」

ところが、後の言葉が、どうしても出ない。

すると、唯のしがみついてない方の腕に、ぎゅつと心が抱きついてきた。

「心ちゃん……」

「お姉ちゃんのところにも、戻ってよ……」

怒り心頭の表情だが、目だけはなぜか涙をにじませている。

「……唯ちゃん。とりあえずプラネタリウムは後にして、言葉のところへ行く」

唯はチクリとなった。

この妹さんの言う通りにすれば、誠との2人きりの時間が短くなるのは確かだ。

でも、言葉も……。

心配だ。

「……わかった。いいよ」

自分ではその意識はなかったが、口調に不満が出てしまっていた。

「……………」

誠は、その不満げな口調と、彼からそむけた視線を見て、妙な悪寒のようなものを感じた。

まるで、自分の求めているものが、消えてしまうような……。

「いたいた」

声が出たので、皆、そちらを向く。

まぎれもない、世界と刹那。

「世界、それに、清浦……」

「何だか、ここで修羅場ってたって聞いたから」刹那は相変わらずのクールっぷり。「だ
いぶアツアツだよね」

「そう？ やっぱり？」

「清浦、余計なことは言わなくていい」

紅潮して笑う唯に対し、誠はちよつと恥ずかしげに片手を出して懇願した。

「何があったの？」

相も変わらずの無表情だが、刹那の目はいたって真剣である。

誠が前に進み出て、今までのいきさつを話す。

言葉が何者かに襲われていること。彼女が誠を待っていること。

「桂さん、か……」黙っていた世界が、つぶやく。「桂さんがやってきたら、平沢さんと誠は、二人きりの時間を楽しめなくなっちゃうよ……」

「私も」唯は落ち込み気味の表情になり、「それは辛いけど、やっぱり桂さんも心配だし……」

「優しいよね、平沢さんは……」

「普通だよ」

唯は苦笑いをする。

「貴方が笑えば、私も笑える。そう思ったんだけどな」

世界はつぶやく。

「とにかく、行くか」

「でもどこに？」

「実はさつき」心が口を開く。「お姉ちゃんにメールしたんだよね。榊野ヒルズで誠君と落ち合ったって」

「じゃあさ」誠がいのいちに、「榊野町駅の改札口で待つということにしようよ」

誠はそう言って、言葉にメールを送った。

「マコちゃん……」

唯が誠の目をまっすぐ見て、潤んだ瞳で話しかける。

「唯ちゃん……」

「あのね、桂さんが無事でも、そうでなくても、そばにいても、そばにいてね。」

私、マコちゃんのことを好きだから……。

マコちゃんは、私の一部だから」

懇願が少し混じった声であった。

ふと、誠の中に、アブのような思いが入り込んだ。

自分のそばに居続けることで、唯の純粋な思いが穢れていくのではないか……。

自分を思い続けるあまり、他の人のこともどうでもよくなつて……。

ありえない。とは思った。

しかし、そういう思いがこまつぶりのように回転していた。

「マコちゃん？」

唯が目を丸くして聞いてくる。

「……何でもない。」

誠はこれだけ、答えた。

「平沢さん……」刹那が、唯に小声をかけた。「伊藤は、平沢さんの純心さを好きになつ

たんだと思う。」

だから、自分の欲を出しちやダメ」

「……………」

唯は、刹那が何を言っているのか、よくわからなかった。

「純心？」隣の世界が、刹那に声をかける。「なぜわかるの？」

「なんとなくはね」刹那は無表情。「もうこのことは、世界を傷つけるから関わらないようにしてただけけど、どうしてもほっとけないんだ」

「そう……………」

世界は苦笑しながら、小走りの誠についていく。

誠は、

「親父が来てないといいけどな……………」

と独りごちた。

用務員が携帯で、こんなやり取りをしていることには気付かなかった。

「もしもし、はい……………。え、平沢唯？ ショートボブで桜ヶ丘の学生服……………」

それらしい人はいましたよ。榊野町駅に向かうみたいですよ……………」

物々しくムギのSPが配置された、榊野学園。

道行く人々は、桜ヶ丘生徒も榊野生徒も、窮屈な思いで通っている。

「まだ沢越止は、来てませんね」ムギはSPと連絡を取り合いながら、注意深く様子を見ていた。「休憩室は？」

「休憩室は、生徒たちが行為をする場所だから、あまり位置してほしくないと言ってますが……」

「何いつてんの！　そういう人目に付かない場所こそ危険でしょ!!」

ムギが珍しく怒鳴る。

「まあ、確かに……」

SPのリーダーは、あわてて配備につく。

ムギは、それぞれのSPが配置した位置を確認していた。

「とりあえず、休憩室には2人入って」

びしぼしと、手厳しく指示をしていく。

「何としても、止を止めないと……」

ただでさえ鉄とコンクリートで殺風景な教室の中に、SPが立ち並ぶ。

生徒たちは唖然とした顔で、そろそろと歩いている。

2階で七海と梓は、後ろ手で見張っているSPの横をこそそと通り過ぎながら、話をしていた。

長身の七海と小柄な梓は、傍から見ると大小の漫才コンビといった外見。しかしその雰囲気は、シリアスだ。

「ほんっと、ムギさん張りきってるな……」

多少皮肉を込めて、七海はつぶやいた。

「何としても、止に好き勝手させたくないんだろぅねえ。唯先輩も止に狙われてるし」

七海の横で、梓は手を顎に当てて解説する。

「平沢さんもかい？ 平沢さんは、伊藤が好きなんだろ？」

「そうだけど、止は伊藤のお父さんで、彼は唯先輩が好き……って、昼ドラみたいだよ

……」

「伊藤の親父もロクデナシか……。厄介なものだな」

七海は一つ、息をつく。

「あ、律先輩!!」

梓の声。

左手の階段から、律と憂が駆け足で階段を上ってきていた。

多少眉にしわが寄っている。

大雑把でいい加減な部長の、あまり見せない表情を見て、梓はドキリとなった。

「梓、甘露寺……」

律もこちらに気づいたようだ。

足を速めて梓と七海のところにとどりついた。

「甘露寺、あんたに聞きたいことがある」普段見せない、律の真剣な視線。「なぜムギを裏切った？」

「知ってるんですね……」

七海は認めるだけで、はつきりとは答えない。

「桂が気に食わないのは私も同じだ。だが、なぜムギを脅して、いじめの片棒を担がせようとした？」

「そうだよ。なぜムギ先輩を？」

「……味方を作っておくに、越したことはなかったからですよ」
妙に開き直ったかのような発言だ。

「味方……」

「あのデカ乳女に、いいところはとらせたくないからねえ。なんとしても世界を幸せにしたかった」

「……………」

「でもまあ、世界が平沢さんのことを応援したいというのなら、素直に従うしかないですよね……」

七海は、空を仰いだ。

「……もつといい方法があったと思うけどな」律はため息をついて、「せつかくあんたがHTTファンクラブに入ってくれたのに……。正直、ファンクラブに入った人たちとは、わけ隔てなく接したかったのに……」

「悪いのは全部私ですよ。ムギさんを無理に仲間に引き入れたことは」妙に潔い返答だ。「ムギさんのことでどうしても私が許せないなら、除名してもいいです。ただ、世界や光はいさせてやってくれませんか？」

「……まあ、西園寺や黒田は何もしてないしな。とりあえず、これからのこと、桂とのことはじっくり考える。」

律は不本意ながら、うなずくしかない。

「まあ今は、私も止からず唯を守らなくちゃいけないからよう」只でさえぶつきらぼうな、律の姉御口調がさらにぶつきらぼうになった。「後でムギに謝つといてくれ」

七海はとりあえず、うなずいて生返事をした。

急に電話が鳴って、七海は、携帯を取り出す。

「あ、もしもし！ あ、恭一!! なに、是非ともしたい……とはいっても、ムギさんのS P達が休憩室にいるからなあ。いい下着はいてきた？」

「どうやら彼氏と話をしているらしい。」

「なんとかあのSPに、立ち退いてもらおうよう頼むとするか」

しゃべりながら、七海はどこかに行ってしまった。

「ああやって重点配備しても、必ずどこかでほころびが出るんだけどな……」

そう呟きながら。

律、梓、憂が、後に残った。

他の生徒達も、3人を気にせず、めいめいそれぞれの話をしている。秋風が紅葉を飛ばし、秋らしい風景を作っている。

「……つたく、甘露寺は何様のつもりなんだか」

律はぼそりとつぶやく。

「律先輩」梓は苦虫をかみつぶしたような顔で、「なんだかやつかいですね」

「いまさら何を言ってるのさ」律はため息をつく。「こんな入り組んだところに、すでにはいつてるんだから」

「何で甘露寺は、あれだけ桂に嫌がらせを繰り返そうとしてるんでしょうか……」

「さあ……。桂も、あまり榊野ではいい噂を聞かないからなあ……。まあいいさ、あくまで桂と私らは、中立だからよう。濡に任せればいいさ。さて、伊藤に電話しますか」

今まで黙っていた憂の表情が、目に見えて不安を帯びる。

「お姉ちゃん、大丈夫ですよね」

「まあ、伊藤がかくまってるるとするならな。まずは居場所を何としてもわからないとな」

3組の喫茶店で、七海は彼氏と落ち合うことにしている。

もどつてみると、殺風景な部屋にも関わらず、中は多くの生徒達がたむろして賑やかだ。

「鈴木、そつちの方をお願い」

「うん」

ちらりと見ると、友人の光が、なぜか見知らぬツインテールの少女にあれこれ指揮している。

「光、何やってんの……それにその子、桜ヶ丘の子でしょ?」

ツインテール少女のエプロンの下にある制服は、桜ヶ丘のもの。

それを見て不審に思い、七海は光に尋ねた。

「ああ、この子は鈴木純って言って、確かに桜ヶ丘の子。でも私の家のケーキの試食コーナーを全部食っちゃったから。食うだけ食って買わないと。これは罰」

光の家は洋菓子屋で、レモンカスタードケーキが名物。試食コーナーも使つて大いに宣伝していたのを、純がひとつ残らず食べてしまった。

「だって」純は指をつんつんしながら、「黒田んちのケーキって、あまりに美味しかった

んだもん……」

「罰、ね……」ひきつり笑いをする七海。「まあ、伊藤や世界や澤永や刹那が休みで、大変なものも分かるけどさ……」

「うるさい、今日も猫の手を借りたいほど忙しいんだからね。止って奴か知らんけど、それを捕まえるとか言ってへんなオツサンも来ているし。」

澤永の奴、ほんと何やってんのよ……」

「案外さ、好きな女の子持って帰ってるんじゃない？」純はあつけらかんと言う。「んでもってキスしたり、あんなことやこんなことしてるとか」

びくん！

光が色めきたった。それを七海は感じ取って、

「余計なこと言うなよ、鈴木……」

「あ、そうなの？ ははは……ごめんね。」
が、すでに遅かった。

光は控室にあわてて戻り、教室の壁に、頭突きを繰り返している。

「お、お、お、お、お………!!」

喫茶店中に、彼女の蛙声が響き渡った。

皆、びくりと声のする方を見た。

8つほど券売機のある、駅としては比較的大きな榊野町駅構内。構内アナウンスが、大きく流れる。

ラッシュアワーの時刻は過ぎており、今はスーツの男女がまばらに乗り降りしている。

駆け足で唯と誠、それに心、世界、刹那は、この大きな駅に来てしまっていた。

あたりを見回すと、ちょうどプラットホームに続く階段から、滯と言葉がかけ下りていくところだった。

「言葉……それに、秋山さんまで……」

手を振ると、向こうもそちらに気づき、よりかけ足を早くして合流する。

5人の目の前で、滯と言葉は、その姿を見せることになった。

「その顔……」

滯の顔には、誰かに殴られたかのような青いあざが、ところどころにある。

「秋山さん……」心は言葉から、すでに滯のことを聞いている。「大丈夫?」

「……気にしなくていい……」滯は空笑いをして、「一つ、言っただけいいか」

と、申し訳なげな誠と、彼の腕にきつく抱きつく唯の目を見据える。

「いい加減、桂か唯かはつきりさせてほしい……と言いたかった……」

低い口調の漣の声。

「はあ……」

「でも今回は……桂を選んでくれないか？」

「え？」

「漣ちゃんっ!!」唯が不満げに、誠の前に出た。「そりやあ、桂さんが狙われたことは心配だったけど……それとこれとは別だよ!!」

「唯……。神野の生徒達に、私もほこほこにされてな。桂をかばってた、それだけの理由で」漣は諭すような口調。

やがて、重々しく口を開き始めた。

「私はもう、桂から手を引くから。」

「え……!!」

一同は、ひやりとなった。

しばしの間、電車の警笛の音と、車輪のゴトゴトいう音だけが聞こえた。

「どうして……」

ただただ、呆然として言うしかない言葉。

漣は片手で両目を隠しながら、

「もうこれ以上……あんな目に合うのは……いやなんだ……。私の代わりに、伊藤が桂

を守ってほしいって思うんだ。唯は律やムギがいるし」

「……………」

「ただ言葉には、私がいなくなったら誰もいなくなっちゃう。だから私の代わりに桂を守ってほしいんだ」

「……………」

どうしたらいいのか、分からなかった。

唯だって、自分の父親に狙われて、下手をすれば手籠めになるかもしれない状態なのに。

「あんな目に合うのはもう、ごめんなんだ……。沢越止は他の桜ヶ丘生徒も襲ってるって聞いたし」

何があつたかは、分からない。

しかし、誠も唯も、濡が碌でもない目を見たことは察しがついた。

「濡ちゃん……泣かないでよ……」

唯がそばにいて、慰めてくる。

「誠君っ!!」心は再び誠をなじる。「お姉ちゃんだけじゃなくて、秋山さんだってこんな風になっちゃったんだよ!! 誠君がそばにいてくれないと!!」

誠は、無言のまま。

「私……私だって……」唯は、抱きついた誠の腕にぐつと力を入れながら、「マコちゃんと一緒にいたいんだよ……」

「唯ちゃん……」

唯の痛々しい顔が、誠にとつては切なく思えた。

どっちを取つても、最悪の結末しかないように感じられた。

「まあ、こんな状況になつても、刹那は飄々としている。「同情で付き合つても長続きしないからね。伊藤、自分の気持ちで決めなよ」

言葉と誠の間に入りながら、アドバイスをする。

「俺は……」

この先の言葉が、やはり出てこない。

誰もせかすような発言もしない。

その場で沈黙が、5分ほど続いた。

唯も言葉も、息をのんで誠の答えを期待していた。

電車のアナウンスと、鉄道の音が響いて少し。

ふと、聞こえた声。

「いたー!」

聞き覚えのある声。

誠は思わず、ぞくつとなった。

まぎれもない、沢越止。

入口付近のファーストフード店で、革ジャンと長髪をなびかせている。

「しまった!」

誠は焦った。

何でここにいるんだ。

「唯ちゃん、行くよ!!」

「え、マコちゃん……」

戸惑う唯の手を、誠は強引に引っ張っていく。

「ごめん、やっぱり親父に狙われている唯ちゃんを助きたい」

皆に言い聞かせて去ろうとする2人。周りは一瞬、面喰っていたが、

「誠君!」

少々打ちひしがれている言葉だけが、声をかけてきた。

しかしその目は、真剣。

「言葉……」

「誠君と最初に付き合ってたのは、私ですよ。沢越止さんと同じ道を歩みたくないなら、最初に付き合っている人を裏切ったりしないですよね!」

誠は、はっと胸をつかれた。

無意識のうちに、ブローチと指輪を取り出し、

それを言葉の右手に持たせていた。

思い、分かってくれるかな……。

誠は強く思つて仕方なかった。

「誠君……」

こちらの思いをわかつてくれたかどうかは、分からない。

しかし言葉の発した声には、鬱と失望が七三ほど含まれていた。

「くそ、逃がすか……」

止は、急いで唯と誠を追いかけようとするが、袖をがつつかまれる。

世界だった。

その目に怒りの炎がある。

「知ってるんだよ。私は貴方の子供だって……。」

なのに、お母さんを捨てて……。

貴方は一体、何なの……？

なんで私は貴方に捨てられなければならないの……？」

「知らないな」

止はまるで他人事のように言い、世界の手を払いのけると、急いで改札口を潜り抜けた。

「榊野ヒルズに、貴方の知り合いがいたんだね……」

刹那の言葉に、止は足を止めて振り向き、

「何故知っている……?」

「別に。ただ言ってみただけですよ」

彼は凶星をつかれたといった表情になったが、すぐに気を取り直してプラットホームへ向かう。

「……………」

世界は、顔がくしゃくしゃになっている。

「……………行くかう」

刹那が彼女に、手を差し伸べる。

そのまま、滯と言葉、心を背にして、榊野ヒルズの方へ向かった。

唯の手を引つ張つて駆け出す誠。

ちようどそこに、電話が入る。

「はい?」

「あ、もしもし伊藤か？ 放課後ティータイムの田井中律だ！」

「田井中さん……」

「唯は無事か？」

「一番問題となることを聞いてきた。今が大変な時。」

「……幸い、朝、俺んちに来てくれましたね。とりあえず親父には何もされてないみたいです。」

「ただ、今親父に見つかってしまつて。急いで逃げているところです」

「やっかいだなあ。携帯の奥のくぐもつた声が、今の彼にはよく聞こえた。」

「……つたく、あんたの親父もしつけえなあ」

「ほんと、すみません」

「しかし、まあ、言つておこう。ムギが止を勾留しようと、榊野学園に何人もSPを用意していた。そちらの方に止をおびき寄せてくれ」

「そうですか……分かりました。ありがとうございます」

彼の胸に、どこか安心感と同時に、申し訳ない思いがもやつと上がった。

何かしないと……。

そんな思いもあつたのだろう、誠は滯のことを話してしまつていた。

「田井中さん、ちよつといいですか？」

「ん？」

「実は、秋山さん、もうこの争いから、言葉からは手を引くって言ってるみたいなんです……」

「は？」

「どうも榎野の生徒達に何かされたらしくて……。もう痛い目にあいたくないといったような感じでした」

「はー!?」電話の奥の律の声が、荒くなってしまう。「こんちくしょー！ 私がフランクラブに助けを呼んだ意味ねえじゃねえか!!」

「助け？ フランクラブ？ どういうことですか？」誠は尋ねながらも、「まあとにかく、今の言葉には秋山さんが必要だと思いますから、何とかありませんか？」

そうこうしている間に、2人はプラットホームにたどりつく。

「あ、電車が来ました。切りますね。」

焦って携帯を切り、折から来た銀色と緑の電車に、あわてて乗り込む。

あたりを見回し、父親がいないことを確信して、ようやく誠は一息ついた。

それと同時に、電車のドアが閉まり、動き始める。

唯は………。

誠の一連の行動があまりにも速く、わけがわからない状態だった。

だが、少なくともあの男から、自分を守ろうとしているんだということを、すぐに理解していた。

「マコちゃん……」

「ん？」

「ありがとうね……」

唯はほつりと囁いた。

誠は、唯になんと言ったらしいのかわからなかった。

電車は少しずつ、速度を速めてゆく。

止がプラットホームに駆け上がる姿を、彼女は偶然目にとめた。

電車が動いているのを見て、唯は安心感を覚えた。

残った滯、心、そして言葉。

「伊藤の奴……」

滯はあさつての方向を向きながら、呟いた。

「秋山さんっ!!」心が滯に、文句を言ってきた。「なんでいきなり手を引くっていいだすの!?! 今のお姉ちゃんにとって頼れるのは、秋山さんしかいないんだよ!!」

「だって、もう二度とあんな目には会いたくないし……。沢越止だって、桜ヶ丘の生徒を

無作為に襲つてゐるって話だし……」

濡の気持ちだが、さらに沈んでいく。

自分の思いと、言葉の行方とがなймаぜになつて、板挟みの状態になる。

「私は……。どうすれば、いいのか……」

ますますどうすればいいのか、分からなくなつてきていた。

「……心」言葉が心に話しかける。「秋山さんは今まで、私を助けにきてたんだから。

感謝しても足りないくらいなんだよ……」。

本当は私一人で何とかすべき問題だったんだけど、秋山さんは、初めて会ったときから私を守ろうとしていた」

「お姉ちゃん……」

その場に、沈黙が流れた。

カタカタと電車の音が鳴り、続いて、警笛。

道行く人は、3人を全く気に掛けず、通り過ぎていく。

「桂……すまないな……」

うつむいたまま、濡は答えた。

「秋山さん、どうするんですか……？」

言葉はそつと尋ねた。

「いったん家に帰って、それから考える……」

精も根も尽き果てたというような、濡の声。

「……………桂……………」

言葉を見ると、良心がさらに疼いてくる。

「……………ごめん……………。本当は、ずっと貴方のそばにいたかったんだけど……………」

「……………もういいんです……………私が助けてほしいと言った時はもちろん、言わなくても、頑張つて私の面倒を見てくれたんですし」

「そう……………」

うつむき加減に、穏やかに濡は笑みを浮かべた。

今度の微笑は、自嘲も入っていた。

「でも最後まで……………私を……………守ってほしかったな……………」

「……………行くね」

フラフラと、濡は、言葉を背にして、止に気づかれないように歩き始めた。

スカートのポケットの中で着信が何度もあったが、それに対応するどころか、気づく気配もない。

「心も、いい加減帰りなさい」

「お姉ちゃん、ほんと、大丈夫？」

「大丈夫だから、ね」

とはいっても、声にかすかな震えがあることに、心は鋭く感づいていた。

「お姉ちゃん？」

「ん？」

「必ず、帰ってきてね。お姉ちゃんがどんなになっても、お姉ちゃんは、私のお姉ちゃんだから、ね」

思わずおかしさがこみ上げた言葉。

「まるで、私が二度と帰ってこないかのようなセリフね」

言葉は、一人になった。

やせ我慢の糸が、切れていた。

誰にともなく、眩いていた。

「どうして……こうなるの……？ 私なんて……いなく……なっちゃえ……」

眩いているうちに、なんだか妙なおかしさがこみあげてきていた。

「あは……あはは……私なんて……いなく……なっちゃえ……」

周りは、恐怖と奇異さが混じった目で、言葉を見る。

「あは……あははは……みんな……みんな……壊れちゃえ……あははは……あ

はははははは……」

彼女の目に、光はなかった。

うつろな笑い声が、駅構内に、響き渡った。

ちようど、その時。

妙な予感がして、榊野町駅に戻ってきた世界。

そこには、ふらりふらりと歩き始めた言葉の姿。

「桂さん……？」

妙な好奇心がわき、急いで言葉を追いかけた。

気づかれないように。

「畜生、何で滯と連絡がとれねえんだ！」

律は苛立たしげに携帯のボタンを押すと、片足を床に向かって蹴りあげた。

「どうしたんですか、律先輩」

「伊藤から聞いたんだけどよ、滯の奴、桂から手え引いて逃げちまったみてえなんだ」

「滯さんが……？」

憂は唾然となる。

「……もう、どうでもいいじゃないですか」

なぜか梓は、投げやりだ。

「な、何でだよ!？」

「あいつらをかまえばかまうほど、介入すればするほど、どんどん厄介なことになるだけじゃないですか。」

ムギ先輩も甘露寺に脅されて、わざわざボデイガード呼ばなくちやならなくなつて……。

「……」

「馬鹿野郎!!」

律の声が、急に大きくなった。

「律先輩……」

「私達にはそうかもしれないけど、2人にとっては一種の縁だろ! 漣と桂が初めて会つてから、そんな気がしてたんだ。伊藤だつて、心配しているみてえだし。そんなにあいつらと関わりたくないなら、梓はもういいよ」

「律先輩だつて、自分と桂は中立だつて言つてたじゃないですか」

「細げえことは言わない!! それによ、あいつに後悔はしてほしくねえんだ。とにかく、漣んちに行つてくる! いつも挫折した時、漣の奴は家にこもつていたことが多かった

から!!」

「え、ちよつと律先輩!」

梓が止めるのも聞かず、律は生徒たちの合間を縫って駆け出し始めた。

「律さん!! お姉ちゃんは!」

憂が律に尋ねてきた。

「唯と伊藤はこちらに向かつてる! 沢越止をそちらにおびき寄せるよう、伊藤にも伝えた。」

榊野町を出発したそうだから、30分くらいで来ると思う」

「わかりました」

憂はシャドーボクシングのように、ワンツートの練習を始めた。

ついにはコンクリートの壁に向かつてワンツーパンチを行い始めた。

「拳を固くしておかないと……」

手首のスナップを間に入れつつ。

人の目も気にせず、憂はボクシングの練習を続ける。

「ほんと、律先輩も憂も元気だよね……」

梓は相変わらず、げんなりとしている。

「梓ちゃんも、そんなにいやならば、帰っていいと思うよ」

「そうはいかないよ。清浦の勧めもあるし……私も唯先輩が心配だし……」

自分で言うのもなんだけど、唯先輩って幸せよね。あんな奴が彼氏候補で、その父親もごろつきだというに、それに気づかないまま羽を伸ばしていて。挙句後輩や同級生を心配させて、世話させてさ」

「梓ちゃん。それは結局、お姉ちゃんが好きってことじゃないの？」

「……そう……なるかな」

どっちにしても、今は伊藤に唯先輩を任せるしかないんだろうなあ」

梓は一つ、ため息をついた。

銀と緑のローカル線に無事に乗ることができても、誠は止がいるかどうか、心配でならなかった。

「とりあえず、親父はいないな……」

電車の中で、誠は呟く。

ラッシュは過ぎて、乗客は数えるほどしかない。ところどころ座れる場所もある。

唯はすぐに空席を見つけて座った。

誠も、「いいかな？」と言って、唯の隣に座る。

すぐに唯の左手は、誠の右手に重なった。

「……………」

誠のぬくもりを今ここで、少しでも感じ取りたかった。

彼の横顔は、多少染まっているものの、それでも落ち着いている。

誠の横顔と、絶望する言葉の表情が、唯の頭の中でクルクルと回った。

「……………桂さん……………」

唯は、ぽつりと言う。

「唯ちゃん？」

「桂さん、大丈夫かな、とと思って」

それを聞いて、誠は…………

意を決して、唯にあることを打ち明けようと思った。

「唯ちゃん」誠は胸にきゅつとなる感触を覚えつつ、「一つ、言っておかなければならな

いことがあるんだ」

「なあに？」

と、唯。

すると、電車のアナウンス。

『間もなく、榊野学園前に到着します』

唯は、急に空元気になり、

「マコちゃん、行こう！」

屈託ない笑顔で、声をかけてくる。

その無邪気な笑顔を見て、彼女に打ち明けることが、すべて消えてしまった。誠は黙ったまんま、唯の手を取り、榊野学園へ向かった。

続く

第13話『危機』

カーテンを閉めた、薄暗い部屋。

クマのぬいぐるみなど、女の子らしい趣味が施された、溼の部屋。

学生服のまま、彼女はベッドに横になっていた。

顔や体を受けた傷は、シツプや傷バンを貼って、どうにか痛みは抑えている。

このまま外にいと、どんなことが起きるかわからない。

その思いでいっぱいだったが、同時に……。

言葉の悲しげな顔も、脳裏に焼き付いていた。

伊藤がいなくなったら、自分には何も残らないと言っていた。

その伊藤も唯を気にして、どこかへ行ってしまった。

自分は臆病だな。

伊藤がいなくなったら、桂はどうなるかわからないのに……。

でも自分は……

二度とあんな目には、会いたくないんだ。

ピンポン。

玄関から、呼び鈴。その後、「空いてるぜ。失礼」と高い声。律の声だと、すぐに分かった。

「よお」

いつものような、律の声。

「どうしてここが分かった？」

「伊藤から話を聞いてな。お前が桂から手を引くつて。」

いつも挫折した時、お前、部屋に閉じこもってただろ？」

「そう言えば、そうだったな……」

幼馴染の律は、滯の行動をよく理解しているようだ。

「ちよつと見舞いに来ただけさ」律は穏やかな声。「それでいいのかな、とは思ってるんだけど」

「怒らないんだな……」

滯は、以前軽音部が廃部寸前で、自分が入部しないと云った時、この人が、『滯がベース、私がドラムですつとバンドを組むつて忘れたのか!?!』

と怒鳴っていたのを思い出した。

成り行きとはいえ、それで自分がベースリストとして入部することになった。

いざというときは彼女、それだけ言いたいことをはつきり言う。

今回も桂を見捨てたことをとがめるだろうって、思っていたのだが。

律は滯の心を読んだのか、

「桂のことなら正直、どうでもいいと思ってるさ。あいつ、悪いうわさが絶えねえようだし」

「全部……デマだよ。私はそう思っているよ」

苦笑いしながら、滯はごまかした。

律は、笑わない。

そのまなざしは、穏やかそうで、実は真剣。

「しかしよ」律はにべもなく、「どうしてお前は、あんなに桂に興味を持ったんだ？」

単刀直入すぎる。

だが、答えない理由はなかった。

あの時のことを、ゆっくりと思いだしながら、ゆっくりと答えていた。

「マックで初めて会ったんだ。

初めて見た時、本当にきれいな人だなんて思った。

伊藤のことで悩んでいるのを聞いて、何となく助けてやりたいって思った。

助けた時の安堵した表情を見て、助けてよかったなって思ったんだけど……」

そうだった。

あの時笑顔を見せてくれたことが、嬉しかったんだ。

「そうか」

律は一呼吸おいて、

「まあ、あたしもできる限りのことはしたつもりなんだけだよ」肩をすくめた。「そういえば漣、桂に会ってから、榊野に行くの、全然怖がらなくなったよな」

「そうか？」

「ああ、うちらが榊野で演奏するということになってから、ずーつと元気がなかったのによ」

「そうか？」

律はようやく、にいつと笑って、

「やっぱり、あいつのおかげなのかね」

「そう思うか？」

「あたしは思うぜ。ま、あたしはお前と違って、西園寺と出会ってから、特に変わったこととはねえと思うんだけどよ」

「変わらない方が、律らしいよ」漣は笑いながら、「そう言えば、姉らしい雫を見たのは、あの時が初めてだったな……」

「は？」

「ほら、憂ちちゃんがいたるちゃんを襲った時。あの時唯は本気で憂ちちゃんを張って、本気で憂ちちゃんに怒ってた。いつも憂ちちゃんに世話になってる唯じゃん。あいつらしくないなあって思った」

「そう言えば、そうだったな……。それが、伊藤のおかげだったとでも？」

「少なくとも私は、そう思うけどな」

視線を枕に向けて、漣は眩く。

「さあ……。まあ、少なくともお前は、桂と出会ってから変わったと思うぜ」

律は、笑った。

あとは、何もしやべらない。

沈黙がただ、流れていく。

やがて律は、つまらなそうに漣の部屋を物色し始めた。

暗い中で。

「……桂と会ってから、榊野に行くのに動じなくなってる、か……。」

『貴方の、笑顔が見たいから、貴方が苦しんでるのが、耐えられないから』、か……』

漣は横になりながら、一人ごちた。

それがどこなのかは、わからない。

ただっ広い緑の草原。周りに広がる、無数の杉の木。
しかし目の前には、深い深い谷がある。

自我を失った言葉は、ふらついた足取りで、そこに来ていた。

「……私なんか……いなくなっただって……」

その眩きは、むぐむぐしてちよつと聞きとれない。

世界と刹那は、こつそりと言葉を追跡し、様子を見ている。

崖の上から言葉は、あいかわらずもごもごしたつぶやきを漏らす。

何とか言動を聞き取れた。

「世界」

近づこうとする世界を、刹那は止める。

一方で、携帯でメールを入力していた。

「……平沢さん……誠君を奪ったこと、許しませんから……」

そう呟くと言葉は、鞆の中の何かを確認する。

木の陰に隠れていた世界は、それをはつきりと目にとめた。

レザースー。

「桂さん……何を……」

つぶやく世界。

踵を返し、ふらりふらりと歩いていく言葉。

2人はさっと隠れる。

そのまま、どこへともなく言葉は歩いていく。

「はあー、到着うー!!」

正門から榎野学園の校内に入って、唯はいのいちに大音声をあげた。

2日目の学祭も、非常に賑やかである。

庭の至る所に屋台ができ、お好み焼きやら焼きそばやらが売られている。

「そっさいえ、ベラ・ノツテでも同じこと言ってたね、唯ちゃん」

誠は、笑いながら彼女を冷やかした。

組んでいる腕から、ポカポカした唯の体温が伝わってくる。

「いーじゃん！ とつても楽しそうなんだしさ」

周りの人々は、ニヤニヤしながら2人を見る。

「ひよつとして、ヘテロカツプルー号成立かな？」

「なんかあつただよね……」

「いやいや、まだキャンプファイヤーの時までわからないよ」

「そそそと皆皆、話をする。」

誠はそれを聞いて、多少頬を染めた。

「やっぱり目立つちまうか……」その後、きよろきよろとあたりを見回して、「しかし、これは一体何なんだ……?」

桜ヶ丘と榊野の生徒達がうろついている中、スーツ姿、スキンヘッドで無表情だが体格のいい男達がいたるところで、校内の様子を見張っている。

こちらには気づいてないようだ。

「さあ?」

唯は全然、気にしていない。

その時、第三者の声がした。

「あれは沢越止を勾留するために差し向けられた、ムギ先輩の会社のSP。ムギ先輩がわざわざ父に頼んだみたいだよ」

つり目、ツインテールに、桜ヶ丘の学生服。

梓であった。

「君は……」

「あずにゃん……」

怒りの表情の梓。

誠をぐっと睨みつけて、

「清浦から聞いた。桂がおかしくなってるって」

「言葉が……」

誠は目を伏せた。

梓は例のごとく詰り出て、

「私は認めないからね。貴方と唯先輩が付き合ってるなんて。自分の意思をはっきりも
させず、先輩をその気にさせてさ」

「ちよ……あずにゃん！」

唯が梓を止めるが、梓は唯には答えず、

「伊藤、貴方は本当に、だれが好きなの!？」

「それは……」

答えられない。

何度も言われた質問だが、はっきり答えられるものではない。

「あずにゃん。もういいんだよ」

唯が梓をたしなめてきた。

「唯先輩……」

「マコちゃんが誰を好きであろうと、私はマコちゃんが好きだから」

唯の言葉に、2人とも、目をぱちくりさせた。

「さあマコちゃん、行こうよ。ほら、見てよあのポスター!! 桜ヶ丘奇術部、中庭でやっているみたいだけど、大盛況みたいだよ!!」

「あ、ちよつと、唯ちゃん……」

唯の腕に引つ張られ、誠は連れていかれる。

梓はそれを、冷めた視線で見送った。

「清浦あ……。こりや、だめかも shouldn't」

唯の勧めるままに、誠は中庭にやってきて、奇術部の芸を見物した。

『ひよつとこ』『傘回し』『真剣の剣舞』

奇術部の様々なアトラクションを見て、2人はおおっと歓声を上げた。

皆も盛大な拍手を送る。

「いやあ、すごかったねえ!!」

「ほんと、あんな実力があるなんてねえ」

「そういえば昨日も、軽音楽部以上の拍手が起こっていたなあ……。私たちが演奏した時には拍手がちよつとまばらだったし」

急に声に元気がなくなる唯。誠は思わず、

「いやいや、唯ちゃん達の演奏も良かったよ。ノリノリで。」

でも欲を言えば、X—JAPANのようなバラードがあるとかかったんだよねえ、はは……」

なんとかフォローをする。

「それもそうだね。考えとくよ」彼女は持ち直して、「あ、そうだ。奇術部のファンクラブに入らない？」

「そうだね……。あ、でも桜ヶ丘の部活だし……。いいのかな？」

そのまま一緒に、奇術部ファンクラブにサインしてしまった。

そして2人は、笑いあう。

ようやく和やかで、お互いに笑いあえる時が、訪れた。

唯の笑顔を見て、再び誠の緊張感が、ほどける。

この笑顔は、誰よりも人をいやす力がある。

嫌なことを全部忘れさせる力が。

とはいってもあの父親のことが、ちよつと気になってはいたが。

「次はさ、喫茶店に行こうよ」

「いや、そこは俺達1年3組の担当。休みと言っちゃってるから、行ったら嘘がばれる」

「そっかあ……。マコちゃんの作る食べ物、食べたかったんだけどな」

「いや、俺は作れないって。……あ、その道は喫茶店につながっちゃうから、反対側行つて」

「わかった」

唯ははしやぎながら、階段を駆け上がっていく。

2階へあがると、2年の教室が左手にあり、その戸口に『手芸部入口』と書かれた紙が目に入る。

「あ、榊野手芸部！ 何かいろいろと作ってるみたいだから、行こうよ!!」

「あ、うん……」

唯に手をひっぱられ、誠は穏やかに歩いてゆく。

2人は、手芸部の展示室に入った。

蠟で作ったクリスマスケーキ、市販で買って編んだと思しきマフラーに、スプレーとマスキングで派手にカラーリングしたと思しきガンダム、『金魂』の金さんのフィギュア……。

どれもこれも、作者が全力で作り上げたというばかりの出来。

奇術部と同じように、皆々がやがやと作品を覗き込んでいる。

「いやあ、みんなよく作ってるねえー」

「ははは、そうだね」

興奮する唯に、穏やかに相槌をうつ誠。

また2人そろって、手芸部ファンクラブにサインしてしまった。

「マコちゃんも、手芸部か何かに入ればよかったのに」唯は誠の前に出て、左薬指にある銀色の指輪を見せながら、「こんな綺麗な指輪を作れるぐらいなんだから」

「そんな……男が手芸部入ったらかつこ悪いだろ……。それに俺が作れるのはそれぐらいなんだからさ……」

そんな会話をしながら外を出て、廊下を通りかかると、

「いたいた！ 平沢さんですよ」

声をかけられた。

2人がそちらを向くと、2人のスーツ姿、体格のいい男がいる。

ムギのSPだ。

「平沢唯さんですよ」SPは抑揚のない声で言う。「どうか、こちらの方に来てくれませんか？」

「え……どしたの」

「たつた今、沢越止が来たのですよ。紬お嬢様に頼まれましたね、貴方を守るようにと」
そういうとSPは、唯の周りを取り囲むように、彼女の前後に位置する。

誠はSPに押されて、唯からはじき出された。

「あ、ちよつと、マコちゃんはそばに居させてやってよ」

「そうはいきません。それにたしか貴方は、伊藤誠さんですよ」

「ええ……」

「調べで沢越止の息子だと聞いてます。正直貴方が唯さんのそばにいたら……」

誠は顔をしかめ、

「親父とは、すでに離婚済み……縁を切っていますよ」

「そうは言ってもですね……。唯さんがあの男に狙われている以上、血縁者がいては心もとないんです。裏切らないとも限らん」

「な……!! 俺だつてあんなバカ親父なんか……!!」

誠は反駁するも、SPは耳をかさず、唯をつれてどこかに行こうとする。

「唯ちゃん!」

誠は思わず、彼女を追いかけていた。

が、SPが足を速めてしまい、手を引っ張られる唯もその速度になる。

「マコちゃん!!」

大声で名前を呼び、周囲の注目をひいてしまう。

SPは唯に対し、「しーっ!」というと、ふたたび唯を引っ張って行った。

誠の姿は、もう見えなくなっていた。

やがてたどり着く。3階の端っこの一つの教室に。

白いコンクリートで覆われ殺風景だが、大学の講義室のような教室。

中に、SP達と一緒にいる。

「あ、お姉ちゃん」

SP達の集まる場所に、妹の憂も来ていた。

3階にある、教室の一つだが、ここはどここの部の出し物も展示されてはいない。

ムギがあらかじめ榊野学園に連絡をし、対策のための部屋を作っておいたのであった。

「憂……」

「沢越止が、どうやらここに来たみたいで。私も安全のため、いるように言われた」

感情のこもらない声。

「マコちゃんをどうしてここに連れてこなかったんだろ……みんな……」

「伊藤さんは沢越止の息子だからね。それに正直、伊藤さんは好きじゃないから……」

「お姉ちゃんはここにいて、自分の安全を図るべきだよ」

「そんな……」

唯は思わず、しょぼくれてしまった。

こうしている間にも、SPたちは外に入ったり出たりして、止の対策に奔走しているようだ。

「マコちゃん……」

『秋山さん……』

『私、嬉しいんです。私のこと、心から気にかけてくれる人がいましたから……』

あの時の言葉の声が、滯の頭の中でリピートしていた。

言葉の、涙をにじませながらの笑顔も。

『桂、私の演奏、できたら聴きにきてほしいんだけど』

『嬉しい、是非とも聴いて！「ふわふわ時間」!!』

今度は自分の言葉が、頭の中で繰り返される。

今思い返すと、自分はいれだけ桂を気にかけていたのに……。

「あんなだけ、あいつが気になつてたんだな……。なのに半端なところで手を引いちゃつて……。情けないよな……」

独りごと。

蒲団を抱きかかえている腕が、さらにきつくなる。

律はため息をついて、つまらなそうに滯の部屋を物色する。

すると、律の携帯から音のない振動。

取ってみる。

「もしもし、あ、西園寺か」

「田井中さんですね。どうですか、秋山さんは……」

「ああ、家にいる。こつちも滯の家にいるよ。それより、桂はどうした？」

世界はしやべらない。

律は言葉を切って、彼女の返答を待つ。

ふと一刻、沈黙の時間が流れた。

「……桂さんなら、学校に向かいました。自分が振られたのは平沢さんのせいだと思いこんでるみたいで、なんか仕返ししようとしてるみたいです」

淡々とした声である。

「つておい、唯は飛び入り参加だろうが!! なんで桂が狙うんだよ」

「でも、今誠の隣にいるのはあの人でしょうから。見境がつかなくなってると思うんです」

「……」

「おまけに、うつろな笑い声ばかりあげていて……たぶん混乱しているんだと思うん

「だけど……」

律は、言葉が出ない。

「わかった」

電話を切ると、漣が律に、何があつたかを聞いてくる。

「なにかあつたのか?」

「漣がいなくなつたせいかは分からねえけどよ、桂がおかしくなつて、唯を恨んじまつたみてえなんだ。

「どうも榊野の方へ向かつているらしい」

「桂……!」

「私はそつちに向かうよ。ただでさえ唯は大変な時なのに、余計なごたごたを作りたくねえしよ」

「律……!」

「そうか。」

桂はやつぱり、自分がないとだめなんだ……!」

「がばっ!!」

急に漣は、起き上がった。

「律、私も行く!!」

声をかけると、律は待つていたかのようニヤリと笑い、

「そうこなくっちゃあな。その方がおめえだつて後悔しねえだろ」

早足で外へ飛び出した。

唯と引き離された誠は、1人ぼんやりと歩いてた。

今、どこにいるのかもわからないまま。

寂寥感が、ひどい。

あの笑顔は、ずっと見たかった。

そのまま楽しむのも、いいのではないかと思つてたのだが……。

気がつくと、物理部の展示室から離れて、階段を下りていた。

周りにいる人たちは、

「さっきの人だ」

「ひよつとして振られちゃったのかな？」

「気の毒だよなあ、ヘテロカップル1号成立と思つてたのに」

等と、無責任に自分勝手な話をする。

無責任なんて、人のことは言えないか。

自分も世界と言葉、そして今は唯とふらふらしていたのだから。

唯が父親に狙われていると、言い訳をして。

続いて頭によぎったのは、梓の言。

「私は認めないからね。貴方と唯先輩が付き合っているなんて」

「貴方は一体、だれが好きなの？」

「桂がおかしくなってるそうだよ」

そうか。

また流されるのを抑えて、最初に付き合ってた言葉のところに行くようにとの、神のお告げだったのかもしれない……。

もともと自分は神なんて信じないくちだが、本当にそう思った。

気がつくくと、足が速まる。

携帯を取り出し、言葉に連絡をしていた。

「もしもし、言葉、どこだ？ 誠だ。今そっちに向かっているから、どこにいるのか電話してくれ」

ふらり、ふらりと言葉は、榊野学園の校門にたどりついてた。

門で待機していた女バスの生徒は、それに気づいて口々に話をしはじめた。

「！ あれは、桂……！」

「しかし、こんな時にみんなで襲うのって、ちよつと可哀想じゃないの？」

「そうは言っても、甘露寺さんの命令だからなあ……」

「それにしても、いつもちよつと暗い雰囲気だけど、今回は輪をかけて暗いな……」

「と・に・か・く！ 七海さまには逆らえないよ、やろう。」

おい、桂！ 七海さまの命令でな、ここは通れないんだよな」

1人が大の字になって通せんぼをかける。

「……どいてください」

言葉は低い声で、ぼそりと言う。

「はー？ そうはいかねえよ！ 七海さまからあんたを止めるよう言われてるんだ!!」

女子生徒に手をつかまれるが、グイと跳ねのけた。

そのまま無言で、生徒達の間を通過してゆく。

「ちよつとこらー！」

「シカトしてんじゃねえよ!!」

他の生徒達はカンカンになり、言葉に一斉に襲いかかった。

言葉は……。

無言でカバンの中に隠し持っている、レザーソウのキャップを外す。

七海の配下は、言葉の髪を引っ張ったり、服をつかんだりと、荒っぽい行動をし始め

た。

言葉がソーを取り上げようとした瞬間、
がっ。

何者かに、利き腕を掴まれる。

「!?」

スーツ姿でサングラス、体格のいい男がそこにいた。

ムギのSPの1人である。

「何をしているのです?」

SPが声をかけてきたが、言葉は答えない。

彼女に絡んでいた女子生徒が、

「何者か知らないけれど、これはこつちの問題なんです。部外者は口を出さないでもらえませんか?」

SPは、言葉を取り出そうとした鋸を見て、少し考えてから、

「わたしも、ちよつとこの子と関わりがありましてね」とつさに機転を利かせた。

「ちよつと話をしたいのです」

と言いつつ、強引に彼女の手を引つ張り、体育館の中へ連れて行った。

つまらなそうに皆は、それを見送った。

その様子を、追いついた世界と刹那は、校門に隠れて神妙な態度で見ていた。
「桂さん……」

体育館の奥にある、トイレへと続く狭い通路に、SPは言葉を連れ込んだ。
幸い、誰もいない。

もつとも、古くて薄汚れた通路とトイレは、学祭に来た人を興ざめさせそうだが。
「誠君……どうして私を捨てたの……？」

ぼそぼそ呟く言葉に、SPは困惑しながらも、
「何があつたのか、全然わかりません。」

ただ、貴方が持つてるレーザーソーと、あの女の子達の様子から考えて、なんかただ事ではないと思って、止めに入ったんですがね」その後、黒いトランシーバーを取り出し、
「沢越止を発見した？ わかりました。ちよつと私用ができてしまつてるんで、後から
追い付くと言つてください」

連絡を取り、言葉の様子を見る。

彼女は相変わらずもごもごと呟いており、目は光なく、焦点もあつていない。
「何があつたのか、できれば話してもらえませんか」

焦点の合わない彼女の目を見て、SPは話しかける。

が、言葉は答えない。

「誠君……どうして平沢さんのところへ行っちゃったの……？」
ぼそぼそと呟いている。

SPは一つ息をして、

「お願いですから、今ならだれも聞いていないですし……。」

そしてまた、しばらく静かな時間が流れる。

しかし言葉は、まったく答えない。

「話したくないなら、話さなくていいです。」

でも……そんなことをしても、全然相手は苦しまない!」

あきらめたSPだが、真剣な声で語りかけた。

「……」

「相手を高笑いさせるだけ。」

それだけじゃない。貴方の親や、兄弟皆が苦しむことになります」

「……」

「人間は時として、自分一人の力で生きていると思ひ込みがちですがね。でも金八先生じゃないけど、人間とは、人の間と書くものです。」

親や姉妹とか、自分を気遣ってくれる人がいて初めて生きていける。

貴方は一人じゃない。家族や友達、皆が貴方を心配してくれているんです」

「……」言葉は鞆の中で、レザーソウのキャップをつけた。「私は……」

聞いているのかいないのか、いまひとつ分からない。

「すみませーん、桂をこちらに渡してほしいんですけどー!」

体育館の外から、女子生徒の声が聞こえてきていた。

「もう少し、時間をください」SPはうまく誤魔化した。「誰か貴方を心配している人が、来るといいのですがね……」

言葉は虚空を見ながら、ぼんやりとしているようである。

「誠君……誠君……私よりもどうして平沢さんが……?」

「言葉……なぜ返事をよこさないんだ……?」

誠は榊野の校内を歩きまわる。

皆皆は彼を気にもせず、好き勝手な方向に歩きまわっている。

ふとその中に、体格が良いグラサン、スーツの男がいることが気になる。

「?」

周りをきよろきよろとみた。

「くそー!」

「意外と強い……!」

SPが壁のところまで、そう言っとうなっているようだ。

股間を押さええたり、脇腹を押さええたりしている。

どうやら、意外に父の勾留にてこずっているらしい。

「親父の奴……!」

右側の階段をみると、視界に写ったのは、長髪に革ジャンの男。

上へと階段を上っている。

父が来ている。

もはや、気が気でならなかった。

言葉のことも吹き飛んでしまいそうになる。

彼は、大きく深呼吸をして、気分を落ち着かせた。

やがて、言葉宛にメールを入力し始めた。

メールを送った後、階段を上って、誠は止を探しまわる。

父の毒牙に、唯や言葉がかかったら、どうなるか。

「親父!! ど……だ!?!」

声をあげながら、彼は屋上へと続く階段、さらに階段の下と、目を移していく。

誰もいない。

いやに静かである。

「親父の奴……。何をするつもりだ……」

と、その時、

ドンツ

何か強い力で、背を押されるような感触を覚えた。

その時、一瞬、振り向いた。

そこには、にやりと笑みを浮かべている、自分の父親が……。

ガタンツ

誠は、階段のグリップの部分でつまづいた。

そのまま8段下の、白いタイルでできた床に落ちてゆく。

ようやく、榊野の正門にたどりついた。

肩で息をしながら、滯と律は安堵の表情を浮かべた。

校庭は、相変わらず様々な模擬店でにぎやかになっている。

が、木でできた体育館入り口付近で、女子生徒達が何やら輪になって話をしているようだ。

レンガでできた校門のところでは、世界と刹那が顔を出しながら、校庭の様子をうか

がっている。

滯と律は気になったので、

「いったい何があつたんだ？」

と声をかける。

世界は、傷バンがところどころ貼られた滯の顔を見て、何かを考えるような表情になつた。

かわつて刹那が無表情で、

「桂さん、ここに来たみたいなんだけど、あの女子生徒達に絡まれてしまつて……」

律は、女子生徒達の様子を見て、

「やっぱり桂、付け狙われているのか？」

と話しかける。

「そうですね。皆七海の配下だと思ふけど」答えたのは、刹那。「桂さん、女子みんなに嫌われていますからね。」

からまれかけたんだけど、今は男の人に、ちよつとかくまわれています」

「男？」

「何か、どつかのボディーガードと言つた感じなんだけど……」

「ボディーガード……」

おそらく、ムギが呼び出したSPだろう。

まさかこんなところで役に立つとは。漣はちらりとそう思った。

「それにしても甘露寺の奴、どこまで強引な方法を取るつもりなんだ？」

律は悪態をついている。

「桂……！」

校庭へと目指して、足をけり上げる漣。

ガッ!!

その腕を止めたものがある。

世界だった。

腕をつかんだまま、複雑な表情で漣を見ている。

「西園寺……」

「秋山さん……。どうしてそこまで、桂さんをかばうんですか？」

「え……」

「女子生徒達に反感をもたれて、そんなふうにはゴロゴロにされて、なのにどうして、また桂さんをかばおうとしてるんですか……？ また返り討ちにあうだけじゃないですか……」

漣は目を伏せて、また少し考え込んでみた。

けれど、答えは一つしかなかった。

口に微笑を浮かべて、言った。

「一目ぼれしたから、かな。」

「え……」

ムギのことを笑えないな、と思いながら、漣は続ける。

「私はレズじゃないけれど、一目惚れしちゃったんだよね、桂に……」

マツクで初めて会ってから。

伊藤のことで悩んでいるのを聞いて、何となくほっとけなくて……。

あれこれ世話をして、桂に感謝された時、すごくうれしかった。

嬉しくて、あいつが心から笑顔を見せてくれるときが来るのを、楽しみにするようになった」

「……」

「だから今も、あいつが痛い目に合うのを見ていると、ほっとけないんだ」

また飛び出そうとする漣。

ガッ!!

再び世界が、引き止める。

「もういいじゃないですか!! 桂さんのことなんて!! それにまた七海達に攻撃された

ら、せつかくのきれいな顔が台無しじゃないですか!!」

「西園寺……」

「私……貴方にあこがれていたんです。」

「貴方がもうこれ以上傷つく姿を、見たくないんです……」

懇願するような表情で、世界は言った。

漣は笑って、

「氣遣つてくれるのはありがとう。実際、一度は怖気づいちゃって、手を引こうとは思っ

ていたけれど」

「だったら!」

「でもそれじゃ、嫌だつてわかったんだ。」

たとえそれで、また傷つけられても、きつと後悔しないと思う。

桂が笑ってくれば、それでいいんだ」

「秋山さん……」

世界の手の力が緩む。

「だそうだが、西園寺」律が口をはさんでくる。「止められねえのは自明のことだぜ」

「あ、もしできればいいんだけど、女子生徒達が、桂や私に手を出すのを止めてくれな
いかな」微笑を浮かべて世界に頼んだ後、漣は校庭を見る。

しびれを切らした生徒達は、再び体育館を見ているようだ。

「それは……」

再び世界は、うつむいた。

「その瞳……迷いはないようですね……」

刹那は、微笑みを出しながら、そつと語る。

律は、

「だとき、西園寺。じゃ漣、がんばれよ」

と言つて、漣の背中をドンとおした。

漣は校庭に飛び出し、女子生徒達の合間をかき分ける。

グッ

今度は、女子生徒達に腕を掴まれる。

「貴方、甘露寺さんの言つてた秋山さんですよね」

「……知ってるのか……」

女子生徒達は、今度は漣の腰までかかるロングヘアをつかみ始め、

「貴方も止めるように言われてるんですよ。残念ながらここを通すわけにはいきませ

ん」

「やめてくれ！　なんでそんなに桂を嫌うんだ!？」

ピーピーとわめき始めた。

「部外者の貴方が知るべきことじゃありません」

リーダーと思しき女性が答え、滯の襟首をつかむ。

「このっ!!」

もはや説得は通じないと思い、滯は女子生徒達を張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしながら、包囲網を何とか潜り抜ける。

それを見ながら、世界は重い気持ちに駆られるようになった。

律は思案顔。刹那は相変わらず飄々と、無表情で校庭の様子を観察している。

「……」

「西園寺さんよお」

声をかけてきたのは、律だ。

「田井中さん?」

「私もちよつと、滯の手助けしてくるわ。」

「なんだかんだで滯のこと、ほっとけねえしよ」

「……」

「私はやつぱり滯のこと、見過ごせねえや。あいつの気持ちを尊重させたいしな」
にいつと律は笑みを浮かべ、校庭を飛び出した。

メントスとコーラを取り出して、律は、

「おい、お前ら何やってんだー!! 面白い芸があるんだぞー!!」

と、体育館に入ろうとする七海の配下に声をかけてきた。

それを見ながら、刹那は、

「世界、ああなっちゃったけど、どうするの?」

と、真顔で世界に迫ってきた。

彼女はうつむき加減で、何もしやべらず、何も行動を起こさない。

何とか女子生徒達の腕を解き、滯は体育館の中へ入った。

「桂! 桂、どこだ!?!」

誰もいない体育館の中に、滯の声が響き渡る。

すると、ひよっこりと顔を出したのは、ムギのSP。

「桂って、この人ですか?」

すぐ横には、目に焦点の定まっていない言葉がある。

「桂……どうした……?」

「……」

ぼんやりして、目に生氣のない言葉。

滯の中に、言いようのない恐怖が湧きあがっていく。

「桂……そんな……」

そこで、SPが助言を出して来た。

「貴方がこの方の心配をしてくれているのは、ありがたいことです。

この人は、さびしい人の目をしてますから。友達のいない人のような。

誰より心配してくれる相手がいるのは、いいことです。

私はちよつと用事があるので、行きますね。

きつと貴方なら、この人を助けることができます」

と言いながら、SPは体育館を去ってしまった。

「あ、ちよつと待ってくれ、おじさんもこの人を……」

滯が止めるのも聞かずに。

残された滯は、青い顔のまま言葉の肩をつかみ、じつと彼女の瞳を見る。

……

思わず肩のあたりで、抱きしめてしまっていた。

「桂……！ 私が悪かった……」

だから、戻ってきてくれ……しつかりしてくれ……！」

言葉は、滯の存在に気付いてないかのようだ。目の焦点も定まらない。

「誠君……誠君……」

ただひたすらに、繰り返している。

SP達が見張る中で、唯はただかきこまって座っていたが、頭の中はひたすらに、誠のことを思っていた。

「マコちゃん……」

憂は彼女をちらちらと見ながら、同じように部屋の様子をうかがっている。

SPたちは、外に気を取られて自分のことには、気づいていないようだ。

いてもたっても、いられなかった。

憂がちらりと、こちらから目をそらしたすきだった。

唯は立ち上がり、速足摺り足で教室から出て行った。

「憂……憂がなんと言おうと、私はマコちゃんが好きだからね」

小声で言うのと、そつと教室を出ていく。

床がタイル、天井がコンクリートでできた廊下では、相変わらず榊野と桜ヶ丘の生徒がたむろしている。

唯のすぐ横で、背の高いボーイッシュな少女が、恋人と思しき長身の男性と手をつないで歩いている。

他の人たちも、一人であれカップルであれ、彼女を気にせず歩いている。

マコちゃんは、どこいったんだろう。

SP達のいる部屋から、ある程度離れた後、唯はさりげなく携帯を取り出した。

電話をかけてみる。

……

が、通じない。

「マコちゃん……返事してよ……!」

そして、3年2組の教室を通りかかり、階段を降りようとした時、

「見つけたぞ」

すぐ隣で、低い声を耳にした。

そちらを向くと、沢越止。

長髪に革ジャン、長い髪をなびかせる。

「!」

あわてて逃げようとするが、韋駄天のごとく止に追いつかれ、そのままどこかへと肩を掴まれ連れて行かれる。

「そんな! やめてください!! 離して!!」

「そうはいかないな。悪いが静かにしてもらおうか」

続いて脇下に、刺すような妙な痛みが走る。

体が急にしびれて動けなくなり、止にいいように押され、連れて行かれてしまう。

『3年2組』と書かれた部屋に。

部屋の中は薄暗がり、よくわからない。

暗闇の中見えたのは、保健室にあつたものと思しきベッド、一式のハンガー、それに、くしゃくしゃのティッシュがぎゅうぎゅうに詰め込まれた茶色のゴミ箱。

どうやら榊野の伝統と思しき『休憩室』のようだが、なぜかSPが配置されていない。

この部屋の存在に気づいていないのか。

十分に動かせない体でそのまま、ベッドのところまで連れて行かれる。

「お姉ちゃんっ!!」

と、後ろから聞き覚えのある声。

憂であった。

どうしてここが分かったのか。

そう考える間もなく、憂は止を後ろから羽交い絞めにし、強引に唯から離す。

火事場の馬鹿力である。

唯は脚に力が入らず、そのままベッドの上に倒れる。

その拍子に、ポケットの中の携帯が、ベッドのすぐ下に落ちてしまう。

「お姉ちゃんに何するんですか!!」

「うるさい!!」

2人はベッドの横で、組み合って争い始めた。

何とか腹筋を使って、唯が上体を起こした時、

ガッ

「きゃっ!?!」

憂は脇下に何か、妙なものを押しつけられたようだ。

そこで光る青白い発光の後、憂はぼろきれのように飛ばされ、スチームヒーターのパイプに激突した。

脳震盪を起こし、彼女は言葉もなくくずおれる。

「憂!!」

唯は叫ぶが、起きる気配もない。

「一段落したら、お前も完全に征服するからよ」

止は憂に対して毒づくくと、ベッドのほうを向き、荒々しく唯をベッドに引き倒した。

その刹那に彼女は止の股間をけり上げるが、まったく効いていない。

足に力が入らないうえ、ジーンとしびれてくる。

「……………どうして効かないの……………」

「ここは重点的に防御を固めたからな。一度攻撃されちまったし」

なすすべもないまま、唯は服のボタンを外されていく。

震える声で叫んだ。

「嫌!! 濔ちゃん、あずにゃん助けて!! マコちゃーんっ!!」

続く

第14話『唯誠（ゆいま）』

「……………！」

誠は手すりをしっかりとつかみながら、足の痛みを耐える。

とっさにつかんだので、階段から8段下に転がり落ちるのだけは免れた。

しかし、その拍子に右足首をねん挫してしまふ。

何とか姿勢を直し、足を痛めない形で座り込む。

野次馬もそのことに気づいているようだ。

「大丈夫ですか？」

通りかかった人たちが何人か、気にかけて周りに寄ってきていた。

「いえ、大丈夫です……」

周りに心配かけないようにと、誠は手すりを使って立ち上がり、よろよろしながら階段上のところに行く。

と、その時、

「あのう……伊藤さん……ですよね……」

野次馬をかき分け、一人の少女が湿布薬を持ってやってきた。

金髪で、やや垂れ目。桜ヶ丘生徒の格好をして、眉がたくあんのように太い。

「ええ、そうですけど……」

「私は、琴吹紬と言います。」

沢越止を調べているうちに、息子の一人に貴方がいると知りまして……。

今回沢越止を捕えるために、SPを出したのは私と、父の会社です」

誠はムギの顔を見て、頭の中で引つかかっていた記憶を引き出し、

「……もしかして、唯ちゃんや田井中さんの言ってた、ムギさんですか？」

「ええ」

「それにしても、ずいぶん用意がいいんですね……。俺も正直、親父を何とか止めたいと思ってたんだけど」

「まあ、大がかりのほうがいいですね」ムギは話題を変えて、「実は、SPの待合室にいた唯ちゃんがいなくなってしまう……。伊藤さんなら知っていると思うのですが。どこにいるかご存知ですか？」

「唯ちゃんが!?!」

誠は小声で驚きの声を漏らす。

「ええ、ちよつと目を離れたスキになくなったそう……。ひよつとしたら、沢越止に襲われているかもしれなくて……」

「実は俺も、唯ちゃんとはぐれてしまつて……。SPが引き離しちやつたこともあるけど」

「そうですか……」

深刻な表情になるムギを見て、誠は奥歯をかみしめる。

すつかり不安と、父親への怒りでいっぱいになってしまつていた。

「親父……俺を殺そうとしやがつた……」

思わず口から、自分でも驚くようなドス声が出てしまつていた。

「え……」

「実は、親父の奴に、階段から落とされそうになつて。」

とりあえず手すりを用いて、助かつただけ……」

「……伊藤さん……」

ムギの憐れみの目を受ける。

ありがたいような、辛いような、そういう思いを背負いつつ、誠がとりあえず携帯を取り出す と、着信メッセージが残っている。

唯からだつた。

『マコちゃん、今どこ？ こちらは3年4組の教室を出たところ。今すぐ会いたいよ！』

「唯ちゃん……」

ムギはそれを横で聞きながら、

「着信があつてから、そんなに経つてないみたいですね。無事だといいんだけど……」
「心当たり、ありますか？」

「考えられるのは、休憩室ですね。とは言つてもたくさんあるし、どこにいるのやら。利用されやすいところだから、部屋の全てをSPが2人1組で監視して、大丈夫だとは思うんですけれど……」

「そうですか。見落としがなければいいのですが……」

「あ、動かないで」

ムギは誠の靴と靴下を脱がせ、赤く腫れた右足首に湿布を貼つてやる。

ひんやりした感触とともに、痛みが薄れていった。

「……とりあえず、これでなんとか歩けそうです。フォークダンスは無理だろうけど、ありがとう」

「いえいえ、当然のことです」

物腰の柔らかいムギの横で、再び彼は立ち上がった。

出発しようとする、

「あれ、伊藤じゃねえか。それにムギさんも」

急に声がする。

2人ともそちらを向くと、野次馬の中で七海が、長身の彼氏の腕を組んで立っている。

「甘露寺さん……。そちらは彼氏ですか……?」

「ま、まあね……。昨日はデートしそびれちゃったんで、今度こそと思ったんだけど……」

笑う七海に、ムギは肩を震わせ、

「なんで……。なんで私や貴方を慕う皆さんにあんなことをさせて、自分はのうのうとデートなんかしてるんですか……!?!」

潤んだ声で空笑いしながら、自分より背の高い七海に詰め寄った。

彼女はバツが悪そうに、

「ああ、そこは、まあ、悪かったと思ってますから……。一段落したら、ラーメンでも何でもおごってあげますから……。はは……」

「おごれば済むという問題じゃありません!」ムギの目には、涙が光っている。「私……。本当にあなたにあこがれていたのに……。どうしてこんなことをするんですか!!」

「ああ、ああ……」

七海は何も言えなくなる。

この2人に何があつたのか、誠は全然わからなかつたが、

「とりあえず」誠が慌てる七海に、「桜ヶ丘の平沢唯ちゃんがどこにいるか、甘露寺、知っ

てるか? ……わけないよな。」

「平沢さんだよな。そういえば見たな」

「何だって!?!」

「3階の廊下に出ていたのを見かけたよ。あんたを探していたようだった」

「そうだ! 甘露寺さん、彼氏といるってことは……!」ムギは再び七海の肩をつかみ、

「一体どこで休憩を取っていたんですか!?!」

「え、あー……」彼女は頬を染めて、恥ずかしげに「3年2組の休憩室……」

「! たしか……!!」

ムギはばらばらとSPの資料をめくる。

休憩所のある場所について調べているのだが、3年2組の休憩室だけが載っていない。
い。

おそらく見落としがあつたんだろう。

「しまった……!! SPが多分、見落としただわ……!!」

「じゃあもしかして、そこに親父と唯ちゃんが……!!」

「急ぎましょう」

ムギと誠は、野次馬をかき分けて走り出そうとする。

「待て伊藤!」

その時、七海が彼の腕をつかむ。

「悪い、いまそれどころじゃねえんだ！」

「大事な話だっ!!」声を張り上げて七海は怒鳴った。「世界はどうした? あんた、世界の彼氏じゃなかったのかよ!!」

「は……………」

誠は思わず、足を止めてしまう。

「世界自身は、平沢さんにあんたを譲るって言ってたけど……………」

あんた、世界に何かしなかったのか!? それで世界が弱気になったんじゃないのか!?

「違うよ!! ただ……………」今は固まった世界への思いを、彼は七海に対して、打ち明けていた。「世界とは……………所詮、友達でしかなかったんだ……………」

今まで付き合ってたけど、やっぱり喧嘩することが多くて、心の底から好きになれなかった。

好きだけど、好きじゃないんだ

「……………本当かい……………」

七海の真剣な声に、彼は多少、後ろめたい気持ちになりながら、彼女の手をほどいた。

「……………ああ……………」

それを聞いて、半分呆れ気味の表情で、七海は目をつむる。

「伊藤さん、早くしてください!! SPの人たちも、3年2組の休憩室をなんとかしても探して!!」

今度はムギが、誠に対して声を上げる。トランシーバーを取り出してSPに連絡しつつ。

急いでムギの後を、誠は追った。

走ろうとするが、一歩一歩進むたびに右足が痛み出し、思い通りに進めない。

「ムギさん、甘露寺と何かあったんですよね? 世界がムギさんのことを気にしてましたし」

「あ……:気にしないでください。こちらの問題なんで」

声をかけるが、はぐらかされてしまう。

「伊藤の奴……」

後に残った七海は、世界を案じつつ、呟いた。

集まった野次馬も、蜘蛛の子を散らすように去って行った。

ブシューウウウウツ!!

校庭で騒がしく人々の話が聞こえるなか、コーラの噴く音が空気をつんざく。

「ほれ、見事な暴発だろ」

500mのペットボトルから、噴水のごとく勢いよく噴き出るコーラを見て、律はやったとばかりに胸を張る。

「……まあ、昔聞いたことがあります。メントスをコーラに入れると暴発するって」
他の女子生徒達も、啞然としながら律の相手をしている。

周りはげげんな顔をしながら、横を通り過ぎていく。

「つて、んなことしている暇ないだろ!!」

リーダーと思しき人が、あわてて声をかけてくる。

「待て待て、まだまだ隠し芸はあるんだぜ。ほら、マギー審司よろしくビッグイアもあるしー、それから……」

「さっきから私達の邪魔ばかりしているけど、もしかして貴方も、桂や秋山さんの味方なんでしょうか!？」

ぐいっとリーダーが進み出て、血走った目で律を睨む。

律は苦笑いしながら、

「いやあね、友達っていうか、腐れ縁っていうかね…ほっとけない仲というかね、あははは…」

「まさか、あなたも邪魔をするっていうのなら…どうなるかわかってますね…」

「いや……それは……はは……」

律の笑顔が、だんだんとひきつり始めた。

やべえやべえ、このままだと大変だ。

そう思っている時、

「待って」抑揚のない、飄々とした声。「七海は、どこにいるの？」

刹那が無表情で、中に入ってきた。

「清浦！」

「貴方確か、1年3組の学級委員の清浦さん……」

グループの1人が、まばたきをする。

「まあね」刹那は感情のない声で、「七海、たぶん1日目は彼氏とデートしそこねたから、2日目は遊んでると思うけどな。七海の監視のない中で、貴方達が懸命になる理由って、ある？」

「あ……」

生徒の一部が、顎に手を当てて考え始めた。

うまいところついてくるな、と思いつつ、律は校門の入り口を見る。

世界が、何かを考えているような表情で、うつむいている。

「西園寺……」

一方の刹那は、強い視線で七海一派を見つめているが、

「いやあ…七海さまは顧問にも信用されていてさ、レギュラー選びの権限持つてるって話だし、逆らったら私達…」

言い返されてしまっている。

「つて、そういう問題じゃないだろ」続いて一派のリーダーが怒鳴る。「とにかく、この人も貴方も、さつきから私達の邪魔ばかりしているけど、桂や秋山さんの味方なのか!？」
食いしばった歯の間から、しゃべっていた。

「やべえやべえ…」

律が尿意を催すほど怖気づいていると、メールが届いたという携帯振動がくる。

「そこそとその中身を見て、彼女はさらに青ざめた。

「唯の行方が分からなくなった…。沢越止にやられたらどうなるんだよ…!! 伊藤も何やってるんだよ…!!」

思わずとんとんと足をふみならしていた。

「うーん、別に味方と言うわけではないけれど…。ただ、七海がいないのに、貴方達が生懸命になる必要はないのではと思っただけ」

一方で刹那は、飄々と答える一方、小声で律にもアドバイスを出していた。

「慌てて行っても、平沢さんの居場所は分からないでしょ？ 私達は私達で、今ここに集

中しましょうよ」

「でも……もし唯が襲われちゃったたら、どうするんだよ……」

律は冷や汗が出そうになりながら、小声で答える。

「伊藤や他のみんなに、期待するしかないよ」

押し倒され、思い通りに動けないまま、唯は制服のボタンを外されていく。

「嫌！ 嫌!!……うっ、また……!!」

暴れ出すと、再び体に、痛みとしびれが走る。

「大人しくしてもらおうか。声を出されると困るのでな」

動けなくなった唯を、再び止はひんむき始める。

至る所に防音用の壁が置かれ、誰も来ないように思えた。

「やめろ………っ!!」

急に、大きな声。

思わず反応する2人。

突然入口から飛び出したのは、誠だった。

バキッ!!

そちらを向いた止の頬を、誠は思いっきり殴っていた。

それでも怒りの思いと、息苦しさがおさまらなかつた。

止はベッドからはじき出されて倒れ、薄暗い床を転がる。

そのポケットから、黒いリモコンのような装置が落ちた。

スタンガンだ。

おそらくこれで、SPや唯を怯ませていたんだろう。

「これは、スタンガン。貴方……」

後からやってきたムギがそれを拾い上げ、怒りの目で止を見る。

続いて来たSP2人が、気を失っている憂と、ベッドの唯を保護する。

そのどたどたした音で、憂は目を覚ました。

誠の視界に、Yシャツ姿の唯が一瞬、見えた。

白いベッドで横になったまま、体を押さえて震えている。

それを見てさらに誠の怒りが、胃から頭へと這い上がり、倒れている止の胸ぐらをつ

かみ、拳を振り上げた。

「……お前か……」

止は不敵な笑みを浮かべ、ため息をつく。

「親父……!!」 誠は奥歯をくいしばり、その間から「よくも唯ちゃんを……!」

そして、俺を殺そうとしやがったな……!! 人でなしが……!!!!

ヒューツ、ヒューツと息をしながら、喘ぐように言う。

上着を脱がされ、Yシャツの第1、第2ボタンが外されている唯は、横にうずくまつたまま体を押さえて震えている。

「いつもそうやって、母さん以外の女に手を出しやがって！ 床上手かどうか知らないけど、母さんをどれだけ傷つけたか、分かっているのか!? そして、唯ちゃんにまで……!!!」

「何を言っている！ お前も同じだろ!!」

ハツと彼は胸をつかれ、それを振り切ろうとして止の顔面を殴る。

それでも、ナメクジのようにずるずると止の声が頭に残る。

「あんたと俺は違う!!」

休憩室に、誠の怒鳴り声が響き渡った。

止は頬を押さえながら、

「同じだよ。萌子から聞いたぞ。」

桂言葉と付き合っていないながら、西園寺世界とも関係をもったんだってな。

そして今は、この子に対して躍起になっている」

再び胸をつかれる誠。

世界、言葉、そして唯の顔がかわるがわる浮かぶ。

「伊藤さん、この人の言うことに耳を傾ける必要はありません。

気にしなくていいんです！ 貴方は沢越止とは違います!!」

ムギの言葉も、全く耳に入らなかつた。

「所詮俺の血かねえ。」

「……!!」

バキツ!!

また誠は、我を忘れた。

勝ち誇る止に対し、横っ面に拳をぶつけた。

「な……殴る必要、ないじゃないですか。現に伊藤さん、唯ちゃん気遣ってくれてる

し……。認めなくていいんですよ」

さらに焦りながら、ムギはフォローを入れてくる。

が、誠は拳を下ろして、深呼吸をする。

そして筋が弛緩したかのように腕を垂らして、気持ちを落ち着けると、しつかり、そ

してきつぱりと答えた。

「認める。確かに俺は、ずっと隠れて皆と付き合ってた。

世界も言葉も、そして唯ちゃんも好きだったから。

あいまいな態度のまま、みんな失いたくなくて、みんなと付き合っていた」

その途端、誠の気持ちは重くなった。

自分のはつきりしない態度で、どれだけ世界や言葉や唯を傷つけてきたか、胸がキュツと鳴る思いがした。

「だったらー！」

せせら笑う止を彼は制し、

「今までの俺が、弱くてふらふらしていたから。

みんな好きだったから、流されるままにこの関係を続けていた。

でも……もうこれ以上、このままではいられないって、いつも思ってたんだ!!

あんたと俺は違うから!!」

「なら、自分の好きな人を言ってみなよ、今ここでき!!」

止は片方の眉をあげて、彼をなじる。

「!!」

誠は再び、胸をつかれた。

いつも悩んでいた答え。

今まで、いくら悩んでも出せなかった答え。

「俺が本当に好きなのは……」

だが……。

なぜか今は、その答えが単純な気がしていた。

しかも、答えは1つしか、思い浮かばなかった。

「……言葉だよっ!!」

止も、唯も、ムギも、一瞬、あつげにとられた……。

沈黙が、しばらく流れた。

「あ、言っちゃった……」

誠は、自分で自分に驚いていた。

今まですつと、答えられない質問だったのに。

わからない。

なぜこんなに分かりやすく。かつ自分の気持ちが見えたのか。

大嫌いな父親の前だから、出てしまったのだろうか。

「……ふん、ならば俺が唯に手を出すのを、あんだけムキになって止めることはなかったんじゃないのか。」

止は毒づく。

「あんたは………したいだけだろ……。今までも母さんをほおつておいて、沢山の女の人に手を出して、子を作らせて……!!」

あんななんか、唯ちゃんを汚させはしたくなかった……!!」

目をそらさず、誠は止の目を睨んだ。

「……自分のあいまいな態度で世界や唯ちゃん、もちろん言葉だって傷つけたのは申し訳ないと思ってる」誠は続ける。「でもそれは、みんな好きだったからなんだ。

それでどちらとも選べなくなつて、ずるずるずるずる今まで関係を続けてきたんだだけだ。

それではいけないとわかつていながら。

唯ちゃん、ほんと、謝る」

誠は震えている唯に向つて、頭を下げた。

唯は、聞いているのかいないのか、潤んだ目で彼をちらりと見た。

SPが出てきて、

「伊藤さん、もういいでしょう」

そつと肩をたたく。

ごつい体格の割に、口調は礼儀正しい。

誠の手をどけ、顔を上げた止の手に手錠をかけた。

続いてムギがやってきて、逮捕状を見せながら、

「貴方を、警察に連行します」

「……まさか、逮捕されるとはな。俺にはコネがあるんだがね」

「そうはいきません。私の会社の重役にまで手を出して。

幸い、父がじかに警察庁に出向いたら、すぐ逮捕状を出してくれましたよ」

ムギは無表情だが、声に憤りがこもっているのを、周りはすぐにとる。

「まさかそんなコネがあるなんて、思ってもみなかったけどよ」

止は脱力して、手錠がかけられた腕を下ろす。

誠の怒りが冷め、右足の痛みが急にひどくなり、立つていられず、誠はベッドの上に腰かけた。

ちようど唯の隣。彼女が寄ってきている。

気になって見ると、唯は悲しさと安堵が入り混じったような顔をしている。

服も乱れたままだ。

そばに、無理やり脱がされた紺色の上着が、ひしゃげている。

校庭。

律・刹那と七海一派がぎやあぎやあ争っていたころ、世界は一人、自分のしたことに関して考えていた。

元々は自分から桂さんに近づき、誠と親しくなりたいという思いで誠を紹介した。

それがちよつとした偶然から、彼と関係を持ち、本当の気持ちを押しさえられなくなっ

てしまった。

ちよつとしたボタンの掛け違いではあつただけ、それで桂さんに誠を譲れなくなつてしまつて……。

でも、全てのほとぼりが冷めた今、思う。

それでよかつたのだろうか。

あの時、桂さんとけんかした時も、自分は感情的で理不尽なことを言っていた。

誠を譲りたくなくて。

でも、誠自身は……。

自分が彼を独占しようとする、怒つてしまった。

そこまで考えた後、もう一度、校庭のほうを見た。

そこでは、田井中さんと自分の親友が、七海の配下の人間を止めようと話しこんでいるようだ。

田井中さんは自分をかばってくれたけど、同時に桂さんのことも助けようと思つている。

自分は……。

誠が平沢さんとキスしたことに、つい怒つて彼に手をあげてしまった。

でも結局、平沢さんになわなないと思ひ、彼女に譲ることにした。

とどのつまり、結局桂さんには冷たくしたまま。

でもそれで、よいのだろうか。

……………

律と刹那が皆を止めている間。

壊れた言葉を何とかしようと、滯は彼女を強く抱きしめたまま、心のうちで頭を抱えていた。

するとメールが届く。

ムギからだった。

「唯がいなくなつた……？ よりにもよつてこんなときに……!!」

思わずがたがた震えてしまう。

でも……………。

中途半端なところで、作業を中断していいのだろうか。

言葉だつて壊れていると言うのに。

どうにかしなければ。

外でガヤガヤと声が聞こえる。

七海の配下が、何やら自分達のことできわいでいるようだ。

「頼む、律……！　ムギも梓もなんとか唯を見つけてくれよ……」
呟く漣。

切羽詰まった挙句、やぶれかぶれになり、言葉のポケットを見る。

人のを勝手にみるのは常識外れとも思った。

が、今はそれどころじゃない。

言葉のポケットを探ると、純白の携帯がある。

伊藤から連絡はないものかと思って、思わず取り出した。

カラン。

「！」

すると、一緒に手製のブローチと指輪が床に落ちる。

「これ……ひよつとして、伊藤が渡した……」

見る限り、七宝焼きで作った代物だが、非常に光り輝いて、形も整っている。

おそらく、最上級のもを彼女に渡したんだろう。

「伊藤……きつと、桂が本命なんだよな……。そうでないとな……。ははは……」

思わず漣は呟き、ついでに携帯を見てみる。

幸い、留守番着信と新着メールが届いていた。

誠のだ。

思わずメールを開いてしまう。

それを見て……安堵の表情になる。

それから言葉の耳元に、囁くように言う。

「桂！ 伊藤からメールが来てる。見てごらん。」

滯は言葉の耳元で、囁くように手紙の内容を読んだ。

「言葉へ

まず最初に、ごめんなさい。

ずいぶん迷惑をかけてしまった。

本当は俺、言葉のことが好きなんだ。

つい世界や唯ちゃんに迷ったりしたけれど……。

考えてみれば、最初につき合ってたのはお前だったね。

その責任をきちんと取らなければいけなかった。

言葉は、俺が隠れて世界と付き合ってた時でも、唯ちゃんとキスした時でも、変わら

ずに俺のことだけをずっと見てきたんだよね。

愛想を尽かさず、いたるがピンチの時でも助けてくれていたよね。

俺、すっかり忘れていた。

お前にここまで思われていることに。

本当にすまなかつた。

でも今、親父は唯ちゃんを狙っている。

唯ちゃんのことが一番好きというわけじゃないけれど、親父が絡んでる以上、ほおつておけないんだ。

だから、今は言葉と付き合えない。

許してくれ。

もし言葉が俺のことを好きならば、全てが終わってひと段落したら、俺と付き合いなおしてほしい。

でも、もし言葉が、唯ちゃんを気にしている俺が嫌だつたり、俺に愛想を尽かしているなら、無理をすることはない。

俺とは別れてかまわないよ』

見やすいようにデコメがいたる所にちりばめられた、派手なデザインである。

「な……。伊藤が一番好きなのは、唯ではなくて貴方なんだよ」漣は続ける。「ほら、わかるだろ。伊藤は貴方のことが好きなんだよ。唯よりも好きなんだ。

ここで頑張れば、桂、伊藤の彼女になれるんだぜ。

だから、戻ってきてくれよ！ な……。！」

抱きしめたまま、背をぼんぼんと叩いて、漣は震える声で言った。

そして、ぎゅっと腕を締めつける。

くつつき魔の唯を笑えないな、と一瞬思った。

そのまま、一刻経つ。

ふと、言葉の体が、急に暖かくなったように思えた。

「秋山……さん……秋山さん……？」

言葉の、蚊の鳴くような声。

ようやく彼女が、我にかえったようだ。

「桂……今の話、聞いてたか？ 伊藤は唯より、貴方のことが好きだって、メールに書いてあったんだ」

濡の話を聞いているのかはわからないが、再び言葉は、自分の携帯に届いた誠のメールを黙読する。

「誠君……。やっぱり、私のことが好きだったんですね……」

言葉は、ギョツと白い携帯を抱きしめた。

濡は、とりあえず安堵の息をつく。

ふと急に、唯の泣き顔が浮かんだ。

「そうだ、唯は!?!」

思いついたように濡は、唯に電話をしようと携帯を取り出す。

その一瞬、唯に本当のことを言ったらいいのかどうか、ちよつと迷った。その時だった。

どさどさと七海一派が入ってきて、

「おまえら、悪いけどここから出すわけにはいかないなあ」

8人ほどやってきて、周りを取り囲んでしまう。

遅れて律と刹那が、追うようにしてやってくる。

七海配下の合間から、律と刹那はちらちらと2人を見ている。

「あ……貴方達……！」

呆れと混乱のこもった声を出す滯に対し、

「すまねえ滯!! 止められなかった!!」

「学級委員の私と部外者の田井中さんの力じゃ、止められるのはここまでみたい……」

謝る律と、愚痴をこぼす刹那。

「さて、ヤキいれてやりますか」

血走った目で迫るリーダーに、滯は後ずさりして、思わず尻もちをついてしまう。

その時であった。

「待って!!」

甲高い大声が、体育館の中に響く。

入口の方からだ。

そちらを向くと、世界が真顔で、戸をつかみつっ立っていた。

「みんな！ もういい!! やめてくれる!？」

世界は、律と刹那を通り過ぎ、七海配下に向かって仁王立ちになった。

「あれ」榊野の女子生徒は口々に「君、1年3組の西園寺だね。七海が言ってた」

「私のこと、知ってるんだ……」世界は戸惑いながらも、「まあとにかく、もうこれ以上、

桂さんに手を出さないで！ 桂さんは私の友人だから……」

「ほう……」

横で律は、感心のため息を上げた。

「は？ 七海さんの話では、桂は貴方と彼氏を争ってるって聞いていたけど」

「あ、それはちよつと前……。でも、今は桂さんに譲ることにしたの。七海は私のためにこんなことをやってるんでしょ？ 私の頼みの方が七海の頼みより優先。ね、頼むから」

柏手を打って、世界は懇願した。

「世界……」

「ほう……」

刹那には面食らった表情で、律はそう来たかという顔立ちで、その様子を見ていた。言葉を襲おうとした生徒達は、また皆で相談を始めた。

「どうする?」

「かといつて、七海さまに相談なしでは……」

「あ、でも、一連の首謀者は西園寺さんだつて聞いたし。甘露寺さんは西園寺さんの意向を受けて……」

「一応謝つて、手を引いておくか。引こう」

やがて皆、ごめんねといいつつ、そそくさと立ち去つてしまった。

「ちよつと待ちなよ。甘露寺さんの意向を聞かなくちゃあ」

リーダーはあわてて、その後を追う。

冷めた視線で、律・世界・刹那はそれを見送る。

「マコちゃん……!!! 怖かったよ……!!!」

いきなり唯が、ベッドの上で泣きながら誠に抱きついてきた。

「あ、ちよつと、唯ちゃん……」

誠はどぎまぎする。

それでも思わず、胸の中の唯の背に、腕を通していた。

今まで、何度も感じられた暖かさ。

唯の頬を伝わる涙が、誠のスーツをぬらす。

それでも、こんなヘタレな自分を愛してくれて、嬉しかった。

自分が、言葉だけでなくこの子を愛したことも、間違っていないような気がした。

同時に、胃が重苦しくなってくる。

これから自分も辛いこと、でも言わなければいけないことを言う必要があるのだから。

その中で、憂の暗い表情と視線がジンジン感じられたのが気になったが。

ムギは2人と憂を、興味深げにかわるがわる見た後、

「じゃあ私、沢越止を連行しますので」

休憩所からムギは、止とSPたちと一緒に去って行った。

唯を誠と2人きりにした方がいいと思ったからだった。

「あ、もしもし……誰です？ ……え、HTTファンクラブに入りたい人がいる？」

小さくムギの声が、聞こえた。

SP達が去ったあとで、唯と誠、そして憂は3人だけになった。

「伊藤君、お姉ちゃん……」

憂の声は低い。表情もどんよりしている。

不気味に、沈黙が流れた……。

「……憂。ちよつと場を離れてくれる？ マコちゃんと、2人で話がしたいから……」

唯が誠に抱きついたまま、憂に声をかけた。

「……でも、お姉ちゃん、沢越止に襲われてショックだと思っし……」

憂の表情は、浮かない。

「大丈夫だよ。マコちゃんと2人でいれば、心が落ち着くし」

するとムギが踵を返して戻つて来て、ぐつと強く憂の腕をつかむ。

「今は2人きりで、話をさせてあげましょう」

「でも……」

「あとともう、2人の思いにゆだねるべきよ。大丈夫。伊藤さんは悪い人じゃないし。

唯ちゃんも、私達より伊藤さんといった方が落ち着くみたいだし。まかせましょうよ

……」

憂は暗い顔でうなずくと、ムギと一緒に休憩所を離れていった。

ガヤガヤと、外は相変わらず話し声が聞こえている。

外側のぎやかさは対照的に、体育館では静かな時間が流れていた。

七海一派は、まだ戻らないようだ。

ムギからメールが届き、澤達は、止が逮捕されたことを知った。

ようやく皆、安堵の表情になれた。

「どうする？」

「この場合は、その場を離れた方がいい」刹那は落ち着いた口調だ。「宮沢達がまた戻ってきて、襲ってくるかもしれないから」

学級委員の彼女の言うことに、従ったほうがいいだろう。

皆、体育館を出て外に出る。

日は中天を通り越して、傾いていた。腕時計を調べると、午後2時。

生徒達の数も、やや少なくなってきた。

「いまさら、気づくのが遅いのもかもしれないんですけど……」言葉は、陽だまりのような明るい表情になっていた。「誠君がいなくても、私は一人じゃないんですね……。秋山さんがいますし、考えてみれば、ずっと心も気を使ってくれていたし」

「はは、そうだね」澤は思わず、笑った。「心ちゃんや私だけじゃないと思うな。桂を育ててくれたお父さん、お母さん。それに律や西園寺や清浦だって……桂のことを案じたから、わざわざあの人達を止めてくれたんだと思う。」

貴方の、笑顔が見たいから。

貴方が苦しんでいるのが、耐えられないから。」

「オイオイ、なんでそうなっちゃうの？」律が赤い顔で、横から口を出す。「私は滯が危険に会うのはまずいと思ったからだよ。でもまあ、思いつきり感謝しなさい」

「私も、こういうやり方が好きではないから止めただけ」

2人を見て、滯はくつくつと笑う。

世界だけが、黙っていた。

それに目もくれず、言葉は、

「ありがとうございます。もし…もし万が一誠君に振られても、私、もうくじけません。泣きませんから。」

だって、秋山さんや、みんながいるって、分かりましたから…」

「いやいや、伊藤は貴方のことが好きって言うてるんだよ…そうだ、唯と伊藤は？」

思案していると、メールが来る。

ムギからだ。

しかし滯は、そのメールを見た時、表情が変わる。

「え…？ 2人とも、3階3年2組の休憩所にいる…。2人きりにした？ お互いの思いを確認しあうには、それしかない？」

ムギからのメッセージに驚く。

「誠君…！」

言葉は、校舎に向かって駆け出していた。思わず濡も、後から追う。

「桂、伊藤は本当に桂を思っているから、多分伊藤は唯を拒むと思うんだが……」

「そんなことないです。誠君は、優しすぎますから……きつと、平沢さんを拒まないと思うんです。」

「そんなの……」

「たぶん、平沢さんと……!」

「くっ!!」

言い終わらないうちに、濡は、かけ足を速めてしまっていた。

昇降口から、あつという間に階段を上っていく。

言葉は、留守番着信を開く。

『もしもし、言葉、どこだ? 誠だ。今そっちに向かってるから、返事してくれ』

「それは?」

「誠君からの着信。誠君、私のこと……。私も、誠君の思いに気付かなかったから……」

「そういうわけでは、ないと思うけど……」

苦笑いする濡だが、すぐに気を取り直して、3階の休憩室に向かった。

かけ足を速めた濡と言葉と異なり、律と世界・刹那の足取りは、後を追ってはいるも

のの、ゆっくりしている。

そのまま、校内の玄関に入った。

「急がねえのか？」

「いや、もうこうなつたからには、もういいでしょう。私はもう、当事者じゃないんだし」
心配する律に対し、世界は大きく息をして答えた。

「それにしてもよう、まさか西園寺が、桂へのいじめを止めるとはな……」

ニヤツと笑つて語る律に対し、世界は目を伏せている。

「さっきも言つたけど、誠の彼女になれない以上、私が桂さんを遠ざける理由はありませんから……」

ちよつと気まぐれに、『いい人』になつてみただけです」

「いーじゃんかよ、伊藤もみんなも好感を持つと思うぜ、あんたに」

「でも……桂さんは女子からは嫌われてますし。それに、七海には悪いな、と思う」

「あいつね……」にこやかな顔を消して、律はため息をついた。「今度あんた達も呼んで、桜ヶ丘でティータイムを開こうとも思つただけけど、どうしようかな……」

「いえ、余計な気を使わなくても……。七海のこともありますし……」

「なーんか言つたか、世界？」

きびきびした声。

噂をすれば影、七海であった。彼氏と思しき長身の男性と、腕を組んでいる。

「七海……」

「宮沢から話は聞いています。桂への攻撃をやめてくれと、あんたが言ったって」

「……」

世界は少し、むっとなった。

「それでいいのかよ？」

「……もういいの……」彼女はうつむき加減に、小声で言う。「誠とは、うまくいかなかったし……それに、平沢さんを見てたら、この人にはかなわないな、って思っちゃって。」

平沢さんと付き合ってる時の誠……平沢さんと一緒にいた時の誠、嬉しそうだったな

あ……

「そんな自信なさげで、どうすんだよ!？」

「いーんじゃねーの?」律が口を挟んできた。「うまくいかなかったって、西園寺自身が言うんだからさ」

「まったく、桂の奴に何言われたんだか……」

「だから、違うって言うてるだろ!!」律の声が、急に荒くなった。「いつもそうやって、全部桂のせいにして、ムギまで巻き込んで陥れて!!」

ムギは本当にあんたにあこがれてたんだぞ!! それを粉々にぶっ壊しやがって!

もういいだろ!! 終わりにしてくれよ……」

「部外者の貴方に何がわかるんですか!？」

「違う!!」大声で遮ったのは、世界だ。「……たぶん本当は誠、私のこと、好きじゃなかったんだよ。」

好きだったのは、そしてつながってたのは、ただ体だけだったって、思うんだ。

平沢さんが誠と付き合ってると思いいこんで、怒って、桂さんにも八つ当たりして……。こんな心の狭い女、いないよね……」

好きだけど好きじゃない。誠がそう言っていたことを七海は思い出して、

「そんなことないって、伊藤や桂が……」

「そこまで自分を卑下しなくなっただっていいだろう」言いかけた七海を、律は静止する。「ただ縁がなかった、それだけじゃねえのか」

「田井中さん……」

まばたきをしつつ、世界は言う。律は再び笑いながら、

「縁があるか、ないか。結局はこれに尽きるだろ。」

西園寺だって伊藤でなくとも、いずれ縁のある男を見つげると思うぜ。

さて、行くか」

「どいへ？」

「ナンパ。私も見つけたいしよ、いけてる彼氏」

「待って！」世界が止める。「平沢さんはいいの？」

「いやあ、もう疲れちまってな。それに、あいつを選ぶかどうかは伊藤が決めることだぜ。私たちが口出しできることじゃねえよ。止も逮捕されたみてえだし、もう厄介なことにはならないと思うぜ。」

あいつら、さんざん私らを振り回したんだから、せめて最後ぐらい、自分でけじめをつけさせねえと。

それと、いい男がいたら紹介してくれ。じゃ、後で」

律は手を振り、遠ざかっていった。

携帯からメールが来たので、とってみる。

「やれやれ、濡の奴……。どこまでおせっかいなんだか」

「律先輩！」

突然声をかけられる。

梓がそこにいた。

「おお、梓か。大丈夫、沢越止は逮捕されたそうだけ。唯が襲われる心配はねえよ」

「ムギ先輩から聞いています……。じゃないです、唯先輩と伊藤はどこに行っただけですか!？」

「ああ、ムギによれば、2人きりで3年2組にいるみたいだぜ」

「な!? 2人きりにさせたんですか!? まずいじゃないですか……」

「追いかけるのか!?!」

「律先輩だつて、言つてたじゃないですか! 2人にとつては一種の縁だつて」

「そんなこと言つたかな……?」すつかり忘れていた言葉を、律は思い出し、「ああ、それは澪と桂の話だつたんだけどさ。」

桂は悪い噂が絶えねえし、多分孤立無援じゃないかと思つてさ。澪のような味方がいたほうがいいと思つたんだけど……唯と伊藤もそうか」

「自分で言つたんじゃありませんか……」梓は半ば呆れ気味に、「私は、唯先輩があんな奴と付き合うなんて、まだ許してませんからね!」

「分かつた。それだけ思うのなら、止めに入つてもいいぜ。私は止がいなくなつた以上、唯と伊藤の2人の思いにゆだねるけどな」

「……わかりました。ありがとうございます」

深々と頭を下げると、梓は突つ走ろうとした。

「梓ちゃん!!」

横から、通りかかつた憂に声をかけられた。

「憂……」

「私も最初は、あの2人を引き離したいと思ってただけど……。」

「やっぱり、ムギさんの言う通り、ここは2人の気持ちにゆだねるべきだと思う」

「何言ってるの!? あんな奴に唯先輩を取られちゃっていいの!？」

「でも、お姉ちゃんには伊藤君が好きだから……。伊藤君は分らないけれど……」

「私は、あんな奴に唯先輩を取られたくはないな。それにこれ以上、唯先輩と親しくなったら嫌だし」

「でも……。お姉ちゃんは伊藤君を求めている。今回沢越止に襲われた時も、泣きついたのは私じゃなくて、伊藤君だった……」

「私じゃなくて、と言った時の声は、妙に低い。」

「だからどうしたっていうの!？」 ほら、行くよ!!」

ためらう憂の腕を引っ張り、梓は突っ走る。

誰もいない、薄暗い休憩室。

しばらくずっと、唯と誠はベッドの上で抱き合っていた。

服を整えていない唯。その白い胸元が、大きく見える。

「……」

誠のどきまぎが、ドキドキに代わっていた。

そのまま、一見すると平淡にも思える時間が流れていく。それでも、時間がきわめて長くなったように、彼には思えた。

自分の胸の中ですすり泣く唯を見ていると、唯に言わなければならぬことを、言うのをやめようかとためらってしまふ。

しかし、父の顔が浮かび上がった瞬間、何か吹っ切れたような気持ちになる。

「……落ち着いた、唯ちゃん？」

「……うん……」

涙と鼻水ですっかりくしゃくしゃくしゃになってしまった顔を、唯は上げた。

ハンカチで顔を拭いて、彼女は穏やかな表情になる。

吹っ切れている今、そして彼女が落ち着いた今、打ち明けなければ。

そう思って、彼は、真顔で、切りだしていた。

「ごめん……さつき言った通り、俺は言葉のことが好きなんだ。」

唯ちゃんも好きだけど……。友達以上の思いはないんだ」

その後、非常に不気味な沈黙が流れた。

唯は、何を言ったらいいのかわからなかった。

誠の言ったことが、まるっきりの冗談だと信じたかった。

「……あのね、唯ちゃん。」最初に口を開いたのは、誠だった。「今言ったとおりだから。」

俺は、言葉のことが好きなんだ。

もっと早く言いたかったんだけど、気持ちがあふらつてばっかりだったし……唯ちゃんがあつかりして傷つくのかと思うと……」

今更ながら彼は、自分の優柔不断を恥じていた。

けれどこれ以上、父と同じ轍を踏みたくはない。

そう思つて、腹をくくつた。

やがて唯は、静かに、

「……それは、桂さんに言われたからじゃないの？」

『止さんと同じ道を歩みたくないなら、最初につき合つてた自分を捨てたりはしない』つて……」

「それは……」

「それは違うと思う。マコちゃんが本当に好きな人を選べばいいんだよ」

唯は、誠と同じ真顔になっている。

なるべく、理屈を並べ立てて、彼を引きとめようと思つた。

さつき言ったことは嘘、あるいは勘違いなんだ。

マコちゃんは私が好きなんだ。

そう自分に、言い聞かせていた。

滯と言葉は、唯と誠を探して榊野校内と一緒に疾走していた。

2手に別れたかったが、まだ七海の息のかかった生徒がいなくても限らない。急いで3年2組の教室へと向かっていた。

「滯先輩！」

横から梓が、憂を連れて追い付いた。

「梓、どうしたんだ!？」

「どうって、あの2人を止めに行くんですよ!!」

「……私は、お姉ちゃんの気持ちを尊重したいけどなあ……」

呟く憂に、

「おいおい、憂はあんな奴に唯先輩を取られちゃっていいの!？」

「いやだけど、でもね……」憂は窓を見ながら、「お姉ちゃんと伊藤君が2人でいた時、2人ともすごく楽しそうだったんだよ。」

2人で一緒に料理をしていた時、2人ともうれしそうだった。

そして、2人とも自分に正直になってた」

「……」

「邪魔するのは悪いなあ、と思う……。」

私はちよつと、学園祭を楽しんでくるから。3人で行つてきて……」

踵を返して、いかにも鬱といった感じで憂は去つて行つた。

「……!!」梓は呆れながら、「もう憂なんか知らない! ……伊藤め、私の唯先輩に手を出したら……!」

と、いいつつ、漣と言葉を追うような形で走り続けた。

前を走る2人は、こんな会話をしている。

「……何でこんなに皆さん、平沢さんを気にするんですかね? 桜ヶ丘生徒って、レズが

多いんですかね……」

「いや違つて……」

呟く言葉に、漣は苦笑いしながら答えた。

「みんな唯が心配なのさ。私だつて、唯が沢越止に襲われたのか不安だつたし。でも唯が伊藤の気持ちを見殺して、手を出しちやたら困ると思うよ」

「誠君は、私が好きですからね……平沢さんが手を出しては困ります」

その場で漣は、上手く皆の気持ちをまとめ上げるが、言葉は思わず毒づいてしまう。

3人は、目的地へと急いで行つた。

「唯……」

「誠君……」

初めての沈黙の長い会話を、唯と誠は続けていた。

「唯ちゃん……」

「言ったじゃん、昨日。『俺も、本当は』って。

私のこと、好きなんでしょ」

そうだった。

あの時、悲しい顔をした唯を見ていられず、つい引きとめた。

言葉も好きであり、唯も好きだった。

どっちも好きで、どちらもそばにいてほしかったんだ。

「そうだよ。言葉も好きなら、唯ちゃんも好きなんだ……」

「だったらー！」

「でも……」

誠は、今まで自分で気づかなかった自分の思いを整理し始めた。

「唯ちゃんも好きだったんだよ。きれいな目で、いい笑顔だからさ。」

その笑顔は、俺を純粹にさせる力があるんだと思う。いや、あったよ。

でも……このまま俺と付き合ったら、大好きな唯ちゃんが壊れそうな気がしてさ

……。

それなら、友達のままでもいいよって思ったんだ。」

「そんなことない!! マコちゃんに出会ってなかったら、今の私はないと思う。」

マコちゃんの前だから、いい笑顔だって出来たんだよ!!」

「ううん」誠は首を振って、「俺なんかがいなくても、例えば学祭で演奏した時も、みんなの前でいい笑顔を見せていた。独りでも君はいい笑顔ができる。」

そんな唯ちゃんに、俺はふさわしくないと思うんだ。

だから、友達に戻ろう」

「そんな……」

唯は思わず、目を伏せた。

「それに言葉は、俺が世界と付き合っている、唯ちゃんとキスした時も、変わらずに俺のことを見てくれていた。」

見捨てずに、憂さんがいたるを襲ったときだって、俺を助けてくれた。

俺はずっと、自分に向けられた愛情に気づかなかったんだ」

「……私だって……」

「唯ちゃんのこと好きだから。大事には思ってるから。友達として、これからも接したいって思う……」

言いかけて、誠は言葉を失った。

唯の目には涙がにじみ、額には血管が浮かんでいる。

彼女は、耐えられなかった。

「ずるいよ……マコちゃんは……！」

「ずるいつて……！」

「私をその気にさせて、今更別れようなんて……！」

今度は誠が目を伏せ、

「はつきりしない態度だったのは、本当にすまなかった……って」言い終らないうちに唯の両手が、誠の両肩をつかんでいた。「ちよつと何するんだよ。……痛い！ 右足くじいてるんだぞ。」

「このまま黙って去れないよ!! マコちゃん！」

片手を外し、唯はスカートのポケットから、あらかじめくすねていた、あれをだした。

「!!」

「……これ、使つて……!!」

誠は、愕然となる。

避妊器具だ。

どこから取ってきたのか、分からないが。

……そうか、ひよつとして、言葉を助けようとして休憩室に行ったときに……!!

そう思うと、急に胸が高鳴り、体が火照り始めていた。

唯もそれに気づいたのか、誠の肩にぐっと力を入れる。

思わず彼女は、バランスを崩してしまった。

「きゃあー！」

「うあー！」

何かにつまずき、平沢唯と伊藤誠は重なって倒れ込む。

誠は強く背を打った気がするが、クツシヨンみたいなものがあって痛くはない。

「つーっ……え……？」

気がつくとも誠は、白いベッド（本来は保健室にあるもの）の上で、唯に肩を掴まれ、組み敷かれている。

薄暗い部屋。そこに男女が2人きり。

唯は誠の胸のあたりで、顔を預けた。

そう言えば、始めてキスした時も、彼女は体をそうやっていたな。

妙なデジャビュに駆られそうな思いを、必死にふっ切ろうとする。

「おい、やべえよ」

肩をふりほどこうと思って、誠は急にゾクリとした。

見交わした唯の顔は紅潮し、目は潤んでいる。

大きな胸元が、目をそらそうとしても視界に入ってくる。何を求めているかはすぐに分かった。

雰囲気の流れられそうな自分を、誠は必死に押しえ付けた。彼女の目は真剣なようだ。

もう望みはかなわないと、分かっているはずなのに……。

「や、やめようよ……」

「一回だけでいいから……」

「でも……」

「あと少しなんだよ！マコちゃんと恋人でいられるのは!!」

唯が普段考えられないほどの大声を出す。

「トーンダウン、トーンダウン。ばれちまうよ、唯ちゃん」

誠が必死になだめた。

「ごめん……。でも、あたしの気持ちもわかって……」唯が潤んだ瞳で続ける。「あと少
しで、全部諦めなくちやいけななんだよ、マコちゃんのこと。」

せめて最後にマコちゃんが……マコちゃんの思い出が欲しい。

あたしじゃ、西園寺さんや桂さんの足元にも及ばないかもしれないけど、後悔したくないの……。

お願いだから……」

「唯ちゃん……」

誠は、自分の頬どころか身体全体が火照っていることに気がついた。

そして、誠に体を預けている唯も同じように熱くなっていることに。

長い長い沈黙の後、誠の顔に唯の顔が近づいて……。

最終話へ、続く？

最終話 『交差譚詩曲（クロスバラード）』

「唯！ 伊藤!!」

滯が休憩室に飛び込んだとき、彼女は思わず息をのんだ。

薄暗い部屋の中で、唯は鼻水と涙をぐずつかせながら、ベッドの上で制服の上着を着なおし、誠は気まずそうにちらちらとそれを見ている。

後からやってきた言葉と梓も、2人を見て体を固まらせた。

「……………!!」

こりや、してないと言っても信じてもらえないかな……。

上着を着る唯と、呆然としている3人を見て、誠はそう思った。

「ふえええん……。滯ちゃあん……」

ふらつきながら寄ってくる唯を、滯は思わず抱きしめる。

「唯……。伊藤とは、どうなったんだ?」

「振られちゃったよ……」唯は泣きじやくりながら、「私は、マコちゃんに求めてほしかったのに……マコちゃんは桂さんのことが好きみたいで、裏切ることはできないし、それで桂さんに勝ったことにもならないって……」

「そうですか？」言葉は横からその様子を見ながら、誠の方へ向き直り、「誠君、魔が差したというのならば、すっぱり言っちゃってください。今更私、責める気は毛頭ないですから」

「ほんとか？」誠は少し胸のつかえが下りた感じで、「本当に、してないから。今となつては俺は、言葉しか見えてないから」

「誠君……」

「本当に、今までさんざ裏切ってしまつて、ごめんな……」

誠の目は、真剣。

「……はい」

その目を見る言葉の目にも、曇りはない。信用しているようだ。

「ホントに？」低い声で梓が「怪しいものねえ」

「中野、本当だつてば。」

誠はどうせ分かつてもらえないだろうと、半分考えながらも、落ち着いて弁明する。

梓は相変わらずである。

濡は表情を消して、すすり泣く唯と、困惑する誠の様子をかわるがわる見る。

キョトンとする言葉、梓。

「本当……だよな。」

口を開く滯に、皆は目を瞬きさせる。

「秋山さん……」

思わず声を出す誠。

「今まで2年間、付き合ってたからわかる。

唯は見栄は張るけど、嘘はつかないから、大丈夫」

「そうですか……」

言いきる滯に対し、言葉はうなずく。

「いや、ミエとウソって同じようなもんだと思うけど……」

梓は思わず毒づいた。

「ぐすぐす……」

唯はひたすらに、泣き続ける。

初めての恋、そして、初めての失恋だった。

数分前――

近づく唇。

自分の鼓動と、興奮を隠しきれない唯の吐息。

だが……。

誠の中で、何かが崩れた感があった。

「……………こんなこと……………」

「……………え……………?」

「こんなこと、求めてほしくなかった……………。唯ちゃんが、俺に……………」

近づいた口から思わず目をそむけ、誠は目をつぶった。

「求めてほしく、ないって……………?」

「唯ちゃんは、俺の中の唯ちゃんは、純粹で穢れないままでいてほしかったんだ。

こんなことは、求めてほしくなかった」

唯はハツと我に返った。

自分が何より求めていたことなただけど、誠自身は求めていなかった。

それは……………。

「その純粹さや笑顔に、何より癒されたから。

純粹さは、ずっと保っててほしかったんだ」

「じゃあ、求める私は嫌いってこと……………」

「好きではないことは、確かだな……………」誠は入口を見ながら、「それに……………そんなことをしたって、唯ちゃんが言葉に勝てるわけじゃない。

どんなことをしても、言葉への思いは変わらないんだ。

「さんざ言葉のこと、裏切ってしまったから……これ以上裏切ることは、できない。」
「マコちゃん……」

「こんな俺を好きになつてくれて……俺を好きになつて嬉しいって言つてくれて……ありがとう、唯ちゃん……。」

そして、ごめん……」

言いきつてしまつてから、誠は思わずぎよつとなつた。

唯の目には、涙がいつぱいたまつていた。

「そんなあ……。やだよお……。つらいよお……」

そのままベッドに、唯は泣き崩れてしまった。

胸の痛みが、さらにひどくなつた。

それでも……。

それでも、耐えるしかない。

その時、

「唯！・伊藤！！」

滯が言葉・梓を連れてやって来たのであつた。

すっかり、窓の外は赤くなっている。

唯を抱きしめたまま、漣は休憩室を後にして、廊下に出る。

後から、誠と言葉がゆつくりと出てきた。

誠の表情は浮かないが、言葉には多少憐憫を含めながらも、喜びの顔がある。待っていたかのようにムギもやってくる。

「決着……ついたのね。」

「ああ。」

泣きじやくる唯と、上手く言えない誠にかわり、漣が結末を説明する。

「そうでしたか……」

「ちくしょー！ 全然彼氏なんて出来やしねえ……んお？」

偶然ゆえか、律も通りかかった。目の前に漣の胸のあたりですすり泣く唯を見て、少々動じてしまい、

「おい、何かあったのか？」

「ああ、漣ちゃんの話によれば、」ムギが代わりに答える。「唯ちゃん、伊藤さんに振られてしまつて……。伊藤さん、こちらの桂さんと付き合いなおすそうよ。」

すると律の表情は、すぐに冷めたものになり、

「あーはいはい。末永ーく爆発しちゃってくださ……あいたたた!!」

ぼやき口調の律を、漣は思いっきりつねった。

「はは、すまないね。律はなかなか彼氏が作れなくて、ジエラシー入ってるんだわ」
弁解する滯に対し、ふと言葉が、

「秋山さん……今回の件では本当にお世話になりました。ありがとうございます。」

それと、私のこと『桂』ではなく、『言葉』でいいですよ」

「そうか……わかった。私も『滯』でいいぜ」

こんな会話をする。

横で誠はそれを見て、少し微笑む。

彼女にもようやく、友達ができたらしい。

この2人は、これでいいのだ、と思った。

「よかったな、伊藤……」

穏やかな表情の滯を見て、彼は、

「もしよければ俺も、みんなとこれから仲良くしていきたいんで、放課後ティータイム
ファンクラブに入れてくれないか？」

「そうだな」

「ええ、構いませんよ」

滯とムギは、笑顔で答えた。

律と梓も黙認する。

ふと誠は、さわ子先生が自分の父親に襲われたことを、皆に打ち明けなかったことを思い出した。

話そうかとする、言葉が心を読んだのか、

「誠君、言わぬが花ということもあります。」

放課後ティータイムや平沢さんと付き合いたいならば、言わないほうがいいと思いませんよ。」

小声で進言してくる。

それもそうなのか。

でも、言わなければ……。

「一つ、言っていないなかったことがあるんです」誠は低い、重い声で、「放課後ティータイムの顧問、確か、さわちゃん先生と行ってましたよね」

「ええ……そうですけど……」

「実は、友達から聞いたのですが……さわちゃん先生が、俺の親父に襲われたらしくて。」

「ホント、ごめんなさい」

深々と彼は、頭を下げた。

「ま、誠君……」

言葉は少し呆れた表情で、伏せた彼の表情を見る。

悔恨と無力感で、目を思い切りつぶっていた。

「え……」

唯以外の4人は思わず眩く。

唯は耳に入っていないのか、相変わらず泣いてばかり。

しばらく、沈黙が流れた。

するとムギが前に出て、

「実は、私もSPからちよつと聞いていました」

「え……」

「でも、心配しないでください」ムギは微笑みを浮かべながら、「先ほどさわ子先生の電話を、私もらったんですけど。元気な声でしたよ。気にしていないみたいです。」

だから、心配しないでください」

「本当に大丈夫なんですか？」

と、誠。

「ええ。上機嫌だったわ。きつと何か、いいことでもあったんでしよう」

「そう……ですか……」誠は多少安堵したものの、気がかりでならなかった。「さわちゃん先生にも謝りたいしな……」

そう言ってから、背後の足音を感じて振り向く。

見覚えのある顔がやってくる。

世界だった。

「誠……」

言葉とくつつく彼を見て、思わず彼女は声を上げた。

「世界……」

言葉が世界の前に大の字になって立ちふさがる前に、世界は目を潤ませ、はつきりした声で、言った。

「私……。誠を好きになったこと、後悔してないからね！」

たとえ血がつながっていても、兄妹であっても、私、誠のこと、忘れないから!!」

誠も、唯も、言葉も、これを聞いてきよとんとなった。

『血がつながってる』『兄妹である』

全然わけがわからなかった。

律だけが、伏し目になる。

言うことだけいうと、そのまま後ろを向いて、世界は駆け去った。

「……西園寺さん……」

「……世界……」

唯と誠は、思わずつぶやいた。

「伊藤！」

唯を抱きしめたまま、滯は一瞬、誠と見つめあう。

穏やかだが、やや口ごもる滯。その表情は、切なさが混じっている。

「秋山さん……」

「伊藤……」

幸せに……なつてくれよ……」

悲しげな表情で、囁くように言つてから、滯は目をそむけた。

誠は、そんな滯と、彼女の胸元で泣き伏す唯を見て、心が冷える気分になっていた。

でも、それはしようがないんだ。

それが優しさということもあるかもしれない。

これで、いいんだ。

「……じゃあ俺、ちよつと3組の手伝いをしなければいけないので、行きますね。これか
らもよろしく。」

そのまま、彼は一度も振り返ることなく、言葉とともにさつそうと去つて行つた。

「伊藤……」

眩く滯。

窓を見ると、緋色の夕日が榊野の校舎を照らしていた。

つるべ落としに夜が来て、街が七色のイルミネーションを輝かせていたころ。

ムギの会社の系列のホテルの、高級レストラン。

穏やかな光が、白い部屋を照らし、それを分厚いガラスが取り囲む。

ケーキバイキングに来たのだが、ずっと唯は泣いてばかり。

皆がじろじろと見るので、すぐにトイレに行ってしまった。

律はもう少し彼氏づくりを粘ると言って、榊野に残っている。

残りの3人で5人がけのテーブル席に座り、夜景が空の星のように輝くなかで、めいめい好きなケーキを食べ始めた。

「唯先輩、大丈夫でしょうか……」

「あれからずっと泣きっぱなしだな……。でも、そつとしておいた方がいいかもしれない」

唯を案ずる梓に、漣は静かな声で言った。

「伊藤も言葉を彼女と決めたからには、言葉に嫌がらせをする人もいなくなるよな……」

眩く漣に、ムギははつとなり、

「あ、漣ちゃん……」

「ん？」

ムギは、急に席を立って、漣の前に膝をつき、

「実は甘露寺さんに、漣ちゃんの家を教えたの、実は私なの！」

甘露寺さんが漣ちゃんに目を付けているのをわかつていながら……。

本当に、ごめんなさい!!」

太い眉をすぼめながら、ムギは床に額をぶつけるほど深く、土下座をした。

「ムギ……」 漣は思わず瞠目しながら、「もういいよ……」

「本当、もうこれ以上榊野生徒と付き合うの、いやになっちゃいましたよ」 梓は一口ケーキをやけ食いしながら、「でも、付き合わなければいけないんですよね」

「でも梓ちゃんだって、清浦さんとは気兼ねなく話をしていたそうじゃない」

「清浦は学級委員ですからね。ましな方ですよ」 梓はケーキについてきたポツキを口にくわえながら、「あれから、沢越止はどうなったんですかね……?」

すると、ムギが、

「私の会社で、去勢の手術をする予定ですよ。もう二度と同じことを繰り返さないように」

「おいおい、昔の宦官じゃないんだからさ……」

「被害を受けた人たちのなかには、さわ子先生以外に、桜ヶ丘の生徒たちもいるみたいですよ……」

「何ですって!?!」

「そういえば、曾我部先輩からその話を聞いたな……」

驚く梓に対し、漣は背筋に寒気を感じながら答えた。

ムギも、雰囲気をぶち壊したとわかり、

「ま、まあ、とりあえず、精神的なバックアップはするつもりよ。ただ、止にやられても、みんなそれを苦に思っていないみたいなのよね……」

「は? なぜ!?!」

「相当な床上手か……」

漣は呟く。

「それから、伊藤さんのために、マスコミにはチップを渡しておいたの。

必要以上に話を広めることのないように」

「至れり尽くせりだな……。むしろそのほうがありがたいけれど。」

伊藤もこれ以上、お父さんのことで苦勞したくあるまい」

呟く漣に、ムギは、

「伊藤さんのこれからの生活に支障があつたらまずいから。沢越止に預けられている妹さんもいるそうで、伊藤さんのお母さん、引き取るといふ話だし……」

「いたるちゃんか。そうだな。いたるちゃんのためにも、事は小さく収めておいた方が

いいな」漣はチョコレートケーキを口に入れながら、「そういえば、ファンクラブに入れた人は意外と少なかったな。律の奴は、これから定期的に一緒にお茶会を開くとか言っていたけど」

「甘露寺さんは、りっちゃんが除名するかどうか考えるそうよ。」

……それにしても、恋なんて、しないほうがよかつたのかな……。

誰も好きにならなければ、裏切られた時にこんな悲しい思いってしないし……」

ムギの表情が、どんより暗くなる。

「い、嫌、大丈夫だって。私ももう気にしてないし」

「そうですよムギ先輩。今回は相手が悪かつただけですよ」

漣と梓がフォローをするが、ムギはうつむいて落ち込んでしまった。

「……私、誰とも恋しない……」

そう呟いて、黙々とケーキを食べていく。

こりや、ちよつとひどい人間不信だな。

尊敬していた人に裏切られ、あれだけ持っていた思いを、粉々に粉碎されたんだからしょうがないか。

漣と梓は、顔を合わせてため息をついた。

雰囲気が悪くなったと悟つたのか、ムギも話題を変えて、

「そう言えばさわ子先生、沢越止に襲われたって話だったけど、伊藤さんにも話した通り、さつきも電話をした限りでは、元気そうだったのよ」

「さつきも聞いたけど、本当なのかな……」

「それで、榊野1年3組の澤永泰介っていう人をファンクラブに入れるように、先ほど電話があつたの」

「澤永……？」 滯はふいと思ひ出し、「言葉を襲つた奴か？ そんな奴入れて大丈夫なのか？」

「そうなんですか？」

「まあ、とりあえず私が撃退したけど……」

「さわ子先生は、何としてもファンクラブに入りたいと言つていたわね。りっちゃんにも相談するけど、なんとかできないものかしら……」

夜になって、榊野学園の校庭では、キャンプファイヤーが行われていた。

井の字型に組まれたまきの中で、炎が煌々と燃え盛っている。

その前で、カップルが2人ずつ、フォークダンスを踊っている。

律はすっかり疲れ切り、打ちひしがれたとばかりに人ごみの中を歩いていく。

「くあーるえーるすいーる……」

片っ端からストライクゾーンに入った男達をナンパしたのだが、全然だれも振り向いてくれなかったのであった。

「ちくしよー！ こんな美少女になぜ誰も振り向いてくれないんだよお……」

愚痴りながら歩いていると、2人さみしく、篝火を見つめている世界と刹那に会った。

「おう、西園寺！ 清浦！」

「……田井中さん……」

空元気を振りまく律に対し、世界の声には何やら力がない。

「何だ、まだ伊藤に振られたことを気にしてんのか？」

「……ええ……」

世界の声に、元気はない。

「世界はずっと、伊藤のことが好きだったから。気持ちを少しは分かってあげて」

刹那がフォローしてくる。

「そうかそうか、じゃあ非リア充なのはあたしと同じだな。

あたしも全然彼氏ができねえよお……。本当はHTTFファンクラブ第1号は彼氏に

する予定だったのにい……」

「そうだったんですか」世界はきよとんとしつ、「私が第1号じゃダメですかね」

「ま、まあそういうわけじゃねえけど……」

「まあ、田井中さんに彼氏ができたなら、第1号の座をその人に譲るつもりでいますよ」
「はは……心遣いわりいな……」

ふと律は、世界が誠にかけて最後の言葉「私、誠を好きになったこと、後悔してないからね！」を思い出した。

「それにしても、あんなこと言うなんて……。伊藤も唯もわけがわからなかったみたいえだけど」

「分からなくていいんです。ただこの先、どこかで思い出してくれたらいいな、と思つて」

「……」律はちよつと考えてから、「あー！　こうなったら踊ってうさを晴らすぞ!!　ほら、西園寺、行くぞ!!」

「え、ちよつと田井中さん!!」

世界の腕をひつつかみ、律は堂々とキャンプファイヤーの前に出てくる。

当然、皆の視線が2人に集中する。

「あれー？　一応榊野と桜ヶ丘のペアだよな」

「でも女同士じゃないか」

「いいんじゃない？　この際何でもありで」

皆皆が噂する中、世界は顔を赤らめて体を丸める。

律はやけになり、

「うっせーやい！ 同情するなら彼氏くれ!!」

「田井中さん……。昔のドラマじゃないんだから……」

突っ込む世界に対し、律は自分から世界の手をつかんでリードを始めた。

「ちよ、ちよつと田井中さん！ 速すぎますよ」

「いーんだよ！ こんくらいスピードがちょうどいいの。さ、踊りまくるぞ!!」

律のリードに、世界はきりきり舞いになる。

世界より小柄な律が（律が154cm、世界が155cm）踊りを引っ張るその姿は、傍から見ても奇妙な光景と言える。

くるくる回る、スリーステップをそろえる、手を握る……。

「あーもう、すっかりやけになっちゃってますね……。ま、いつか!」

世界も開き直り、律のペースに意識してあわせ始めた。

元々ダンス慣れしているのか、走り気味の律のペースにもすぐに追いつく。

3分ほど2人が踊った後、急に見物者の雰囲気が変わり始めた。

「お、男女カップルがまたか」

「おお・・・しかも桜ヶ丘と榊野のカップルかよ!」

「おお!! 待ちに待ったヘテロカップル1号、ついに誕生か!!」

どやどやと皆が騒ぎ立てる中で、そのカップルがキャンプファイヤーの前に姿を現す。

「え……う？」

「あ……」

その2人の顔を見て、律と世界は動きを停止し、これでもかと言わんばかりにドン引きした。

トイレの中で、両手で顔を隠して、ずっと泣き続ける唯。

初めての恋、そして、初めての失恋。

ずっとそれが頭の中を占め、つらく悲しくてならなかった。

外からカップルの話声も聞こえる。この中は白い光がちよつともるだけ。

それが、さらに唯の気持ちを鬱にしていた。

便器に座って、ずっと泣き続けてから、半刻程過ぎた時。

目が乾いて痛くなつた時、偶然唯の視界に左手のひらが入る。

薬指には、誠がくれた銀色の指輪が。

何故だか急に腹が立って、思わず、便器の中に捨てようと、無理に外して腕を振り上げた。

が、しかし……。

手を放す瞬間、思いとどまった。

利き腕の指先で、銀色に輝く指輪を見つめながら、唯は呟く。

「これ……。マコちゃんが、一生懸命作ってくれたんだよね……」

今日の朝、彼の部屋で食事をしたことが、ふいと思ひ浮かんだ。

『これはシルバークレイをこねて作るんだけど、割と簡単に作れるんだよ』

『ねえ、これ一つもらっていいかな？』

『うん、いいよ』

『やった、ありがとう！』

自分が喜んだ時、誠もとてもうれしそうだった。

彼は、自分も好きだったのだろう。

だから自分に、こんなきれいな指輪を渡してくれた。

「マコちゃん……」

真つ赤になった目を拭うと、指輪を元の左薬指にはめ、唯は立ち上がった。

そのまま、トイレを後にする。

窓が部屋の光を反射し、鏡のようにうつすらと中の景色を映している。

「ただいま」

唯は皆が座っている、白いテーブル席に戻る。

「おかえり」

皆、暖かい声をかける。

「唯先輩も」梓はフォークを持ってないほうの手で頬杖をつきながら、「伊藤のことなんか忘れて、ケーキ食べましようよ」

「……」

唯はぎこちない笑顔を浮かべながら、ケーキを取ってくる。

そのまま、黙々とケーキを食べ始めた。

みな、不安げな視線で彼女を見る。

「唯、さみしいのは私も同じだからね」隣の漑は、息をついて真顔で、「言葉が伊藤のところへ行ってしまったし……それに……」

「それに？」

「私の初恋も、終わっちゃったから」

急にぼんやりした表情で、漑は窓の方を向いた。

窓には、高層ビルが並び立ち、七色のイルミネーションが至る所で輝いている。

「漑ちゃん、どうしたの……？」

心配げな表情で、ムギが聞いてくる。

唯ははっと気づいて思わず、囁いた。

「もしかして……漣ちゃんも、マコちゃんが……？」

すると漣は、顔を赤らめ、うつむき加減でうなづく。

皆、少し仰天の表情になる。

「でも、言葉のことがあるし、本人の前では言えないさ……」

そう呟いて、漣は猫背でうなだれてしまった。

そうか。

彼女もずっと、我慢していたんだ。

そう思うと、次の瞬間、

『私、誠を好きになったこと、後悔していないからね！』

と言う声が頭に思い浮かんだ。

そうだ。

2人とも、思いを我慢して……自分の思いに決着をつけてたんだ。

「漣ちゃん！」唯はギュッと漣の肩をつかみ、「私、決めたから！もうマコちゃんのとで泣かないって!! だから、漣ちゃんも元氣出してくれる？」

「唯……」

ポカンとする滯だが、唯は真剣な思いであった。

「ね！　もう泣かないから!!」

赤い頬、赤い目でじつと滯の目を見つめる唯に対し、

「ありがとう。でも、気を遣わなくていいんだ。私が勝手に抱いた思いだから」
思わずぎこちない笑顔で、滯は答えた。

「うん……。じゃ、思い切って食べて食べて楽しもう!!」

急に元気を出し、唯は声を張り上げる。

「何ですか唯先輩。さっきまでずっと泣いていたくせに」

「そうね。甘い物をたくさん食べれば、嫌なことも忘れるでしょう」

半分呆れ顔の梓に対して、ムギは穏やかな表情で答えた。

「じゃあ、律には悪いけど、楽しむとしますか」

再びケーキを取ってきて、皆皆食べ始めた。

唯は、榊野の方角の街を見て、独りごちた。

「マコちゃん……。これからも、友達として付き合っていけるよね……」

家の灯りが、街並みをともしていく。

誠は言葉と腕を組みながら、自分のマンションの廊下を歩いていた。

足にねん挫をしていたので、3組の学祭実行委員会も同級生達も、早めに帰してくれ
た。

自分の選択が正しかったのかどうかはわからない。ただ、少なくとも唯は、あれから
ずっと泣き続けていた。

言葉は、彼が作ったブローチと指輪をはめている。

自分が選ぶことを決めてから、ずっと嬉々としている。

これで、いいのかどうか……。

そう思いながら、誠は組んでいないほうの腕で、杖をつきながら歩いていく。

ところで……

どうもさつきから、殺気のコもった視線を感じる。言葉が豊満な体を押しつけてきて
も、どうも安心できなかつた。

「誠君」

言葉が神妙な顔で話しかける。

「？」

「元氣ないです。」

怪我もしてますし、疲れも残ってるんですか？

あるいは平沢さんを振ったことを、まだ気にしているとか」

「そういうわけじゃないけど……。ずっと誰かに見られている気がして……」

「ストーリーカー……。というわけではないですよ。平沢さんはそういうことをする人には見えないし……。そうそう、心には一緒にフォークダンスを踊れなくなつたと連絡しなきゃ」

ストーリーカー……。そんなことをされるほど、やましいことはしていない気もするが。

静かに、小ぢんまりとした家の中に入る。

すると、母がさびしげな表情で、ぼんやりと明かりのともるリビングにいた。

「母さん……」

「だけじゃないわよ」

母の指さす方を向くと、いたるが何も知らないとばかりに、元気にリビングを走り回っている。

ドタドタという音がひどく、そのため、玄関のかぎが解除されるゴチャツツという音が、皆には聞こえなかった。

いたるは今回起こつたことを、何も知らないようだ。

でも、それでいいんだ。

「誠……。足、どうしたの？」

「ああ、親父に突き落とされてけがしたんだけど、大したことはないさ。ただのねん挫」

「あの人が……。そう。あの人も、逮捕されたそうね」

「……どうしてそれを？」

「琴吹さんという人から聞いてるわ。……。でも、これでよかったのかもしれないわね。」

もう2度とあの男に襲われる人がいなくなるわけだし。

「琴吹さんは、襲われた人には最大限ケアすると言ってたけど」

「暗い微笑みを浮かべる母に対して、誠は、

「……そうだな。もう親父に迷惑を被る人はいない。」

それに、これからいたると一緒に暮らせるんだから、それでいいのかもしれないな

「……」

「琴吹さん、マスコミが必要以上に騒ぎ立てないようにするって言ってたけどね……」

「まあ、この先取材が来ても、堂々としたほうがいいな」

「私も何とかしますので、誠君も、お母さんも元気出してください」言葉が2人の間に入って、「いたるちゃんを感じがいちゃったら、まずいでしよう」

「あ、ああ」

「そういえば」母は、一番聞いてほしくないことを聞いてきた。「唯ちゃんは、どうしたの？」

唯の泣き顔が浮かび、誠は思わず黙ってしまふ。

「……そういうことね。」母は彼の隣の言葉を見て、全てを理解したようだ。「結局貴方は、言葉さんが……」

「ねーねーおにーちやー！」いたるが母の声を遮り、無邪気な笑顔で誠に聞いてくる。「おとーさん、しごとでがいこくにいくつておかーさんからきいたよ。おにーちやとこれからくらせるつてほんど？」

「……ああ……これからはばらく、母さんとお兄ちゃんと、いたるとで暮らすことになったのさ。」

「ホント？ わーい！ おにーちやといっしよだー!!」いたるは喜んで、さらにびよんびよん跳びはね、「いっしよ！ いっしよ！ いっしよ！」

おにーちやーといっしよ！ おふるもいっしよ！ ねるときもいっしよ！
いっしよ!! いっしよ!!

騒ぎはじめた。

「ここらこらいたる、下の人に迷惑になるから、跳ねない跳ねない。お兄ちゃんもよかつたと思つてるよ。いたると一緒になれて」いたるにつられて笑いながらも、彼は母を案じ、「ところで母さん、夜勤はどうするの？」

「そりや、あんなことがあつたわけで……大丈夫、すぐ行くから」

すでにスーツ姿に着替え、バッグも用意してあるが、母の声は低かつた。

すると、いたるがまばたきをした後、つつつと玄関の方へ行ってしまう。

「いたる、どうした？」

思わずリビングから声を上げる誠。

「あれー？」いたるは玄関に行つた後、素つ頓狂な声を上げる。「きのうのおねーちゃ、どうしてここにいるのー？」

気になって玄関に急ぐと、そこには、学生服姿の平沢憂が。

「あれ、憂さん」

誠は思わず、声を上げた。

「……玄関開いていたから、ついつい入っちゃった……」

声に力がない憂。

「そう？ 鍵はかけたと思つただけ……」

誠も言葉も、憂が鍵をこじ開けるための針金を持つていたことには気づかなかつた。

「伊藤君……お姉ちゃんを振つたそうね」

チクリと、彼の胸が痛んだ。

無言で、うなずいた。

「お姉ちゃんがどれだけ、貴方のことを好きだったか、分かる？ キスマでした仲なのに

……」

相変わらず低い声で、厳かな表情で話しかけてくる憂。

「わかってたよ……」誠は唯の泣きじやくる顔を思い出して、「俺が唯ちゃんに謝ってから、唯ちゃん、ずっと泣いてたし……」。

でも、ここまで来て、やっとわかったことがあるんだ。

唯ちゃんは好きだけど、恋人とかいう思いではないんだ。

恋人として付き合いたいのは言葉だつて……やつとわかった。」

憂は彼の言を聞いているのかいないのか、目を急に潤ませて、

「お姉ちゃんを泣かせるなんて……!!」

パンッ!

強烈な平手打ちが、誠の左頬を襲った。

母も、言葉も、いたるも哑然となる。

「伊藤君なんか嫌い……!!」潤んだ目でそこまでいつてから、憂はぶいっと顔をそむけて、「でも、お姉ちゃん、これからもずっと、伊藤君を求めてくるでしょうから……拒まないでよね……」

「憂さん……」

張られた頬を、誠は抑えつつも、黙って憂のセリフを聞くしかない。

これだけ言つて、彼女は踵を返し、外に出ようとす。

「憂さん!!」あわててて誠は、「俺も……これから唯ちゃんとずっと接していききたいんだ!!
友達として!!」

唯ちゃんの笑顔で、癒されるから……純粹になれるから……!!
振っちゃったことを、少しでも償いたいと思うし……。

その……唯ちゃんと友達になることを、許してくれて、ありがとう!!」
誠は深々と、頭を下げた。

憂は眩くように、

「友達として、お姉ちゃんを泣かせないであげてね……」

そのまま、外へ出て行つた。

ガチャリ。

重い、黒いドアがしまる。

「あの子、とても大胆ね……」

母はポカンとしつつ、

「ほんと、無茶な人です」

言葉は、ため息をひとつ。

「でも……」誠は頬を押さえたまま、「憂さんの気持ちもわかるよ。

ずっと俺のことを好きだった唯ちゃんを泣かせちゃったわけで。

俺だって『妹を泣かせる男がいたら俺が殺してやる。』と思うもの。ジャイアンじゃないけど」

「結局」母は微笑を浮かべながら、「それが貴方の選択なんですよ。言葉さんが一番好きだってことが。」

1人に絞ったということは、選んだ人だけではなくて、拒んだ人にも誠実なこと。憂さんのいうことも気にしない。唯ちゃんにも誠実なのだから。

もうあの男とは違うのよ。

もつと自分の決断に自信を持ちなさい」

誠は、自分に言い聞かせるように

「そうだな……。もう俺は、親父とは違う道、自分の道を歩いて行ってるんだよな……」
「そうよ。自分を信じればいいの。」

やっぱりあなたは、私の子。

なんだかんだいっても、着実に自分の道、いい道を歩いて行っているのよ」

につこりほほ笑んで、母は、

「じゃあ私、夜勤の仕事があるから、行くね。言葉さんも、この子をよろしくね」
身支度を整えると、すぐにマンションの入り口を出てしまった。

「誠君……」

「言葉……」

いたると言葉と、3人きりになった。

左頬に残った痛みは治まらず、憂の怒りと悲しみが半々の表情も、泣きじやくる唯の顔も、頭の中に残っていた。

「平沢さん……大丈夫でしょうか。あれからずっと、泣きつばなしだったけど」

言葉が口を開く。

「言葉……？」 誠は目を瞬きさせながらも、「そうだな。学校休んだりしないかな……」

「でも……」 言葉は桜ヶ丘の方角を向きながら、「平沢さんは優しい人だから、私のために泣いてくれた人だから、きつと、私達のことをわかってくれると思うんです。」

そしていつか、平沢さんと滯さんと4人で笑いあえる日が来ると思っています。

きつとその日は近いと思いますよ」

「そう……だな……。信じれば、いいんだろうな……」

「そうです。その通りですよ」

につこり言ってから、2人はいたるの遊び相手をする事になった。

「こうしてみると私達、家族のようですね。誠君、いたるちゃんのお父さんっぽいし」

「じゃあ言葉が、お母さんということになるのかな。」

「えへへ……」 言葉はぽつと頬を染めて、「いつか、そうなれたらいいな、と思っています。」

この指輪は、一足早いけど結婚指輪だと思っっていますよ」

「言葉……。ちよつと気が早いぞ」

誠も、言葉の笑顔に頬を赤くする。

彼は桜ヶ丘の方向を見据えて、呟いた。

「唯ちゃん……。また、俺に笑いかけてくれるかな……」

それからのことである。

今度は榊野学祭の後に行われる桜ヶ丘の学祭に向けて、練習を続ける放課後ティータイム。

だが、演奏するとちぐはぐになる。

唯のギターに強い思いがこもっている一方、ムギのキーボードには力がない。

「あー、だめだだめだ!!」 梓が再び不満を言う。「これじゃあ演奏にならないよ!!」

「落ち着け梓」 滯がフオローをする。「まだ時間はある。ゆっくり着実に練習をすればいいと思うんだ。……それにしても唯、お前は張り切っているよな」

「うん……」 唯はどこか、さびしげな表情で、「きつと今度の学祭、マコちゃんも来るだろうから……。恥ずかしくない演奏をしたいんだ。」

「唯……」

「もう彼女になれないって、分かってはいるけれど。

それならばせめて、マコちゃんに思いつきりいい演奏を聞かせたいと思ってるんだよ」

そう言つて、笑顔を見せる唯だが、その中の悲しさが、皆にはひしひしと感じられていた。

「唯先輩……」 梓は唯の瞳を、じつと見つめながら、「これは私の気のせいかもしれませんけど……少し大人びたように見えますよ」

ふと、コンプレックスを乗り越えられたような気がして、唯の気持ち之急に浮いた。

「ほんとに?」

思わずニカつと笑顔を浮かべる。

ギョツ

梓に抱きつき、

「ありがとう! 私、少し大人っぽくなりましたかったんだー!!」

「ああもう、くつつかないでくださいよ! やっぱり大人げないや唯先輩は……」

梓は呆れる。

「私も同じ気持ちだよ、唯」 滯もまた、唯と同じ悲しげな笑顔で、「伊藤や言葉に、いい演奏を聞かせたいさ」

「だよね、漣ちゃん……」

「まっ、これはこれで1つの決着じゃねえの？ ……とところでムギも、ちよつと音楽に力がねえな。」律がムギに話を振る。「やつぱり、甘露寺のことがどうしても残っているのか」

「ええ……。挙句漣ちゃんに、痛い思いをさせちゃって……」

「いや、私はもう気にしてないって。」

漣があわてて言うが、ムギは、キーボードを視界に入れてうなだれてしまう。

「ムギちゃん……」

皆戸惑っていると、律がムギの両肩をぼんとつかみ、

「おいおい、ムギ。甘露寺に裏切られたのがそんなにつらいなら、それを反面教師にして親切になればいいじゃねえかよ。そして甘露寺を追い越してふつきつちまえばいいだろうが。」

とはいっても、あの甘露寺じゃねえよ。ムギが思い描いた『理想の』甘露寺にさ。

学祭前は、本当にいい人だと思っていたんだろう？ そしてバスケが得意なさわやかガールだとさ」

「りっちゃん……」

ようやくムギが、小さく笑みを浮かべた。

「ムギ先輩、いつそ財力でひねりつぶすというのはどうですかね」
梓が何気にトンデモなことを言ってくる。

「いや、そんな乱暴な……。とはいっても、ちよつと痛い目にあつてほしいというのが私の正直な気持ちかな」

澪は、たしなめているのか賛成しているのかよくわからない。

「……まあ、私が直々に話すぜ。」

律がまとめ上げる。

「ねえ……」急に梓が、「大人になるって、どういうことですかね。」

「は……?」

「榊野生徒達、童貞卒業のなんのつてうるさかったから。」

でも結局、唯先輩を見て思うんですね。

大人になるっていうのは、恋愛をかなえることでも童貞卒業することでもなくて……。

新しい場所に行つて、いろんな人に触れ合つて、もまれて、

それを積み重ねることで、大人になっていくと思うんです……。

今回の榊野学祭のように……。

私はまだ、やっぱり愚痴ったり文句言ったりで子供っぽいかなあ、と思うけど」

「……」

「いきなり何を言っただよ」

「いや、唯先輩も、その点で大人びたかなと思って……。何より、童貞卒業のなんの言ってる榊野生徒がばからしく思っただよ」

「梓、それをあいつらの前で言っちゃだめだぞ。一種の文化なんだから」 澪は彼女をたしなめてから、「じゃ、練習しますか」

「ま、色々あつたけど、今回は今回でいい思い出になったのかもな。」

マブダチも新しく出来たし、人助けもしたしよ」

「そうだな」

律が朗らかな口調で話すと、澪がうなずく。

律は一方で、携帯でメールを入力していた。

七海宛に。

薄暗い部屋の中で、黒板の前にスクリーンが垂れ下がる。それを見て、皆皆がどよどよと騒いでいる。

ここは榊野学園の視聴覚室だ。

そこで、女バスの打ち上げが行われている。

部員たちに混じって、世界がちらちらと教卓のほうにあるスクリーンを見つめる。

その隣で、七海は携帯のメールを読んでいる。

「どうしたの、七海？」

「田井中さんからメールが来てる。……なぜムギさんを脅して、自分のところに組み入れようとしたのか、なぜ秋山さんに手を出そうとしたのか、腹を割って話がしたいって」

世界は、重い口調で、

「私が間に入ろうか？　田井中さんと私は話が合うし、私が話せば、あの人も分かってくれるかもしれない」

「いや……まあ私の独断でやったことだから、談判ならタイでするつもりだよ。」

それより世界、大丈夫なのか？　伊藤に振られてから、昼飯も全然のどを通らないみたいだが」

「だ、大丈夫大丈夫……。まずは女バスの打ち上げを楽しみましょうよ。」

とはいっても、皆皆からすれば元気がないように見えるのであろう。
すると、アナウンスが流れた。

『皆さま、学祭お疲れ様でしたー！』

特に、先生達に内緒で休憩室の設営に回ってくれた皆さま、ご苦労様ですー！！』

「お、始まった」

呟く七海だが、次に続いたアナウンスは、きわめて衝撃的なものだった。

『実は、その休憩室にこっそりカメラを設置しておりまして、それをこっそり見ちゃおうというのが、今回の打ち上げのメインイベントだったりします』

「な……………!!」

『彼氏持ちの子は、思い出を思い出すもよし、彼氏のいない子はそれを見て楽しむもよしと言ふことで、さっそく放送するとしますか』

「待ってください！ それって休憩室の中を映していたってことですか!？」

『ええ。甘露寺さんがおにーちゃんんって甘えてる声もバッチリと。』

……………あ、早いな、もう流れてる。』

スクリーンで、その映像が流される。

周りから上気する、失望とあざけりの声。

七海は、声にならない悲鳴をあげて、その場にうずくまった。

凍りついた表情でそれを見る世界。

スクリーンに映ったのは、七海と彼氏が休憩室で行為をする映像であった……………。

放課後ティータイムと榊野生徒達の、合同お茶会の日。

桜ヶ丘音楽室では、律と世界が向い合せて、榊野の男子生徒の写真を並べながら話を

している。

その横で、刹那・梓が隣り合わせでケーキを食べているが、光はケーキも食べずに机に突っ伏している。

「律さんって、彼氏にこだわりとかないんですか？ 年上がいいとか、優男風イケメンのほうがいいとか」

「あーあー、あたしや別に何でもいいよ。イケていて優しく、話していて面白い相手ならさあ」

「何でもいいというのが、一番選びづらいんだよなあ……」世界は頭をちよつと抱えながら、写真を選び出し、「じゃあこの、男バスキャプテンの宇野先輩なんてどうですか？」

なかなか背も高くてカッコいいし。吹奏楽部の海部もいいと思いますよ。とつてもおしやれだし。

……あ、でも海部は私と同じクラスで、ちよつと興味はあるんだよなあ……」

「おいおい、じゃあ世界、さつさと誘っちゃまえよ」

「そうはいかないですよ。ちよつと心の準備がいるんです」

「そういうええ」律は世界の目をじつと見つめ、「世界、伊藤のことはふっ切ったんだな」

ふつと世界の表情に翳が走った。静かな声で、

「いつまでもめげててもしょうがないし。私もまだまだ、これから高校生活を楽しむ時

期なんだしね……」

「やれやれ」刹那が紅茶に口をつけながら、「学祭の後、2週間も食事のどを通らなかつたくせに」

「言わないでよー！ 刹那ー!!」

「あはは、ま、いーじゃんかよ。あんたになら伊藤でなくとも、絶対いい彼氏できると思うぜ」

律が言うと、刹那は再び、

「結局榊野の中でも、平沢さんと伊藤は玉砕したって評判になつたからね」

「まあそうね。唯先輩も彼氏に振られたと桜ヶ丘でも噂になつてるもん」

刹那の隣の梓は、ぶっきらぼうに話す。

「それにしても、」刹那はチーズケーキをフォークで切りながら、「結局私は、最後まで敵に塩を送る形になっちゃったけど、よかつたのかな……」

「まあいいよ。」世界は刹那に答えて、「それが、刹那の選んだ選択なのだから。私は刹那が選んだ道は、間違つていないと思うよ」

「ほうほう」律はにやりと笑みを浮かべ、「ま、それでいいんでねえの?」

刹那と梓が会話するその傍らで、なぜかムギがバスケットボールを持ってドリブル・フエイクの練習をしている。

よく見ると、壁にバスケットのゴールがかかっている。

ムギが設置したのだ。

「ムギさん、何でこんなところでバスケットの練習してるんですか？」

「これ？」ムギは少しひきつった笑顔で、「甘露寺さんに、少しでも近付きたいかな、と思って……。私の中では、やっぱり甘露寺さんは、さわやかな女バスのエースだもの……」

目を遠くするムギを見て、急に周りの雰囲気为重くなる。

「そう言えば、甘露寺はどうしたんだ？」

「実は、」世界は深刻な顔になり、「彼氏と休憩室で……していると、ところをビデオに撮られていて、学祭の後の打ち上げで、皆の前で見せられてしまつて……」

顧問にもチクられたから、レギュラーの座をはずされたそうです。人望も失つたみたいで……。

家でずっと寝込んでいるようです……」

「そうですか……」

ムギは注意深く表情を消した。悲しいとか、気の毒とか言う雰囲気も出てはいるが。

「なるほど。それで談判を断つたのか」律は脱力して言う。「そうか……」

「あれこれやることやってみましたからね」

梓は多少、呆れた。

「……そう言えば、平沢さんと誠、結局プラトニツクな関係で終わったみたいですね。」世界が話題を変えて、「隠しカメラで、沢越止が平沢さんを襲おうとしたのも写っていて。誠が止めたみたいですよ」

「そーかそーか」

「どちらかと言えば平沢さんに彼女になってほしかったかな。……でも、誠が桂さんを選ばずなら、仕方ないかな」

「ま、今となつてはどうでもいいよ。でも唯先輩と伊藤がプラトニツクな関係で終わったのはよかつたと思う」

と、梓。

「ビデオを見た人達は、『ヘテロカップル誕生と思つたのに、すかしかよー』つて不満げだったけど。結局誠は、桂さんをこれ以上裏切ることにはできないんだそうで」

刹那は紅茶をグイッと飲み干すと、

「……そう言えば、平沢さんも秋山さんもさつきから来ないけど、どうしたんだろう？」

「伊藤と桂と、一旦図書館で落ち合つてから行くつて。借りたい本があるそうだよ」

梓は、気になったことを打ち明けてみることにした。

「そういえば、桜ヶ丘と榎野のヘテロカップル1号つて誰になつたの？ 唯先輩と伊藤

がああなつたことを考えると、該当者なし？」

「……今にわかるわよ」

話題を変えた梓に対して、隣でずっと机に突っ伏していた光が、低い声で言った。それを聞いて、律と世界も、顔を見合わせて苦笑いを浮かべる。

「な、なんかやな予感……」

眩く梓。

その時、急にドアがバタンと開いて、

「みんなー！ こんちゃー！！ 私、榊野学祭で彼氏作ったから、紹介するねー！！」

ハイテンションな声で、顧問の山中さわ子が音楽室に飛び入り、

「やつほー！！ さわちゃんの彼氏の澤永泰介でーす！！」

榊野学生服のまま、澤永泰介が後からスキップで部屋に入ってきた。

「この子とはウマが合うのよ！！ 102番目の新しい彼氏、できたー！！」

「意気投合、したーっ！！」

肩を組みながら、さわ子と泰介はガッツポーズを上げる。

ポカンとするムギ。飄々としている刹那。

後の皆は口をあんぐりと開けて、2人を見つめる。

梓はこの世の終わりとはばかりに、手にしているショートケーキをぽとりと落とし、光

は無言で、幽霊のようにふらりふらりと部室を出て行く。

「ヘテロカップル1号の景品も、もらったーっ!! パルコの高級チョコ、おいしいよねーっ!!」

「まあねー!! ……とところでそう言えば、秋山さんいない……? どうも苦手なんだよなあ、あの人……」

「ん? 泰ちゃん、どうしたのよ。」

「俺、ちよつと秋山さんが苦手でさ……」

「そうなの。ま、少し遅れるそうだし、すぐ慣れるわよ。あの子も奥手だし。」

あ、そうだ、泰ちゃんのために特別な服を作ったから、着てみてよ。」

「えー! さわちゃん、どんなどんな!」

エルビス・プレスリー風純白のフリルを取り出して、泰介に着せながら、さわ子は、「唯ちゃん、残念だったみたいね……。伊藤君は私と話がしたいと言っていたけど、ちよつと考えなおしてもらおうことってできないかしら」

「いやいや、それは要らぬ節介だろう。桂さんを恋人にするというあいつの決意はもう固いみたいだし。まああいつによれば、平沢さんとは友達以上恋人未満みたいな関係になつてるとき。いいんじゃないの?」

「そう……」ミック・ジャガー風の黒いジャケットとGパンも出しながら、「そう言えば、

もう1組のヘテロカップル候補はどうなったの？ 確か足利君と、あとは……」

「ああ、加藤さんと真鍋さんか。何でも、真鍋さんは遠縁先で亀仙流を身につけ、加藤さんは海でうっかりゴムゴムの実を食べ、その能力を駆使して足利争奪戦に臨んだらしい……」

「亀仙流とゴムゴムの実って本当にあつたの……というか、その力で争ったら、半径30キロは確実に荒れ地にならない？」

「まあね。お互いかめはめ波とゴムゴムのバズーカの撃ち合いだったからねえ……」
長々と話すさわ子と泰介の話を、皆は聞いていない。

「あははは……」

「澤さわカップル、見事成立か……」

苦笑する世界と律に対し、

「き……清浦……幻覚剤、ない……？ 一年分、いや、二年分……」

「中野、ないない。」

震える声で言う梓、飄々と答える刹那。

続いて向こうで「お お お お ……!!」という光の唸り声が響いた。

秋風はやみ、さわやかな青空が浮かんでいる時。

唯と滯、誠と言葉は、榊野ヒルズの中央広場で落ち合った。

その場所では噴水がわき、アベックがところどころでたむろしている。

「マコちゃんーん！」

「唯ちゃん！」

一目見るなり、唯と誠は朗らかな声を上げ、お互いに笑顔を返した。

「マコちゃん、借りたい本があるなんてびっくりしたよー!!」

左薬指の指輪をちらつかせながら話す唯に、

「なーに、手塚治虫の漫画だよ。びっくりすることなんてないよ」

誠は、唯に似た微笑を浮かべて答えた。

恋愛が実らぬ形で終わっても、気兼ねなく話ができることに、2人とも驚きながら話を続ける。

学祭以来続いていた誠の足の痛みも、いつの間にか治っていた。

隣の滯は、微笑を浮かべているが、目の下にクマができ、ちよつと元気がない。

かたや言葉は、誠の右腕に抱きついている。彼が自分のところに戻り、すっかり明るくなったようだ。

「言葉あ……」

「滯さん、どうしたんですか？」

「お礼のプレゼント、高級シヨコラはありがたいんだけど……『四丁目の夕日』はやめてくれない？ 私、ホラー映画は苦手なんだよ……」

言葉はあわてて、

「あ、ごめんなさい！ でも四丁目の夕日はホラーよりも人情系の側面が強い映画だし……」

「あのさ、言葉……」誠は半分呆れる。ホラー映画なんてちよつと女の子が好きそうなものではない。「ジャンプ系の漫画とかじゃ駄目なの？ 俺達の学校では流行ってるだろ？」

「あ、じゃあ『金魂』があります!!」

「金魂!」唯はパツと目を輝かせ、「私も『金魂』好きなんだ。気が合うねえ、桂さん!」
「へえー、ちよつとびつくりです」

言葉の声には嬉しさがこもっている。

「いや、『金魂』は私はちよつと……」

「あははは……」

意気投合する唯と言葉に対し、漣と誠は思わず苦笑。

「伊藤も」漣は誠に、「足の方は大丈夫なのか?」

「ええ、痛みはすっかり無くなりました。やつぱり、唯ちゃん的笑顔に癒されたからか

な」

「そうか……。唯って、いい笑顔するもんな。」

それと、マスコミに追われたりしてないか？」

「いや、大丈夫です。ムギさんだけでなく言葉も、いろいろな手を尽くしてくれていますし……」

「そっか……。よかったな。」

「氣遣いありがとう。」

「そう言えば、滯さん」言葉が滯の方に向き直り、「実は滯さんのファンクラブに入ったんで、今朝曾我部さんに挨拶してきたんですけれど、よろしくと言っていました」

「そうか……。曾我部先輩もファンが増えるのはうれしいと言っていたしな」

「秋山さん？ ファンクラブ？」

「あ、そうか、マコちゃんには話してなかったっけ。滯ちゃんにはあるんだよ、桜ヶ丘にファンクラブが。」

桂さんも入ったとなると、よりにぎやかになるかも」

訳のわからない誠に対して、唯がにこやかに説明する。

「じゃあ俺も、入ってみようかな……」

「いや、初めての男になっちゃうから、みんな緊張しちゃうかもよー」

誠が興味を示すと、唯は嬉しそうに冷やかす。

中央広場に、4人の笑い声が響いた。

図書館でのおの好きな本を借りて、皆外に出る。

噴水は相変わらずライティングを帯びて盛んに沸いているが、アベックは少なくなつたようだ。

唯は誠の隣で歩きながら、鼻歌を歌う。

♪でもね 会えたよ 素敵な 天使に♪

思いがけずわいたフレーズを口ずさむ唯に、誠は、

「何その曲？」

小声で話しかける。

「あ、これ……」唯は思わず顔を赤らめ、「ふいと思ひ浮かんだ歌のフレーズなんだけど、まだまだ固まってない。大丈夫。気にしなくていいから」

「そうなの？」

「おいおい、その歌私も始めて聞いたぞ」

「『天使』って、ちよつとベターなフレーズですな」

誠だけに話したつもりだったが、滯と言葉も耳ざとく聞いていた。

「滯ちゃんも桂さんも首突つ込まないでよ、マコちゃんだけに話したつもりだったのに」

くすくすと笑う滯と言葉につられ、唯と誠も思わず笑顔を見せる。気がつくくと、4人で笑いあっていた。

「そうそう、実はね……詞・曲ともにまとめたものがあるの。……聞いてみたい？」
「唯ちゃんの作った曲ならば、何でも」

顔を赤らめて話す唯に、誠はくつくくと笑いながら応答する。

唯はギー太を取り出し、噴水の近くのベンチに座った。

「桜ヶ丘の学祭で演奏する予定なんだけどね。言つとくけど、聴いていいのはマコちゃんだけ」

「「は!?!」」

「冗談冗談。みんなに聞かせるから、聞いてね。名付けて『クロス・バラード』!」
「そっか……。たのしみだなあ……」

誠は思わず、唯に向つて、彼女に負けないぐらいの笑みを見せる。

3人が見守る中で、唯は指輪越しに誠を一瞬見つめる。

「それ、唯ちゃんによく似合うね」

すると誠が、満面の笑顔で言ってくる。

「マコちゃんの作ったものだから、似合うんだよ」

唯も負けず劣らずの愛嬌のある笑顔で、答えた。

(マコちゃん……)(唯ちゃん……)

(大好きだよ……!!)

そして唯は、ギターを取り出し、演奏を始めた。

ギターの音が風に流れ、雲ひとつない空へと昇っていった。

終わり？